

かんすい

鹽落しを覗きけり 栢月。
かんすい(甘水)(靈)佛生會に用ゐる香水。甘草(ワシ)を茶に交へ煎じたるもの。甘茶(アヲ)。

かんすいせき(寒水石)大理石の一種、白くして固し。
かんせき(寒施行)(冬)寒中に貧者僧侶などに施行すること。○粥施行。野庵行。

かんた(獨眼)ガソチに同じ。
かんた(韓退之)名は愈、字は退之、昌黎先生といふ。唐代有名なる學者、佛を排斥し嘗て論奉佛骨表を作る。
かんたい(岩洞提燈)岩洞に入るに用ゐる手提燈、丸く黒塗にて燭火自在に廻轉するもの。碩鼠隨筆には強盜提燈にて盜の用ゐしより起ると。

かんた(強盜頭巾)(冬)黒き巾にて面部を包み目ばかりを出す頭巾の名。
かんた(神田香)栗水光善と云ふ神師、神田に住して、麒麟の香味を發明せし獸方の名。
かんたけ(寒竹子)(冬)孟宗竹の筍をいふ。冬生す。○寒竹や遠くもならぬ朝の影也。○寒竹字甲。

かんたもへ

かんたもへ(上達部)古へ三位以上の人の稱。かんたちめ。
かんたもへ(神田藤)藤の平たき藤の名。あんだ番の説。
かんたもへ(神田明神社)(秋)九月十五日、江戸神田明神社(大己貴命を祀る)の祭禮。神田、日本橋等概して其氏子にして市中甚賑ふ。麹町山王祭と共に東都の二大祭禮と稱せらる。○花名大名衆をまつり故。嵐雪。
かんた(那那)蜀の人、盧生が五十年、榮華の夢を叙したる諸曲。
かんた(那那男)眉に八字を畫きたる若男の能面。

かんち(片眼)めつち。かんた。
かんち(寒中)(冬)寒を見よ。
かんち(寒竹)高さ四五尺、節の細かさ竹の名。人家に植ふ。
かんち(雁)(秋)雁の連り飛ぶを軍陣に比していふ。連併に季とす。
かんち(岩盤)堅固なること。五調。
かんち(寒道)(冬)寒中に離道する酒をいふ。年を経て變らすといふ。
かんち(寒橋)(冬)冬橋。○牛開の合久しや寒橋 字甲。

かんたのり

かんたのり(勘亭流)芝居看板などに書く太き書體。中村勘六書初めしと云ふ。
かんた(間田)租税のなき田をいふ。
かんた(寒磨)(冬)寒中に刀劍、鏡等を磨ぐこと。○寒磨や鏡の匣に落椿。
かんた(寒取)(冬)すまふ寒取。
かんた(漢和)わひんを見よ。
かんた(神無月)(冬)十月の異名。
かんた(神無月)(冬)かみなづき。
かんた(神嘗祭)(秋)九月十七日(今新暦十月十七日)天皇より伊勢神宮へ幣を奉らせ給ふ御祭事。九月十一日幣を御使に授けられ、御使伊勢に至り、十六日度會の宮を祭り、十七日大神宮を祭る。○度會新嘗會。○神嘗や酒さく(古)の古瓶子 知十。
かんた(寒古)寒古。○寒古習妻親がしとかな 風里。

かんた(雷鳴陣)(冬)古へ雷鳴ある時、宮中にて武官、各弓箭を帶して御殿を守護し、雷止めば其陣を解く儀式あること。夏季殊に六月に多しとす。○陣の座に鼓音高し雷の聲 貞兼。
かんた(雷鳴堂)(冬)宮中の鬘芳會(ヒヤウ)をいふ。其庭上の樹曾て落雷に焼けたるを植ふ替えず置きしより、終

かんたも

に名とせり。連併に季とす。
かんた(次日)曆の語、外出に凶き日ないふ。
かんた(寒念佛)(冬)寒中三十日間、僧俗を問はず夜間、鐘を鳴らし念佛を唱へ家々に放捨を乞ふこと。○茶屋町や三笠過ぎて寒念佛 旨原。
かんた(寒雨)(冬)寒中の雨。○雁さわぐ鳥羽の田面や寒の雨 桃青。
かんた(寒入)(冬)寒を見よ。○なほ白し寒に入る夜の月の影 道肥。
かんた(寒内)(冬)寒を見よ。○乾鞋も空也の履も寒の内 桃青。
かんた(寒灸)(冬)かんき。
かんた(寒空)(冬)寒中の天空。○寒空や鐘の乳見ゆる西明り 長翠。
かんた(寒水)(冬)寒中の水。○刀磨く指の細りや寒の水 呂博。
かんた(寒餅)(冬)寒中に搗きたる餅、一年中敷すこと置せらる。○寒餅の春のおちつきなれや寒の餅 道二。
かんた(寒乗)(冬)寒の内に漁家の少年集りて漁船に乗習ふ事。
かんた(寒梅)(冬)冬の梅を見よ。○寒梅や念者を見舞ふ枝上 蘆角。
かんた(寒著)(冬)太著。

かんたのり

かんたのり(早懸)(靈)ひでり。
かんた(雁皮)(靈)落葉の灌木、高さ三四尺より一丈に及び、葉は南天の如く夏枝の間に四出の淡黄花を開く、形丁子に似て小なり、其樹皮は紙に製す。○刺春麗。○細つ立の腰掛茶屋や雁皮さく 道彦。
かんた(寒彈)(冬)三粒を習ふもの、寒中に早朝より修練すること。寒聲と同じ意なり。○寒彈の聲にあがりし振かな 旨原。
かんた(韓非子)韓非は秦時代の人、荀子の門、刑名の學に精し、其著を韓非子と云ふ。
かんた(寒風)(冬)冬の風。
かんた(寒鮓)(冬)寒中に捕る鮓、味美なりといふ。○寒鮓を賣行く市の霞かな 世耕。
かんた(雁風呂)(春)秋、雁の渡るとき小



(びんが)

かんたのり

き木片を咬へ來り、之を海上に浮べ其上にて羽の勢を休む、其木を南部外ヶ濱邊に落し置き、雁歸る時又咬へ行く、此時残れる木多くなるは人に捕られ、又は死したる雁ある故なりとて同所の人、供養の爲此木にて風呂を焚き施行とす。○雁風呂に漸の残る哀かな 處子。
かんた(干瓢)(靈)干瓢むくを見よ。○干瓢に黄楊の小櫛や指の股 專吟。
かんた(干瓢)(靈)夏の土用に瓢(ワラ)夕顔等の實を取り皮及種を去り、肉を薄く割き長き紐の如くし、竿に懸けて干し、干瓢となす。○新干瓢。○夕顔に干瓢別いて遊びけり 桃青。
かんた(寒紅)(冬)寒中の丑の日に製したる紅。口中に宜しとて此月小間物屋などに多く紅を賣る。○牛紅(ウシカウ)
かんた(寒牡丹)(冬)冬牡丹。○金屏の籠の契りや寒牡丹 紫嵐。
かんた(寒草)(冬)寒草。
かんた(寒草)(冬)信長の草履取に市若と云ひし者の諱名、猛勇なる故兒童の荒きものをガマツクといふに譬へらる。
かんた(寒巻)(冬)寒巻。○り。







かみまつり

て舞樂を覽たまふことあり。北祭ともいふ。○山茶花の日和や加茂の臨時祭。樂南。○雪はらふ福宜の秩や賀茂祭方山。

かみまつり(加茂祭)(夏)四月中四日(今新曆五月十五日)京道上賀茂下賀茂兩社の祭禮。下鴨の祭神は御祖(天)の神、玉依姫なり。古へ玉依姫、蟬の小川の邊に遊べるとき、川上より丹塗の矢一筋流れ来るを取りて家根に挿む、程なく孕みて男兒を生めり、或時酒宴して其兒に汝が父に盃をさせと言しに、兒は盃を虚空に投げ、我は天神の御子なりとて天に登る、上賀茂は其兒を祀りて別雷の神といふとぞ。此祭を一に御生(ハア)の日といふは、別雷神の生れ給ひし日なればなり。四月中旬日、西賀茂の氏人辨を伐り、御生所の假宮、齋宮及び大宮の假宮を搦へ之を守護す。未の日、假宮遷宮す。申の日に古は開白の參詣あり、社司、奏樂に桂枝を禁裡仙洞、高家に獻す、乃ち御慶に懸く、賀茂の地人は皆葵を門戸に掛け、祭日は衣領頭髪に掛く、之を諸曼、葵蓋といひ、夏日雷火の災を免る、符とす。故に此祭を葵祭といふ。當日禁裏より勅使の參向あり、

かみまつり

其行列は宜秋門より出で、橋を渡り、下鴨にて



(圖之車使衛近祭葵茂賀)

着き、祭典終りて賀茂堤を上賀茂に向ひ、又祭典を行ふ。行列には先驅、火長、看督長、檢非違使、山城使、内藏寮史生、御幣櫃、走馬、馬寮使、近衛使車(御所車にて牛飼附添ふ。挿圖參照)舞人六人、健(ト)勅使(騎馬)舍人、居

かみまつり(賀茂水無月能)(夏)賀茂水無月能。六月晦日の夜、京道上賀茂社にて御禊を行ふ(下賀茂にても同じ、下賀茂水無月能を見よ)廿九日より卅日に至り社前に能樂あり、之を水無月能又は御手代會(ミテエ)といふ。國里人は能して遊ぶ御祝哉。句空。

かみ(勘文)陰陽寮より吉凶を奏聞せし文書。

かみ(掃部)宮中の掃除役の稱。ハかにしり。

かみ(鷗)河海に棲む水禽。灰色又は白色なるあり。嘴と足と赤し。都鳥といふは川かもめなり。

かみ 疑問の意ありて感嘆の意の添ふテ

かみまつり

かみ

ニテハ。雲とへだつ友かや雁の生別れ。

かみ(茅葦)チゲヤのこま。

かみ(樞) (秋) 實を季とす。喬木にして雌雄二種あり、雄は枝立ちて冬に花を開く、雌は枝横に茂り花なくして秋實を結ぶ、實は葉に似て油分に富む。○樞樞の殺吉野の山の木の實見よ。嵐雪。

かみ(蚊帳) (夏) 蚊を防ぐ帳、四月頃より九月頃まで吊る。蚊帳。樞。○枕蚊帳。紙帳。蚊帳。○樞や蚊帳に葦を打つ老二人 田福。

かみ(蚊帳) (夏) 夏日蚊帳の類を賣歩くもの。○紙帳賣。

かみ(樞) (冬) 飾實を見よ。

かみ(樞) (春) 春の蓬菜などに樞の葉及實を飾ること。○樞の實を御口祝や吉野殿 牛父。

かみ(葦刈) (秋) 秋の末、葦を刈りて屋根を葺く料とする。○葦葺く。○山里や草を刈らして葦を刈る。紅絲。

かみ(茅柴) (秋) 山城國鞍馬に産する小柴なり、村婦之を藁したるを京市中に賣歩く。

かみ(蚊帳釣草) (夏) 田圃の間に生する草、葉穗共にカウアシに似て莖三

かみ

角あり。小兒戯に之を引裂きて蚊帳の形に擬し弄ぶ。莎草。○蝶も寐る蚊帳釣草の葉陰哉。冬鶯。○蝶も寐る蚊帳釣草(蚊帳釣草) (夏) 晩春、初夏の頃、蚊帳を始めて釣ること。○釣草。○蚊帳釣草(蚊帳釣草) (秋) 俗説に九月中、蚊帳の中に雁を開けば災厄を免ると云ふ、此月蚊帳に雁を畫きて貼り、又は四方の釣手に雁の字をかく、これ聲を聞きたる意なりと。○蚊帳に雁畫かん月もよき頃 和陽。

かみ(葦軒端) (秋) 葦にて葺きたる屋。連俳に季とす。

かみ(樞花) (冬) 樞を見よ。○月洩るや樞の花ちる土手の上 大江丸。

かみ(樞) (秋) 樞を見よ。

かみ(葦刈) (秋) 秋の蚊帳。

かみ(葦葺) (秋) 秋の葦を刈りて屋根を葺くこと。連俳に季とす。葦の軒端。

かみ(蚊帳) (夏) 蚊を追ふ爲、烟を立てること。○蚊火。蚊道火。○蚊道草。蚊道香。○蚊道して師の坊をよつ端居かな 大魯。

かみ(蚊道香) (夏) 蚊道のため焚く香。

かみ

かみ(蚊道草) (夏) 蚊道に焼べる料。種々の小草を干し貯へ置くをいふ。○西廂に一日曝しめ蚊道草 江南。

かみ(蚊道火) (夏) 蚊道。

かみ(葦占) (春) ひらなをのみかゆ。いしのみかゆ。みほまつり。あまのかゆら等を見よ。

かみ(粥施行) (冬) 寒三十日の間、毎夜白粥を大いなる桶に入れ葺ひ五六人提灯を點し、貧乏町を粥やらふくと呼びて施し歩行しもの、多く町内の有志家のせしことなり。○粥やらふ。○粥施行冷さじと震覆ひけり 青嵐。

かみ(粥杖) (春) 正月十五日、粥を焚きたる木を削りて杖としたるもの、此杖にて子無き妻の尻を打てば男子を設くるといひ傳ふ。古は宮中の女房達も之を行ひたること古物語に見ゆ。○粥の木。○粥杖や梨壺の五人打はづし 几菫。

かみ(粥木) (春) 粥杖。

かみ(粥柱) (春) 正月の七種粥、小豆粥等の中に入る、餅をいふ。○粥した、かに挟み上げたり粥柱 李山。

かみ(粥典) (冬) ちゆせきやう。○粥やるに祖後ば灯い、けけり 無徑。











かたがね

かたがねのつゆ(枯野露)(秋)枯草の露を見よ。  
 かたがね(枯萩)(冬)枯萩を折たく夜  
 やや老が肘 青々。  
 かたがね(枯蓮)(冬)蓮枯れて夜風の音  
 や池の坊 江南。  
 かたがね(枯葎)(冬)葎枯る。圃 八重葎  
 それさへ枯る、世なりけり 白雉。  
 かたがね(枯柳)(冬)冬、葉落ちたる柳を  
 いふ。圃 冬柳。圃 ちらくと柳枯れ  
 けり空也寺 長翠。  
 かたがね(枯夕顔)(冬)圃 妹が短夕顔  
 枯れて仕舞れり 貞樂。  
 かたがね(枯萩)(冬)圃 枯萩や日和定ま  
 る伊賀古崎 子規。  
 かたがね(枯尾花)(冬)尾花の枯る、こ  
 と(古は秋とするもあり、今冬とす)圃  
 枯芒。圃 舟墓ふ淀野の犬や枯尾花  
 几童。  
 かたがね(枯尾花)其角が撰みし芭蕉翁道  
 善の句集。  
 かたがね(枯女郎花)(冬)圃 枯れに  
 けりくねりし形に女郎花 秋也。  
 かたがね(夏爐冬扇)盆なきことを夏の  
 爐と冬扇に比へていふ。  
 かたがね(蒸大將)源氏物語中の入  
 物。源氏の子、實は母の女三の宮、柏木

かたがね

左衛門と通じて生みし子なり。八の宮  
 の大い君を得んとし、後浮舟に通ず。  
 木葎(葎)葎の一種、樹は高さ  
 三四尺、其實黄にして食ふべし。圃  
 鉤子。  
 黄色足袋(冬)黄色の足袋。  
 休安忌(三回忌をいふ)圃  
 秀頼の次子、大坂落城の時  
 逃れて江戸に來り、三條山に薙髪し後  
 伏見に住す。  
 夏(夏)夏の異名。  
 劉伯莊をいふ。秦の始皇の  
 時の人、始皇の母と姪と誅せらる。  
 念景(冬)十二月の異名。  
 九穴(冬)鼻孔、兩眼、兩耳、兩尿  
 道の九つの穴をいふ。  
 前月(冬)十二月の異名。  
 久三(京にて供人の汎稱)圃  
 九枝燈(秋)七月七日、七夕に  
 供ふため九本の燈籠に燭を灯すこと。  
 支那の古俗。  
 九香(春)春の異名。

かたがね

牛星(秋)牽牛の異名。  
 宮中の女子紅絲を以て日の長短を量る  
 に、冬至より後一線の長さを添ふとい  
 ふ。圃 一線を添ふ。圃 日影寒くは  
 り見らむ糸の丈 定武。  
 喜雨亭(蘇東坡が自亭に命ぜし  
 名、その記古文眞寶にあり)圃  
 九冬(冬)冬の異名。  
 牛馬(能狂言の名)圃  
 求肥(葉子の名、蛤の類にして狀、  
 牛皮の如きもの)圃  
 牛郎(秋)牽牛の異名。  
 黃瓜(夏)蔓草、葉は冬瓜の如く  
 夏、五瓣の黃花を開き藤を生ず、圓く長  
 くして肌刺あり、熟すれば黃色とな  
 る、採り又は漬物とす。圃 胡瓜。圃 葉  
 をもれて形はづかしき胡瓜故 金水。  
 黃瓜(春)二月、黃瓜の種を  
 まくこと。  
 木區(下總國利根川沿岸の地名)圃  
 古へ鹿島行の船出る處。  
 季夏(夏)六月の異名。  
 擬階奏(夏)四月七日、宮中  
 にて二月の列見の時選びし藝能ある人  
 人の名を録し、大臣より奏聞する式。

かたがね

八月十一日に至り此人々を撰び出して  
 定むるを定考(ヤウ)といふ。圃 裝束  
 も疑隙の奏のあやめかな 安靜。  
 乞巧(秋)乞巧のうてん。  
 伎樂(唐樂以前、百濟より來りし  
 雜樂の稱)圃  
 其角(春)二月三十日、賀井  
 其角(賀井、晋子、鎌倉の號あり芭蕉  
 の高弟、寶永四年歿、江戸白金二本橋上  
 行寺に葬る)の忌日を修すること。圃  
 花の月(其角を祭る繪巻) 知十。  
 黄帷子(夏)黄色の麻布にて  
 作りし帷子。圃 ぎびら。  
 黄鱸魚(谷川に棲み給に似て小さく  
 肥あり、腹の下に刺あり、黄色黒斑ある  
 魚。圃 ぎさう)圃  
 ぎさを見よ。  
 黄菊(秋)菊花の黄なるもの。圃  
 手燭して色失へる黄菊かな 燕村。  
 黄菊衣(秋)いさねの色の色目  
 名。表黄、裏青。  
 利酒(秋)秋、製終りたる新酒  
 の味を捨すること。圃 利酒に酔ふて  
 もどるや秋の市 臥央。  
 雄子(春)さじ。  
 問居島(春)泊山(ヤマ)にて

かたがね

雄子の鳴くを聞きおくことをいふ。圃  
 季までさ、すえ鳥や鷹つかひ 春清。  
 利茶(春)かき茶。  
 季吟(拾穂軒、湖月亭の號あり貞徳門  
 の俳人、兼て國學に名あり、寶永二年江  
 戸に歿す)の忌日を修すること。圃 夕涼  
 かへす忌日の湖月抄 青々。  
 結梅(秋)高さ三四尺、葉圓く  
 葉の形格にして圓あり、節、筒狀にし  
 て五尖あり、藍紫色を帯び又白色なる  
 もあり、白紫交りたるあり。圃 さちか  
 う。ありのひあふき。圃 朝露の花透  
 き通す結梅かな 柳梅。  
 結梅笠(菊花の如き形したる  
 冠笠。青、黄、  
 赤にて一圓  
 置に彩りす。  
 明暦比流行  
 せしもの。織  
 方など多く  
 彼る)圃  
 結梅原(信州筑摩郡洗馬驛  
 の東北の地。武田小笠原兩氏の古戰場。  
 歸去來辭)晋の陶淵明が  
 官を罷めて田園に歸農すること。圃



(まがうやき)

かたがね

し文章。  
 吉利(冬)神樂歌の曲の名。  
 一に明星とも又、單に星ともいふ、明星  
 を誅ひし歌なればなり。  
 宿根より自生す、其莖葉花  
 の種類甚多く千葉(千葉、單葉(ト)、黄白  
 紅紫雜色、淺深大小の別あり。圃 菊の  
 湖。殘る菊。そが菊。百菊。(異名)百夜  
 草(ガサ)。千代見草。餘草(ガサ)。こが  
 れ草。星見草。霜見草。まさり草。山  
 路草。茅草。乙女草。輪草。いなて  
 草。契草。片見草。初見草。秋無草  
 (アキナ)。秋の花。秋しくの花。草の毛。  
 鞠花。花の鳥。隱君子。女花(メウ)。長  
 月花(メウ)圃  
 菊合(秋)古へ宮中などにて  
 菊花を集め其優劣を定め勝負すること。  
 圃 菊合菊ものいは、歌  
 すべし 大江丸。  
 菊戴鳥(秋)渡鳥。眼白に似  
 たる小鳥背、  
 翅青綠色、頂  
 に菊花の形し  
 たる黄毛を冠  
 す、好みて杉  
 の實を食ふ。



(戴 菊)







草花

淡緑色なり、後に葉の如き實を結び、夏至に至り枯る。其葉牛舌に似、其根羊蹄に似、實を振り動せばきざしきざといふ如く鳴る。俗に大黃と呼び古語シといふ。||しのね。圃さしきしの胤にはじまる夕哉。雪雨。

草しき(芝蔴)(秋) 藥草。二月苗を生じ七月青碧の花を開く、八月實を結ぶ。||けんじん。

草しげる(樹皮) 茂り。

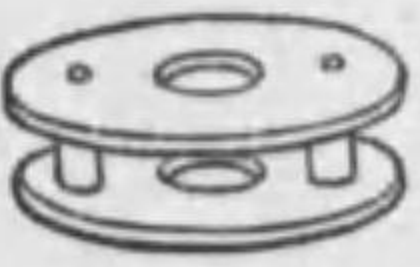
草しな(雄子) 攝津豊島郡垂水村に在る地。俗説に長柄の長者の女、其父の人柱となりて後、雄子も鳴かずば云々の歌を詠じたる古蹟なりと。

草しおだ(岸和田) 和泉國の城下の地名。草しおだ(雄子鳩) 鳩の一種。嘴と脚赤きもの、形小なり。

草しおだ(雄子) (毒) 雄子を嚙るに圓の如き木製の笛を吹き其聲に擬して之を呼寄するもの。

草しおだ(雄子) (原) 野に生ずる草。莖葉軟くして細し。四月白花を開く。||けんじん。

草しおだ(雄子) (原) 野に生ずる草。莖葉軟くして細し。四月白花を開く。||けんじん。



(笛子雄)

草しん

草しん(時人) 普通と異りたる行ひある人、或は片輪者の稱。

草しん(鬼子母神) 鬼面女體の佛身。俗に子育ての神とす。

草しん(騎射) (夏) うまゆみ。

草しん(起請) 誓文のこと。又、男女の契をする誓紙のこと。

草しん(起請忌) 七回忌をいふ。

草しん(規春) (春) 一月の異名。

草しん(規春) (春) 三月の異名。

草しん(紀昌) 列子に見えし弓の名、虱の心中を射貫しといふ人。

草しん(結線) (夏) 虫の名。形蟬虫に類し鳴く聲ギスギスと聞ゆ。一説にハタチリ虫をいふ。||晩夏とし或は秋季とするものあり。圃さすの聲引る計りれむ。||臥突。

草しん(木強) 俗にギョハと云ふに同じ。

草しん(既生魂) (秋) 哉生明(行ハヒ)を見よ。

草しん(黄瀬川) 駿河の南を流れ、沼津町に注ぐ川の名。

草しん(喜獲) 桓武帝の裔にして山城守治に住みし僧。三十六歌仙の一人。

草しん(喜獲) 山城守治郎に在る山。

草しん

草しん(着綿) (秋) 古へ重陽に菊花の上を赤白黄等の綿を被ふこと。菊花の霜を防ぐためなりといひ、又此綿に菊の露を採りて顔などを拭ひ、老を忘れ齡を延ぶる薬とす。||菊の着綿。圃綿とれば菊となりぬる朝かな。||關更。

草しん(輝葉) (秋) 月光をいふ。

草しん(木曾) 木曾義仲、平家追討の願書を八幡宮に納め出陣を祝ふことを作りし謡曲。

草しん(木曾路) 信州木曾川を挟みて兩側の街道を云ふ。||岐蘇。

草しん(木曾) 近江國栗津義仲寺にある、木曾義仲の塚。

草しん(着衣始) (春) 正月三日の好日を撰びて衣を着始る祝。圃母方の紋めづらしやきそはじめ。||山蜂。

草しん(既河) (夏) 薬の日。

草しん(木曾) (秋) 木曾地方の盆踊。圃墓の森見えそめて木曾踊。||董。

草しん(北岩倉) 山城愛宕郡岩倉の地。

草しん(北風) (冬) 北風は冬に多し。冬の風。||朔風。

草しん(北上川) 陸奥岩手郡を流るる河の名。

草しん

草しん(北時雨) (冬) 北風に吹く時雨。圃茶の會は北山時雨する日なり。||董。

草しん(北野石不動) (毒) 正月廿八日、大阪北野天神の傍なる不動寺の不動尊(弘法作なり)に諸人參詣すること。

草しん(北野真白連歌) (毒) 裏白連歌。

草しん(北野御火焼) (冬) 十一月廿五日、京都北野社にて行ふ御火焼の神事。(御火焼の條参照)

草しん(北野御手水) (秋) 七月七日、京北野天満宮梅松院院主、社殿の内陣に入り神前に御手水を献じ、又同社神寶の一なる松風祝に梶の葉を添へて供ふ、これ七夕の神詠を天神自ら書し給ふ爲なりと。北野煤拂をも見よ。

草しん(北野九度参) (夏) 竹亭。圃手洗して神清めけり人の業。||竹亭。

草しん(北野九度参) (夏) 竹亭。圃手洗して神清めけり人の業。||竹亭。

草しん(北野観音開帳) (夏) 六月十七日十八日、京都北野社内の観音堂(管神、梅櫻の材にて自刻したる十一面観音を安置す)の開帳。

草しん(北野御忌日) (毒) 二月廿五日、京都北野社(菅原道真を祀る)の忌日。

草しん(普通と異りたる行ひある人、或は片輪者の稱。)

草しん(鬼子母神) 鬼面女體の佛身。俗に子育ての神とす。

草しん(騎射) (夏) うまゆみ。

草しん(起請) 誓文のこと。又、男女の契をする誓紙のこと。

草しん(起請忌) 七回忌をいふ。

草しん(規春) (春) 一月の異名。

草しん(規春) (春) 三月の異名。

草しん(紀昌) 列子に見えし弓の名、虱の心中を射貫しといふ人。

草しん(結線) (夏) 虫の名。形蟬虫に類し鳴く聲ギスギスと聞ゆ。一説にハタチリ虫をいふ。||晩夏とし或は秋季とするものあり。圃さすの聲引る計りれむ。||臥突。

草しん(木強) 俗にギョハと云ふに同じ。

草しん(既生魂) (秋) 哉生明(行ハヒ)を見よ。

草しん(黄瀬川) 駿河の南を流れ、沼津町に注ぐ川の名。

草しん(喜獲) 桓武帝の裔にして山城守治に住みし僧。三十六歌仙の一人。

草しん(喜獲) 山城守治郎に在る山。

草しん

草しん(京都北野社(菅原道真を祀る)の忌日。此日、西の京の御供田を預る諸家より大小の神供を捧ぐる。とて、神前の階下に至り、社人に手づから是を傳ふ、轉供又は手供(てまご)といひ、其供物に菜花(未だ咲かぬ處は梅花)を挿む、故に菜種の御供と稱す。||天神御忌。圃菜の花の色香や御供の松明り。其朝。

草しん(北野宇坐祭) (秋) 九月廿五日(新暦十月廿五日)北野にて行ふ神事。西の新暦十月廿五日北野にて行ふ野祭にて神輿、花鳥、人物などを色彩巧に造りたるを擔ぎ歩く、之を宇坐の神輿といふ。||北野豊年祭。圃宇坐神輿鏡ばかりは光りけり。

草しん(北野煤拂) (秋) 七月六日、京都北野天満宮の内陣に納め在る神寶を由干し、社殿の煤拂をなす式。

草しん(北野菜種御供) (春) 圃北野の御忌日を見よ。

草しん(北野豊年祭) (秋) 北野宇坐祭。

草しん(北野祭) (秋) 八月四日、京都北野天満宮(祭神菅原道真)の祭禮、神輿下立賣の四御旅所に渡御す、古より祭式の盛にして美麗なること名高し。

草しん

草しん(北野) 圃北野の御忌日を見よ。

草しん(北野) 圃北野の御忌日を見よ。

草しん(北野) 圃北野の御忌日を見よ。

草しん(北野) 圃北野の御忌日を見よ。

草しん(北野) 圃北野の御忌日を見よ。

草しん(北野) 圃北野の御忌日を見よ。

草しん(北野) 圃北野の御忌日を見よ。

草しん(北野) 圃北野の御忌日を見よ。

草しん(北野) 圃北野の御忌日を見よ。

草しん(北野) 圃北野の御忌日を見よ。

草しん(北野) 圃北野の御忌日を見よ。

草しん(北野) 圃北野の御忌日を見よ。

草しん(北野) 圃北野の御忌日を見よ。

草しん(北野) 圃北野の御忌日を見よ。

草しん(北野) 圃北野の御忌日を見よ。

草しん(北野) 圃北野の御忌日を見よ。



(圖之列行供御權菜野北)



遊女をいふ語。

遊女をいふ語。  
 都北山附近の六所社(鹿苑寺の西南にあり)。北山天神。等持院村々社(松尾明神の末社)の祭禮。すべて北山祭といふ。北山の連歌もかけて祭かな五始。  
 茶臼に製する石の名。  
 近江栗津馬場村に在る寺。木曾義仲と芭蕉の塚あり。  
 近江栗津馬場村に在る寺。木曾義仲と芭蕉の塚あり。  
 近江栗津馬場村に在る寺。木曾義仲と芭蕉の塚あり。  
 近江栗津馬場村に在る寺。木曾義仲と芭蕉の塚あり。  
 近江栗津馬場村に在る寺。木曾義仲と芭蕉の塚あり。  
 近江栗津馬場村に在る寺。木曾義仲と芭蕉の塚あり。  
 近江栗津馬場村に在る寺。木曾義仲と芭蕉の塚あり。  
 近江栗津馬場村に在る寺。木曾義仲と芭蕉の塚あり。  
 近江栗津馬場村に在る寺。木曾義仲と芭蕉の塚あり。  
 近江栗津馬場村に在る寺。木曾義仲と芭蕉の塚あり。

月廿五日、京都東寺の西南、吉祥院、菅家の氏寺にて道真の祖、清公の建つる所にて菅氏の徒集り法華經八講を修すること。

月廿五日、京都東寺の西南、吉祥院、菅家の氏寺にて道真の祖、清公の建つる所にて菅氏の徒集り法華經八講を修すること。  
 衣桁に幕を垂れたる如き形の衝立。古へ貴女の坐側に置き視見を避けし具。  
 吉原三浦屋の遊女、平生齋夢を好みしといふ。紀文に請出され妾となる。  
 正月、男兒の遊戯に植の形したる杖にて木製の球を打あひ勝負をなす。其法、十二三間を隔て、其間に線を通し、玉を線内に打入れしを勝とす。これ馬術家の行ふ打毬の變風なりと。ギツチャウ。毬杖。  
 正月、男兒の遊戯に植の形したる杖にて木製の球を打あひ勝負をなす。其法、十二三間を隔て、其間に線を通し、玉を線内に打入れしを勝とす。これ馬術家の行ふ打毬の變風なりと。ギツチャウ。毬杖。  
 正月、男兒の遊戯に植の形したる杖にて木製の球を打あひ勝負をなす。其法、十二三間を隔て、其間に線を通し、玉を線内に打入れしを勝とす。これ馬術家の行ふ打毬の變風なりと。ギツチャウ。毬杖。



(毬杖)

今このネコジャラシと云ふに似て左右に長く垂れし結方。

今このネコジャラシと云ふに似て左右に長く垂れし結方。  
 唐の太宗の名臣、博學の人。龍の首を斬ると夢みて。後、賊を討ちに赴きて功をなす。又、よく太宗を諫む。  
 茶家の遺、冬は塗漆を用ひ、春に至り木地の漆を替へ用ひること。春は風立て灰を飛ばし塗漆に附ゆらなりと。羽飾に音する木地の塗漆かな。馬也。  
 七夕に供ふる瓜菓をいふ。乞巧針の條を見よ。  
 支那の古俗、七夕に婦女七孔の針に五綵の絲を通して供へ、瓜菓を庭上に陳れ巧を乞ふ。若し蜘蛛ありて瓜の上に網する時は願を得たりとす。我國にて後世、此夜の星明にて針に糸を通せば、縫物に上達すとして婦女之行ふ。掛針。乞巧瓜。  
 掛針や舟引とめん天の川。鏡月。  
 七夕祭をいふ。  
 乞巧針。乞巧瓜。願の糸。  
 乞巧針。乞巧瓜。願の糸。  
 乞巧針。乞巧瓜。願の糸。  
 乞巧針。乞巧瓜。願の糸。  
 乞巧針。乞巧瓜。願の糸。  
 乞巧針。乞巧瓜。願の糸。  
 乞巧針。乞巧瓜。願の糸。  
 乞巧針。乞巧瓜。願の糸。  
 乞巧針。乞巧瓜。願の糸。  
 乞巧針。乞巧瓜。願の糸。

の流を流れ淀川に合する川。

の流を流れ淀川に合する川。  
 出雲神門郡の地。又豊後國速見郡の城下。  
 七夕。  
 大和奈良にある遊里。  
 牛若丸と共に奥州へ下向せし男。  
 うしぐるまを云ふ。古へ攝政が乗りしもの。  
 書初(カキ)。  
 左義長の火にて兒童試筆の書を焼くこと。これ書に上達せんことを祈るためなりと。  
 正月九日又は吉日を選び、宮中にて大臣より諸國の守に輪を賜ひ、不動の倉を開く由を奏聞する式。  
 三番叟の冠る烏帽子の稱。  
 ヤチャウ。  
 年の市に正月用ゐる毬打を賣るもの。團扇室より毬打賣りける妙心寺。移竹。  
 鳥の名。大小あり大なるは地位、小なるは雀位、毛色赤青白斑種々にして皆文采あり、嘴長く舌は味より長く、よく樹中の藪を喰ふ、古

俗にけらつ、き。けら、木鳥の月に驚く木の間哉。

俗にけらつ、き。けら、木鳥の月に驚く木の間哉。  
 縦横に組みし格子、箱の祠殿などに多くあるもの。  
 下野那賀郡喜連川の古稱、奥羽街道にあたる川。  
 春の頃、南部五の月、七の月邊の海上に盛氣樓の如きもの現れ、人馬の音聞ゆ、俗説に狐の所爲なりとするもの。  
 能狂言の名。  
 陰濕の地に生ずる菌、色赤く蓋黒くして毒あり。朝生じ夕に枯る。  
 狐手枕(秋) 烏瓜。  
 狐提灯(燈) はらちやくのはな。  
 汚穢の地に生ずる茸、頭傘の如く紫色にして朝生じ夕に枯る。  
 寒中山野に見る燐火なり。狐が柳の根を咬へて打振るなりといひ、又は人骨の腐爛して燐火となるともいふ。狐火や燐火に雨のたまる夜に。蕪村。

節分の夜、江戸吉原の原中大神樂來り、狐の面を被り舞ひ家毎に錢を乞ふ。此狐に抱きつかれたる女は其年に孕むといふをもて遊女を始め女輩、皆逃隠れ興すといふ。

節分の夜、江戸吉原の原中大神樂來り、狐の面を被り舞ひ家毎に錢を乞ふ。此狐に抱きつかれたる女は其年に孕むといふをもて遊女を始め女輩、皆逃隠れ興すといふ。  
 紙團會の神事始めをいふ。五月朔日、擔任の雌色四座、其部下を率ひて寶壽院にて神事の打合せすること。  
 古へ支那にて始めて酒を造りし人。  
 十二月の異名。  
 十月廿三日、高井几董(晋明、春夜樓と號す。夜半亭蕪村の門人、師の歿後其業を繼ぐ)の忌を修すること。晋明忌。  
 散手舞に似て、陸奥方口の面を被り武裝して舞ふ。  
 奇特頭巾(冬) 氣儘頭巾(マツ)。  
 宮中にある御調度の細工場をいふ。  
 物の半ばかりと云ふこと。



きなごり(きなごり鳥)(春)鶯の異名。  
 きなん(奇楠)伽羅木の一種。  
 きぬいも(絹市)(秋)新絹を商ふ市をいふ。||新絹市。  
 きぬもは(絹團扇)(夏)團扇の地を絹にて張りしもの。周囲の枠のみにして骨無きもの。  
 きぬかき(衣笠)帛張の長柄の傘にて周囲に垂布あるもの。  
 きぬかき(衣笠)山城高野郡金閣寺の後にある山。  
 きぬかつぎ(衣被)小さき鶴の如き鳥。背と足黒く灰色の羽あり、田野に棲む。  
 きぬかつぎ(衣被)(秋)里芋を皮の僅茹でて八月十五夜に供ふるもの。江戸の俗。きぬかは「衣川」下總相馬郡の川。絹川とも書く。  
 きぬかき(後朝)添臥したる翌朝の別れをいふ。  
 きぬかき(衣配)(冬)古へ十二月、年始の料に親戚友人互に衣類を贈答する。||冬。團扇の背文庫や衣配。召波。  
 きぬかき(粘)粘の頃、冬衣にすべき帛を縫又は粘にて揃ち軟ぐる。||粘。衣揃つ。打。○四手打(レダ)。しころ打。縫(ワセ)。

きぬた(粘)九州産屋の里の某、在京中妻死して、某歸り來れば、粘の音のみにして主なく、跡を吊ふことを作る謠曲。  
 きぬた(粘足袋)(冬)甲を絹にて製りし足袋。  
 きぬた(衣脱)(夏)四月十五日、綿の入りにたる衣を脱ぎ捨つること。  
 きぬた(生布)(夏)麻布、麻布、木綿布等の未だ晒さざるもの。||木布。  
 きぬた(氣温)(春)春の氣候の温和になりゆくこと。  
 きぬた(宜禰)神社に奉仕する巫女。  
 きぬた(木風)(秋)渡り鳥なり。雀に似て灰色色、山中の樹穴に棲む。  
 きぬた(木根立)木を斬りて根方を殘しあるを云ふ、切株と同じ。  
 きぬた(新年祭)(春)としこひ祭。  
 きぬた(許屋)江戸歌舞伎、長歌の三味線の家元の名。  
 きぬた(甲子祭)(冬)子祭。  
 きぬた(紀川)大和吉野川の下流にて紀州和歌山に入る川。  
 きぬた(蒲)蒲類の總稱なり。又よケ、クサビワともいふ。秋風に生ずるを以て季とす。  
 きぬた(蒲狩)(秋)たけがり。

きぬた(蒲取)(秋)茸狩と同じ。  
 きぬた(蒲飯)(秋)松茸、初茸、松露等の菌を煮て刻み入れ炊きたる飯。○松茸飯。松露飯。  
 きぬた(城崎)但馬國城崎郡の地。湯の島といふ温泉あり。  
 きぬた(喜字屋)江戸吉原にて料理の臺の物を作る家の稱。  
 きぬた(紀路)紀伊國へ通ふ街道。  
 きぬた(氣延)氣を養ふこと。  
 きぬた(紀長谷雄)醍醐帝の時文章を以て有名なる人、官、中納言に至る。  
 きぬた(木丸殿)齊明天皇が土佐國、朝倉の行宮に黒木のまゝの御殿を建給ひし故事。又天智天皇の建給ひしとも云ふ。  
 きぬた(木實)(秋)このみ。  
 きぬた(木實)(春)初春、踏木の萌出る。八月の二季に吉日を獲み四日間、宮中南殿に僧を請じ般若經及仁王經を誦さしむる式。此時、僧に茶を賜ふを行茶とせといふ。團雲なびく季の御讀經の挽茶哉。芭蕉。  
 きぬた(木芽)(春)初春、踏木の萌出る。又専ら山椒の若芽をいふ。團骨柴の刈られながらも木の芽哉。凡光。

きのめづけ(木芽漬)(春)山城鞍馬の土人木の芽(通草(ワヅ)の芽なりと)を漬物とし賣るもの。團春淺き鹽の加減や木の芽漬。木志。  
 きんご(既習)(秋)いざよひ。  
 きんご(既習)(夏)ギョソユ。  
 きんご(書儀方)(夏)五月五日、支那の古俗に、寸紙に儀方の字を書き、之家の四周に張れば其年の蚊蠅を除くといふこと。團妹が子に宿の儀方を書せけり。青々。  
 きんご(香邊草)(秋)るうた草。  
 きんご(黄鸞)寒國に生ずる樹。高二三丈、漆の樹に似たり、此實を染料とし或は薬用とす。  
 きんご(杜父魚)こり。  
 きんご(香邊鳥)佛説に頭二つあると云ふ鳥。  
 きんご(貴妃)楊貴妃のこと。  
 きんご(吉備)備前、備中、備後の三國に美作を加へたる古稱。  
 きんご(黍)(秋)高さ二三尺の草、秋穂を出し粟に似たる實を結ぶ、穀として食ふ。||拒。○高黍。唐黍。團村嶋や黍壳折て風さわぐ。團更。  
 きんご(踵)足のつかをいふ。

きんご(吉備津社)備中吉備郡真金村經山の麓に在る社、靈殿の古式は古來有名にして釜鳴の神事と稱せらる。  
 きんご(黍引)(秋)八月の頃、黍を刈收むること。團我知の寂しさを引く拒細風雲。  
 きんご(黍時)(夏)五月の頃、黍の種を蒔くこと。團黍時や夏なほ霞む筑波山。鶯々。  
 きんご(吉備眞備)孝謙天皇の時入唐せし學者、後右大臣に昇る。俗説に野馬壘の詩を讀みしといふことあり。  
 きんご(生平)(夏)晒さざる麻布。近江犬上郡高宮より出す故に高宮布ともいふ。團風先に伊吹は後に生平坊許六。  
 きんご(枝早團扇)(夏)枝早地方より産する團扇。  
 きんご(急景)(冬)十二月の異名。  
 きんご(枝早提灯)(秋)華奢風流に製り多く草花を畫きしもの。東京にて盆燈籠に代へて吊る提灯。團廉まくや枝早提灯の薄明り。如虹。  
 きんご(貴船)洛外愛宕郡に在る山。山中に貴布禰社あり。  
 きんご(貴船虎杖)貴船虎杖(夏)虎杖

きんご(貴船菊)(秋)京都の貴船、鞍馬等の山中に多き草。  
 きんご(葉は菊に似て)花淡紫なり。  
 きんご(八月)頃菊に先ちて開く、形牡丹の如し。||秋牡丹。紫衣菊。加賀菊。  
 きんご(貴船祭)(秋)九月九日、山城國鞍馬郡貴船社(一に貴布禰とも書く、高龍神(高龍)を祀る。水を司る神なり)の祭禮、京都市中の小兒此日、小さき神輿を作りて振り歩く、之を狹小輿(ワサ)といふ。團祭る日はわたりもやすし貴船川。友元。  
 きんご(紀文)紀國屋文左衛門、元祿の頃、茶室を以て茶遊を行ひし人。



(菊 船 貴)

貴船

貴船

貴船



銀瓜

銀瓜

銀瓜

「折木」(冬)冬の異名。  
 「玉簪」(夏)園圃に植うる花草。葉圓くして末尖り橋欄の擬寶珠に似たり。夏六瓣の小白花を開く。開かんとする時恰も白玉簪の如し。擬寶珠(シメツク)。玉簪。○小玉簪。紫玉簪。園玉簪のさせばめけり大走り。斗流。  
 「氣儘頭巾」(冬)黒き布にて頭部を包むをいふ。おこそ頭巾の類、又奇特頭巾をいふ。園目ばかりを氣儘頭巾の浮世哉。其角。  
 「木守」果の時過ぐるまで樹に取残されしものを云ふ。  
 「君春」(春)歳旦の祝語、君が代の春といふ意。園臣老いぬ白髪を染めて君が春。漱石。  
 「木栲茄子」(夏)木よりむしり取し茄子。  
 「祀三井寺」紀州海草郡にある名刹。西國願禮の札所にて眺望佳絶なり。  
 「琴」支那製の七絃の琴をいふ。  
 「金鳥」日の異名。  
 「金衣公子」(春)鶯の異名。  
 「金衣鳥」(春)鶯の異名。園秀正の時代を略し金衣鳥。巴丈。

「銀河」(秋)あまのがは。  
 「金柑頭」売あたまをいふ。  
 「高」支那戦國時代、趙の人。仙術を得て鯉に乗り空中を飛行すといふ。  
 「金閣寺」山城葛野郡衣笠山の麓にあり一に鹿苑寺といふ。足利義満の造営に成る。  
 「銀閣寺」京都東山鹿谷の北に在り。慈照寺といふ。足利美政の建つる所。  
 「銀閣寺切」白地の雲に飛鶴の模様ある裂地。  
 「金柑」(秋)橘の類、葉は蜜柑より小く、夏小白花を開き、秋の頃、實を結ぶ。形なつめの如く黄色にして光澤あり、食用とす。園金柑や油薬に並ぶ店。文鳴。  
 「銀漢」(秋)あまのかは。  
 「金柑花」(夏)金柑を見よ。  
 「金柑の散る用水の濁りかな」  
 「金柑元結」元結の細きもの。稱。  
 「鴨足草」(夏)ゆきのした。  
 「金銀花」(夏)にんだう。園  
 園にありて名酒の光や金銀花。樂下。

「金魚」(夏)夏季水盤、池泉などに飼養する美しき魚。錦魚。○らんちゆう。園錦魚飼ふて能の大夫の奢りかな。碧梧桐。  
 「錦魚草」(夏)草の名。六月の頃金魚の口の如く紅黄絞の花を開く。  
 「金瓜」(夏)瓜の一種、瓜の色金色なり、攝津死原郡田邊村より出づ。  
 「銀瓜」(夏)瓜の一種、瓜銀色なるもの。  
 「金華山」今の陸前牡鹿郡に屬す、海中より突出せる島山。山麓に黃山神社あり。  
 「錦鶏草」(夏)草の名。葉細長く尖り、夏の頃單瓣の花を開く、紅褐色にて形菊花の如し。  
 「金海鼠」(冬)海鼠の一種、體金色を帯びたれば名く、奥州金華山の海邊に多く産す。  
 「金札」神社造營の勅使、伏見に至りしに、天より金札を降らし奇特を現したることを作りし謡曲。  
 「金山寺」麴と大豆にて造りし味噌に、茄子、大根などを入れし惣物の名。  
 「紫色」綾織裝束の色目の勅許なり。

金波

金波

金波

「金波」(秋)月光をいふ。  
 「銀杏」(秋)いてふの實をいふ。  
 「能狂言の名」  
 「金商」(秋)秋の異名。  
 「金星草」(春)ヒトツバ。  
 「金蓮花」(春)草の名。高さ四五寸、葉の形ササに似て厚く狭し、タンボポの如く野生し三月薄黄色、又は黄色の盃形の花を開く。夏、葶中に實を結ぶ。長春菊。高麗花。園金蓮花夕日につるる眠哉。百里。  
 「銀鏡花」(春)草の名。五六月頃花を開く形楕に似て青白、朝開きて夕に萎む故に朝露草ともいふ。園香さへ頼なき間や朝露草。安靜。  
 「貴公子」(冬)漢詩より出し語、垂水(つ)を云ふ。  
 「銀鏡」(秋)月の兎と同じ。月の異名。  
 「銀杏」(秋)いてふの實をいふ。  
 「金波」(秋)月光をいふ。

「金蠅」(夏)蠅の一種、鉢、金色に光るもの。  
 「勤香」徳川時代に大名の家來が主人の江戸詰の時従ひ來ること。  
 「公平」昔御伽本などに假作されし人物。坂田金時の子にて勇猛比なしと。  
 「金華山」羽後國東田川に在る山。又、大和吉野郡にも在り、又甲信二州に跨る山にも此名あり。  
 「銀動」一に海どちやうといふ。形どちやうの如く全身、黄色黒點あり、多く天ぶらさして食ふ。  
 「金風花」(春)おにたがらし(鬼毛蕨)ともいふ草、莖葉共にタカラシの如く。  
 「細毛」  
 「四五」  
 「五瓣」  
 「花を」  
 「小實を結ぶ」(俳諧にて古來春季とす)毛蕨。園瑠璃鉢に色増りけり金風



(花 風 金)

「竹亭」  
 「銀葉」(夏)眞桑瓜の大きくして味悪きもの。  
 「金目實」(秋)百菊の一、黄にして小輪なるもの。こがれめき。  
 「禁野」能狂言の名。  
 「禁裏御灯籠」(秋)盆會の頃、諸家より禁裏へ献じたる燈籠を南殿に點じ、七月十四日下民の拜を許すこと。  
 「黄紅葉衣」(秋)カサネの色目の名、表黄、裏濃き黄、又は表黄裏青、又は表黄裏紅。  
 「肝向」心の枕詞。  
 「氣陽」(夏)夏の異名。  
 「行觀忌」(冬)十一月廿八日、京都音羽山清水寺にて行觀の忌を修すること。行觀は大和小島寺の沙門延綱が、寶龜九年に靈夢に感じ當所にて邂逅せし二百歳の老翁にて觀音の化身なりといふ。延綱に靈木を授け觀音の像を刻み精舎を建つることを托し、飄然東國に赴く、十一月廿八日は即其日なりと。謡曲「田村」にも此事を作れり。  
 「行觀忌」(冬)同前。園行觀忌や地主の櫻の返り花。



事やん

事やん(寛寧)事業の成功したる後の酒宴。  
 事やん(行雅)徒然草に見えし人物。唐橋中將の子にして達識の僧なり、奇病をやみて死す。  
 事やん(匡衡)前漢の人、家貧にして火を得る能はず、壁を穿ちて隣家の燭光を引き、書を讀みしといふ。  
 事やん(行香)香會の時、香を配布すること。  
 事やん(京蕪)(冬)京都地方より出る蕪の稱。  
 事やん(行基)和泉の人、聖武帝の時の大僧正なり。瑜珈唯識の學に精通す。天平二十一年帝に菩薩戒を授け同年二月歿す。  
 事やん(經木流)(秋)七月十六日、大坂四天王寺の經香堂(みぎのり)にて諸人志す處の法名を經木に乞ひ記し、寺内の龜井の水を以て回向をなすこと。國流し行く舟に添ひくる經木哉永年。  
 事やん(行基委)(春)二月二日、攝津河邊郡長岡村眞高山毘盧寺にて開祖、行基大師(天平廿一年二月二日寂)の忌を修し諸人參詣す。寺は天正年間に戻

事やん

疎し、後に小堂を構へて本尊及開山の像を置く。圓短かき行基參の摘蓮。青々。  
 事やん(行々千)(夏)葦切(あしきり)。  
 事やん(行基燒)素燒の陶器にて、炭色なるもの。掛花瓶などに多し。  
 事やん(經供養)(春)天王寺經供養。  
 事やん(香花雨)(春)清明に降る雨をいふ。  
 事やん(京官除目)(秋)ツカサメシ。  
 事やん(美臆)後漢の人、性至孝にして友愛厚く、常に弟と妾を共にして起臥す。曾て賊に逢ひて弟と死を争ふて、賊の心を感ぜしめしといふ。  
 事やん(京草履)淡竹の皮にて編みし草履。  
 事やん(警策)詩文の勝れしものを云ふ。又、禪宗の僧の用ゐる杖の名。  
 事やん(景迹)經歷を云ふ。  
 事やん(香匙)香を盛るさじの名。  
 事やん(行者山)(夏)祇園會の山の、役の行者、葛城神、善鬼の像を作る。  
 事やん(京助)江戸助と同じ意なり。其條參照すべし。  
 事やん(行水)(夏)夏季、盥などの中に

事やん

て行水すること。圓行水の心やすきよ山の月。月人。  
 事やん(行水名殘)(秋)秋になりて行水を廢するをいふ。圓行水の名殘の香や十日月。碧梧桐。  
 事やん(行尊)朱雀帝の時、天台の座主たりし人。畫を善す。  
 事やん(鏡臺祝)(春)正月廿日、婦女、鏡臺に供へし餅を祝ひ食ふこと。ハツカと初願と其調似たれば、初願祝ふ意とす。圓餅白ふ鏡臺祝ふお末かな。觀魚。  
 事やん(興女)遊女、藝妓などないふ。  
 事やん(行徳)下總葛飾郡に在り、鹽を産し、又魚市を以て有名なり。  
 事やん(京七口)各地より京都へ道路の入口七つないふ。東三條口、長坊口、伏見口、鞍馬口、七條丹波口、大原口、鳥羽口。又一説に清盛口、荒神口、粟田口、清谷口、大原口、丹波口、鞍馬口、なりとも云ふ。  
 事やん(京間)一間を六尺三寸又は六尺五寸の尺度としたる座敷。  
 事やん(京紫)赤みを帯びたる紫色をいふ。  
 事やん(經讀鳥)(春)鶯の異名。

事やん

事やん(京室)すべて世上の風説かなすもの。汎稱。  
 事やん(行圓忌)(春)三月十六日、京都一條の北、行願寺にて開祖行圓(天台宗の僧、常に革の衣を着し故に革上人の稱あり、寺を草堂と呼ぶ、寛弘頃の人)の忌を修すること。  
 事やん(客人宮)(夏)山王祭のとき出る神輿の名。七社の内の一、幸崎にて供御を奉り又船にて漕戻るなり。圓客人の宮もとまらで夜の雨。沾徳。  
 事やん(脚湯)足を湯にて温むること。病者などに行ふもの。  
 事やん(逆峯入)(秋)峯入を見よ。圓山勝や宮を守護なす法螺の音。太威。  
 事やん(脚馬)(夏)抱籠の類にて足に置くしもの。圓脚馬は人には、かゝる者り哉。潮馬。  
 事やん(脚立)踏躰の類。四足ありて梯形をなす。  
 事やん(黄柳衣)(春)カサネの色目の名、表薄黄、裏薄青。  
 事やん(脚布)女の下帯を云ふ。  
 事やん(木屋町)京三條、加茂川の西に沿へる町。一に橋木町と云ふ、昔は遊女屋ありしところ。

事やん

事やん(伽羅)香水の皮を取て香料とせしもの。圓香楠。  
 事やん(伽羅栴)(秋)栴の一種、實の形圓く稍尖り肉中に木理の如きもの透さ見ゆ。圓すきとほり栴。  
 事やん(窮月)(冬)十二月の異名。  
 事やん(宮線添)(冬)きうせんをそふ。  
 事やん(散)虎の形を木にて造り、背に二十七の鉄刺をつけ長さ一尺許の木にてすりて音を發せしむる樂器。  
 事やん(許由)周の文王の時、箕山に隱れ、天下を讓らんと云はれて汚れを聞しとて耳を洗ひし人。又、鳴鳳(ナリ)の故事あり。  
 事やん(照燈耗)(冬)十二月廿四日、床の邊に灯を照せば、貧を富にかへるといふ支那の俗説。  
 事やん(清風)京都藤森の祠宮、歌をよみて繪馬の子規を鳴かせ又は強盜の難を死れし人。  
 事やん(御忌)(春)正月十九日より廿五日まで、淨土宗の寺院にて開祖法然上人の忌を修す、京都智恵院、東都増上寺等最も盛なり。京都の俗此日を遊覽の始とし、美衣を飾り、辨當を携へ、參詣す、

事やん

故に辨當始と呼ぶ。(辨當納をも見よ)。圓御忌詣。○御忌の儀。御忌小袖。圓うかれ女や佛事ともなき御忌詣。李流。  
 事やん(御忌小袖)(春)正月十七日、御忌に祇園町の遊女は一統に衣裳を着更ゆるを云ふ。  
 事やん(御忌定)(冬)十一月十一日、京都東山智恵院にて役僧等相會し、明年の御忌の導師及び法役の僧を定むる式。  
 事やん(御忌鐘)(春)御忌の時、撞く鐘なり。圓曙の雲の中より御忌の鐘升六。  
 事やん(御忌詣)(春)御忌に詣づること。  
 事やん(玉海集)明暦二年、安原貞室が集録せし歌句集。  
 事やん(玉環)楊貴妃の幼名。  
 事やん(曲水)(春)曲水の宴。  
 事やん(曲水宴)(春)三月三日、水邊に宴し、盃を上流より流して己が前を過ぎさるうち盃を作り、後盃を把つて飲む。支那の古俗にして早くより我國に傳はり樂中の行事となる。圓まがりみづのさよのあかり。こくすのえ







霧のぼた

霧のぼた「桐花」(夏)桐は春の末より初夏に葉或は白の花を開く、形筒の如くにて種をなす、花衰へて花を生ず、實は扁くして尖り長さ寸餘、内に小子あり。桐の花寺は桂の里はづれ、曉臺。

霧のぼた「梧一葉」芭蕉が俳諧の「タニ」の事につき記したる書。實は後世の偽作なりといふ。

霧のぼた「霧籠」(秋)霧の立ち隔てたるを垣に比へていふ。||霧の芭。

霧のぼた「桐實」(秋)桐の花を見よ。桐の實や詠め久しき秋の色。長翠。

霧のぼた「霧籠」(秋)駒虫に信濃國霧原の牧より買進する馬をいふ。

霧のぼた「桐一葉」(秋)初秋、桐の葉の散落すること。一葉落て天下秋を知るなどの語あるより云ふ。||一葉。一葉舟。一葉散る。桐の青き中より一葉哉。盛太。

霧のぼた「桐火桶」(冬)桐にて製したる火桶。桐火桶人來て閉を奪ひけり衆婦。

霧のぼた「桐火桶」後成瀬が歌の論を記したる書。

霧のぼた「桐生」上野山田郡の地。

草

草「切疔」上下黒く中白き爛の羽にて作りし矢。

草「切生芒」(毒)かりふの芒に同じ。

草「霧降蓮」下野日光山にある三瀧の一。

草「切棒」駕を擔ぐ棒の長からぬもの。邸の駕多く長棒にして擔ぐ人数多し。町醫など乗るもの切棒なり。

草「切干」(冬)大根を細長く刻み、蒸にて日に干し貯蔵するもの。園切干も三千丈や四ヶ原。松江。

草「切幕」芝居の揚幕をいふ。

草「切夢」(夏)暑時、小麥粉を温純の如く製し細く切りて煮、冷して食ふ。||冷夢。園切夢やすすしき影を水鏡園解。

草「麒麟草」(夏)草の名、高さ一二尺、莖葉は

草「似た」

草「夏、莖」

草「上」



(草 りき)

霧のぼた

黄色の小花を開く。一種秋のきりん草と稱するものあり。葉は綠葉に似、莖の色黒く、秋の末、小黄花を開く。園物とひにくる目印やきりん草。徳元。

霧のぼた「切虎落」竹矢來のこと。

霧のぼた「着衣」さしもの。京語。

霧のぼた「切盛」物事を操縦すること。

霧のぼた「切風」(毒)切だ。

霧のぼた「切字」俳句に云ふ切字とは終止言の手前於葉のことにて、更に、意切れ、廻しなど名目を付たるあり、要は一句の中の何れかに断止の音節あるを云ふ。

霧のぼた「切風」(毒)紙馬(紙馬)の糸切れて飛行き、若くは落ちたるもの。||落風。切れい。園切、いや淺茅が原の草の露。完全。

霧のぼた「切や」俳句の上五字の終にありて意味を強むるやの字。「春雨や蜂の巣つたふ雨のもり」の如し。

霧のぼた「紙王」平清盛に愛せられし妓。後に佛御前の爲に寵を奪はれ、「萌出るも、枯るも同じ野邊の草何れか秋に逢はで果べき」と讀み、髪を切て嵯峨に墜る、時に年廿一歳。

霧のぼた「木綿」(冬)綿の一種、もめん綿な

霧のぼた

霧のぼた「初夏種を下し草の高き三四尺、六月葉間に五出の淺黄花を開く、秋晴の日其實より架を吐く、實の形桃に似たればも、吹くと稱す、摘みて綿に製す。||唐綿。○綿打。綿くり。綿車。綿弓。蓮綿。駄綿。東れ綿。園山畑はわく霜早き木綿かな。松吟。

霧のぼた「木綿取」(秋)綿取。園木綿とる雨雲たちの生駒山。其角。

霧のぼた「妓園」唐の玄宗皇帝、官女を集めて身の周圍をかこび寒を防ぎしこと。俗に肉屏風といふ。一説に楊國忠の事とす。肉陣の條を見よ。

霧のぼた「紙園」京都四條の東南の地。八坂神社あり。妓樓多くありて繁昌の地。

霧のぼた「紙園精舎」天然の須菩提が禪迦の爲に寄附建立したる廣大なる庭園伽藍の名。釋尊常に茲にて說法し給へりと云ふ。

霧のぼた「紙園一切經會」(毒)三月十五日、京都紙園社にて行ひたる式、古より絶えなければ未詳。園一切經をわらひ佛の機嫌かな。元親。

霧のぼた「紙園御火燒」(冬)十一月朔日、京都紙園社にて行ふ御火燒の神事。(御火燒の條參照)

霧のぼた

霧のぼた「紙園削掛」(毒)十二月晦日子の刻、京紙園の社前にて一簾火の外悉く火を吹消し、暗中參詣の群集口を恣にして他人を斥る、其人之を聞くとも決して争はず、却て懺悔となす。丑の刻に及び社司執行、拜殿に上り經呪を誦し、東西の欄に建てし削掛の木、左右十二本(十二ヶ月を表す。一に卯杖と稱す)を同時に焼く。俗説に此火葬く方向の國は五穀實らずとて大に忌む。園明けの間をばやせ紙園の削掛學海。

霧のぼた「紙園御靈會」(夏)紙園會に同じ。

霧のぼた「紙園千文拂」(毒)三月十四日、京都紙園社にて行ふ、實錢千文を撒き惡神を祓ふ神事。

霧のぼた「紙園兒定」(冬)紙園會の條を見よ。||針の兒定め。

霧のぼた「紙園女御」白河院より平忠盛に賜ひし官女。清盛が母也。

霧のぼた「紙園初」(夏)紙園會の條を見よ。

霧のぼた「紙園神典洗」(夏)五月晦日夜、京紙園社の神典三基を神庫より出し、社殿に移し其一基、少將井と稱

霧のぼた

するを四條宮川の邊に昇き行きて鴨河の水に濯ふ。此時四條の佛堂及町家各、提灯を點じて神典を守護す、六月祭禮終りて後も又此式を行ふ。園すすしめに神典洗へる氏子哉。常長。

霧のぼた「紙園御入講」(毒)昔時二月八日に京都紙園社にて法華經を論講したる式。今絶てなしと雖ももとは幼會にて行はれたりといふ。園八講や眞葛の原の風の音。文鳴。

霧のぼた「紙園臨時祭」(夏)六月十五日(紙園會の翌日)紙園社臨時祭あり。主上宮中にて御暇を行ひ、宣命、東遊を奉らる。

霧のぼた「紙園會」(夏)京都紙園社の祭禮なり、一に御靈會といふ、先づ五月朔日(吉符入を見よ)の致齋より四條御旗町へ神を立て、廿日より針の町々にて蠟子初を行ひ針の兒を定む、(紙園兒定め、紙園燈初を見よ)。同晦日、神典洗ひ(紙園御典洗を見よ)あり、六月初日、針兒紙園詣あり、(其條參照)五日を針の引初めとし、六日山針の前後を園にて定め、(針園(針)參照)此日夕刻より宵宮飾(宵飾、青山といふ)とて針を飾り、提灯を連れ灯して蠟子をなす、七日卯



の刻より長刀鉾を第一として、函谷鉾、放下鉾、鷲鉾、菊水鉾、月鉾、船鉾等市を渡る。

各鉾高さ十数丈、心木に長刀、三日月等の形を頂き、屋蓋には鉾櫓の幕を張り、正面に一人の兒、頭に寶冠を戴き、腰に羯鼓を繋ぎ、之を打て躍る、其左右に侍童あり、團扇を以て之を揮揚し、傍に笛、太鼓、鉦等にて拍す、之を祇園囃(ギョウゼン)といふ。鉾の下は車輪二双を附し、左右に大繩を施して、數十人之を曳く。其他、天神山、野天神山、太子山、占出山(ウツデ)、白樂天山、琴破山、郭巨山(コウキョウ)、山伏山、木賊山、孟宗山、蘆刈山、蟻塚山、保昌山、余鉾、岩戸山等の山(臺)上に繩々鉾を以て山形を作り之に多くは松を立て、傍に人形を飾り出で、鉾に従って連行す、神輿は其日の暮、未刻より祇園社を出て、四條の御旅



(圖之召結會園祇)

所に移る、絃召等甲冑を着て之に従ふ。八日より十四日の山鉾の營ありて十三日圖取をなす、之を山圖といふ。十四日朝より橋辨慶山、黒主山、淨妙山、行者山、鯉山、鈴鹿山、八幡山、觀音山、鷹山、船鉾等渡り、神輿御旅所を出て市中を練歩き歸す。現時の祭日は新曆七月十七日より廿四日までとす。(山鉾の名各條参照) 圖 祇園會や道狭らぬ手水賣 旨原。

【氣折】氣短なること。

【空海】弘法大師の名。讃岐の人、俗姓佐伯氏、入唐して真言の秘法を傳へ、天仁元年高野山金剛寺を創立す。

【宮司】祭主に次ぐ神官。又、宮の名ある社の神官の長。

【空也】名は光勝、仁明帝の皇孫、天台の一派の空也念佛宗の祖、瓢箪を叩きて阿彌陀を唱ふ、世に市上人と呼ばれり、天祿三年寂。

【空也忌】(冬)十一月十三日、空也上人の忌日に京四條、空也堂にて法會

を行ふ。此日より四十八日間空也宗の徒、鉢叩きを行ふ。圖 空也忌やうかれ心に法の聲 知石。

【空也堂】京四條堀河の東に在る堂。光勝寺といふ。

【おもしろうさみしき空也念佛かな 山公】

【探湯】古代、正邪を糺すに神に盟ひ、手を熱湯に入れて糜爛するものを邪とし、然らざるを正として成敗せしこと。

【釘隠】長押の釘を蔽ふ爲め種々の模様ある金物を張りて飾るもの。

【葦漕】(冬)葦著の多く出る頃、其葦葉を漕、鹽等に漬り貯へ置き食用とするもの。多く年の暮に漬り來春までも貯ふ。圖 葦漕にたがねて送る葦葉哉 召波。

【葦菜】(冬)葦漬の菜。

【句兄弟】元祿七年、其角の著にて、古人及び師友の秀句に模倣して自作を合せ、換骨脱體の作手を示したる書。

【復伎羅】(夏)ほととぎすの異名。

【聖立】(春)二三月の頃、蘆薈、菜

類の葉を出すをいふ。|| 葦、葦葉。圖 雨晴れて整立となる鳥哉 十計。

【傀儡師】(春)夷題しの類。|| くわいらいし。

【九月】(秋)「異名」無射(ヤシ)。季秋。葉秋。菊秋。晚秋。主月。栴の秋。長月。菊月。紅葉月。寢覺月(ネガサキ)。小田刈月(コタガキ)。菊咲月(キクサキ)。紅葉月(もみぢ)。彩り月。圖 伊勢に居て根柢丸き九月哉 葛三。

【九月盡】(秋)暮の秋。圖 石上に星翫はる夜や九月盡 世竹。

【九軒】大坂新町の遊廓の別稱。

【河邊】山林に叢生する灌木。概ね四五尺にして、枝に刺多し、春秋



(こ) (く)

茶といひ又、其汁を飯に入れて炊くを枸杞飯といふ。六七月頃、五瓣の紅葉の小花を開き、秋赤くして小なる實を結ぶ。圖 くこの芽や朝々つめど萌出る一畝。

【内裡にて食膳のこを云ふ。】

【枸杞茶】(春)枸杞の葉にて製したる茶。

【枸杞花】(夏)く。

【枸杞實】(秋)枸杞を見よ。圖 枸杞の實のこはれて霜の稍寒し 土

【枸杞芽】(春)枸杞の春芽。

【枸杞飯】(春)く、くを見よ。圖 枸杞飯と書つゝ高し桃花坊 飄吾。

【百草】(夏)百草を開けす。

【草燻】(夏)夏日、山野の草木が日光の暑熱のために蒸されて其臭氣甚しきをいふ。圖 草いきれ人死居ると札の立つ 蕪村。

【草市】(秋)盆市。

【草葺】(夏)葺に同じ。|| 蓬桑。

【草芳】(春)春草の綠香ふが如きをいふ。圖 細路や草芳しき宵の月 延長。

【草枯】(冬)草枯る。

【草枯】(冬)冬、諸草の枯るゝこと。|| 枯草。草がれ。圖 草枯れに種炊すす樵夫かな 白雄。

【常山花】(秋)原野に多き樹、葉は桐に似て小く、臭氣甚しき故に臭木、臭桐等の稱あり、秋初、五瓣の白花(萼赤し)簇生す。|| 蜀漆。恒山。圖 枝ながら虫うりてゆく常山哉 含帖。

【常山虫】(秋)常山(ツツジ)に寄生して其木を食ふ虫、捕へ焼きて小兒の疳の薬とす。此虫を赤蛙などと共に賣りに來るものあり。圖 土器や常山の虫のいちり焼 貞無。

【田畑の雜草を刈るをいふ。】

【草莖】(秋)鴟の草莖。

【草茂】(夏)夏草の繁茂を云ふ。

【草賣】(夏)夏草の繁茂を云ふ。圖 酒賣も來すなる草の茂り哉 道彦。

【草鹿】(古)弓術の稽古の爲め、草木を集めて鹿の形を作りてとするもの。鎌倉時代の技。

【草下毛】(夏)草の名、初夏、木下毛に似たる細紅花群り開く。

【草相撲】(秋)田舎の壯夫などが草原の上などにて行ふ相撲。圖 脱ぎすてて角力になりぬ草の上 太紙。

【草摺】(夏)腰の邊に垂れたる裾



をいふ。

くまづ「草津」上州吾妻郡に在る温泉地、有名なり。又近江栗太郡の驛の名にて東海道中山道追分の處。  
 くまづつ「草津月」(秋)八月の異名。  
 くまづつみ「草堤」病の枕詞。  
 くまづつみ「草摘」(春)つみくさ。  
 くまづつみのけん「草薙劍」日本武尊東征の時、賊の火を防ぎし神寶の劍。  
 くまづつみの「草主」(秋)菊の異名。  
 くまづつみの「草色」(秋)草の紅葉。國色付て花にこぼる、小草かな、惟然。  
 くまづつみの「草香」(秋)るうた草。  
 くまづつみの「草錦」(秋)草の紅葉。國別れ路や草の錦をたつ思ひ、几重。  
 くまづつみの「草花」(秋)草花。國吹て嬉し華のほとりの草の花、菱湖。  
 くまづつみの「草實」(秋)諸草の實をいふ。木の實に對して古來秋季とす。國草の實や空しく土となるばかり、關東。  
 くまづつみの「草芽」(春)一二月の頃諸草の萌出ること。草萌る。したした。○菊の芽。萩の芽。萩の芽。萩の芽。芒の芽。若芝。かさつばたの芽。芦の芽。國草の芽や塚のけふる雨上り、夢雨。  
 くまづつみの「草餅」(春)三月三日の節句に

蓮の若葉を採り、莖を去りて煮熟し、蓮にひろげて乾したるものを交へて搗きたる餅を雛に供へ又は近隣に贈答す、古は母子草を交へたれば母子餅といふ。草餅、蓮餅、國鶯の來て染つらん草の餅、嵐雪。

くまづつみの「草紅葉」(秋)諸草の紅葉すること。草紅葉、草の錦、草の色。國草紅葉思ひ草にも限らぬぞ、長翠。  
 くまづつみの「草王」(春)草の名、葉は菊に似て一葉毎に五つに成る、莖葉に毛茸あり、四月頃莖頭に四瓣の黄色の花を開く。白屈菜。  
 くまづつみの「草花」(秋)秋草の花をいふ。(草花は四季中最も秋に多ければなり)。草の花。秋草。千草(チヂ)。野の花。野の錦。國あつめれば花にはあらぬ小草哉、秋波。  
 くまづつみの「草」(秋)さのい。  
 くまづつみの「南山伏」能狂言の名。  
 くまづつみの「草煙」(夏)山煙。  
 くまづつみの「草薙」(夏)イハフヤ。  
 くまづつみの「草芙蓉」(夏)蓮の異名。  
 くまづつみの「草牡丹」(秋)草の名、葉は牡丹に似て小く、秋、莖端に單瓣の白花を開く。

くまづつみの「草枕」旅の枕詞。

くまづつみの「草夢」(春)青夢。國草夢や村はのく、朝の露、梅立。國草夢や村はのく、草結、道の葉に草を結びゆくことより、すべて案内の語に用ゐる。又、草の度な結ぶこと。  
 くまづつみの「草萌」(春)草もゆる。下しし。國草の戸や狗子草もえ出る、乙二。  
 くまづつみの「草餅」(春)草の餅を見よ。  
 くまづつみの「草薙」(秋)草の紅葉。  
 くまづつみの「草香」(春)草もね。下もね。  
 くまづつみの「金糸梅」(春)キャンシバイ。  
 くまづつみの「鎖願」歌或は俳句の上下の句を尻取の如くつづけ行く技。  
 くまづつみの「廣市」(冬)べつたら市。  
 くまづつみの「草若菜」(春)春、諸草の芽を出し若菜するをいふ。○萩若菜。萩若菜。けし若菜。菊若菜。菘若菜。葛若菜。國餌にあやめ家鴨の嘴や草若菜、菜雪。  
 くまづつみの「首」くび。  
 くまづつみの「髪」かみ。  
 くまづつみの「酒」さけ。  
 くまづつみの「奇」ふしきなること。  
 くまづつみの「孔子」孔夫子。  
 くまづつみの「虞氏」楚の項羽の愛姫、項羽が沛公

のため

のためには地下に埋まれば時死す。  
 くまづつみの「節占」さし節を立て、倒れし方により事を卜ふこと。  
 くまづつみの「鹿」鹿の一種、麝香を取ることをの鹿の雄なり、形鹿より小く角なくして、黒黄の毛を蒙る。熱地の産。麝。鹿。  
 くまづつみの「串柿飾」(春)竹串に貫きたる干柿を蓬茶壺及飾籠に祝ひ用ゐること。國串柿の夫婦めでたき連理故遊花。  
 くまづつみの「舊事記」日本古代の史書。古事記と併稱す。  
 くまづつみの「佛道具」佛道具を入る、箱。  
 くまづつみの「串海鼠」(冬)いりこ、串にさしたるもの。國宇治橋の串海鼠はつすや月の下知、其角。  
 くまづつみの「飯師小平太」江戸傀儡子遣ひの名人。  
 くまづつみの「鬪罪人」能狂言の名。  
 くまづつみの「獄門」獄門にかけらる、首をいふ。くまづつみの「孔子」恰情の者にも過あることいふ説。  
 くまづつみの「九子粽」(夏)古へ唐の頃の粽の名。カクシヨの條参照。  
 くまづつみの「酒神」少名彦命のこをいふ。

くまづつみの「奇」怪しきこと。

くまづつみの「孔雀草」(秋)草の名、高さ一尺餘、七月頃、紅黄色にして菊花に似たる花を開く。○藤菊。  
 くまづつみの「孔雀草」ヒハの一種、其葉孔雀の尾を廣げたる如くなるもの。  
 くまづつみの「孔雀石」孔雀の羽色に似たる銅質の化石。  
 くまづつみの「孔雀長屋」江戸吉原廓外に駕籠昇の住みし家屋の稱。  
 くまづつみの「俱舍宗」佛教の小乗派の宗旨。天親菩薩の俱舍論を宗とするもの。  
 くまづつみの「快」よがること。  
 くまづつみの「熊手の大なるをいふ」松葉、芥などをかくもの。  
 くまづつみの「刺」古代、肘に巻きし腕輪の類。  
 くまづつみの「高」高さ十丈に至る常緑木、夏黄白花を開く。古きものは化石す。俳諧には難なり。○楠。  
 くまづつみの「葛」(秋)蔓草、春宿根より生じ、葉は圓く尖り蔓と共に褐色の毛あり、其色青く裏白し、風吹けば飄りて人の掌を反す如し。歌人之を葛の葉の裏見こいひ、人の恨に比ふ。夏秋の交、花穂を出す三五寸にして垂れ、豆の花に似て紫赤なり、後に英を結ぶ、實は食ふべし。

くまづつみの「玉」

らす。秋其根を彫りて葛粉に製す。葛そのみは秋にして、葛の花は夏なり。○眞葛。○葛根堀。國葛の葉の恨み顔なる細雨哉、蕪村。  
 くまづつみの「國栖」國栖の姿を見よ。國山樵の御階に近し國栖使、神石。  
 くまづつみの「國栖」大海人の皇子、大友の皇子に襲はれて吉野山に通れ入りしに、山神、老夫婦と現じて救ひ奉ることを作りし説曲。  
 くまづつみの「國栖魚」(春)くすつを。  
 くまづつみの「國栖魚」(春)國栖の姿に國栖人より獻る魚。鮎の類なりと。國國栖魚は老て吉野の春くれぬ、迂外。  
 くまづつみの「醫師」いしやをいふ。  
 くまづつみの「奇」ふしきなること。  
 くまづつみの「屈」物憂き貌をいふ。  
 くまづつみの「薬玉」  
 (夏)  
 五月  
 五日、  
 宮中  
 殿殿  
 寮の  
 糸所



(玉 藥)



より、種々の香料を玉とし、道花に八尺ばかりの五彩の糸等を結びたるものを献ず、天子、晝御座間に之を懸く、(此時去年九月懸けたる菊花茶更を撤す) 薬の玉。さつきの玉。 國 薬玉やほの匂ふなる横柱 夜叩。

くすねぼろ【葛根堀】(秋) 秋の頃、葛の根を堀りて敲き水に浸し、後之を絞リ、水飛して葛粉に製すること。大和吉野は最も盛に之を製す。 國 袖白し葛の根た、く岩の上 關更。

くすのたす【國栖歌笛】(春) くすぶえ。

くすのたす【國栖奏】(春) 大和國吉野郡の國栖人、應神帝吉野行幸の時、體酒を獻じたるより後、毎年參朝して國栖魚を奉り歌曲を奏す。元日節會、踏歌節會等に行ひしといふ。 國 國栖魚。國栖魚。 國 どりいでて古き笛なりくすの矣 死酒。

くすのは【葛葉】(秋) 葛を見よ。

くすのは【葛花】(秋) 葛を見よ。 國 ごとく、くすの清水隠して葛の花 青露。

くすのぼろ【葛松原】支考が著述にて俳諧の準繩を師翁の説によりて記したる書。

くすばか【葛袴】葛の布にて作りし袴。

くすび【國栖人】國栖。

くすび【國栖笛】(春) 國栖奏の時に國栖人の吹く笛の樂をいふ。 國 國栖の歌笛。 國 古事も知らぬ顔なり國栖の笛 尋香。

くすみつ【葛水】(夏) 夏季、葛の粉を冷水にてかきたて飲料とするもの。 國 葛水や茶碗取次ぐ馬の上 車蓋。

くすも【葛餅】(夏) 葛粉を煮て餅の如く練り角に切りて、黄粉などを附けしもの。多く夏の食品とす。 國 吹出しの水 葛餅を流れけり 子規。

くすりがり【藥狩】(夏) 藥の日。

くすりがり【藥吠】(冬) 昔、獸肉を喰ふを忌みし時、寒の内に限り、鹿、猪の肉を喰ふこと。これ、體を温め血を調ふといふ。鹿は春日、加茂等の神使なればシカといはずして、ロクといひ、之を賣る者を鹿賣(カウ)といひ、猪を賣るものを田猪賣(ウヅ)といふ。 國 客僧の狸寝入や藥喰 藥村。

くすり【藥子】(春) 御藥(ミヤク)を供すを見よ。 國 藥子やけふ香そむる千々の春 未得。

くすりのたす【藥玉】(夏) くすだま。

くすりのひ【藥日】(夏) 五月五日、藥草を摘

み蓄ふこと。此日に採りたる藥草は効大なりとて、古より支那に行はれ我國にも之を傳ふ。一に藥草摘、藥狩、數ひ取らざりといふ。 國 藥狩。 國 放れては又呼かふや取らざり 米哉。

くすりの【藥日】(夏) くすりのひ。

くすりの【藥降】(夏) 藥日(カウ)に降る雨露をいふ。 國 のびたがる草に藥の降る日かな 升六。

くすりぼろ【藥堀】(秋) 秋、諸種の藥草の根を堀り採りて藥に製すること。 國 老が身に伊吹おろしや藥堀 二柳。

くせ【曲】諸曲の節の名。

くせいなん【虞世南】字は伯施。唐の太宗の名臣。書法に高名なり。

くせいのふ【弘誓船】弘く衆生を濟はんことを誓ひし佛の語を船に人を乗するに譬へし語。 國 誓の船。

くせの【久世里】山城久世郡の地。藏王堂のある所。

くせの【久世戸】天橋立、久世戸の文珠の縁起を作りし諸曲。

くせはいたまつり【久世灰形祭】(秋) 九月廿一日、山城國久世里、妙見の祠の祭にて灰形の御符を出すこと。

くせまつり【久世祭】(夏) 四月中巳日、山城

國乙訓郡久世神社(靈明神)の祭禮。

くせまつり【久世祭】(秋) 九月十九日、山城國巨椋南久世の久世明神(吉野の木守勝手二社を祀る)の祭禮。十八九の兩日能樂を行ひ、其役者を明神の客と稱して里人製應す。 國 橋守の錢けふからん久世祭 湖春。

くせま【曲舞】足利氏以前に行はれし舞の名。

くせ【久世】小兒のこと。いふ古語。

くせのかみ【具足鏡開】(春) 具足餅を見よ。 國 餅鏡の賑もかろして鏡割 李冠。

くせ【具足餅】(春) 正月、武家にて甲冑に供ふる餅。上を赤にし下を白とし松魚節を添へて飾る。十五日に至り手にて之を割り喰ふ(刀を以て割るを思ひなり)。之を具足の鏡開といふ。

くせ【一村を鼓で呼ぶや具足餅 史邦。

くせ【尿毒】毒の一種、形大にして羽色さたなきもの。

くせ【蠅】(夏) 蠅の一種、青色にして多く糞上に集るもの。

くせ【鴉】にはとりのこと。

くせ【唐】(唐) 茶家に用ふる炭の

稱、細長く管状に切りしもの。

くたに【苦丹】(秋) りんだうの異名。

くたに【九谷橋】加賀江沼郡九谷村より出づる磁器の名。美しき模様を以て世に名あり。

くたの【百濟】古へ朝鮮は三分されて高麗百濟、新羅となり居りし時の稱。

くたの【百濟琴】百濟より渡れる七絃の琴。撥にて鳴すこと琵琶に似たり。

くたの【朽野】(冬) 冬の枯野をいふ。 國 腐野。 國 朽野や横きつて行く鳥の影 方明。

くたの【下殿】(秋) からうなき。

くたの【降月】(秋) 十六七夜の頃より廿一二夜の頃の月をいふ。一説に下り月は傾く月の意なりとす。

くたの【下葉】(秋) 九月頃、葉を掃へて落黏を流すること。上(カウ)に對していふ。 國 またしては狐見舞の降り 葉 召波。

くたの【口開祭】(春) 嚴島祭。

くたの【口合】俳句の上五音の中間にありて口調を強むるためにのみ用ゐられ、切れ字にならざるやの字をいふ。「雪や散る山の端白き霞かな」の如し。

くたの【朽木書】書畫の下がきをいふ。

くたの【口切】(冬) 茶家、夏より壺中に封じ置きたる新茶を切冬に取出して茶會に用ふるをいふ。 國 口切や寺へ呼ばれて竹の典 召波。

くたの【口開】詞辯なること。

くたの【山花】(夏) 人家の庭に植ふる灌木、葉は厚くして深緑なり、初夏六瓣の白花を開き香を有す、實は楕圓に似て六角なり、黄色の染料とす。 國 山花の花に懸ぐな鳥の聲 一有。

くたの【口】(夏) 蛇の異名。 國 くらなはの見返りしせの袴かな 杜口。

くたの【朽葉】(冬) 落葉の朽ちたるもの。

くたの【水底の守宮隠る、朽葉散 桐雨。

くたの【表遺】(秋) カサネの色目の名、表遺は紅、裏遺は黄。

くたの【口寄】(口寄) 能狂言の名。

くたの【口】(口) 巫が神の言を寄せて、自分の口より云こと。轉じて巫の稱。

くたの【鯨】(冬) 海中に棲む獸、形魚に類し色若黒にして鱗なし。冬季、北より南に渡りて近海に來るを漁獲す。(異名) 男魚(オサ)。 怒る魚。 國 鯨舟。 鯨。 鯨汁。 鯨賣。 國 足場して油汲み出す鯨 哉 羅漢。







VM

村九品佛淨真寺にて開祖阿闍上人の像を迎ふため信徒二十五人、彌陀、地藏、觀音等の假面を被り法衣を着して練行く、これ開祖入定の時二十五菩薩の來迎ありしに擬すと、俗に面被りといふ。

くまがら【熊】(冬) 北國、深山に棲む獸。近代の伊季に冬とす。○熊突。

くまがら【熊谷草】(春) 草の名、高さ五六寸、葉路に似て小く春、莖を出して赤紫色の花を開く形、熊谷直實の母衣を著たるに似たりとて名く。

くまがら【熊谷櫻】(春) 櫻の一種、高さ四五尺に過ぎず、花初め紅にして後白し、彼岸櫻に次ぎて早く開花するを以て熊谷直實が攝州一ノ谷に先登したるに寄せて名くとす。

くまがら【球摩川】(夏) 肥後八代郡にある河。

くまがら【たなをかん】(熊栗樹) (秋) 秋の頃、深山にて熊栗の木に上り其實を食ふため枝を並べて橋を作る。○熊栗



(草谷熊)

の欄に止る熊の心かな。

くまがら【熊坂】熊坂長範、牛若丸に討たれし最後のことを其靈出でて、旅僧に物語ることを作りし謡曲。

くまがら【熊頭巾】(冬) 綴を長く垂らしたる頭巾。

くまがら【熊蟬】(夏) 蟬の一種、形甚大く色黒く、聲又大なり。

くまがら【熊鷹】(冬) 鷹の一種、形最大にして力猛く、能く狐狸兎等を襲く。○角鷹。熊鷹や岩松越の眼の配り。

くまがら【熊突】(冬) 奥州南部、出羽等に土人、俗にマツゲと稱し、總身に熊皮を被りたる男、五尺餘の槍を携へ三人ッ、數日の食料を用意して山深く入り、熊の穴居



(熊之突)

するを誘出して之を突き捕ふ。○熊鉢や穴熊打の九寸五分 史邦。

くまがら【馬鞭草】(夏) ばべんさう。

くまがら【熊手】(冬) 西の市に賣る熊手をいふ。種々の實の形したるものを付く。○大熊手昇くや朝日は後より。

くまがら【熊手賣】(冬) 西の市に熊手を賣る商人。

くまがら【熊野浦】紀州南牟婁郡の海邊一帶をいふ。

くまがら【熊野比丘尼】素は伊勢、熊野等に詣て行を勤めし尼の稱。地獄極樂の繪解して諸方を勸進せしもの。後に歌比丘尼の卑賤のものとなれり。(歌比丘尼の條參照)

くまがら【九萬峰】(春) 蜂の最も大なるもの。色黒黒なり、俗にクマンバサといふ。○熊蜂。胡蜂。○九萬峰の聲に日關くる山路かな。

くまがら【九萬正】(秋) しいら。

くまがら【熊祭】(冬) 蝦夷人が熊の兒を人間の乳にて育て、三年目に殺して贊とし神を祭ること。○熊祭長カ飾る熊砲や熊祭り 櫻村。

くまがら【熊王】赤松家の臣、宇野六郎の子にて、補正儀を担ひ討んとせし事蹟。

VM2

VM170

VM

太平記に稱し。

くまがら【茶黄】(秋) 茶更の一種、秋ぐみと稱す。高さ丈餘、春の未開花し秋、實熟す、大さ南天の如く赤くして白點あり食ふべし。(伊季に苗代ぐみを春とし單にぐみを秋とす) ○ぐみ折てぬれば穢ひく茨哉 路邊。

くまがら【汲貼】(春) 貼波みに同じ。小貼を見よ。

くまがら【組重】(春) 重詰(ツツ)に同じ。

くまがら【茶更花】(春) ケミを見よ。

くまがら【茶更袋】(秋) 菊花の酒の條を見よ。○稚子の肘にくるやぐみ袋 青々。

くまがら【佩茶更】(秋) 全前。

くまがら【薰衣香】(夏) 掛香のこと。○くまがら。

くまがら【群行】(秋) 野の宮の別を見よ。

くまがら【群青】濃き青色の顔料。多く畫具とす。

くまがら【郡代】郡の奉行をいふ。武家の制。

くまがら【訓讀會】(春) ゆゑげうさやうと。

くまがら【郡内】甲州都留郡より續出す絹の汎稱。

VM20

くまがら【薰風】(夏) 風薫る。

くまがら【薰陸】熱帶國より産する木の脂を固めしもの。多く燻物とす。

くまがら【買馬】みつきにする馬。

くまがら【久米仙】和州郡山の人、仙術を學びしが、衣を洗ふ女の腰の白きを見て雲の上より墜落し、通力を失ひしと云ふ。

くまがら【桑路橋】役の行者、大和の葛城山と、吉野金峯山に橋の通路を作らん葛城の神、一言主に賦役をせしむ、一言主、顔の醜きを耻ぢ畫は出でず、夜のみ出で、兎角に成らざりしかば、行者怒り呪を以て一言主を縛めて谷底に捕へしと云ふ故事。橋の不成功を中絶へし意にて多く戀の事に用ゐる。○くまがら。

くまがら【久米寺】大和高市郡にあり、東塔院と云ふ。古へ久米仙が通を失ひて天より落ちし所なりといふ。

くまがら【久米平内】江戸淺草觀世音境内に在る石像、何人か詳ならず。祈願の者文を綱目に結び縁結びの誓とす。

くまがら【久米舞】神前に行ふ舞の名。大伴岑を彈し、佐伯劍を持ちて蜘蛛を祈る態を演すと云ふ。

VM

くまがら【蜘蛛】(夏) 蜘蛛は夏多く出る虫なればとす。其形、頭小く腹大くして八足あり。尻より絲を出し網を作りて蚊蠅などの小虫を捕り食ふ。初夏、産卵し幼虫恰も芥子粒の如く群る。○さ、がに。蜘蛛の子。○袋蜘蛛。蠅とり蜘蛛。蜘蛛。○蜘蛛の園や薄をかけて小松原其角。

くまがら【蜘蛛切】頼光が土蜘蛛に切つけし太刀の名。

くまがら【雲助】街道の駕丁、人足等の稱。

くまがら【雲津川】伊勢一志郡にある川。

くまがら【蜘蛛手】八方にくもの巢の如くなれる様、又は神などを交又せるもの。

くまがら【雲入鳥】(春) 鳥雲に入る。○もにさすり【飛雲樂】秦始皇帝、犬、雞に仙薬を與へしに、皆空中に飛びゆきしと云ふ故事。

くまがら【蜘蛛子】(夏) 蜘蛛といふに同じ。(又蜘蛛の兒にもいふ) ○蜘蛛の子の落ちて廣がる庭かな 如菊。

くまがら【蜘蛛】(夏) くも。蜘蛛の巢の浮世にこすな山清水 才丸。

くまがら【雲旗手】夕雲の形、機の手の如く動くを云ふ。

くまがら【雲舟】漂へる雲を云ふ。



VOGARA

くものみま(雲渡)雲の多く集まれることろを云ふ。  
 くものみま(雲峰)(夏)陶潜の詩、夏雲多奇峰の句より出し語。夏雲の奇なる状を形容していふ。(異名)丹波太郎。安達太郎。和泉小太郎。奈良二郎。摩耶九郎。出雲入道。伊豫入道。彦太郎。國夕暮や九け並びたる雲の峰。去來。くものみま(雲舞)網渡りの曲藝のこと。徳川時代の語。  
 くものみま(雲見草)(夏)樽(ア)の異名。國片そぎや彩る八重の雲見草。三千風。  
 くものみま(雲馬)(冬)鹿(ウ)の馬を滝産したるもの。冬の食品。國 雲馬に月うつりけり魚の欄 關更。  
 くものみま(雲舟)江戸吉原金井樓の遊女。書道俳諧に通ず。  
 くものみま(雲舟爲)遠く、或はいさよふの枕詞。  
 くものみま(雲舟履)源氏物語中の人物、夕霧の北の方にて頭の中將の女なり。  
 くものみま(雲去舌)鍋(鍋)去舌(雲)ゆえしたる。  
 くものみま(蔵人)くらんど。  
 くものみま(九郎燒)文化中、平澤九郎と云

VOGARA

者の焼始めし陶器の名。  
 くものみま(開上結)河内より大和へ出る道。小椋山の山根なり。  
 くものみま(海月取)(夏)海月は泥多き海に産する動物。形稜角ありて色白く、目鼻口なけれどよく小魚を吸ふ。夏季漁りて鹽蔵し食用とす。國 蛸(蛸)の夢な破りそくらげ取 丁江。  
 くものみま(倉梯山)大和十市郡小倉山の別名。  
 くものみま(福開)(春)新年に吉日を撰びて倉庫を開き賣買をなす祝。近時は多く十一日を用ふる。國 家子共に引出物せん福開 琴風。  
 くものみま(鞍馬)馬の鞍につくる革の袋。旅行用とす。  
 くものみま(蔵船)荷倉のかほりに船を敷懸さかきて使用するもの。  
 くものみま(蔵馬)(夏)賀茂の鼓馬(ア)。  
 くものみま(蔵苦)心くるしきこと。  
 くものみま(倉法師)諸物の土蔵預りの役人の稱。  
 くものみま(蔵祭)(冬)十一月、農家にて其土蔵を掃清め灯明、神酒を捧げ祭ること。此日來春より新冬の男女に目見え動きさすといふ。國 雀にも米撒き

VOGARA

くれぬ蔵祭 杏村。  
 くものみま(鞍馬天狗)牛若丸、鞍馬山の大神正より兵法を授かる事を作りし謡曲。  
 くものみま(鞍馬竹切)(夏)六月廿日、山城愛宕郡鞍馬寺の樂師堂に村民集り、大竹を縛り立て、又別に竹二本を堂の中間に横へ、法師廿人餘、白き袴を着し、一本の竹を近江、一本を丹波と稱し、掛壁をなしつ、山刀にて之を敲り、其連連にて兩國の豊凶を占ふ。其後、竹を毘沙門堂に持來りて段々に敲る。これ古へ傳承延なるもの此寺に在りて、大蛇に襲はれしを呪を以て段々に斬りたる故事に習ふものと。夜に入りて寺僧相集り疫鬼を敲ふ法を行ふ。一に蓮華會とも云ふ。國 竹伐や杉の嵐の走る音 麻父。  
 くものみま(鞍馬火祭)(秋)九月九日(新曆十月廿日)山城鞍馬山の由岐神社及八所明神の祭典。同處の村民、通路に大炬火を點じ婦人小兒まで松明を手にして參詣し、深更に及び神輿、山下の御旅所に參す。炬火の光輝る壯觀なり。|| 鞍馬祭。  
 くものみま(蔵前)江戸淺草にあり。幕府の

VOGARA

米藏ありて、御用商家軒を並ぶ。是を札差と云ふ。皆豪華を以て競ひ、風俗華美を盡す之を蔵前風といふ。  
 くものみま(鞍馬餅)(春)初寅。  
 くものみま(鞍馬祭)(秋)九月九日、山城愛宕郡鞍馬山の由岐(社)大己貴命を祀るの祭禮。(現時は新曆十月廿日に)行ふ。鞍馬火祭の條を見よ。國 祭る日は馬も遊ばず鞍馬山 寛人。  
 くものみま(蔵人)宮中の文書及び諸事の奉行をいふ。又訴訟をも取扱ふ役。|| くらんど。  
 くものみま(車持皇子)竹取物語に出し人物。蓬萊の玉樹を取來りしと偽れる人。  
 くものみま(苦參)(秋)山野に生ずる藥草、春の末、夏淡黄花を開き、七月小豆の如き實を結ぶ。其根黄色にして甚苦し。秋引きて藥用とす。○苦參引。



くものみま (くらく)

VOGARA

くものみま(苦參引)(秋)苦參。國 先生に引て見たる苦參哉 雅因。  
 くものみま(内蔵家)宮中の調度係の稱。  
 くものみま(栗)(秋)栗の實をいふ。樹は高さ二三丈、葉はクマギに似、夏初、穂の如き青黄色の花を開き後實を結ぶ。實はイガ(刺)に包まれ熟すれば自ら裂け落つ、味甘く焼く又は煮て食ふ。(異名)鍋栗。○さ、栗。茅栗。ひよひ栗。丹波栗。て、うち栗。三度栗(ア)。落栗。いが栗。割栗(ア)。焼栗。熊栗樹をいふ。  
 くものみま(謡曲の節)(の名)。  
 くものみま(庫裡)寺の厨を云ふ。  
 くものみま(栗粉餅)(秋)小栗を粉にし餅に交へしもの。九月九日の節句に用ふる。|| くりの餅。  
 くものみま(新曆)新曆十二月廿五日、耶蘇教の祖、エス、クリストの降誕を祝するため各地の教會堂にて祭事を行ひ、信者ば互に贈物をし、小兒ある家にはクリスマスストリーを作し、又は靴足袋に玩具などを入れ兒女に與ふ。|| 基督祭。國 物くれる和蘭人やクリスマス菓子。  
 くものみま(栗茸)(秋)山野の地に生ずる茸、

VOGARA

蓋は白色にして圓く栗の實の如し。栗樹に生ずるには非ず(毒ありて食ふべからず)。國 ったなきや手に打耳に一筆槍 眞臣。  
 くものみま(栗干餅)(秋)くりもち。  
 くものみま(栗節句)(秋)重陽(ア)に栗を贈答して節句を祝するをいふ。轉じて重陽のこと。  
 くものみま(栗花)(夏)栗を見よ。國 雨濤に流れて寝し栗の花 晩平。  
 くものみま(栗虫)(秋)栗の實を喰ふ虫。形、ウジの如く色白し。|| 栗虫。國 日に喰入や栗の虫 李由。  
 くものみま(栗木)後鳥羽院の御時、水無瀬殿に連歌の會あり。上手を柿木とし下手を栗の本と名付られし稱。  
 くものみま(栗橋)武藏北葛飾郡の驛にて利根川の堤防あり、世に權現堂境と云ふ。  
 くものみま(ハマケリ)云々を轉倒したる語にて前後義をなさぬことを嘲る語。俳諧者の通言。例へば祇園林を林祇園など作る時之をケリハマといひて嘲ふ。  
 くものみま(九輪草)(春)七重草ともいふ。葉は燈百合に似て大なり。其莖に八極の枝を出し、梢に至て七層又は九層となる故に此名あり、三月小花を開く、



ワカ

ワカ

ワカ

形櫻草の花に似て大なり。旌節草。園まう一輪望みもありや九輪草 清湖。  
 くりぬし「栗飯」(秋)栗の實の皮をとりて飯と共に焚きしもの。園思ひよりて栗飯炊くや佛の日 石葉。  
 くりや「厨」塞所のこと。  
 くりや「羅矢」鴨の羽にて刺さし矢をいふ。遺矢に用ふる。  
 くりやは「厨川」今の陸中岩手郡にありし川。古へ安倍貞任が櫓を構へし所。  
 くりわた「羅綿」木綿を綿車にかけ、未だ打ち分けざるもの。  
 くり「羅」くるるを見よ。  
 くり「東髪」ぐるくると巻付し髪をいふ。  
 くり「來秋」(秋)立夏。  
 くり「狂花」(冬) 歸り花。  
 くり「狂花」(冬) 同前。  
 くり「車僧」天狗ありて車上の僧を寛道に引かんとすれども動かざるに遂に力屈して消失ることを作りし謡曲。  
 くり「車百合」(夏)百合の一種。花大く、花瓣の端を反りて車輪の形したるもの。園 蟻塚の小野とはいはじ車百合 其角。  
 くり「車寄」車を附けて昇降すること。

ろ。玄關などの側にあり。  
 くり「胡桃」(秋)樹の實なり。樹は喬木にして葉は漆の如く、三月、葉に似たる紅白花を開き秋實を結ぶ、桃に似て丸く青し、核は堅く仁は脂ありて味美なり。園 木魂して胡桃割れけり石の上 夢林。  
 くり「胡桃花」(春)胡桃を見よ。  
 くり「回」くるくまはること。又、眩くこと。  
 くり「箭」水鳥を射る爲め軽く造りし矢の名。  
 くり「戸」戸のこと。或戸締のため棧に附くるサル。  
 くり「曲輪」周囲を限るかこひ、轉じて遊女屋のある地。園。  
 くり「木」木の小さき片、又は石などの一塊、木くれ、石くれなどいふ。  
 くり「供料」僧に與ふる米をいふ。  
 くり「暮連」(暮)永き日のこと。園 暮連き日。暮、ぬる日。園 くれ連しすはりつむれば草臥れる 多代女。  
 くり「暮連日」(暮)暮連し。  
 くり「暮連日」(暮)同前。園 暮かいて釣する人の静さよ 桃天。  
 くり「榊木」材木のこと。

くり「暮新月」(暮)一月の異名。  
 くり「吳竹」代々或はフツに、る枕詞。  
 くり「紅藍花」(夏)紅(二)の花。  
 くり「紅菊衣」(秋)カサネの色目の名、表紅、裏青。  
 くり「紅櫻衣」(春)カサネの色目の名、表紅、裏紫。  
 くり「紅羅漢衣」(春)カサネの色目の名、表スハラ、裏紅。  
 くり「暮秋」(秋)秋の終をいふ(秋の暮、秋の夕と異り)。園 暮秋。秋の末。楡の秋。晩秋。行く秋。秋の別。秋の限。秋の果。秋惜む。秋深し。秋に後る。殘る秋。秋の名殘。秋の湊。九月盡。冬待つ。園 松風の軒をめぐりて秋暮れぬ 桃青。  
 くり「あきやうの異名」園 實のおぼる葉の朝露やくれのおも 桐雨。  
 くり「暮魂祭」(冬)年の終の魂祭。  
 くり「暮春」(春)春の終をいふ(春の暮、春の夕と異り)。園 暮春。晩春。行く春。春の限。春の果。春惜む。春を送る。春に隔る。春の別。春の名殘。

ワカ

ワカ

ワカ

春の湊。三月盡。夏を待つ。園 いとほるる身を恨み離やくれの春 蕪村。  
 くり「吳服」應神の朝來朝せし、吳織、漢織の類、昔を語り祝ふことを作りし謡曲。  
 くり「榊」屋形の附きし櫓をいふ。  
 くり「吳樓」古へ吳國より樓艦を渡來せしに因りて樓櫓のものをいふ。  
 くり「吳服祭」(秋)穴織(ハ)祭を見よ。  
 くり「榊船」材木を積みし船。  
 くり「吳松大夫」秀吉公の時代にありし能樂の名人。  
 くり「紅蓮」(夏)はらすを見よ。  
 くり「田島」田島の間の細き道をいふ。  
 くり「日光山」日光山の別稱。  
 くり「黒木」(夏)カキ。  
 くり「黒木」皮を去らぬ木材、又は薪にする樹枝。  
 くり「黒木賣」黒木を賣る小原女のこと。  
 くり「黒木御所」大和吉野郡和田村に後醍醐帝の忍び在せし行宮。  
 くり「黒慈姑」(春)池澤に生ずる草、葉蘭の如し、春其根に慈姑に似たる黒

き塊を生ずる之を掘りて食用す。園 烏字。  
 くり「黒欄」三欄の一、文書などを載せおく道具。宮殿などの調度。  
 くり「黒谷」京都の東北にある地。園 光大師の開基せる光明寺あり。熊谷直實の遺蹟多し。  
 くり「黒鯛」鯛の類、全身灰黒にして大さ尺餘。其小なるをカイゾといふ。  
 くり「黒戸」宮中清涼殿の北、瀨口の西に在る戸の稱。  
 くり「黒主祭」(夏秋)六月一日及九月十六日、近江國滋賀郡新在家の氏神黒主社(大伴黒主を祀る)の祭禮。  
 くり「黒主山」(夏)菟園會の山の園。さまいやし黒主山の造り花 蒲尺。  
 くり「黒海苔」(春)ウツプルヒ海苔の類、紫色にして短し。北地地方にて降雪の候多く生ずる故に雪海苔ともいふ。園 黒海苔やちら〜雪の唯白し 眠子。  
 くり「黒雲」(夏)梅雨中の西風をいふ。しらはえを見よ。園 黒風。園 黒雲に出で見る安房の御哉 鶯々。  
 くり「黒日」曆の語。萬事忌むべき日なり

くり「黒髪」順髻ある恐しき顔の能面の名。  
 くり「黒船」徳川時代に外國船を呼ぶ稱。  
 くり「黒牡丹」こくぼたん。  
 くり「栗奴」(秋)栗の一種。種のみする時黒き煤の如きもの生ずるをいふ。  
 くり「黒女」賤しき女をいふ。  
 くり「黒燒釜」虫獸など黒燒として薬に製するに用ふる釜をいふ。  
 くり「黒百合」(夏)百合の一種、花淡黒色なり。東北地方の深山幽谷等に稀に生ず。  
 くり「黒樂」樂焼茶碗の黒手のものをいふ。  
 くり「花押」書き判のこと。  
 くり「會稽」越王勾踐、吳のために會稽山に敗られ、復讐を計りし故事より、すべて耻を覺ぐ、ことに云ふ。  
 くり「摺紙」連句を書く式紙。杉原又は摺紙を四つ折にして用ふるもの。  
 くり「摺紙式」連句の疊式に區別を設け、順序の名稱を附したるもの。連句作法を見よ。



くわいせん

くわいせん(快禪)加賀小松の人、佛氏となりて正覺を得ず、基を以て天下に名あり、世に加賀和尚と云ふ。

くわいせん(懐中笠)冠り笠の疊みて懐に入るやう作りしもの。

くわいせん(外笠)(冬)寒氣を防ぐため用ゐる衣。圓軒に釣る外笠古し柳原愚哉。

くわいせん(懐風藻)淡海三船の作にて我朝古代の詩を集めし書。

くわいせん(題文)下から上から同じ文字、同じ意に讀まれる歌、俳諧をいふ。又、諸方へ通知の状を一通に數名の名宛を記し名宛順に廻すを云ふ。讀了の人多くは墨にて名の所に棒を引く例なり。

くわいせん(槐門)大臣のこと。

くわいせん(槐陽師)(春)夷題し。くぐつまはし。圓青柳に傘結びけり槐陽師 月居。

くわいせん(題禮)(春)年始の禮に廻ること。圓慶。年禮。圓題禮や竹屋渡りて小梅町 樂南。

くわいせん(懐爐)(冬)金屬製の小匣に火を入れ懐にして腹部を暖むる用とするもの。圓腹爐を暖めてゐる懐爐哉 子

くわいせん(書鏡)(春)元旦、鏡を畫きて戸上に貼り、葦葉(葦の葉)を其上に懸け、桃符を挿めば百鬼畏れ遷らすといふ、支那古代の俗。

くわいせん(書鏡戸貼)(春)同前。圓動くよと見れば風あり書鏡の鶴 安

くわいせん(花月)茶會の式法七事の一、花月の香札を折居に入れ、之を探り取て主客を定め喫茶すること。

くわいせん(花月)花月といふもの七歳の時、天狗に擲はれしを、其父僧となりて尋ね歩きて再會する事を作りし謡曲。

くわいせん(管絃)音楽のこと。

くわいせん(冠者)元服したる男をいふ。

くわいせん

くわいせん

規。くわいせん(回祿)火災をいふ。

くわいせん(黃安)漢の武帝の時の仙人。常に磁砂を呑て全身赤く、龜の上に座せしといふ。

くわいせん(荒神)天竺の神にて如來荒神、亂荒神、忿怒荒神の三體あり。俗に龜の神とす。

くわいせん(黃雀雨)(秋)九月の雨を云ふ。

くわいせん(黃雀風)(夏)六月中に吹く東南の風。圓鶴去て黃雀風の吹く日々な 碧梧桐。

くわいせん(黃初平)列仙傳中の人物。赤松子の前名。少にして神仙に伴はれ、山中に在ること數十年、後、兄初起に會ひて白石を羊に化せしめしといふ。

くわいせん(黃石公)漢の高祖の臣、張敖が兵法を授かりしといふ仙人。

くわいせん(廣澤)細井氏、次郎大夫といふ。江戸に住み能書の間は高し、赤穂の浪士等と交りし逸話あり。

くわいせん(皇帝)玄宗皇帝の臣、鍾馗、鬼を退治して、楊貴妃の病を除く筋の謡曲。

くわいせん(黃鳥)(春)鶯の異名。

くわいせん(火事)(冬)火事は冬に多きを以て近代季とす。圓鍋焼や火事場に遠ざ板の上 子規。

くわいせん(火事頭巾)(冬)指子の頭巾、火事場に被るもの。

くわいせん(花車)京にて揚屋の女房を云ふ。圓江門にては遺手(ヤ)のことなり。

くわいせん(花備者)(春)古書に梅は花中の備者なりとあるより異名とす。

くわいせん(過書舟)西國より京へ上る運送船をいふ。

くわいせん(化生)(秋)古へ支那の俗に、七夕に織を以て嬰兒の形を作り水に浮べ弄ぶこと。婦人子に宜きの呪とす。圓蠟燭の蠟で作しし化生かな 青々。

くわいせん

くわいせん(黃梅天)(夏)梅天。

くわいせん(光風)(春)春日の晴れたる時、吹く風も自ら光るやうに見ゆるをいふ。圓風光る。圓尊さや風の光らぬ寺しなし 寸韻。

くわいせん(光明寺)伊勢山田に在る臨濟宗の寺。

くわいせん(光琳)(春)鶯の異名。

くわいせん(光琳)尾形氏、名は方規、京の人にて江戸に出て狩野常信に畫法を學び、更に古土佐、本阿彌等の畫を折衷して一派を出す。又畫に高名なり。享保元年歿す。

くわいせん(光琳忌)(夏)六月二日、尾形光琳の忌を修すること。圓光悅を更にしのぶや光琳忌 江戸庵。

くわいせん(臥煙)渡りもの、中間、折助など。圓無頼漢を意味す。

くわいせん(花蓋)(春)鶯の異名。

くわいせん(瓜期)(夏)六月の異名。

くわいせん(郭巨山)(夏)祇園會の山の一、郭巨が黄金の釜を掘出す像を作る。

くわいせん(霍光)くわつくわう。

くわいせん(鶴堂)白き毛衣をいふ。

くわいせん(郭文)晋の郭文の事。性山水を愛し、無人の境に入りて、水を橋へ

くわいせん(霍去病の弟)漢武帝の遺詔を受け昭帝、宣帝の二帝を輔佐し、二十年の間攝政せしといふ。

くわいせん(月輪寺)山城愛宕山の中腹に在る寺。

くわいせん(花朝節)(春)二月十五日。支那の俗に、此日は春の中央なれば百花生日と稱し、花神廟(十三體の花神の像を置く)の祭祀をなす。

くわいせん

くわいせん(花鳥)天明二年、兼村が交遊の花の句を集めし書。

くわいせん(瓦灯口)壁を切りて出入する口。上に燈籠を吊るす。圓火灯口。

くわいせん(花燈夕)(春)上元。元宵を見よ。圓灯立て花いそぎたる夕哉 貞佐。

くわいせん(花免鏡)兎に波と花の模様ある鏡の製地。

くわいせん(靴香)靴箱に用ゐる革香の稱。

くわいせん(花飛)(春)三月の異名。

くわいせん(誤阿彌)能樂親世流の祖。伊賀の人、結崎三郎清次と云ふ。足利義満に仕へ童坊なり。應永十三年歿。

くわいせん(關羽)三國時代、蜀の劉備に仕へ、勇武を以て後世、神とせられし人。圓帝。

くわいせん(霍去病の弟)漢武帝の遺詔を受け昭帝、宣帝の二帝を輔佐し、二十年の間攝政せしといふ。

くわいせん(月輪寺)山城愛宕山の中腹に在る寺。

くわいせん(花朝節)(春)二月十五日。支那の俗に、此日は春の中央なれば百花生日と稱し、花神廟(十三體の花神の像を置く)の祭祀をなす。

くわいせん(花鳥)天明二年、兼村が交遊の花の句を集めし書。

くわいせん(瓦灯口)壁を切りて出入する口。上に燈籠を吊るす。圓火灯口。

くわいせん(花燈夕)(春)上元。元宵を見よ。圓灯立て花いそぎたる夕哉 貞佐。

くわいせん(花免鏡)兎に波と花の模様ある鏡の製地。

くわいせん(靴香)靴箱に用ゐる革香の稱。

くわいせん

くわいせん

くわいせん







け「偶」佛家を用ゐる諷刺の詩。四句より成るもの多し。  
 けあき(夏明)(夏)げけ。  
 けあき(同上)足にて泥をはねかすこと。又京都三條の東にある地名。  
 けあき(夏)紫雲(紫雲)の類にて山中に多く白花黄花あり。其根塊は菱角多し。圃心ありや蓋をうつなる雨たなき野双。  
 けあき(琴)樂器の一種。箏と云ふ鳥居形したる梓に山形の角なる器を掛けたるを打鳴すもの。石琴あり、銅琴あり、僧家には銅琴を用ゐる。  
 けあき(契印)公文書に押す封印をいふ。  
 けあき(荆柯)春秋時代の人、燕丹のために秦王を刺さんとて却て殺さる。  
 けあき(傾蓋)孔子、道に程子華に逢へば、車を駐め蓋を傾けて語りしといふ故事。之を傾蓋の交といひて友情のことに比ふ。  
 けあき(昔廉)晋人、琴詩書を愛し又、常に銀治を好み、柳の許に水を圍らし、夏月毎に其下にて銀治せしといふ。七賢の一人。  
 けあき(景感道)連俳の用語。叙景、抒情、叙事のことを云ふ。

けあき(鷄冠石)橙赤色の石。焼きて温氣を避け又蛇を防ぐに用ゐる。雄黄。  
 けあき(桂月)(秋)八月の異名。  
 けあき(藝子)京阪にて藝妓のことをいふ。首藝子は容貌よきものを云ふ稱。鯨舎。校書。  
 けあき(稽古初)(春)正月初旬、擊劍、柔術、槍術、長刀其他武術の道場にて稽古初の式をなすこと。初稽古。  
 けあき(撃子)土器の下に敷く板をいふ。  
 けあき(慶子)中村富十郎と云ふ。實厩の女優。若女形にして、書を善くす。  
 けあき(鶯日)(春)元日の異名。鶯目。(人日の條参照)  
 けあき(鶯人)宮中に奉仕して時をうつ役人。  
 けあき(傾城)傾城を傾くる意にて美人をいふ。轉じて遊女のこと。  
 けあき(鷄旦)(春)元日の異名。(鶯日を見よ)  
 けあき(契沖忌)(春)正月廿五日、契沖阿闍梨(名は空心、圓珠庵と號し國學に精し。元祿十四年寂)の忌を修すること。圃梅白くたきもの細し契沖忌

青々。  
 けあき(鶯鷄)(春)二十四氣の一。  
 けあき(鼓渡)(夏)支那の俗、端午(又は五月朔日より六日迄)に江湖に數艘の龍船(小舟を龍の形に裝ひ、牌樓といふ門の如きものを立て、四方に旗數本を列れたるもの)を浮め、一艘に十人餘の楫手と二三人の指揮者と六七人の樂手あり。銅鑼太鼓等を鳴し鼓ひ清々。見物の諸船より家鴨を放ち又は酒壺に賞銀を記したる紙を入れ流し、龍船争ふて之を取る。一に之をパイロンといひ、我國にても長崎在留の清人之を行ふ(長崎パイロンの條参照)水馬。兜車(ヤ)。圃日に向いて進み運る、鼓渡かな。果欣。  
 けあき(鷄頭)(秋)高さ二三尺の草、葉五生して末長く尖れり。秋梢に紅或は黄白の花を開く形鷄冠の如し。鷄冠花。圃鷄頭に巖のつくや持佛堂。御風。  
 けあき(鷄頭肉)唐明皇、楊貴妃の乳を弄して喰へし詞。  
 けあき(鷄頭毒)(春)二月頃、鷄頭の種を蒔くこと。  
 けあき(計都星)九曜の一。青龍に乗り

日月を提けたる態に畫かる。  
 けあき(競馬)(夏)賀茂の競馬をいふ。  
 けあき(迎梅雨)(春)三月に降る雨をいふ。  
 けあき(京房)陰陽五行に通ぜし漢時代の學者。  
 けあき(景物)四季其折々に賞玩する花鳥風月、行事等をいふ。又、點取俳諧にて勝たる人に褒美を出す、こにもいふ。  
 けあき(啓明)金星の一名。  
 けあき(毛芋)(秋)ヤノ芋に似て葉圓く根塊はカシワダマといひ殊き葉多し。圃カシエウ芋。黃獨。  
 けあき(鷄立江)能狂言の名。  
 けあき(雨怨)思ふ男に捨てられし女の、園中に淋しさをうらみか、こつこと。  
 けあき(脇息)小さき机の如きものにて貴人の座側に置き肘を掛ける器。  
 けあき(氣疎)思ひなきこと、又驚く意もあり。  
 けあき(夏書)(夏)夏行(ヤギ)の者、又は志ある在家の人、九旬の間、經文などを書寫すること。圃ふつ、かな我手悔みて夏書哉。土川。  
 けあき(夏書納)(秋)七月十六日、夏

行の終りにて、僧俗の行者、其書寫したる經を堂寺に納めて供養をなすこと。圃秋の露ながめる夏書納かな。陰風。  
 けあき(下疳)梅毒などより起る陰部の瘡瘍。  
 けあき(外記)古へ太政官の恒例、臨時の大書の公事の詔書奏文を勅遣し記録する官。  
 けあき(隄舌)解らぬ言語を嘆舌るを云ふ。圃隄舌。  
 けあき(外記政治)(春)正月九日若くは他の吉日太政官の外記(外記の條を見よ)の政事始を行ふ式。圃殿かに並ぶ机や外記日記。不樂。  
 けあき(劇孟)前漢時代の俠者の名。  
 けあき(夏行)(夏)佛家にて四月十六日より七月十六日まで九十日間、一室内に禁足して精進潔齋し讀經などに暮すこと。佛敎に夏日は草木の芽、小虫の類多く出で、外出する時は知らずして之等を踏み傷め殺生成を犯すことあれば安居退足して身を慎むなりと。圃夏籠(ヤ)。結夏(ヤ)。一夏。解夏(ヤ)。夏書(ヤ)。夏經。夏斷(ヤ)。夏花(ヤ)。安居(ヤ)。夏に入る。圃何となく夏に入る人を見られけり。白雄。

けあき(夏經)(夏)夏行の人、九旬の間經文を讀誦すること。圃日頃経て鷄鷄の眞似る夏經かな。李川。  
 けあき(遊蕩)宿屋のこと。  
 けあき(外宮祭禮)(夏)六月十六日伊勢外宮の祭禮。  
 けあき(外官)古へ地方の官吏をいふ稱。  
 けあき(解夏)(秋)七月十六日、夏行の終りたるをいふ。圃夏アキ。圃解夏草(ヤ)。夏書納。送行(ヤ)。江湖別れ。圃雲晴て解夏の鶯聞えけり。碧梧桐。  
 けあき(芥下)草履をいふ古語。  
 けあき(解夏草)(秋)解夏の日、夏行の僧尼より在家の人に送る(草)の名、水草の類なりともいひ、夢門冬なりともいふ。佛書に吉祥草と稱すを束れて贈り其成就を告ぐるもの。圃解夏草や放てば今朝の無一物。丈草。  
 けあき(敬々)うやまふこと。又、かどかどしきこと。  
 けあき(五形花)(春)げんげ花の略、蓮華草をいふ。  
 けあき(下元)(冬)十月十五日、支那の傳説に此日本官(一種の神)人間に降り、其善惡を檢し厄を解かしむ。正月上元を天官、福を賜ふ日とし、七月中元を







けん

けん「外典」佛敎以外の典籍。  
 けん「養所」平生の部屋のこと。  
 けなり「養形」平生の服装。  
 けい「夏入」(夏)夏行(けい)に入り初むること。  
 けい「情」情しに同じ。  
 けん「外任美」(春)あがためし。  
 けん「義」衣服の毛立つこと。  
 けん「夏花」(夏)夏花の間、佛に供する花なり。夏花摘。夏花摘むで片枝葉のなき枝かな。山川。  
 けん「夏花摘」(夏)夏花にする花を探ること。  
 けん「化粧坂」相州鎌倉の西にある地。  
 けん「下卑蔵」卑しき振舞ある人ないふ。  
 けん「氣比宮」越前敦賀、氣比大明神の社。  
 けん「檢非違使」古へ非法を取調ぶる役、追捕、裁判等を振ふもの。別當、佐官、尉官、志府生、などの職あり。  
 けん「狭布」古へ陸奥國より出し、白くして巾のせびき布。  
 けん「毛吹草」正保二年、松江重頼が

けん

連佛季寄を記したる書。  
 けん「夾算」書物に挟む葉の板。  
 けん「夾鐘」(春)二月の異名。  
 けん「扁息」座側に置き肘をかけて體を支ふるための小机。  
 けん「夾竹桃」(夏)灌木、葉は桃に似て硬く細長し、六月の頃淡紅花を開く。形。  
 重瓣の桃花に似たり。  
 國朝の御衣の細夾竹桃に下りけり。知十。  
 けん「今日秋」(秋)立秋の日をいふ。今朝の秋。今日秋死しと聞きし人に逢ふ。曉堂。  
 けん「狭布里」陸奥國鹿角郡古河村にあり。鳥の毛を以て織りし細布を出す地。  
 けん「今日月」(秋)名月。今日月の月關守る人も候はず。我則。  
 けん「今日春」(春)歳旦を祝ふ語。國太刀佩て寐てゐる人や今日の春涼苑。



(桃竹夾)

けん

けん「華蔓」(春)華蔓草の略。  
 けん「華蔓」佛像の頂につくる金銀の造花の飾。又、佛家の裝飾として用ゐる。花形に瑠璃の垂れしもの。  
 けん「華蔓草」(春)葉は牡丹に似て小く花莖一尺餘、三月莖頭月莖頭に淡紅の花を開く。  
 其狀佛像の頂を飾る華蔓の如し。  
 けん「ケマン」ケマン牡丹。藤牡丹。國幼きに花むしらるる華蔓草。一覽。  
 けん「華蔓牡丹」(春)ケマン草。  
 けん「毛見」(秋)古へ農民より年貢を收納するに先だちて懸支、各地を巡檢し、其田地の立毛(タチケ)未だ刈らざる稻の稱の善惡を調査し、其納むべき額を定むること。檢見。毛見衆。國



(草んまげ)

けん

荒れて毛見の沙汰なし幾秋ぞ。抱琴。  
 けん「毛見衆」(秋)毛見の役人。毛見衆の舟さし下せ最上川。蕪村。  
 けん「藝道」馬術の法に外れて常の足取に歩む馬をいふ。  
 けん「毛蟲」(夏)黒色又は褐色にして、大なるは二三寸に及ぶ虫。身圓く長く全身に剛毛ありて人を齧す。夏日樹上に棲み葉を食荒す。後に羽化して蝶となる。我水に隣家の桃の毛蟲哉。蕪村。  
 けん「壺」壺の如き陶製の樂器。上尖り底平く、吹て鳴らすもの。其聲時ぶが如し。  
 けん 過去より現在へかけて想像するテニオハ。「鎌倉を生いてけん初體」  
 けん「玄英」(冬)冬の異名。  
 けん「兼好」卜部氏。吉田の法師といふ。和歌に名あり、徒然草を著す。觀應元年歿。  
 けん「兼好忌」(春)二月十五日、兼好法師の忌を修すること。  
 けん「阮成」四柱十柱ある琴、晋の阮咸の作に始る。  
 けん「阮成」晋人、竹林七賢の一。琵琶をよくす。虫干に禱を竿先に掛けし

けん

有名なる故事あり。猶ほ南阮北阮の條を見よ。  
 けん「牽牛」(秋)七夕の男星。(異名)河鼓。牛郎。牛星。牛ひく星。彦星。大洞星。いなみ星。男七夕。國語がりを牛牽く星の急ぎ哉。來山。  
 けん「源空」法然上人をいふ。  
 けん「源九郎」和泉の國にありし醫師。  
 けん「嚴君平」前漢の人。卜筮に精し。  
 けん「五形花」(春)蓮華草。  
 けん「乾月」(夏)四月の異名。  
 けん「乾月」(秋)九月の異名。  
 けん「乾月」(秋)弓張月。  
 けん「原憲」支那戰國時代の人。孔子の門人なり。常に赤貧に甘んず。同門の人、子貢、訪うて先生何ぞ病めるをいひしかば、財無きは貧なり、學で道を行はざるは病なり、今憲は貧にして病に非ずと答へしかば、子貢愧しと云ふ。  
 けん「源翁和尙」のこと。  
 けん「源五郎」(夏)夏入の頃、近江琵琶湖の北なる尾上島津といへる所に多く漁する魚。其名源五郎といへ

けん

る漁夫の名に取りしともいひ、又夏頃(ゆき)餅なりともいふ。餅の大なるもの、色白く味宜し。  
 けん「兼翫」猪苗代耕開堂といふ。宗派に學び連歌に名あり。東山義政に仕へ、後土御門院、後柏原院の御製に批點を奉る。後、岩代國に草庵を結びて住むといふ。明應頃の人。  
 けん「兼翫佐兵衛」野呂松と同時代の人形遣の名人。  
 けん「兼翫」(現在七面)日蓮上人、七面山の龍女を解脱させることを作りし謡曲。  
 けん「兼翫松」岩代會津平潟の菅公詞前にある松をいふ。連歌師猪苗代兼親が所念のため植えしといふ。此社を世俗、兼翫天神といふ。  
 けん「兼翫」(春)ふらふら。  
 けん「兼翫」尾形光琳の弟、元禄頃の人、陶器に名あり。山城鳴瀨に隱棲す。  
 けん「兼翫」尾形乾山の焼き始めし陶器、樂燒の如くにて自畫を現す。  
 けん「兼翫」王羲之の第七子、能書家の名あり。  
 けん「兼翫」細川幽齋のこと。  
 けん「兼翫」(春)ジャワツ。



げんじ

げんじ(源氏)源氏物語の略。紫式部石山寺に籠りて書きしものといふ。全部五十四帖、桐壺の巻に始り、夢の浮橋に終る。源語。

げんじ(源氏)連句の一體。源氏五十四帖に於たりて五十四句(初表六句、初裏十二句、二の表十二句、二の裏十二句、名残表十二句、名残裏六句)より成るもの。一説に歌仙三十六句に二の折二十四句を加へ六十句を一巻とするといふ。

げんじ(阮衛)阮咸の子、杖の頭に百錢を掛て酒屋に往きしと云ふ奇人。

げんじ(源氏雲)光琳風の雲形の模様にて書籍の表紙に用ゐるもの。

げんじ(源氏供養)紫式部、源氏物語を書し爲、地獄に墮らしと云ふ俗説に基き、安居院の法印之を吊ふ筋の謡曲。

げんじ(元始祭)(春)新暦一月三日、宮中にて皇位の元始を祝し、祖宗皇靈を祭らせ給ふ式。國ほのくさよき雲ばれや元始祭 黙平。

げんじ(源氏豆)豆に砂糖の衣をかけたる紅白の菓子。

げんじ(支冬)(秋)さしくさ。

げんじ(源信忠)(夏)あしんそうづき。

げんじ(見真大師忌)

げんじ(見真大師忌)(冬)しんらん。

げんじ(元政)深草元政忌を見よ。

げんじ(支上)琵琶の名器、仁明天皇の時、掃部頭良敏が渡唐して持歸りしより、累世の御物となりしが、何時の頃か失ひしと云ふ。

げんじ(絃上)太政大臣師長、琵琶の秘曲を得んと入唐の瓜あり、須磨に至りて不圖、鹽屋の老夫婦が琵琶の秘曲を聴き、入唐を思ひ止る、此夫婦實は村上帝及び梨壺の女御の夢中に現はれしなり、師長、獅子丸の琵琶を得て歸洛する筋の謡曲。

げんじ(元政忌)(春)深草元政忌。

げんじ(源城樂)舞樂の曲の名。赤き釣瓶の面を被り、蛇を見て喜ぶ態をなす。

げんじ(刀鉞)刀鉞を量る規矩、曲尺一尺二寸を八段とす、佛像なども是を用ゐる。

げんじ(懸車輪)八十歳をいふ。非役となる年のこと。

げんじ(獻春)(春)一月の異名。

げんじ(間飲)(春)大和の俗、春の頃の八ツ茶三時頃の茶菓を出すこといふ。

げんじ(元政忌)

げんじ(元政忌)(春)深草元政忌。

げんじ(獻生子)(春)生子を獻す。

げんじ(顯昭)藤原清輔の弟、和歌に有名なり。家運と争ひて獨結鎌首の世評あり、龜其條を參観すべし。

げんじ(元宵)(春)支那の俗、正月十三日を元宵、十五日を落燈、十六日を元宵、十八日を落燈といひ、此六日の間を燈夜といひ、十三日夕より家々の門前に燈籠を飾り、富家は其飾影しく或は宴を催し、或は市中に戯戯をなす。元夜。(上元の條參照)

げんじ(元夕)(春)上元。

げんじ(阮衛)晋の人、竹林七賢の一、禮儀



(燈籠の宵元)

げんじ

の事にて来る客は白眼をなして御け、酒の友が来れば青眼とて喜色を現はしたりと云ふ。

げんじ(獻酢)(春秋)セキテンを見よ。

げんじ(支宗)唐の六代の皇帝、楊貴妃を愛したる事有名なり。

げんじ(兼題)宿題に同じ。隠しめ題を出して置くこと。

げんじ(源大夫神)尾張國熱田社の攝社。手摩乳(マサ)、足摩乳(アシナ)を祭る。

げんじ(絹袖)支那より舶來するつむぎ織。

げんじ(儀杖)鎮守所などの書記の役の名。

げんじ(建長寺)鎌倉五山第一の禪刹。げんじ(幻住庵)松尾芭蕉の住みし庵の名。近江國石山寺の奥にあり。

げんじ(支猪)(冬)亥の子の餅。國三日月の小暗き程に支猪かな 其角。

げんじ(支死)(秋)月の死、月の異名。

げんじ(支冬)(冬)十月の異名。

げんじ(堅食)上下に溝ありて、蓋をさすやう作りし箱の稱。昔は之に蕎麥を入れて持行しより麩て其ソバの名となる。

げんじ(建仁寺)

げんじ(建仁寺)京都五山の一。京四條にある禪寺。又、同寺より始り作りし垣根の結び方、割竹を皮の方を外にして並べ結びし垣。

げんじ(建仁寺経子祭)(秋)旅夷祭を見よ。

げんじ(建仁寺開山忌)(秋)七月五日、京都建仁寺にて開祖榮西禪師の忌を修すること。榮西忌。國東山をこら茶燈り榮西忌 青々。

げんじ(建仁寺切)京建仁寺什物の製の稱。木に唐草の纏へる模様のもの。

げんじ(建仁寺経子祭)(秋)旅夷祭。

げんじ(支能)大工の用ある具。鐵槌の太さの。

げんじ(猪牛兒)(夏)野生の草、葉は五に裂れ、刻みありて對生す、夏の頃淡紅の梅花の如き花を開き、後葉を結ぶ、熟すれば裂けて神輿の旗手の如く巻き上る。ミモシツケサ。風露草。

げんじ(支助)奈良興福寺の僧、入唐して歸り深く時の天皇に信を得しが、天平八年、藤原廣嗣の靈の爲に殺さると云傳ふ。

げんじ(元白)唐の詩人元稹と、白樂天の

げんじ(源八渡)

併稱。二人は俗謂との誹りあり。

げんじ(源八渡)大坂天満より中野村への渡船の名。

げんじ(憲法塗)明暦頃、京都四條の吉岡憲法と云ふ者の案出したる塗物。黒茶に小紋を染むもの。

げんじ(支宗)弓削道鏡の從兄、道鏡の内道場に立入を假し、和州三輪に隠れ、桓武帝の御惱平癒の爲に召されて宮に入りしも、復び隠れて備中湯川寺に潜み、僧官を受けず。弘仁九年六月寂す。

げんじ(元服曾我)曾我十郎、弟の羅王を別當より申受けて元服させ、五郎時致と名を改めしことを作りし謡曲。

げんじ(見物左衛門)能狂言の名。俗曲にも此名あり。

げんじ(支武洞)但馬國にあるもの。石柱を立願れたる如き奇岩。

げんじ(源平桃)(春)桃の一種、一樹に紅白花交り咲くもの。日月桃。江戸桃。金銀桃。國白がちに源平桃の盛かな 一和。

げんじ(支團梨)(秋)喬木、幹葉はエノキに似て、夏、細花を開き秋の頃實を結ぶ、形鳥の爪をばりたる如く五本の岐あり、熟すれば味甘し。枳椇。國滿







出づる

出入りな 重道。  
 こつじやう「小牛射」能面の名、養老などの翁に用ゐるもの。  
 こつじやう「功叔」妙喜庵と云ふ。利休門の茶人、秀吉に愛せらる。  
 こつじやう「紅樹月」(秋)九月の異名。  
 こつじやう「公卿」召氏、周公旦の弟。賢者なり。  
 こつせん「勾踐」支那戦國時代、越の王なり。呉の爲に降りて辱を忍ぶこと十餘年、膳を嘗めて怨を忘れず、遂に陶朱と共に軍を起し、呉王を亡して會稽の耻を雪ぐ。  
 こつまつ「江帥」大江匡房をいふ。(タマフサを見よ)  
 こつまつ「紅染月」(秋)八月の異名。  
 こつまつ「勾當内侍」後醍醐帝より新田義貞に賜はりし宮女。義貞を慕ひ其戦没を聞て琵琶湖に投身す。  
 こつまつ「勾當内侍祭」(秋)九月八日、江州堅田の田圃中にある勾當内侍の塚(内侍の投身したる處といふ)にて祭を行ふこと。  
 こつまつ「小唄八兵衛」元祿頃、小唄の名人。其傳奇跡考に詳し。  
 こつまつ「小説」謡曲中、祝儀嘉例佛事等に

協ふ

協ふべき文句を抜き一節を讀ふもの。  
 こつまつ「興徳」心越禪師のこと。  
 こつまつ「小柱」古へ婦女の禮服。裳、唐衣などの上へ被るもの、廣袖にて裏あるもの。  
 こつまつ「紅塵」香の名。  
 こつまつ「紅塵」繁華の市街をいふ。  
 こつまつ「紅調粥」(春)正月十五日、宮中にて白飯、大豆、小豆、紅豆、栗、栗、柿の七種を煮たるものを供御に獻る式。宇多帝の寛平年中始めて行はせらる。民間に行はる、小豆粥は之より起るものなり。團草も木も紅調粥や染工合中和。  
 こつまつ「候人」京都東西本願寺の寺侍を云ふ。  
 こつまつ「紅梅」(春)梅の一種、花紅なるもの。團花満ちて薄紅梅となりけり  
 こつまつ「江梅」(春)野梅(ウツクサ)の咲き。  
 こつまつ「紅梅草」(秋)せんかうげ。  
 こつまつ「紅梅衣」(春)カサネの色目の名、表紅、裏紫。又は表紅梅色、裏スハク。  
 こつまつ「勾芒」(春)春の異名。  
 こつまつ「興福寺」奈良にある藤原氏の

氏寺

氏寺。春日神社は此寺の保管する所なる故に人呼で春日寺といふ。猿澤の池は寺前にあり。  
 こつまつ「興福寺切」小紫に賣つなぎの銀細掛機ある製地。  
 こつまつ「興福寺心經會」(春)正月十五日、奈良興福寺にて幸徳井賀茂氏、日時の勳文を當寺務門主に獻じ、松樹を南大門に建つる式。會式終つて松樹を倒し、土民争ふて之を引き、勝ちたる方を農事に利ありとす。  
 こつまつ「興福寺常樂會」(春)二月十五日、奈良興福寺にて行ふ涅槃會。東金堂の圓浮檀金の釋迦像を開扉し、其扉に描ける巨勢金剛筆の涅槃像を諸人に拜さしむ。團物くばり動もあるが常樂會 和及。  
 こつまつ「興福寺佛生會」(夏)四月八日、奈良興福寺にて行ふ佛生會。伶人舞樂を奏す。其舞樂中の陸王の假面の鼻高き故に俗に鼻高といひ、又は鼻高祭とも云ふ。  
 こつまつ「興福寺法華會」(冬)九月三十日より十月六日まで、奈良興福寺の南圓堂にて法華會を修すること。藤原冬嗣、父、内膳の忌日(十月六日)に法

會を修したるより始ると

會を修したるより始ると。團法華會も太刀や佩ちん奈良法師 立團。  
 こつまつ「興福寺法起始」(春)正月十六日の夜、奈良興福寺の衆徒、面を包み、燭貝を吹き寺の四圍を廻り、後大湯屋にて年中の大會事を定む。此時市中は灯を滅し、しし之を見物するものあれば磔を打たれて甚樂ありとす。|| 蜂起始。  
 こつまつ「興福寺法起納」(冬)十一月廿六日、春日若宮祭禮の前宵に興福寺南大門にて行ふ。其式法起始に同會。  
 こつまつ「興福寺維摩會」(冬)維摩會。  
 こつまつ「紅瓶子梨」(秋)梨子の一種、形瓶子の如く、皮紅く肉は白し。  
 こつまつ「弘法大師忌」(春)みえいこ。  
 こつまつ「五蓮」佛説に色、聲、香、味、觸の五をいふ。  
 こつまつ「五蓮」水、火、土、木、金の星を云ふ。  
 こつまつ「小梅花」(春)信濃梅の一名。又、庭梅の一名。團神木の末社もありて小梅々な梅里。  
 こつまつ「公治長」齊の人、孔子の弟子、

善く

善く鳥語を解せしと云ふ。  
 こつまつ「勾欄」曲折ある欄干をいふ。  
 こつまつ「孔子」孔子の息子。  
 こつまつ「紅樓」富家の女の室を云ふ。  
 こつまつ「鴻臚館」古へ京都にありて、來買したる外客を宿したる館の名。  
 こつまつ「後宴」すべて節日、祭禮、月見、花見などの翌日を云ふ。  
 こつまつ「小御衣」小腰巻のこと。  
 こつまつ「小面」柔しき女の能面。熊野、松風などに用ゐる。  
 こつまつ「胡笳」支那の胡人の吹く笛。其音、一種の哀調を帯ぶ。  
 こつまつ「古河」下總鎌倉郡にあり。陸羽街道の驛。足利成氏の城址あり。  
 こつまつ「五戒」佛教にて殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒の五つの戒。  
 こつまつ「沙塵」海邊の沙中に棲むミミズの如き虫、釣の餌とす。  
 こつまつ「顯性之」支那晋代の人、字は長康。畫の妙手なり。  
 こつまつ「五更」今の午前四時、寅の刻をいふ。  
 こつまつ「小督」高倉天皇の愛妃、相國清盛己れの女の寵傾くを妬み、小督を殺さんと計るを曉り、夜走て嵯峨野に墜る、

帝、仲國

帝、仲國を遣はして再び之を徵す、事は平家物語に有り。  
 こつまつ「小督」仲秋の夜、仲國、嵯峨野に小督を尋ね宣言を傳ふることを作りし謡曲。  
 こつまつ「吳剛」傳説に月中の桂樹を伐る人なりといふ。(月の桂の條参照)  
 こつまつ「紅格子」紅地に格子縞ある織物の名。幕府の大奥の中蔵の着るもの。  
 こつまつ「御讀書始」(春)新曆正月六日午前十時、宮中にて、天皇陛下御學問所に出御あり、待講待讀の者より學書を進講する式。  
 こつまつ「五香水」(夏)佛生會に用ゐる五種の香油。青、(都梁)赤、(磨金香)白、(丘隆香)黄、(附水香)黒、(安息香)の五色にて作る。|| 五色の水。團嬉しさや花ちるよりも五香水 確證。  
 こつまつ「御香宮祭」(秋)九月九日、山城國伏見の東、御香宮神社(祭神神功皇后)の祭禮、神輿、山車等出で、十日には神事能を催す。祭禮中、境内に團器店多く出づ。  
 こつまつ「五嶽」支那にて泰山、華山、衡山、恒山、嵩山の五つの高山の稱。  
 こつまつ「妙夢」(夏)はつた。



1162

こかた「子方」能樂、演劇などにて小兒の優人をいふ。  
 こかち「小鏡治」三條小鏡治宗近、稻荷の神の助を得て勅命の餌を打つことを作りし試曲。  
 こかつじ「小鳴食」花月などに用ゐる能樂の面。  
 こかたし「空閑梨」(秋)梨の一種、肥前國に多く産し、色微紅あり。形甚だ大なり。  
 こかねがほ「小金原」下總國東葛飾、千葉、印幡の諸郡に産る糠原、古へ牧狩など有し處。  
 こかねま「金菊」(秋)黄菊の一種をいふ。  
 こかねま「金草」(秋)黄の異名。  
 こかねま「黄金草」(夏)ミヤコケサ。  
 こかねま「黄金虫」(夏)玉虫の類、體は金綠色にて頭に觸角あり。金龜子。  
 こかねま「御魂舎の幾代ふりてや金龜虫」許六。  
 こかねま「金目貫」(秋)きんめいけき。  
 こかねま「五家莊」肥後八代郡にある地、僻陳なる所にて昔平家の落人の多く據りしといふ。  
 こかねま「五個調」琴にある五つの調子をいふ。

1163

こかねま「粉川寺」肥州那賀郡にある古刹。四國願禮の札所。  
 こかねま「置阿」(春)かひこ。  
 こかねま「古淵」元祿頃、京都法恩寺の住職、明譽上人といふ。狩野永納に學び畫名高し。  
 こかねま「小鴨」(冬)カカベ。  
 こかねま「小雀」(秋)山雀に似て小さく、頭黒く、頬白くして圓紋の如し。腹背は白く、翅尾は黒し、聲清明にして能く鳴り、身軽く上下する。こぞ速なり。  
 こかねま「小陵鳥」國朝風や小雀のまゝる標澤。鯉太。  
 こかねま「風」(冬)冬の頃吹く強風、草木枯る、時なれば木枯といふ。國木枯や油からびし石地蔵。龜郷。  
 こかねま「木枯女」俗にすれからしといひて賣色の異名を稱す。  
 こかねま「小鳥」平家重代の名劍の名。  
 こかねま「古稀」七十歳を云ふ。  
 こかねま「五器」飯桶のこと。  
 こかねま「五儀」聖賢、君子、士、庶を云ふ。  
 こかねま「胡鬼板」(春)コイイタ。  
 こかねま「護朽」擬寶珠のこと。  
 こかねま「養牛鳴月」水牛が月を見て日と思ひ、熱を畏るゝことを、人の物をいふ。

1164

こかねま「小菊」美濃より産する小形の紙、鼻がみとして用ゐる。  
 こかねま「胡鬼子」(春)羽子。  
 こかねま「胡鬼實」(秋)つくばれのみ。  
 こかねま「小君」なじみの遊女をいふ。  
 こかねま「胡琴」清樂に用ゐる樂器。もと、胡國より傳へしもの。  
 こかねま「古今三鳥」古今集中の稻荷鳥(イナドリ)、百千鳥(ヒヨドリ)、喚子鳥(カササギ)を詠める歌のこと。古秘へ説として傳授したり。  
 こかねま「古今集」紀貫之が醍醐帝の勅を蒙りて集めし歌集。勅撰の初め也。  
 こかねま「古今傳授」古今集中の秘説、三木三鳥などの傳授をいふ。足利時代の末、歌道の衰へし頃より起る。  
 こかねま「古今體」(春)極めて小さき羅人形の名。  
 こかねま「古今節」ここんぶじ。  
 こかねま「五行」水、火、土、金、木の五をいふ。支那の理學説より起りしもの。  
 こかねま「五形」(春)七月七草の一、母子草(ハナ)、のこ。風物。  
 こかねま「風」よつだけ(四竹)。  
 こかねま「國阿是」(秋)九月十一日、山城

1165

愛宕郡羅鷲山正法寺にて中興祖師國阿上人(同寺中に堂あり)の思を修する。こ。  
 こかねま「梅印」小判などの通貨に量目の端なる取として打つ印。  
 こかねま「殺雨」(春)二十四風の「一」。  
 こかねま「虚空藏」(冬)くそむし。  
 こかねま「虚空藏」右に劍、左に玉を持てる女菩薩の儀。  
 こかねま「御供田」(夏)伊勢の御田植神事に用ゐる田地。  
 こかねま「御供船」(夏)山王祭。  
 こかねま「虚空無天」又、虚空無性といふ。向ふ見する。こ。  
 こかねま「梅月」(冬)十二月の異名。國極月や門につく。在郷馬。喜松。  
 こかねま「小草生月」(春)二月の異名。  
 こかねま「國師」禪宗に許可せらるゝ僧位の名。帝王の師たる僧を云ふ。他宗には大師號の外許されず。  
 こかねま「豆腐」味噌にて魚肉を煮たる料理。  
 こかねま「梅屋」(夏)暑の甚しきを云ふ。  
 こかねま「曲水宴」(春)さよくすみのえん。  
 こかねま「國姓爺」肥前平戸の産、大明の

1166

人、鄭芝龍の子なり、明に入り鄭成功と名告り後に、臺灣を征服す。其事蹟、戯曲に作られて有名なり。  
 こかねま「コトツ祭」(冬)十一月十二日、檢師職の家祭なりといふ。  
 こかねま「殺象虫」(夏)殺物に生ずる虫形小く、似て色黒し。米虫。コクワザク。結露。  
 こかねま「梅月」(冬)こくげつ。國極月の實屋に見ゆれ懸衣。東阜。  
 こかねま「國分寺」聖武帝の朝に國々に僧尼各、一字の寺院を建てしめ之を國分寺と云ふ、本尊は各異なり。  
 こかねま「黒牡丹」牛の異名。唐の劉訓といふ者、牡丹の前に水牛數百を繋ぎ客を聘して、是れ列氏の黒牡丹なりと其富を誇りし故事より起る。  
 こかねま「五葉」(春)にんにく、辣薑、あさづさ、葱の五葉をいふ。  
 こかねま「五旬目」連句の第五旬目をいふ。詳しくは連句作法を見よ。  
 こかねま「小倉祭」(秋)九月十五日、豊前國小倉、到津の(社)應神帝、神功皇后、玉依姫を祀るの祭禮、十四日、流鏝馬、舞樂、神湯(湯)の祝等あり。  
 こかねま「遺菜色衣」(秋)カサネの

1167

色目の名、表褐色、裏薄紅。  
 こかねま「御光星」星の名。此星顯はるれば物草の瑞ありなりと云傳ふ。李星。  
 こかねま「五月」(夏)異名。菘實。仲夏。南流。茂林。蔚林。阜月。鶴月。橘月。月見の月。早苗月。さくも月。さによらば。さつき。國雨に鳴く鳥も多かる五月哉。完來。  
 こかねま「五月場所」(夏)新曆五月中旬頃十日間、東京兩國回向院にて能す大角力なり。國雨がちのかくて初日や五月場所。迂外。  
 こかねま「唐關」師練と云ふ。東福寺の住僧。元亨釋書を著す。貞和頃。  
 こかねま「護花鈴」(春)古へ支那にて寧王といふ人、花時紅の紐に金鈴を綴り、花の梢に繫ぎて鳥鳴の花を散らすを防ぎし故事。連俳に正花なり。花の鈴。  
 こかねま「後家入」入雙のこと。  
 こかねま「普清水」(夏)若多き處の清水をいふ。國山寺や縁の下なる普清水。几童。  
 こかねま「華月」(冬)十一月の異名。  
 こかねま「苦花」(夏)淋雨の頃、地上石上等の普繁茂して花の如きものを生ずる



ウツク

をいふ。○岩角や火繩摺り消す苔の花太。○五元集「其角が自撰白筆の句集。延寶、天和、貞享、元禄、寶永の五年代に讀みし句を撰出せしもの。○げんちやう(御殿重)(冬)亥子(時)餅のこ。○御支猪の轉訛なりといふ。○げんちのめい「古硯銘」唐子因が古硯に托して養生の意を偶せし文章。○うさぎ(岩橋)(夏)岩梨の別名。○うさぎ(柿葉餅)(夏)魚貝の肉を細く切り混して製したる餅。○う(五湖)支那にある湖水。鄒陽、青草、丹陽、洞庭、太湖の稱。○う(壺公)仙人の名。漢の費長房、汝南の操たりし時、市上に藥を賣る老仙人に従ひ、共に壺中に入りしに宮殿樓閣、其中にありしといふ。○う(五侯)三公五侯など云ひ、支那古代貴族の家柄を云ふ。○う(御國忌)(冬)天智天皇御國忌。○う(若干)いくばくのこ。○う(九日)(秋)重陽(ヤマ)をいふ。○う(九日)(秋)長崎諏訪祭。○う(幾何)いくばくに全し。○う(古今節)元禄頃、江戸の俳僧古

ウツク

今新左衛門より起る俗曲。淨瑠璃の一種。○う(小米穂)(春)小米花。○う(小米花)(春)高さ三四尺に著生し葉狭く長くして薄く、春、白花を開く、大さ錢ばかり、形(カ)の如し。○内にては花さいひ、又一名小米穂ともいふ。○(異名)笑顔花(カ)。○小米花奈真のはつれや假治が家。○う(凍)(冬)身軀に寒氣の入むこと。○う(凍)(冬)凍え來し手足嬉しく達夜哉。○(許多)多く、甚だの意。○う(凝餅)(冬)餅の煮凝(カ)を云ふ。○冬(食品)○凍餅は山を垣根哉。○(心奇)心の急ぐこと。○う(心竹)(春)正月十四日、名古屋の城下にて辻の中央に長さ十間餘の大柱を立て、松竹等を飾る、之を心竹とも御柱ともいひ、市中の童子集り、水祝の遊をなす。○(心妻)思ひ妻に同じ。○う(心月)(秋)清く曇りなき心な

ウツク

○う(心花)(春)御傘に出づ。花時の人心の浮立つ事なりと、連律に正花とす。○(心闇)思ひ亂れまごふこと。○(心葉)(冬)新嘗、大嘗等の節會に日蔭の髪と共に冠に替すもの。主上は櫻の挿頭(銀にて造る)大臣は藤、大中納言は山吹、參議は梅の造花なり。○(心太)(夏)こころてん。○(心寄)意が満足すること。○(胡沙)支那の北方の沙漠の地。○(御壺)土用中に吹く東北の風の名、六月十六七日、伊勢の神事に出家の參拜を容す故に御壺の名起るといふ。○(五絲絛)(夏)長命絛。○(小宰相)上四門院の女房、平通盛に嫁し、壽永の亂れに夫の戦死を悲しみ海に投す。○(小前報)(冬)神樂歌の歌曲の稱。○(竹杖)(冬)タツメ。○(五子稿)(言水、去來、素堂、沾徳、來山の五家の句を集めし書。安永四年の刻本。○(巾子紙)冠の腰を止るための紙。○(米を炊く)米を炊くせいる。古は瓦にて製る。○(轂)車の輪の中央の筒状をなせること。○(古式)建治二年、爲相卿の定めし連歌の式目ないふ。新式に對して一に本式ともいふ。○(古事記)元明帝の朝、太安麿が勅を受けて神田安禮が話を聞書せし史書。○(五色網)(夏)富士市にて賣るもの。○(轆落)古俗に、婦人、産の時に胞衣滯れば屋根より蒸籠(カ)を轉し落すを呪とす。男子には南へ落し、女子の時北へ落す。○(五色墨)寶曆の頃、江戸の俳風を正風に復さんとして、長水、宗瑞、咫

ウツク

頃、岡島古左衛門が語り初めし俗曲。○(御齊會)(春)正月八日より十四日まで七日の間、天子大極殿にて金光明最勝王經を講説せしめられ、國家の平安を祈請せらるゝ儀式。○(御齊會)に皆公達(職着)な梅期。○(御齊會内論義)(春)正月十四日、御齊會の結願(終ないふ)の日、天皇の御前にて最勝王經を論義する。○(内論義)結願といふ人。○(高政)。○(小坂殿)性善法親王、綾小路の宮をいふ。徒然草に張繩の故事あり。○(小櫻)(春)山櫻の一種、花の色淡し。○(小櫻の花映)雨や具足親重寛。○(小櫻鏡)鏡の名。白と紅の交り糸にて織したるもの。或は小櫻草にて織したるもの。○(壺)あまざけに同じ。○(胡沙)北地の夷などの吹く笛。○(天山)支那、日本に各此稱あり、五つの大なる禪寺の稱。京五山、鎌倉五山、尼寺五山(各條參照)などあり。○(吳山)支那の吳國(今の浙江省なり)にある山。

ウツク

○(五山衆)京都五山に屬する茶人としをいふ。一に五山派。○(吳山)東山の詩に笠(重)吳山、雪。桂香楚地、花さ云ふ句より出づ。○(吳山)の雪景色を稱する詞。○(五山衆)五山(建仁、東福、天龍、相國、萬壽の五寺及惣祿の南禪寺)其他臨濟の諸寺にて僧徒の和尙に轉位したるものにして、拂子を乘らしむる式。○(小曝)(秋)小曝江船。○(小曝江船)(秋)江船は(イナ)の小なるもの、秋長して六七寸、河海の間に入り、色黒みを減じて晒し洗ひたる如く、脂肪多くなり味美なり。故に之を小曝と稱す。イナの條參照。○(古詩)漢詩の一體。韻は踏めども平仄に拘らずして長短自在に造るもの。○(古詩)漢詩の如きもの。○(冠)冠の中央の高くなりし部分の稱。○(居士)禪學者にて法鉢せぬ者の稱。○(兀子)四角にして四脚ある腰掛を云ふ。○(吳子)名は起、楚の悼王の臣、兵法に

ウツク

達し、吳子の書を著す。○(腰雨)北風のごきに降る雨をいふ。○(腰斬)能狂言の名。○(竹杖)(冬)タツメ。○(五子稿)(言水、去來、素堂、沾徳、來山の五家の句を集めし書。安永四年の刻本。○(巾子紙)冠の腰を止るための紙。○(米を炊く)米を炊くせいる。古は瓦にて製る。○(轂)車の輪の中央の筒状をなせること。○(古式)建治二年、爲相卿の定めし連歌の式目ないふ。新式に對して一に本式ともいふ。○(古事記)元明帝の朝、太安麿が勅を受けて神田安禮が話を聞書せし史書。○(五色網)(夏)富士市にて賣るもの。○(轆落)古俗に、婦人、産の時に胞衣滯れば屋根より蒸籠(カ)を轉し落すを呪とす。男子には南へ落し、女子の時北へ落す。○(五色墨)寶曆の頃、江戸の俳風を正風に復さんとして、長水、宗瑞、咫



ウツクサ

尺、堤亭、馬光の五人、互に判者となり五色の墨にて判詞を下し、四時の歌仙衆目を驚かす、其口調を世に五色墨と稱せり。後此門人等又の五色墨あり、皆一時の流行にて直に衰退す。

ウツクサ(五色水) (墨) 五香水。

ウツクサ(小式部) 和泉式部と橘道貞の間に生れし才女。上東門院に仕ふ。大江山の歌世に名高し、世を早くす。

ウツクサ(胡枝花) (秋) 萩の異名。

ウツクサ(午時花) (秋) 草の名、高さ二三尺、八月葉間に五瓣の朱紅色の花を開く。形鈴葉に似て正午に開き夕に落つ。後に圓長形の實を結ぶ。夜落金鐘。

ウツクサ(伍子胥) 戦國時代、吳の忠臣、勇猛膽略あり、君を諫めて却て讒に遇ひ、東門に眼を懸て吳の亡ぶを見んと云て自刎す。幾何もなく吳王夫差、越の勾踐の爲に亡さる。

ウツクサ(木下間) (墨) 諸木茂りて産間く、なれるないふ。このしたやみ。下間。國 細中や椋四五木の木下間。一茶。

ウツクサ(五七雨) 地震に由りて時候を知る歌に「九は雨、五七が雨に四つ早

ウツクサ

六つ八つならび風と知るべし」とあるより出づ。五つ、七つの刻に地震あれば必ず雨ありといふこと。

ウツクサ(後七日法) (春) 真言院のみしほを見よ。

ウツクサ(櫻枝風呂) 京にて長湯する。と云ふ。又、盟にて行水すること。

ウツクサ(櫻句) 歌の第三句目をいふ。

ウツクサ(小柴垣) 細く柴にて結べる垣。病、リウマチスな云ふ。

ウツクサ(五十雀) (秋) 四十雀の老て毛を換へたるを云ふ。形稍大なり秋來り冬去る。國 むつかしやどれが四十雀五十雀。一茶。

ウツクサ(五十内侍) 源氏物語にある人物。源内侍といふ。老て好色なる女。

ウツクサ(小十郎) 片倉氏、名は景綱。伊達政宗の臣、政宗を共に功あり。

ウツクサ(五十雀) 連句の一體、百韻の二の裏までの五十句を以て一巻とするもの。

ウツクサ(小四方) さんぼうの一種。四方に孔あるもの。

ウツクサ(夕鐘) 夕暮の鐘をいふ。

ウツクサ

ウツクサ(故人) 古き友。又、死したる人。

ウツクサ(五辛盤) (春) 春盤。

ウツクサ(古將監) 百生將監と云ふ。能楽の名人、足利時代。

ウツクサ(小正月) (春) 正月十四日をいふ。十四日年越。國 春もや、宵間遊や小正月。藤石。

ウツクサ(古酒) (秋) 秋、新酒の出たる頃、新酒に對して去年の酒を古酒といふ。國 新酒にて誘ひ出しけり古酒の酔。春成。

ウツクサ(御守殿) 徳川時代に三位以上の諸侯へ嫁したる將軍家の女の居所。又御守殿に仕へし女の偏の風の名。

ウツクサ(小尉) 高砂、老松などに用ゐる能楽の翁の名。

ウツクサ(御所柿) (秋) 大和葛上郡五所村の産、方形をなしたる木柿の一種。色紅にして核少く、柿の上品とす。五所柿。國 五所柿や我齒に消ゆる今朝の霜。其角。

ウツクサ(五所櫻) (春) 櫻の一種。一つの苞より五花集り出づ。千鶴の大輪なり。

ウツクサ(御所八幡祭) (秋) 八月十五日、京都三條坊門の南、御所八幡宮

ウツクサ

(足利尊氏の勳績する所)の祭禮。

ウツクサ(後白河院御忌) (春) 三月十三日、京五條下寺町、長講堂(後白河法皇の御建立にて法皇の宸影を安置す)及び、蓮華王院(三十三間堂といふ)にて後白河法皇の御忌を修すること。

ウツクサ(腰折) 調子の整はぬ拙なき歌をいふ。

ウツクサ(小籠) すだれのこ。

ウツクサ(吳須) 陶器に用ゐる青黒色の繪具の名。又、中古、支那より舶來せし青畫の磁器の名。吳洲。極素。

ウツクサ(小杉) 杉原紙の小判なるもの。鼻紙に用ゐるもの。

ウツクサ(小角力) (秋) 相撲の弟子などをいふ。國 小角力の水打つてある戸口かな。鳴鶴。

ウツクサ(粉炭) (冬) 炭の碎けて粉になりしもの。國 わびぬれば粉炭久しき炬燵かな。通雪。

ウツクサ(秋) 秋櫻。

ウツクサ(胡委) (夏) 草の名、葉は芥に似て立夏の頃、淡紫色の細花叢り開く、根を食用とす。二、こにし。

ウツクサ(栢秋) (秋) 九月の異名。

ウツクサ(栢鏡) (秋) 樹々の栢の紅葉

ウツクサ

して美しきをいふ。

ウツクサ(御寶篋) (春) ヨサイエ。

ウツクサ(五節) (冬) 五節帳臺の試(こい)。

ウツクサ(五節御前試) (冬) 十一月中寅日帳臺の試の翌夜、舞姫を清涼殿に召して舞を見せしむる試。

ウツクサ(五節帳臺試) (冬) 十一月中五日、宮中にて五節の式と稱し、主上、常事殿の帳臺に出御し、五人の舞姫(公卿、國司等の女より撰ぶ)を召し舞踏を覽給ふ儀式。其翌日を殿上潤澤(アエンザワ)と稱し宴を行ひ、又、御前の試等あり。○童御覽(ワラシ)。持の使。舞ふ音の帳臺ふかき五節かな。貞兼。○肩脱の袖に蜘蛛ふや殿上人。季吟。

ウツクサ(五攝家) 昔へ攝政關白となるべき家筋、近衛、九條、二條、一條、鷹司の五家。

ウツクサ(姑洗) (春) 三月の異名。

ウツクサ(古選) 三宅晴山が守武、宗鑑より移竹頃迄の秀句を撰み、漢文にて批評を加へし書。

ウツクサ(御選宮) (秋) 伊勢御選宮。

ウツクサ(御前試) (冬) 五節(オ)御前試。

ウツクサ

ウツクサ(その強めたる辭にて俗語の「であるから」に當り、保辭となる場合多し。「それこそ死たるまゝの霜の宿」(橋米に歌)「そなけれ近衛殿」)

ウツクサ(去年) (春) 新年より舊年を指す稱。去年今年。國 立踏る波にもある。去年今年。尋香。

ウツクサ(賢嫂) 盲人のこと。又、支那の舜帝の父の名。盲目にして頑愚なり。

ウツクサ(去年今年) (春) 一、そ。

ウツクサ(姑蘇産) 吳王夫差、西施を住ませし所の名。

ウツクサ(小袖曾我) 曾我十郎祐成、第五郎時宗を具して、仇討に赴かんご母の許に暇乞をなすことを作りし談曲。

ウツクサ(小袖脱) 申樂などに纏頭を興ること。

ウツクサ(小袖納) (春) 暮春、花見小袖を取仕舞ふこと。國 小袖納横川の櫻ちりにけり。才丸。

ウツクサ(怕痒) こそぐらるゝ如き感あるをいふ。

ウツクサ(古曾部入道) 能因法師の一名。

ウツクサ(木染月) (秋) 九月の異名。濃染月とも書く。



OTAKEGAKO

UKIYAKU

UKIYAKU

○たけのこ(御膳御卜)(夏冬)六月、十二月の十日、宮中神祇官の官人龜卜をなし、主上の玉體に御儀あるべきことを奏す。正月より六月までの事は前年十二月、七月より十二月までの事は其年六月占ふ。

○たけのこ(御膳御占奏)同前。同月に日に清き御體の御占ひな。露水。

○たけのこ(五大力)上総より江戸へ薪などを積みくる船の名。

○たけのこ(吳道子)名は元、唐初の人、仙を學び畫に妙なり。五月蟻に畫く所の體は此人畫き始しといふ。

○たけのこ(小鷹狩)(秋)初鷹狩。

○たけのこ(木工)大工のこと。

○たけのこ(牛王出)(春)天王寺牛王出。

○たけのこ(海鼠巻)(冬)イリコ。同、ただたみむつ。しき世や獨住。風雲。

○たけのこ(御達)女を敬稱して云ふ語。

○たけのこ(火爐)(冬)冬手足を暖むる爲、棧(ヤシ)を置き家を暖む。炬燵。○置火爐。火爐布圍。圍袴着て炬燵にあたる若衆。五角。

○たけのこ(炬燵切)(冬)冬、炬燵を開きて用ゐる始むること。同、初、たつ眼を朝む一日二日かな。鳴響。

○たけのこ(炬燵差)(春)三月、爐差ぐ頃に炬燵も差ぐなり。同、午過の火爐ふさぎぬ夫の留守。替替桐。

○たけのこ(火爐蒲團)(冬)火爐に被ふ布圍、表をいふ。同、寐心やこたつ蒲團のさめぬうち。其角。

○たけのこ(火爐櫃)(冬)火爐に用ゐる四柱ある櫃。

○たけのこ(置棚)(春)置を養ふため竹の棚を作り席を敷きたるもの。同、青くさし大きな家の置棚。波主。

○たけのこ(後段)田島の晩時したるを云ふ。轉じて食饌後に廻類など出すを俗に後段と呼べり。

○たけのこ(傾)たたく、こと。

○たけのこ(東風)(春)春の東風をいふ。暖き風なり。同、(異名)帖の風。○朝東風。夕東風。初東風。同、東風うけて川添ゆくや久しぶり。召波。

○たけのこ(魚)(夏)魚の名。形平たく頭大にして口廣く、尾尖りて長し、全身灰黒色味なるを以て梅雨鮒の稱あり。

○たけのこ(五)多大にの意、又くだくだしいこと。

○たけのこ(五塵)色、聲、香、味、觸の五をいふ。

○たけのこ(古茶)(夏)其年の製に非ざる茶、新茶に對しての稱。同、古き茶の昔を語れ雨の巻。夕叟。

○たけのこ(小重陽)(秋)九月十日(重陽の翌日)再び宴を催し菊を賞すること。同、後日の菊。

○たけのこ(五濁)佛教に劫、見、命、煩惱、衆の五をいふ。同、五塵。

○たけのこ(木遣)庭樹など刈り整ふこと。

○たけのこ(木遣始)(春)正月五日、兼中内侍所の庭上にて御大工、木子井に惣官、烏帽子素袍にて御手斧始の式を行ふこと。同、御新始(オウサナ)。同、木遣や朝日に響く斧始。曲浦。

○たけのこ(滑檣太平記)北條浮生が宗經以來、貞門の傳記を太平記風に記して俳諧の興廢を述べし書。

○たけのこ(小晦日)(冬)十二月廿九日ないふ。大晦日(オホソバ)に對していふ。同、翌ありと頼むもはかな小晦日。蝶夢。

○たけのこ(兀座)無意識に摺り居ること。

○たけのこ(午頭天王)佛説に天竺の北なる九相國、吉祥園の王、祇園精舎の守護神なりといふ。其垂跡を素盞烏尊となす。なほソミンシヤウライの條を見よ。

OTAKEGAKO

UKIYAKU

UKIYAKU

○たけのこ(午頭天王編曳)(春)なんば、つてんわ、つなひ。

○たけのこ(忍必烈)元の王、蒙古より起り支那中國を服す。

○たけのこ(小童水)(夏)鷹の鳥屋入の時羽虫などを醫する薬水。

○たけのこ(子夫)遊女の御客をいふ。

○たけのこ(水芥)水中にある木屑などの芥。

○たけのこ(木種爲)ヨルに、枕詞。

○たけのこ(小訪役者)樂屋の中の部屋を持たぬ役者。俗に相中といふ下廻りをいふ。

○たけのこ(五條市煙祭)(夏)市煙祭。

○たけのこ(五調子)音楽の調子をいふ。

○たけのこ(五條殿)伊勢神宮の西宮にある殿舎。

○たけのこ(五條天神祭)(秋)九月十日、京都、西洞院五條天神社(祭神大己貴命、少産名命)の祭禮。

○たけのこ(五條天神参)(冬)節分の夜、京都五條の五條天神に諸人参詣して白朮(ク)。(藥草の根、家に歸り焚きて惡疫を祓ふ呪こと)餅餅(ハモク)。(小餅、社前勝軍地蔵に供するもの。之を喰へば物事勝利ありこと)を買ふ。

○白朮賣。同、不細工なもの、ゆかしき白朮賣。方山。

○たけのこ(小初拜)(春)元日、清涼殿の東庭に百官参朝して天皇に拜賀すること。朝拜の時儀なるものにて朝拜の行はれざる年に行ふ。

○たけのこ(小手指原)武藏入間郡に在る古戰場。

○たけのこ(虎徹)寛文頃の刀工。名は與里。越前より出て近江に住す。

○たけのこ(小手尼)天平年間、百濟國より來りし産科醫、其手の小さきよりこの名有り。

○たけのこ(胡蝶)(春)蝶をいふに同じ。同、雨の日や軒の掛案にぬる胡蝶。猪史。

○たけのこ(胡蝶)蝶の花に親しまるるを嘆き、法華經の功力を稱し、ことを作しし話曲。

○たけのこ(小手蓮花)(春)灌木。高さ四五尺、葉狭く長くして山吹の葉の如く、三月開花す。



(りまでこ)

花の形テマリに似て白く小く、大さ一寸程の圓をなす。同、小粉團花。(異名)鈴掛の花。同、小手蓮や花を座に組む雨蛙。伊珊。

○たけのこ(吳天)支那の吳の國のこと、吳天雪などいへり。

○たけのこ(小天神)大會の帝釋などの佛に用ゐる能面。

○たけのこ(如)ごこと同じ、助動詞。

○たけのこ(御燈)(春)古、三月三日及九月三日、天子清涼殿にて燈火を北斗七神に奉る公事、古は京都北山の靈嚴寺の峯に四十九束の薪を七所に積み、點火するを宮中より拜し給ひしこといふ。同、明星の峯に、御燈宗。○秋の夜な花になしたる御燈な。燈水。

○たけのこ(後藤彫)一に彫影をいふ。後藤家より出たる彫刻物の稱。後藤家の祖、祐來、美濃より出て足利氏に仕へ京都に在り、代々金工として世に名高し。

○たけのこ(五斗味噌)米糶五斗に大豆、麴、鹽等を和して製したる味噌。

○たけのこ(湖東問答)元祿十二年、洛の







UICACACR

國粉らばし木の實に交る鹿の藁 李里。  
 このみある「木實植」(毒) 諸木の種を毒くこと。草の種と區別するため木種といはず。又毒くといはず。○山人や薪にすてて木の實植う。道彦。  
 このみある「木實雨」(秋) 木の實の落つる音を雨とさくなり。○夕暮や木の實が笠をうつ山の山。一葉。  
 UICACACR「木芽」(毒) さのめを見よ。其崩え出るを吹く、立つ、張るなどいふ。  
 UICACACR「此面彼面」ななかなたに同じ。  
 このみ「兄鶴」(秋) 鶴(か)の雄鳥、脚極て細し、秋、鶴等の小鳥を捕ふに使用す。○椋鳥かけて興に過たるこのり哉。淡々。  
 UICACACR「海鼠腸」(冬) 海鼠の腸を取りて曬乾したるもの。  
 このみ「近衛局」藤原伊平の女、今出川院に仕へ詩歌に名あり。一生不犯の神尼なり。弘安の比。  
 UICACACR「近衛流」近衛権樂院より出し書の流儀。  
 このみ「五倍子」ふしのい。  
 このみ「牛蒡尻」犬猪の尾の短さを云ふ。

UICACACR

このみ「牛蒡花」(秋) 蕪菜の牛蒡を來春蒔く種を取る爲め花を開かしむるもの。其花は白色、小葉して傘形をなす。○まほらしく咲や牛蒡の花の秋。孤山。  
 このみ「牛蒡引」(秋) 七月の頃、牛蒡を收穫すること。○牛蒡引堀川の水も濁るべし。鬻水。  
 このみ「牛蒡毒」(毒) 三月牛蒡の種をまくこと。  
 このみ「小袴」素袍の下に着る袴をいふ。  
 このみ「小萩」(秋) 萩の一種、冬葉枯れて春に至り新苗を出すもの。○鳥濡れて立つや朝日の小萩原。種聲。  
 このみ「木葉」(秋) 萩の一種、冬葉枯れずして春、葉より嫩葉を出すもの。  
 このみ「小走」武家に仕へる婢女をいふ。  
 このみ「木皮色」木皮色の衣をいふ。古へ下僕などの着るもの。  
 このみ「木幡祭」(秋) 九月廿五日(古は廿四日)山城國宇治木幡神社(天忍權耳尊を祀る)の祭禮。○馬借りて見にゆく木幡祭かな。常長。  
 このみ「五八」大坂にて遊女の下等なるものをいふ。

UICACACR

このみ「小蠅」(夏) 蠅の小なるもの。  
 このみ「御番入」幕府の制度に部屋住の者より大番(江戸城に常備せる番士)になること。  
 このみ「小判船」鯨の類、大き二三尺、船底に吸付ば船進行せすと云ひて舟人大に思む。  
 このみ「小盆」(春) 正月三日、江戸幕府にて老中の役、其年に初めて書札に華押を自書する式。  
 このみ「小張」仕丁の着る白衣をいふ。○白張。  
 このみ「小春」(冬) 初冬の氣候溫和にて春に似たること、又、十月の異名とす。○小春日。○小六月。小春風。○海の音一日遠き小春かな。曉聲。  
 このみ「小春風」(冬) 小春の空靜なるをいふ。○小春風風帆も七合五勺かな。蕪村。  
 このみ「小春日」(冬) 小春に同。  
 このみ「小鳥」(夏) ほことさすの異名。  
 このみ「小鳥」(夏) ほことさすの異名。  
 このみ「小鳥」(夏) ほことさすの異名。  
 このみ「小鳥」(夏) ほことさすの異名。  
 このみ「小鳥」(夏) ほことさすの異名。

UICACACR

このみ「五句續き」連俳の用語。連句中、戀の五句續きしをいふ。  
 UICACACR「五筆和尚」弘法大師のこと。  
 UICACACR「山科の莊司」いふ職者、宮中に女御を戀し、重荷を負はせられて遂に倒れ死ぬことを作りし謡曲。  
 UICACACR「墨染木」錦木のこと。  
 UICACACR「紙又は帛にて鯉魚の形に造れるもの。端午に立つ。  
 UICACACR「鯉山」(夏) 祇園會の山の、一に龍門山といふ。鯉魚の淵を登るさまを作る。○鯉山や魚木にのぼる松の枝。友靜。  
 UICACACR「海邊などに貝を拾ひつゝ、暫し戀の心を忘れんとすること。  
 UICACACR「鶴に似て精や肥へ、嘴太き鳥。○鶴、おほとり。  
 UICACACR「劫」佛説にて極端に長き時を云ふ、何万年と限れぬ始んど無限なる意。  
 UICACACR「劫」佛の詞。對手を劫して、其隙に業じ攻守すること。  
 UICACACR「因果のいご。  
 UICACACR「五風十雨」聖代には五日に風吹き、十日に一たび雨ふるといふ事より風雨の時を得て天下靜穩なることをいふ。

UICACACR

このみ「昆布賣」能狂言の名。  
 このみ「昆布柿」能狂言の名。  
 このみ「御旗」神社などにて供物の下りしを信者に與ふもの。佛閣にもあり。  
 このみ「業火」佛教にて嗔志の烈しきを火にたとへていふ。  
 このみ「辛夷」(春) 山中に自生し又人家に植う、樹高大にして枝茂く、夏より筆頭の形したる蕾を着け、翌年の春に至り新葉の生でさる前に開花す、花は木蓮に似て、小く白く紅味あり。又一種紫色なるあり。○木筆。○シデ。○アツ。○紫アツ。○風なくてこぼる。花の辛夷哉。巴水。  
 このみ「小普請」幕府の制度に、非役の旗本に普請人足を出さしめしこと。  
 このみ「國府下」下總葛飾郡の地。里見義弘、北條氏と合戦して亡びし故跡。  
 このみ「見布衣」能狂言の名。  
 このみ「見布衣」(春) 川柳の一種、葉圓く皮を剥けば肌を痛めるを以て名く。  
 このみ「瓜瓜明神祭」(秋) 八月廿四日、京都吉田、春日社の西南なる木瓜大明神(神樂岡の地主神)の祭禮。神輿一基出るのみなり。

UICACACR

このみ「胡瓶」節會の時禁中に用ゐる酒器。金銅にて。其首を鳳首の形に作る。○  
 このみ「小徳見」能樂の皇帝、昭君等に用ゐる天狗の面の名。  
 このみ「古法眼」狩野元信の稱。  
 このみ「水」(冬) 水のみは冬なり。夏季、飲料とする水は夏水といひて之を區別す。○水。○初水。○薄水。○厚水。○水柱。○水。○水の聲。○水の衣。○水面鏡。○水のくさび。○水の花。○水の橋。○風折れの水を引上る水かな。果光。  
 このみ「水浮」(春) 初春、水の解け浮くこと。○浮島のうくこと。○日や水浮く。○柳。  
 このみ「水賣」(夏) 夏日、水を賣り歩くもの。北國にては盛夏、山中にて取りし水を籠に入れ笹葉等を盛り賣り歩く。○山の名を呼びて走るや水賣。  
 このみ「水卸」(夏) 削りひ。  
 このみ「水菓子」(夏) アイスクリーム。  
 このみ「水雨」(冬) 寒夜、雨弱を



(いへこ)



こぼりすべり

さらして水らしたるもの。○蒟蒻のふるひは止んで水りけり。  
 こぼりすべり(水滑)(冬)冬時、北國にて水上を滑りつゝ遊戯すること。○スケート。  
 こぼりすべり(水豆腐)(冬)冬夜、豆腐を屋外に曝して寒氣に凍らしたるもの。○高野路や豆腐凍らす屋根の上。鬼文。  
 こぼりすべり(水解)(春)初春、水邊の水の解くること。○水の間(水)水うく。水流るゝ。○解。○凍凍とけて家鴨の遊ぶ垣根哉。  
 こぼりながる(水流)(春)初春、河海の水解けて流ること。○荇の根のついでなかる、水かな。風竇。  
 こぼりなき(水衣)(冬)カサネの色目の名、表白ミカキ、裏白。  
 こぼりなき(水襖)(冬)水の閉ぢて水の流止りしな、物に櫻うちたるに比へていふ語。  
 こぼりなき(水衣)(冬)水の水を蔽ひて張れるを衣に比していふ語。  
 こぼりなき(水聲)(冬)水の砕くる音をいふ。  
 こぼりのはし(水橋)(冬)水の凝りたる上を渡ること。○諏訪湖氷る。○水さも

こぼりのはな

知らで渡りし湖水かな。一茶。  
 こぼりのはな(水花)(冬)水の花に比へていふ。雪の花、霜の花等と同じ。  
 こぼりのはな(水虫)(冬)冬、信濃諏訪湖の水の上に穴を穿ち、沿岸の人、釣を垂れて魚を漁ること。○釣の糸水の穴に下しけり。蛙人。  
 こぼりのはな(水餅)(冬)・・・餅。  
 こぼりのはな(水店)(夏)夏日、飲料の水を賣る店。○松原に出たる月や水店。更衣。  
 こぼりのはな(水水)(夏)夏水。  
 こぼりのはな(水餅)(夏)餅を寒晒にしたるもの、夏日食ふ。○水餅祝ふ。○あひにあふ水をろしや水餅。召波。  
 こぼりのはな(水餅祝)(夏)六月一日、水室の節句と稱して、去年の雪水にて製したる粉餅、或は攝津の勝尾寺より出る水餅を食し祝ふこと。  
 こぼりのはな(郡山)大和添下郡の地。  
 こぼりのはな(小堀遠州)名は政一、徳川三代將軍の茶の師範にて、兼て活花を善し茶事と共に遠州流の一派を開く。後紫野に閑居し正保四年卒す。  
 こぼりのはな(水供)(夏)四月一日より九月廿日まで、宮中主水司にて、諸國水室

こぼり

より眞したる水を供御に獻る古禮。俳季には夏こそ。○奉る水見そむる御階かな。竹亭。  
 こぼり(水)(冬)こぼり。  
 こぼり(臘月)連俳の用語。連句の月の定座より遅れて月の句を出すを云ふ。月を懸すといふ。但し折檻(ハ)へはこぼりが定法なり。  
 こぼり(蟋蟀)(秋)瓦石の間などの土中に棲む虫。二脚、六足あり、身と足とは油色にて、雄は背に黒き薄翅あり。秋夜聲高くりワリワリと鳴く、雌は翅短くして鳴かず。古名キリギリス。四京にてイトドといふ。又一種エンマコホロギといふあり。形大く原野にありて聾鳴く。京にては之を卑にコホロギといふ。○蟋蟀。○蟋蟀や顔に飛つく袋櫛。北枝。  
 こぼり(蠶斯)(秋)キリギリスの古名。  
 こぼり(高麗)古昔朝鮮の三國に分れし時の一國、京城以北の地。



(きろほこ)

こぼり

こぼり(駒鳥)(春)こぼりを見よ。  
 こぼり(護摩)佛法にて佛に祈るため火を焚きて、惡事を滅すること。○イマは梵語にて火燒、火祭の意なり。  
 こぼり(駒形)江戸淺草駒形堂のある地。  
 こぼり(若返)老人の若やきしをいふ。  
 こぼり(若返草)(春)若草をいふ。  
 こぼり(まがへる草)八十八夜より蕪太。  
 こぼり(胡麻刈)(秋)八月の頃、胡麻を刈獲すること。○こぼるゝと聞た胡麻刈る隣かな。都久愛。  
 こぼり(高麗菊)(春)しゆん菊。  
 こぼり(把)熊手の大なるもの。  
 こぼり(小町)花見の場所の掛茶屋などの賑の稱。  
 こぼり(小町草)(夏)高さ一二尺の草。六七月の頃、淡紅にて五六分の花を開き、茎下の莖に粘液を分泌す。○蠅取草。○小町草あはれ憂き身の虫を取る。志紀。



(草町小)

こぼり

こぼり(小町茶屋)住吉の松原に在りし茶店の名。柄の長き柄杓に茶碗を載せて出す、茶屋女皆獨身なり、仍て名あり。  
 こぼり(胡麻千代祭)(秋)九月上旬日、京都上賀茂の末社千歳社、稻荷明神を祀ることの祭禮、此神、胡麻を好むこと之を神供とす。近傍に胡麻畑多く、よく買るといふ。  
 こぼり(小町餅)(秋)七夕餅。  
 こぼり(小町餅)離屋立園が集めし俳諧集の名。  
 こぼり(小松)加賀能美郡の都市。  
 こぼり(駒形)(秋)原野に生ずる小樹、莖。  
 こぼり(枝花)葉共。  
 こぼり(似)て七。  
 こぼり(月花)を開き、莢を作す。小豆の如くにして實黒し。其芽の形獸類の歯牙に似、根甚強き故に根芽、



(ぎなつまこ)

こぼり

金剛草等の異名あり。○根を引ば中々強しこまつなき。言水。  
 こぼり(小松引)(春)子の日の遊を見よ。○老が身や杖に結びし小松曳。櫻瓦。  
 こぼり(木祭)樵夫の大水を伐る時、斧に御幣を提げて山神を祭ること。  
 こぼり(駒鳥)(春)鶯に似て大く身、體色にして腹白く首に紅點あり。鳴く聲響の鳴るが如き故に駒鳥(コ)といふ。○知更鳥。○駒鳥の日はれてごよみ林かな。開更。  
 こぼり(小間取)小兒の遊戯、子取のわざなどなり。  
 こぼり(胡麻花)(夏)穀類、草は莖方にて夏、葉の間に紫白花を生じ、後莢を結ぶ。黒白二種あり。○花さくや小麥が中のこぼれ胡麻。二柳。  
 こぼり(駒牽)(夏)四月廿八日、天子武徳殿(内裏の西)に幸し馬を牽し給ふ、近衛、兵衛より騎射の事を奏し、後に舞樂あり、五月騎射を行ふ準備なり。  
 こぼり(駒牽)(秋)八月十六日、宮中にて諸國より貢進せる馬を御覽せらるゝ式。古へは十六日に信濃國牧を始めとして甲斐、武藏、上野等の諸牧よりの駒



ウツクサ

幸あり。廿八日まで日を定め行ひしが、後世に至り信濃國望月の牧のみ行はる。諸國より來る馬は蓬阪山にて左右馬寮の官人之を請取て、禁庭に引く之を駒迎といひ、又天子の御覽ありて後馬を公廩以下に給ひ、院の御所、東宮等へ贈り給ふ、此使を引分の使といふ。○信濃の駒。甲斐の駒。武蔵の駒。上野の駒。望月の駒。霧原の駒。穂坂の駒。○ひく駒の足ひやさん、鳴の海太殿。○提灯に獸上の泥や駒迎。許六

【駒奉草】(春) 葦の異名。  
【駒奉草】(駒奉草) 馬を奉く人の形を畫ける錢。古へ、呪咀の料としたるものといふ。  
【駒神】 神を以て四人にて舞ふ雅樂。  
【胡麻餅】(夏) 夏至より半夏生の間に胡麻の種を蒔くこと。國吉日をえらめ浮世は胡麻の壳 夢路。  
【駒迎】(秋) こまひき。  
【小高柳】 伊勢山田浮洲と云ふ所にある柳の名木。  
【小蠟を實乾にしたるもの】 體全(六)の字に寄せて新春の賀儀に

ウツクサ

用ひらる。武家に小殿原(ウツクサ)と云ひ、農家に田作(ウツクサ)と云ひ、商家に倭子(ウツクサ)と云ひ、五萬米銀。國餅の鳥こまめの白蛇眼りけり。洗口。  
【駒寄】 低き橋をいふ。馬の奔逸を防ぐ爲に設くる垣。  
【五味子】(秋) サネカヅラ。  
【芥太夫】 乞食の輩の三味線引て來り滑稽なる淨瑠璃を語るものの卑稱。  
【芥蛇】(夏) 五月雨の頃、池川の水濁りたるときに捕る、蛇をいふ。  
【五寸切】(夏) ヒハモ。  
【五喜日】 屠の語、悪日をいふ。  
【辨反】 足の辨の筋が引つること。  
【小紫】 明曆比、江戸吉原三浦屋の妓なり。平井權八と契り情死せしこと、戯曲などに作らる。  
【小室節】 昔馬方などの唄ひし唄。吉原通ひの土手節も同じ。  
【莊子】 莊子に出し、想像の大魚。其大さ數千里にして北冥に棲りたり。  
【金剛】 草履のこと。密教の僧、安然、賢時、草履を作りて、これ金剛の性

ウツクサ

體なりといひしより出でし語。  
【金剛】 天文頃、役者の男衆を京にて呼ぶ語。  
【金剛】 能樂四座の内の一。金剛流。  
【金剛草】(秋) こまつなぎ。  
【金剛山】 河内石川郡にある山。  
【緋橋】 染物屋のこと。  
【勤行】 僧の誦經して修行すること。  
【金鼓】 ふせ鉦のこと。  
【吼喚】 又、釣狐と云ふ、老狐が獵師の叔父、白藏主に化て殺生を意見し却て裏に、ることを作りし能狂言。  
【金草】 兒童のほく草履をいふ。  
【真山集】 鶴冠井令徳の編みし句集。  
【金神】 方位家にて忌む神の名。  
【胡飲酒】 黃目赤鼻の面にて胡人が酒に酔ふ狀をなす舞樂。  
【言水忌】(秋) 九月廿四日、池西言水(京の人、江戸に出て櫻林に遊び後蕪風となる、木枯の句を以て名あり。享保四年歿)の忌。國 凝るそのみ句下手

ウツクサ

の衆よ言水忌 ゆうく。  
【楳鉢】 筆道の二世の人を云ふ。  
【紺足袋】(冬) 紺色の足袋。  
【混純】(夏) 五月五日、支那の古俗に混純を喰ふこと。混純は粽柏餅の類なり。  
【菊菊花】(秋) 島に植うる草、形、天南星に似て夏初、花冠を生じ二三重相包みて竹の皮の如く秋に至り紫黑色の花を開く、其根を菊菊に製す。  
【薩摩日向の神社にて、各處に行はる、神事。九月廿七日、日向宮崎郡宮崎神社(神武帝を祀る)の例祭に行はるもの最昌なれば奉とす。其式は心願ある人、其崇ふ所の社に備馬を奉ると稱し、馬數十百匹を集め、之に各鞍轡を具し、上に幣を切かけ、一匹の馬に口取三人、皆白衣に纏し太鼓を合圖に馬を追立て、島居より拜殿を廻ること三週、我先にと追重り行く、其間神樂を奏し、事了て流馬、競馬等あり。廿三日を足揃とす。  
【能樂四座の内の一。金春流。

ウツクサ

【金尾羅祭】(冬) 十月十日、讃岐國象頭山金尾羅權現社(素盞烏尊を祭る。一説に崇徳院の崩なりこと)の祭禮、参詣甚多し。國 金尾羅や祭によりし流し樽 沾漉。  
【昆布飾】(春) 昆布、新年の飾物に用ひること。  
【昆布刈】(夏) 土用の頃、北海道方にて昆布を刈取ること。國 昆布刈るや世にしほじみし燵衣 由紀。  
【能狂言の名】  
【混木家】 せとうちの同じ。  
【金王櫻】(春) 江戸、鎌谷八幡社内にある櫻樹、古へ鎌谷金丸の植ましものと傳ふ。國 白あやに金王櫻咲にけり 史邦。  
【米洗】(冬) しちこめあらひ。  
【米虫】(夏) コクゾムシ。  
【朝鮮成鏡道熊川にて産せし茶碗なり、舶來して茶人の賞する所。  
【芥】 鷹芥をいふ。  
【子持沙魚】(春) 正月の頃、産卵期の沙魚をいふ。  
【小望月】(秋) 待宵の月。  
【子持沙魚】(春) 初春の頃、沙魚

ウツクサ

の卵を孕むもの。  
【菰】(夏) 菰の葉にて包みし粽。安祿。國 妾が家は江の西にあり 菰 太紙。  
【菰】 菰を編む時、打つ槌の彼方此方と遣ふ狀を云ふ。  
【菰】(春) 若菰を見よ。  
【菰枕】(冬) 神樂歌の小前張の曲の名。  
【菰枕】(夏) 夏神樂に奏する神樂歌の名。國 重たげな山の妾やこし 枕 鳥六。  
【菰】(春) 若菰を見よ。  
【龍口】 初瀬の枕詞。  
【龍口】 名は美神。柳瀬戸右衛門とて遠州濱松の奥服商なり、和歌を嗜み郭公の歌に由て堂上に其名聞えたり。享保頃の人。  
【龍水】 物陰にある水。  
【菰】(春) かひや(飼屋)。  
【菰】 攝津河邊郡に在り、昆陽寺の北に昆陽池あり、周圍、五千餘畝といふ。昆陽の巨は山崎より西宮へ出る道に在り。  
【後夜】 今の午前四時頃をいふ。又夜















さうぢなみ

書て完うせし才女。  
 さうぢなみ〔掃除波〕(夏) 江の島掃除波。  
 さうぢゆつ〔蒼朮〕古名、チケラ。山野に生ずる薬草。高さ二三尺、秋、枝頭に類に似たる白花を開く。根塊を薬用とし、其着きを蒼朮、白きを白朮(ビユク)といふ。  
 さうぢゆつたぐ〔蒼朮焼〕(夏) 五月頃、淋雨の時、濕氣を拂ふため蒼朮を焚く。支那より傳來したるなり。 〇 蕨拂いて蒼朮たたくや雨上り 雷弁。  
 さうぢゆつたぐ〔蒼朮湯〕(春) 元日、蒼朮を湯に沸かして浴すれば瘡毒を病ますといふ。  
 さうぢゆつたぐ〔双調〕(春) 十二律の一、春の舞樂には多く此調を用ゐる故に連俳には季とす。  
 さうぢゆつたぐ〔蒼朮〕(春) 春の異名。  
 さうぢゆつたぐ〔曹洞〕禪宗の一派、我國には道元禪師を開祖とす。  
 さうぢゆつたぐ〔早梅〕(冬) 冬の梅を見よ。 〇 早梅や御室の里の賣屋敷 蕪村。  
 さうぢゆつたぐ〔蒼朮〕(夏) しやうぶ。  
 さうぢゆつたぐ〔蒼朮衣〕(夏) カサネの色目の名、表紅、裏紫。  
 さうぶ〔僧夫〕いながびと。

さうぢなみ

さうぶ〔菖蒲〕(夏) しやうぶ。  
 さうぶのきぬ〔菖蒲衣〕(夏) あやめがされ。  
 さうぶれん〔相府蓮〕樂曲の名、晋の王儉が家に蓮を植て愛せしことを誅ひし樂。後世、想夫憇と誤り、女が夫を慕ふ歌曲とす。  
 さうぶ〔相馬〕下總相馬郡に在り、馬の産出地に名あり。  
 さうぶのかけら〔紫懸掛〕(秋) かけさうめん。  
 さうぶのり〔紫懸海苔〕(春) 海苔の類、長くして色青黒し、海菜類といふ。  
 さうぶん〔桑門〕沙門と同じ。  
 さうぶん〔相聞〕すべて親子、兄弟、夫婦の相愛すること、單に戀の心にも云ふ。  
 さうぶん〔草藥〕墨氣拂に用ゐる毒藥をいふ。  
 さうぶ〔桑榆〕夕日の影。人の老ひしに譬へていふ。  
 さうぶ〔桑葉〕(秋) 秋の異名。  
 さうぶ〔早瓜〕(夏) 瓜の初めて出たるもの。  
 さうぶんし〔菓林子〕近松門左衛門の號。  
 さうぶんし〔菓林子忌〕(冬) 近松忌。  
 さうぶんじすなほし〔雙林寺墨直〕(春) 三月十二日、京都東山雙林寺芭蕉庵にて京及美濃の俳人集り芭蕉、支考の碑(同寺

さうぢなみ

境内の四行庭前にあり)の銘の墨を入れ直し、俳諧を興行すること。 〇 糸竹の花の雲間や墨直し 大江丸。  
 さうぶをさす〔早瓜供〕(夏) 五月五日、宮中内膳司より山科の御園の早瓜を奉ること。 〇 カツブヲを獻す。 〇 君が蕨御階にあまる瓜の水 貞起。  
 さうぶん〔莊園〕古へ褒賞などに朝廷より諸臣に賜ひし田園。  
 さうぶかへる〔牙返〕(春) 春になりて寒氣再び催すをいふ。 〇 いて返る。 〇 馬市の聲 〇 へる焚火かな 天外。  
 さうぶ〔牙〕(冬) サユル。  
 さうぶ〔嵯峨〕さが野を見よ。  
 さうぶかみ〔逆髪〕蟬丸の條参照。  
 さうぶかみ〔逆髪〕(秋) 關の明神祭を見よ。 〇 關の井や逆髪祭る秋の水 素石。  
 さうぶかみ〔神捕〕(夏) 神取ると同じ。  
 さうぶかみ〔神取〕(夏) 大津祭を見よ。  
 さうぶかみ〔神取〕(夏) 賀茂祭の前に神を取りて神事に用ゐる意。 〇 神捕す。  
 さうぶかみ〔神花〕(夏) 樹は椿に似て葉常緑なり。夏小白花を開き實を結ぶ。神前に供ふるに用ゐるを以て神木の名あり。 〇 賢木。 〇 賢木さく留や老女が朝

さうぢなみ

化驗。  
 さうぢなみ〔嵯峨切〕東山義政、明に命じて織せしと云ふ。嵯峨清涼寺の釋迦御戸帳に張りし製地の名。  
 さうぢなみ〔逆様祭〕(秋) 九月廿四日、河内國植松村の氏神の祭禮、廿四日を祭日とす。廿五日を宵宮とす、故にかく名く。 〇 逆様の宵宮さかしや途の霜 方山。  
 さうぢなみ〔逆養〕(冬) 岡見(さうぶ)。  
 さうぢなみ〔孟影〕(秋) 月の隠し詞なり。連俳に季とす。  
 さうぢなみ〔孟光〕(秋) 同前。  
 さうぢなみ〔造酒兒〕神社などにて神酒(さうぶ)酌する人をいふ。  
 さうぢなみ〔酒殿歌〕(冬) 神樂歌の曲の名。  
 さうぢなみ〔坂島〕(秋) 渡鳥の早朝、鳴を出て山を越えゆくをいふ。 〇 声を鳴る風に坂島待れけり 碧梧桐。  
 さうぢなみ〔嵯峨日記〕芭蕉が去來の許に滯留せし時の日記文をいふ。  
 さうぢなみ〔嵯峨野〕山城葛野郡の地。大堰川を隔て、嵐山に對す。北嵯峨には大覺寺、清涼寺の梵刹あり、下嵯峨には天龍寺、法輪寺の關若あり、古へより有名な

さうぢなみ

る開寂地。  
 さうぢなみ〔嵯峨大念佛〕(春) 三月九日より十五日迄、京都嵯峨清涼寺にて融通念佛會を行ふ。傳説に此念佛會は圓覺上人其生母を尋ねる爲め行ひしものなりといふ。 〇 百萬人に此事を作れり。 〇 結くひし口さないひそ大念佛 引泉。  
 さうぢなみ〔嵯峨柱炬〕(春) 二月十五日、涅槃會の夕、京都嵯峨清涼寺の釋迦堂にて  
 大炬  
 火三  
 基に  
 火を  
 點じ、  
 諸人  
 佛名  
 を唱へつゝ見物す。炬火は圓の如く、材を組みたる中に杉葉、松葉などの乾きしを入れ、暮六つに及び、中野村といへる處の縁多七人、點火の役をなし、炎熾んなるとき其中の頭人、刀を抜き、取火の周圍を三度廻る。此時火消の者、繩を振りて前後を警固すといふ。これ



(圖之明松柱嵯峨)

さうぢなみ

釋迦を擧る式に倣ふといふ。 〇 松明しに風山近し 野明。  
 さうぢなみ〔帝〕酒屋の看板をいふ。杉葉を丸く束ねしもの。  
 さうぢなみ〔かたがへみやうじんまつり〕(塙方達明神祭) (夏) 五月晦日、泉州堺津、方達明神(住吉明神の和魂を祀る)の祭禮。土の標を參詣人に授く。  
 さうぢなみ〔塙重〕さりため。  
 さうぢなみ〔塙天神祭〕(秋) 八月三日、泉州堺戎町成徳山常樂寺の天神社(菅公を祀る、古は鹽穴村にありて鹽穴天神と云ふ)の祭禮、神輿同所の戎島に渡御す。 〇 生魚も踊る天神祭かな 玄札。  
 さうぢなみ〔佐香保〕正保頃、江戸吉原並木屋の遊女、其契りし武士死せしを歎き、尼となり貞閑尼と云ふ。  
 さうぢなみ〔逆矛〕龍田明神の靈、天の逆矛の由来を説くことを作りし謡曲。  
 さうぢなみ〔坂枕〕踐詐、新嘗、大嘗、神今食の時、神前に奉る枕をいふ。古は神今食の時にのみ用ゐるものと誤りて季とせり。  
 さうぢなみ〔嵯峨祭〕(夏) 四月中亥日、山城



葛野郡愛宕神社

葛野郡愛宕神社(祭神伊弉册尊外一座)の祭禮、神輿二基(一基は野宮社なり、山下なる嵯峨清涼寺より出て、嵯峨の町大に賑ふ。國葉櫻に貼くふ迄ぞ嵯峨祭。總元。

さかむかひ(嵯峨丸太)丹波より筏にて嵐山の麓、大井川を下す木材をいふ。

さかみ(相模)源頼光の女、大江公實に嫁す、一品宮の女房にて歌に名あり。

さかみにたたり(相模入道)北條高時のこと。

さかむかひ(坂迎)京にて伊勢參宮より歸る人を逢坂山邊に出迎ふを云ふ。多く晩春の頃なり。

さかむかひ(酒迎)旅歸の待受に酒肴を饗すこと。坂迎より轉じたるなり。

さかむかひ(嵯峨檢)書道の流儀、嵯峨天皇より出づこと云ひ、又角倉與市より出づこといふ。

さかむかひ(相模布)(春)海草の類、遠州相模に多く産す。アラメに似て細長し。カチメ。

さかむかひ(逆懸)舟の軸にも、楳にも、楳を立して、舟を前後に逆懸せしむるやう設けしもの。

さかむかひ(福間天皇、神泉苑に行幸ありし時、福人に仰せて蟹を捕へしむ、福人、

勅諭なり

勅諭なりと呼びければ、蟹附り伏して勅を奉ぜしかば御感あつて、福人、蟹共に五位を賜る筋の謡曲。

さかむかひ(左丘明)春秋の傳を作りし人。孔子と同時代の賢者。

さかむかひ(蟹鳴)(冬)なながかひ。

さかむかひ(幸草)草の名。諸説ありて詳ならざれども、百合の事なりといふ説多し。いさぐさ。

さかむかひ(三枝祭)(夏)サイカサまつり。

さかむかひ(蟹草)(夏)原野に生ずる草、高さ一尺許、葉は

夢の若苗に似、夏室を出して

白花を開く、状、蟹の飛ぶが如し。通泉草。蟹草の足もよく流れる哉

幸田(幸田)神の加護ある田地なりといふ義。



(草) 蟹

清涼殿

清涼殿の庭上にて青竹を立て、燒き、十八日には竹に屬などを飾り燒きて、鬼に裝したるもの舞ひ囃す式なり。民間にては十五日の朝、門飾をさしてドンドヤと囃しつ、燒く、其餘れる竹を間に挿せば疫を除き、又、其火にて焼ける餅を喰ひ、小豆粥などを煮る。三種打。三元張。爆竹。どんど。みそごんど。○吉書揚げ。○三種打や霞そめたる野の煙。有文。

さかむかひ(左吉流)能の太鼓の流儀。

さかむかひ(蟹撫子)(夏)撫子の一種、花の形蟹の飛ぶ様に似て白きを云ふ。

さかむかひ(蟹繪)(秋)鯛を指にて製して繪としたるもの。

さかむかひ(蟹傘)元祿頃、七夕に子女の弄びし草紙の表紙繪をいふ。

さかむかひ(蟹森鼓馬)(春)三月五日、京都修善寺村曼珠院の西、平林中に在る土地神の例祭に行ふ鼓馬なり。

さかむかひ(左京)うさやうを見よ。

さかむかひ(袂露)(秋)露といふに同じ。

さかむかひ(蟹流)能狂言の流儀。蟹仁右衛門より出づ。

さかむかひ(明月)(夏)六月の異名。

さかむかひ(結婚)(冬)臘日のこと。

さかむかひ(作福)陰具のこと。

さかむかひ(丁年)姑のこをいふ。古語。

さかむかひ(俗)俗に氣がさくいなご云ふ、心の淡白なる性質を云ふ。

さかむかひ(角錐)角にて耳挿の如き形に造りし具。糸の結ばれを解くもの。

さかむかひ(物)物に差出でし振舞を云ふ。

さかむかひ(明日冬至)(冬)冬至を見よ。

さかむかひ(雨ながら)明日冬至ならぬ召波。

さかむかひ(東傳)安樂庵傳を見よ。

さかむかひ(明風)(冬)北風。

さかむかひ(索餅)(秋)七夕に索餅を供ふる中に奉り疫を除くこと。索餅の細きを織糸になぞらへしもの。いふ。一説に昔、高辛氏の子、七月七日に死し靈鬼となる、常に索餅を好みし故、之を供へて疫を免るゝより起ると。いさぐさなは。○索餅に魂なぐさめん高辛氏貞旅。

さかむかひ(さくし月)(夏)五月の異名。

さかむかひ(佐倉)下總印旛郡の善城下の地。宗吾神社あり。

さかむかひ(春)俳諧にて單に花さのみ云

へば櫻なり。但、連俳にては花と櫻との意味や、異り。連俳作法を見よ。

(異名)夢見草。仇名草。かさし草。吉野草。曙草。草見草(シギサ)。二日草。龍草(シギサ)。○一重櫻。彼岸櫻。絲櫻。花櫻。兒櫻。山櫻。小櫻。八重櫻。熊谷櫻。御所櫻。普賢像櫻。楊貴妃櫻。照君櫻。虎尾櫻(シギサ)。不斷櫻。雲珠櫻(シギサ)。讓蓋櫻。伊勢櫻。江戸櫻。淡黄櫻。朱櫻。梅櫻。緋櫻。犬櫻。法輪寺櫻。桐ヶ谷櫻。有明櫻。布引櫻。曙櫻。手鞠櫻。匂櫻。雲井櫻。西行櫻。墨染櫻。泰山府君。九重櫻。奈良櫻。秋色櫻。いさ櫻。右衛門櫻。左近櫻。金王櫻。歌仙櫻。朝櫻。夕櫻。夜櫻。家櫻。庭櫻。初櫻。遅櫻。

さかむかひ(櫻麻)(夏)麻の條を見よ。○三日月のいつか出て居る櫻麻。風竹。

さかむかひ(櫻詠)能狂言の名。風竹。

さかむかひ(櫻鳥賊)(春)櫻花のある頃、流るゝ鳥賊をいふ。○花鳥賊。

さかむかひ(櫻賊)(春)櫻吹く頃の賊をいふ。洪水に産する魚にて形アメノ魚に似て鱗細く淡黒と紅色の縦條三あり。○赤腹。○散り浮ぶ櫻うぐひの日和哉。

さかむかひ(櫻梅)(春)梅の一種、中花にして淡紅色、重瓣なり。

さかむかひ(櫻魚)(春)三月頃多く流るゝ魚、ハヤに似て大さ一二寸なり。古より常陸國櫻川の名産とす。東京にて若サヤといひ、雛祭の料理に用ゐる。一説に吉野山の櫻花が水に落ちて魚となりし國柄魚をいふと。○吉野出し水ことぞ知れ櫻魚。竹也。○花の涙間なくすくはれ櫻魚。珠鳴。

さかむかひ(櫻重)(春)櫻のきよ。

さかむかひ(櫻川)子を失ひし母、狂女となりて日向より常陸の櫻川まで尋ね行き途にめぐり逢ふ筋の謡曲。

さかむかひ(櫻貝)(春)殼の色櫻花の散りたるに似たれば名。貝小く薄くして種類多し。○足跡や阿漕の枝折さくら貝。三千風。

さかむかひ(櫻狩)(春)山野の櫻花を尋ねて花を見歩くこと。正花。○花を尋ね。○行き行きて檢原にくれわさくら狩。李堂。

さかむかひ(櫻草)(春)山野に生ずる小草、葉はや、菊に似、三四月頃莖を抽んで花を開く、一重にして淡紫或は白花あり、甚だ櫻花に似て美し。○幼きが



書院にすえつ櫻草 青々。

さくらんぼ [櫻島] 薩摩の國の屬島。薩摩府中にあり。

さくらんぼ [櫻島] 薩摩の國の屬島。薩摩府中にあり。

さくらんぼ [櫻島] 薩摩の國の屬島。薩摩府中にあり。

さくらんぼ [櫻島] 薩摩の國の屬島。薩摩府中にあり。

さくらんぼ [櫻島] 薩摩の國の屬島。薩摩府中にあり。

さくらんぼ [櫻島] 薩摩の國の屬島。薩摩府中にあり。

さくらんぼ [櫻島] 薩摩の國の屬島。薩摩府中にあり。

さくらんぼ [櫻島] 薩摩の國の屬島。薩摩府中にあり。

風やはする櫻のり 風鈴軒。

さくらんぼ [櫻人] (春) 花見の人。國たそがれの重き草履や櫻人 梅亭。

さくらんぼ [櫻人] (春) 花見の人。國たそがれの重き草履や櫻人 梅亭。

さくらんぼ [櫻人] (春) 花見の人。國たそがれの重き草履や櫻人 梅亭。

さくらんぼ [櫻人] (春) 花見の人。國たそがれの重き草履や櫻人 梅亭。

さくらんぼ [櫻人] (春) 花見の人。國たそがれの重き草履や櫻人 梅亭。

さくらんぼ [櫻人] (春) 花見の人。國たそがれの重き草履や櫻人 梅亭。

さくらんぼ [櫻人] (春) 花見の人。國たそがれの重き草履や櫻人 梅亭。

さくらんぼ [櫻人] (春) 花見の人。國たそがれの重き草履や櫻人 梅亭。

たんだい [探題]

さくらんぼ [探題] たんだい。多く葉細長くして兩對す、夏、深紅の花を開く。一種白色、黄色のものあり。花の一重なるものに實あり、秋熟して自ら口を開き内に紅子あり。セキリウ。口あけてのすさまじの柘榴かな 琴峰。

さくらんぼ [探題] たんだい。多く葉細長くして兩對す、夏、深紅の花を開く。一種白色、黄色のものあり。花の一重なるものに實あり、秋熟して自ら口を開き内に紅子あり。セキリウ。口あけてのすさまじの柘榴かな 琴峰。

さくらんぼ [探題] たんだい。多く葉細長くして兩對す、夏、深紅の花を開く。一種白色、黄色のものあり。花の一重なるものに實あり、秋熟して自ら口を開き内に紅子あり。セキリウ。口あけてのすさまじの柘榴かな 琴峰。

さくらんぼ [探題] たんだい。多く葉細長くして兩對す、夏、深紅の花を開く。一種白色、黄色のものあり。花の一重なるものに實あり、秋熟して自ら口を開き内に紅子あり。セキリウ。口あけてのすさまじの柘榴かな 琴峰。

さくらんぼ [探題] たんだい。多く葉細長くして兩對す、夏、深紅の花を開く。一種白色、黄色のものあり。花の一重なるものに實あり、秋熟して自ら口を開き内に紅子あり。セキリウ。口あけてのすさまじの柘榴かな 琴峰。

さくらんぼ [探題] たんだい。多く葉細長くして兩對す、夏、深紅の花を開く。一種白色、黄色のものあり。花の一重なるものに實あり、秋熟して自ら口を開き内に紅子あり。セキリウ。口あけてのすさまじの柘榴かな 琴峰。

さくらんぼ [探題] たんだい。多く葉細長くして兩對す、夏、深紅の花を開く。一種白色、黄色のものあり。花の一重なるものに實あり、秋熟して自ら口を開き内に紅子あり。セキリウ。口あけてのすさまじの柘榴かな 琴峰。

さくらんぼ [探題] たんだい。多く葉細長くして兩對す、夏、深紅の花を開く。一種白色、黄色のものあり。花の一重なるものに實あり、秋熟して自ら口を開き内に紅子あり。セキリウ。口あけてのすさまじの柘榴かな 琴峰。

取るをいふ。

まげた [下帯] (夏) 古へ更衣の日より八月の頃迄、宮中の女房、帯を前にて結び下げたる制。一説に五月五日よりとも云ふ。國下帯にされ行く狎や長麻下李逵。

まげた [下帯] (夏) 古へ更衣の日より八月の頃迄、宮中の女房、帯を前にて結び下げたる制。一説に五月五日よりとも云ふ。國下帯にされ行く狎や長麻下李逵。

まげた [下帯] (夏) 古へ更衣の日より八月の頃迄、宮中の女房、帯を前にて結び下げたる制。一説に五月五日よりとも云ふ。國下帯にされ行く狎や長麻下李逵。

まげた [下帯] (夏) 古へ更衣の日より八月の頃迄、宮中の女房、帯を前にて結び下げたる制。一説に五月五日よりとも云ふ。國下帯にされ行く狎や長麻下李逵。

まげた [下帯] (夏) 古へ更衣の日より八月の頃迄、宮中の女房、帯を前にて結び下げたる制。一説に五月五日よりとも云ふ。國下帯にされ行く狎や長麻下李逵。

まげた [下帯] (夏) 古へ更衣の日より八月の頃迄、宮中の女房、帯を前にて結び下げたる制。一説に五月五日よりとも云ふ。國下帯にされ行く狎や長麻下李逵。

日より六日迄、騎射を左近(京一)條四洞院(右近)一條(大宮)の兩馬場にて行ふ式。三日は左近の荒手結、(真手番)の準備に試むなり。四日は右近の荒手結、五日は左近の真手結(真の勝負)六日は右近の真手結なり。真手結は射手盛装してそのまゝ、大内へ乗入る。此日射手、隨身の者羽衣の尻を折て着る故に引折(ひし)の日と云ふ。國黒髪に櫛簪すしく馬手使 律大。○櫛しあやめし、黒引折の日 世員。

まげた [下帯] (夏) 古へ更衣の日より八月の頃迄、宮中の女房、帯を前にて結び下げたる制。一説に五月五日よりとも云ふ。國下帯にされ行く狎や長麻下李逵。

まげた [下帯] (夏) 古へ更衣の日より八月の頃迄、宮中の女房、帯を前にて結び下げたる制。一説に五月五日よりとも云ふ。國下帯にされ行く狎や長麻下李逵。

まげた [下帯] (夏) 古へ更衣の日より八月の頃迄、宮中の女房、帯を前にて結び下げたる制。一説に五月五日よりとも云ふ。國下帯にされ行く狎や長麻下李逵。

まげた [下帯] (夏) 古へ更衣の日より八月の頃迄、宮中の女房、帯を前にて結び下げたる制。一説に五月五日よりとも云ふ。國下帯にされ行く狎や長麻下李逵。

まげた [下帯] (夏) 古へ更衣の日より八月の頃迄、宮中の女房、帯を前にて結び下げたる制。一説に五月五日よりとも云ふ。國下帯にされ行く狎や長麻下李逵。

まげた [下帯] (夏) 古へ更衣の日より八月の頃迄、宮中の女房、帯を前にて結び下げたる制。一説に五月五日よりとも云ふ。國下帯にされ行く狎や長麻下李逵。

まげた [下帯] (夏) 古へ更衣の日より八月の頃迄、宮中の女房、帯を前にて結び下げたる制。一説に五月五日よりとも云ふ。國下帯にされ行く狎や長麻下李逵。

まげた [下帯] (夏) 古へ更衣の日より八月の頃迄、宮中の女房、帯を前にて結び下げたる制。一説に五月五日よりとも云ふ。國下帯にされ行く狎や長麻下李逵。

まげた [下帯] (夏) 古へ更衣の日より八月の頃迄、宮中の女房、帯を前にて結び下げたる制。一説に五月五日よりとも云ふ。國下帯にされ行く狎や長麻下李逵。

まげた [下帯] (夏) 古へ更衣の日より八月の頃迄、宮中の女房、帯を前にて結び下げたる制。一説に五月五日よりとも云ふ。國下帯にされ行く狎や長麻下李逵。

まげた [下帯] (夏) 古へ更衣の日より八月の頃迄、宮中の女房、帯を前にて結び下げたる制。一説に五月五日よりとも云ふ。國下帯にされ行く狎や長麻下李逵。

まげた [下帯] (夏) 古へ更衣の日より八月の頃迄、宮中の女房、帯を前にて結び下げたる制。一説に五月五日よりとも云ふ。國下帯にされ行く狎や長麻下李逵。

まげた [下帯] (夏) 古へ更衣の日より八月の頃迄、宮中の女房、帯を前にて結び下げたる制。一説に五月五日よりとも云ふ。國下帯にされ行く狎や長麻下李逵。







まつた

役人。  
 まつた〔薩摩〕菩薩のこと。  
 まつたのぼろ〔雑坊〕奴僕のこと。  
 まつたいも〔薩摩芋〕(秋)かんしょ。  
 まつたじやうらん〔薩摩浄瑠璃〕元和年間、泉州の人、虎屋治右衛門と云ふ。小野於通の十二段に節付したる浄瑠璃の元祖。  
 まつたのなみ〔薩摩守〕能狂言の名。  
 まつたまき〔薩摩焼〕薩摩日置郡苗代川村に産する陶器。多く薄土色にして碎文あり。  
 まつたを〔獵夫〕かりうど。  
 まつた〔籠〕(夏)川時に用ゐる手鞠ひの網をいふ。||又手。  
 まつたいも〔里芋〕(秋)芋に同じ。  
 まつたのすぢみ〔座頭涼〕(夏)六月十九日、京都高倉綾小路の清盛庵に、檢校、勾當等の首者會して平家等を談じ相賀應ず、之を納涼會といふ。國月出で、座頭かたむく涼かな。其角。  
 まつたむり〔里下〕(春)敷入をいふ。國里下や魚にあきたる山の兒。戯蝶。  
 まつたかゝる〔里神樂〕(冬)禁裏以外にて行ふ神樂をいふ。又近代祭禮の時行ふ二十五座神樂などもいふ。但し之を冬字とせるはいかゞにや。國 いまま

まきつね

る腰の女童部里神樂 旨原。  
 まきつね〔佐渡狐〕能狂言の名。  
 まきたけり〔里内裏〕方違ひなどにて、假りに主上の移り居ます御所をいふ。  
 まきばら〔里坊〕山寺の僧が別に村里にも分寺を置くを云ふ。  
 まきまつり〔里祭〕(夏)祭を見よ。國 天目で新茶くれけり里祭 許六。  
 まきわ〔里曲〕村里集れるところをいふ。  
 まきみ〔里居〕(春)敷入をいふ。  
 まきま〔鱧〕鱧、毛虫などの蝶に化する前にウジの如き形になりしをいふ。  
 まきま 米又は蕎麥粉の滓を云ふ、洗ひ粉に用ゐる。  
 まきへ〔早苗〕(夏)苗代の七八寸に長じたるものを抜きて常の田に移し植うるもの。若苗。玉苗。國 燕の下腹さばる早苗哉 胡布。  
 まきへやう〔早苗賢〕(夏)五月、農家にて田植を祝ふため相慶する。||さびらさ。  
 まきへつり〔早苗月〕(夏)五月の異名。  
 まきへきり〔早苗取〕(夏)早苗を苗代より抜取ること。  
 まきへきり〔早苗鳥〕(夏)ほととぎすの異名。

まなみ

まなみ〔早瀬〕(夏)五月の頃、海の波立つをいふ。うなみなみを見よ。  
 まにつらふ ぼの赤きことをいふ、色、紅葉、紐、君、妹などの枕詞。  
 まによろばら〔夏〕五月の異名。  
 まなみ〔讃岐〕源頼政の女、二條院の女房にして歌人也。  
 まなかた〔實方〕一條院の時、右近中將にして頼朝の歌才あり。曾て藤原行成と帝の前を争ひ、行成の冠を奪ひ擲ちしより帝、不敬を憤り玉ひ、陸奥守とし歌枕見て参れと奥州に下す。實方、彼地に於て艱難し、長徳四年遂に歿す。其靈魂都を蘇んで歸ると云ふ。  
 まなかつの〔五味子〕(秋)蔓草、高木に纏ひ其葉冬萎ます、三月頃黄白花を開く、形小にして蓮花に似たり、七月室端に豆の如き實



(らづかれさ)

まねかしのほな

叢生す、熟すれば紅紫にして薬用とす。實を食して秋とす。||支及。  
 まねかつのほな〔五味子花〕(春)サネカヅヲを見よ。  
 まねこん〔重來〕再び來る義、又小蝶來んと云ふ意も含む。  
 まねま〔森所〕れや(園)に同じ。  
 まねもり〔實盛〕齋藤別當實盛の亡靈、篠原の合戦を物語る謡曲。  
 まねの〔佐野〕泉州日根郡に在る地。  
 まねの〔頃鳴鐘除〕チャルメラ。  
 まねのふなばし〔佐野舟橋〕古へ上野國にて或男、川を隔てしところの女に舟橋を渡りて通ひしに、男の父母喜ばず、潜に舟板四五枚を外し置しを知らず、闇夜、之を渡りしかば、川へ落て死せし故事。通路の絶ゆるに於けていふ。  
 まねのわたり〔佐野渡〕大和城上郡の地。  
 まね〔鱧〕海産の魚、鱧細く色青く黒き斑あり。大き一尺三四寸に至る。  
 まねやう〔澤桔梗〕(秋)水邊に生ずる草、莖直生し、莖は柳に似て厚く鋸齒あり、夏の初、莖間及莖頭に翠碧の花を開く。(古き季節に秋とするは桔梗の名に依りてなるべし且く之に従ふ) 國 砂川に水ひたばくや澤桔梗 薄夜。

まねかしのほな

まねかしのほな〔關橋〕(秋)遊橋を灰汁又は水に浸し滋味を除き、肉を柔にしたるもの。||烘橋(かき)。檣橋。檣拔橋。  
 まねかしのほな〔走〕はしるに同じ。  
 まねかしのほな〔澤角檢校〕薩摩浄雲の師、浄瑠璃十二段に節付したる琵琶法師。  
 まねかしのほな〔澤宮〕(春)川直に同じ。國 澤宮や草のわらじのちぎれより 杉風。  
 まねかしのほな〔鯖釣〕(夏)海上に出でて、鯖を釣ること。夏季最も多し。國 鯖釣るや不知火ならぬ浪の上 蝶夢。  
 まねかしのほな〔鯖鮓〕(夏)鯖の肉を酢につけ、飯の上のせて、壓したる鮓。國 下僕等に酒盛り過ぎそ鯖の鮓 几童。  
 まねかしのほな〔冬〕霜の異名。  
 まねかしのほな〔小蠅登神〕(夏)夏の蠅の如く悪き神の群ること。御成にて之を祓ふこといふより夏季とす。國 蠅に鳴つて小蠅流るゝみうさ哉 旨原。  
 まねかしのほな〔鱧山頭陀坊〕(秋)九月の頃、周防國鱧山村、曹洞宗の寺院より出る、頭陀行者の五十人、又は僧人位つ、群をなし、周防、長門二州を回る、民家之に米夢を施すに、眠るを思むといふ。國 頭陀坊の登黄骨るゝ小村かな 似雲。

まほら

まほら〔鱧〕(春)西南海に多く産する魚、形鱧(に)似て大に、背青く腹白し尾に鱧の齒の如き鱗あり、春季盛に漁せらる。||馬鮫魚。國 さ々なみを絞りよせけり鱧網 長知。  
 まほら〔漣病〕吐瀉下痢する病。  
 まほら〔漣〕樹の名。枝葉甚だ楡に似て、材長し。||花柏。  
 まほら〔鐘鈔羅〕銅鼓の一種。  
 まほら〔鐘帖〕(秋)落帖。  
 まほら〔佐比江〕兵庫の津に在り、古昔遊女の曲輪ありし所。  
 まほら〔寂衣〕古き衣類。  
 まほら〔寂しきやう〕の義。  
 まほら〔寂菜〕蕉門にて俳諧の風趣を云ふ詞、幽玄なるおもむき。  
 まほら〔寂菜〕白雄の編みし正風句作の趣味を説きし書。  
 まほら〔境目〕さかひめ。  
 まほら〔早苗開〕(夏)四月の異名。又、さなへきやうのこと。  
 まほら〔講鳥帽子〕地に敷ある鳥帽子のこと。  
 まほら〔雜〕季節にあらぬ題をいふ。又、季の詞のなき句をいふ。  
 まほら〔左舞右舞〕雜樂の類別の名。支



ざんげん

那印度樂を左方とし。高麗渤海樂を右方とする。○  
 ざんげん(雑菜) (春) 食用とする諸種の菜草を摘むをいふ。○摘み草。  
 ざんげん(雑色) 古へ藏人所に属したる雑役のもの。又、奴僕のこと。  
 ざんげん(雑炊) (冬) 菜類などを入れて炊きし粥。冬の食品なり。○草枯れに雑炊する機夫かな。白姓。  
 ざんげん(雑談集) 其角が俳諧の隨筆を記し、書。  
 ざんげん(座蒲團) (冬) 座席に用ゐる布團。夏布團に對して冬季とす。  
 ざんげん(雑煮) (春) 正月三ヶ日、餅、大根、芋、昆布等を交へ煮たる羹を喰ふを雑煮。又、又(雑煮)を祝ふといふ。其品諸國家々の嘉例に依りて差異あり。○雑煮腹。雑煮箸。○雑煮ぞこ引起されし旅寐かな。路通。  
 ざんげん(雑煮腹) (春) 大嘗。○雑煮に満腹したるをいふ。○餅腹。○野一運雪見ありさね雑煮腹。召波。  
 ざんげん(佐文山) 佐々木百助、墨花堂と號す。元祿頃の有名なる書家にして、紀文、其角等と遊里に遊び豪放の風あり。

ざんげんのはな

ざんげんのはな(泊美蘭花) (冬) 草の名、熱帯地方に多く生じ、葉は蘭の葉の如く細長く、初冬の頃、五瓣の紫花を開く、花の中に三本の紅蕊あり之を摘みて薬用とす。○泊美蘭に雪の眺めや御用鳥。杏園。  
 ざんげん(遊女) あそびめの古稱。  
 ざんげん(三郎兵衛) 淀屋辰五郎をいふ。  
 ざんげん(鳴) (春) 鳥鳴る。  
 ざんげん(道祖神) だうそじんをいふ。  
 ざんげん(佐保川) 大和國春日山より發し奈良の町を流る、小川。  
 ざんげん(佐保鷹) (春) さほひめたか。  
 ざんげん(朝王樹花) (夏) 暖地に産する草、葉丸くして枝より枝を生じ、葉無くして枝茎共に鋭き刺あり、高さものは六七尺に似たり。○サボテンの花をみたる早かな。ゆうく。  
 ざんげん(佐保姫) (春) 春の色を染め出す造花の神なりといふ。古より和歌などにて秋の立田姫と共に姿ある如く詠す。○佐保姫に蚊の出る宿で別れけり。岳齋。  
 ざんげん(佐保姫鷹) (春) 春の雄特に

ざんげんがら

使用する鷹にて、前年の若鷹なり。○乙女鷹。佐保鷹。○佐保姫の鷹やたしなむかれつけ羽。徳元。  
 ざんげん(佐保衣) (春) 鷹、花など春の景物を佐保姫の衣に比へ擬人して詠するもの。○佐保姫の竿に小袖を干す日かな。仙李。  
 ざんげん(朱槿) (秋) 樹の實、袖の類にして暖地に生ず、實の形クワリンに似て、本狭く末廣く、色黄にして肌粗し、味苦く酸味を帯ぶ。○盛麗に秋も暮行くザホン哉。  
 ざんげん(早松茸) (夏) 五六月頃生ずる松茸、俗にハシリ松茸と稱す。形は常の松茸に似たれども、香劣る。○しめくこと土も匂ふや早松茸。木人。  
 ざんげん(座摩御成) (夏) 六月廿二日、攝州大阪座摩大神宮(祭生井神、外二座)に御成を飾り祭禮を行ふ。社司西横堀の川に於て禊をなす。氏子中より練物、車樂等を出して甚賑ふ。  
 ざんげん(座摩祭) (秋) 九月廿二日、攝津大阪座摩大神宮(座摩御成の祭參照)の祭禮。○こんくわいに仲衆化たり座摩祭。淡々。  
 ざんげん(餅) 餅り軽んずること。

ざんげん

ざんげん(三味線草) (春) 蕨の異名。  
 ざんげん(三味線草) (春) すなくさ。  
 ざんげん(五月雨) (夏) 五月の頃降り續く霖雨。○さつさあめ。さみだる(動詞)○五月間。五月晴。五月空。五月雲。○五日雨や折々出る竹の蝶。櫻真。  
 ざんげん(早稲月) (春) 一月の異名。  
 ざんげん(寒) (冬) 寒さ。○寒き身に果報すくなき風かな。尙白。  
 ざんげん(寒) (冬) 寒き日の風にのりゆく童かな。太紙。  
 ざんげん(寒夜) (冬) 冬の夜。寒夜。○寒き夜に不破の關守る人は誰そ。桃青。  
 ざんげん(寒) (冬) 寒き。寒し。  
 ざんげん(寒) (冬) 寒さ。○浴びるかこ枕に涙の音寒し。涼苑。  
 ざんげん(待法師) 寺侍に同じ。  
 ざんげん(土烏帽子) 頂は三角に折り後方に鳥の尾の如く出たる烏帽子。  
 ざんげん(老鷹) (夏) 老鷹。  
 ざんげん(彩衣) (夏) 彩衣のこと。  
 ざんげん(三衣) 僧の法衣と其下に着る衣、及下着の稱。  
 ざんげん(三夏) (夏) 夏の異名。

ざんげん

ざんげん(参賀) (春) 新暦正月元日、宮城に百官、賀儀を奏すること。  
 ざんげん(三更) 夜の子の刻、十二時頃を云ふ。  
 ざんげん(散樂) 申樂のこと。  
 ざんげん(三ヶ日) (春) 正月元日、二日三日の三ヶ日ないふ。○優々遊びて立ちぬ三ヶ日。蘆雪。  
 ざんげん(山簡) 晋の七賢の一なる山濤の子にして酒客なり。  
 ざんげん(三韓) 馬韓、辰韓、辨韓の稱。後には高麗百濟新羅を云ふ。  
 ざんげん(三竿) 日の中天にある時刻を云ふ。  
 ざんげん(算勘習) 能狂言の名。  
 ざんげん(サンガラ節) 天和頃流行せし小唄。  
 ざんげん(三喜) 田代氏、導道と呼ぶ、大明に渡り醫術を傳へし人、道三の師なり。  
 ざんげん(殘菊) (秋) 九月九日以後の菊花をいふ。又、殘菊の宴をいふ。○殘菊となつて久しき眺かな。右竹。  
 ざんげん(殘菊宴) (冬) 古へ十月五日、室中にて菊花を觀、群臣詩を作りて宴を賜はること。重陽に對していふ。○殘菊の御宴も、日に日和哉。若翁。

ざんげん

ざんげん(算木牛蒡) (春) 開き牛蒡。  
 ざんげん(冬勤) 幕府時代、大小名の隔年毎に江戸屋敷へ來り詰めること。  
 ざんげん(三窟) 鳥窟すれば啄み、獸窟すれば攫み、人窟すれば誅ると云ふ古語。  
 ざんげん(山歸來) (夏) 草の名、葉は竹に似て厚く滑に、夏葉間より莖を出し、黄色の花葎り開く、根を薬品とす。○土茯苓。○六萬部寺にて「立よらば山歸來香め木葉やみ。楓子。  
 ざんげん(鳥風) (秋) 三光鳥。  
 ざんげん(三光) 柔和なる翁の能面。八鳥、忠度などに用ゐるもの。  
 ざんげん(三光鳥) (秋) 深山に棲む小鳥、形モズに似て頭白く、背淡紫色、翅は淡藍色に白斑あり、尾の二羽長く其聲日月星三光といふに似たれば此名あり。○鳥風。尾長鳥。  
 ざんげん(三月) (春) (異名) 姑洗。向月。向月。嘉月。臘月。桃浪。花飛。竹秋。中和。暮陽。暮春。殿春。季春。殘春。春晴。春抄。やよひ。花見月。櫻月。春惜み月。花津月(ナツ)。夢見月。しめいろ月。さわかな月。○三月や蛙の面に雨の降る。葛三。



















時雨

時雨。朝時雨。小夜時雨。北時雨。片時雨。横時雨。月時雨。川音の時雨。松風の時雨。涙の時雨。袖の時雨。  
 五合時雨(時雨忌)(冬)ばせうき。  
 しんれつ時雨(時雨忌)(冬)十月の異名。  
 しんれつ時雨(時雨忌)蛤の肉を味噌煮にしたるもの。伊勢桑名の名産。  
 しんれつ時雨(時雨忌)春秋時代の人。性、善く音律を解す。晋の平公、嘗て大鐘を賜る。工人、其音調へりとなす。師曠獨り其調はざるを知りしといふ。  
 しんれつ時雨(四月)(夏)(異名)仲呂。辨鐘。余月。乾月。正陽月。六陽。己月。首夏。新夏。孟夏。早夏。初夏。卯の花月。卯月。花殘り月。とこはの月。夏はつ月。えとりはの月。さびらき。鷹の腹見えて飛ぶ四月哉。五月。  
 しんれつ時雨(死活杖祭)(秋)八月(日不定)。京都三條、猪熊の福運(かき)神社にて行ふ祭式。古へ此處に牢獄ありて死刑を行ひしを以て其刑死者を祭る爲なりと。死杖の祭。町内が祭り頗なり死活杖。青々。  
 しんれつ時雨(止観)佛教にて煩惱を断つこと。  
 しんれつ時雨(紫荊花)(春)スハハの花。  
 しんれつ時雨(子音)周の靈王の太子、王晉といふ。

ふ

ふ。白鶴に乗て織氏山に遊ぶといふ。呼ばれし叔母、姪の二美人、後吳の孫策と周郎とに嫁す。  
 しんれつ時雨(重衛)京にていふ酒の名。平重衛の奈其を焼きし故事より、南都を滅す位旨しといふ。謎より名く。又、結び飯に茶をかけて喰ふを云ふ。  
 しんれつ時雨(慧眼)天海僧正のこと。天養宗の名僧、上野寛光寺の祖。  
 しんれつ時雨(茂山)樹木の繁れる山をいふ。  
 しんれつ時雨(茂)夏、諸木生茂ること。傘の音して出る茂哉。土芳。  
 しんれつ時雨(龍)みにくきたち。  
 しんれつ時雨(矢龍)やなぐひ。矢を盛る器。  
 しんれつ時雨(子貢)名は端木賜、孔子門の俊才にて魯衛に相たり、貨殖に長む。  
 しんれつ時雨(白紅坊)名はウツマツヲを狩り殺すこと。和泉國堺などにては笠を深く被り綱竿にてさし捕る。白雨に傘を宿る宿る白紅坊。姜先。  
 しんれつ時雨(白紅坊)毛虫の一種、大暑の頃人家の屋根裏などに生ひ出す。白紅坊。  
 しんれつ時雨(雜草)雜草の生ひはびりて汚きをいふ。

シヨロ打

シヨロ打(秋)シヨロ(鶴の類)にて搦つ砧をいふ。四してしヨロ双六盤に盡すなり。旨原。  
 しんれつ時雨(四三)雙六の語。四と三の賽の目の出ること。  
 しんれつ時雨(四始)(春)元日の異名。  
 しんれつ時雨(鹿)鹿、猪等の歌をいふ。又鹿のみの稱。  
 しんれつ時雨(猪)俳諧にて猪は雑なれど、其肉を嚼り喰ひする意に用ゐれば冬季とす。草の月に猪賣も来て雪の暮。牛伴。  
 しんれつ時雨(尿)小兒の尿をいふ。小便。  
 しんれつ時雨(肉)肉に同じ。  
 しんれつ時雨(子思)孔子の孫。中庸の作者。  
 しんれつ時雨(紫宸殿)宮城の内裏の正殿の名。殿前に左近衛、右近衛あり。  
 しんれつ時雨(鹿垣)(秋)鹿などの獸類の田園に來りて穀物を害するを防ぐため設くる垣。一説に鹿木のこと。鹿垣の結びめされて秋の風。曉臺。  
 しんれつ時雨(獅子頭)獅子頭祭(春)正月十五日十六日、伊勢山田の八社(午頭社、大社、藤の社、今村社、坂の社、西(+)社、箕曲の社、瀬木社)にて祭典を行ひ、十五日の終夜、炬火を點して獅子頭

を舞はしめ

を舞はしめ。原神を敬ふことなす。十六日、小田の橋といふところにて、刀を持ち惡神を切る状をなして獅子を舞納むといふ。獅子頭ふるや千歳の小田の橋。望一。  
 しんれつ時雨(鹿谷)京都の東南、若王寺の近傍に在り。靈徳寺といふ梵刹存す。談合谷は二町餘の山上にあり。古へ俊寛、康頼等が清盛を諷らんと密謀せし舊蹟なり。  
 しんれつ時雨(鹿谷祭)(秋)九月廿四日、京都東山鹿ヶ谷の十神師社、及、八所明神(不詳)の祭禮。後世、九月九日を祭日とす。十神師祭。鹿さきの祭。かけたり鹿が谷。几蓮。  
 しんれつ時雨(鹿狩)秋山野にて鹿、猪を狩ること。  
 しんれつ時雨(猪狩)能狂言の名。  
 しんれつ時雨(獅子口)紅葉狩の鬼などに用ふる能の面。  
 しんれつ時雨(四時觀)享保十年、藏前風の紙。心紙等が句を集めし書。  
 しんれつ時雨(鹿白物)鹿と云ふ者の意。ひざ、這ふなどの枕詞。  
 しんれつ時雨(猪耳)(秋)商の一種、羊(+)耳に似て裏に蜂巣の如き穴あり。猪好みて

食ふといふ

食ふといふ。人には毒あり。猪を捕にて突き捕ふこと。猪突の控に立てる深雪哉。曉臺。  
 しんれつ時雨(鹿笛)(秋)しかぶえに同じ。  
 しんれつ時雨(四十雀)(秋)秋群り來る小鳥、形小雀より稍大に、頭黒く兩頬白く、黒白の團圓に至る。胸背灰青色、翅黒くして灰白の縦紋あり、腹白く腹部に雲紋あり。轉聲滑なり。其老いて毛を換へ色や、變じたるを五十雀といふ。崩しては數へ直すや四十雀。藝太。  
 しんれつ時雨(無言)人の物いひつけしに返答せぬを云ふ。  
 しんれつ時雨(獅子丸)琵琶の名器の名。  
 しんれつ時雨(蝦)河海に産する小さき貝。其泥中にあるものは黒く、沙中にあるは白し、多く味噌汁として食ふ。江戸隅田川の業平蝦、江州勢田の勢田蝦は名産なり。○蝦汁。蝦取。蝦賣。濱風に乾く蝦や蟹の中。紫人。  
 しんれつ時雨(親賣)(春)少年老夫等の巻に親を荷ひて賣るもの。待つ日には來てあながまの親賣。几蓮。  
 しんれつ時雨(親川)大阪曾根崎の遊廓の傍を流るる小川。

の宿を

の宿を。親汁(春)親の味噌汁。江の宿を親汁食て立にけり。青々。  
 しんれつ時雨(親取)(春)河港等の淺き處に立ち、親を籠網等にてすくい取ること。國湖の淺瀬覺えつ親取。召波。  
 しんれつ時雨(死々蟲)(秋)馬追虫の類。青くしてキリギリスに似たり。  
 しんれつ時雨(肉)にく。  
 しんれつ時雨(四箴)程正叔が親戚、聽説、言箴、動箴の四つの箴めを書きし文章。  
 しんれつ時雨(四神)四方を司る神にて、東は青龍、西は白虎、南は朱雀、北は玄武の四神。  
 しんれつ時雨(自身番)幕府時代市中の町々に番小屋を設け、名主、町代など詰居り、諸件を捌きしこと。  
 しんれつ時雨(柿音問答)去來と其角が俳論に就て贈答の文書。  
 しんれつ時雨(暗器)かしましく驚るること。  
 しんれつ時雨(時正)(春)彼岸の中日は晝夜長短なく時正しきをいふ。  
 しんれつ時雨(磁石)能狂言の名。  
 しんれつ時雨(寺主)寺の使僧にて鐘つき掃除などする者をいふ。  
 しんれつ時雨(仁壽殿觀音供)(春)正月十八日、宮中仁壽殿にて行はれし會式。應和二年六月、寛空僧正の開成







しやせき

六體に轉進を加へたる稱。  
 しやせき(七步才) 眞の文帝、弟曹植に七歩の間に詩を作らしめし故事。煮ゆ豆(煮ゆ豆) 豆ヲ煮テ豆ノ皮ヲ剥キ豆ノ中ニ泣ク、本ト是レ同根ヨリ生ズ、相ト煎ルル何太急ナル。  
 本名(七名) 連排の附方の案じ方の名稱。有心、向附、起情、會釋、逃句、拍子、色立の七なり。畢竟、七名八體などいふは皆後に命名したるしにて、是に係はるべきに非ず、叙景、抒情、叙事を或は軽く或は重く、其場合に臨みて按排すればよきなり。  
 本名(七面山) 甲斐國身延山の奥にある山。七面天女の堂あり。  
 しやせき(紙帳) (夏) 紙製の蚊帳の類。國操身や紙帳の中の薄月夜。車唐。  
 しやせき(死杖祭) (秋) 死活杖祭の事。  
 しやせき(七熊駕) 古へ支那にて才徳高き人を高くに、其車に七匹の熊を駕くこと。呂尙の故事などより起りしものといふ。  
 しやせき(七里結界) 佛説に七里の境の内に、地主、山王結界守護して惡神を

しやせき

寄つけぬこと。俗訛りてシチリケツバイと云ひ、物を盛ひ返づけぬことにいふ。  
 しやせき(七里法華) 上總の海邊、一帯の地、昔日蓮華に附依せるをいふ。  
 しやせき(下枝) 下方の枝をいふ。  
 しやせき(靜) 京の白柏子にして源義經の妾となる。靜御前と稱せらる。  
 しやせき(日月桃) (春) 海平桃。  
 しやせき(十種香) 東大寺、法隆寺、道徳、三芳野、枯木、法華經、紅塵、八橋、中川、鹿橋、の十種の名香を合せ焼くこと。  
 しやせき(悉曇) 梵語のこと。  
 しやせき(十哲) 孔子の十弟子。顔回、閔子騫、冉伯牛、仲弓、宰我、子貢、冉有、季路、子游、子夏のこと。又、蕉門十哲のこと。  
 しやせき(十徳) 醫者又は居士の着る服。羽織に似て腰の下ひだあり、胸紐をつく。  
 しやせき(十方暗) 暗の語。甲申より癸己の日まで十日間、十方の氣暗くして和合を去るといひて思むこと。  
 しやせき(竹筵) 禪家にて用ゐる竹の櫛をいふ。  
 しやせき(扇扇) 齊の桓公、山中行軍に水なきを苦しみにしに、扇扇が云ふ、蟻

しやせき

は冬、山の南にあり、夏、山北にあれば蟻の所を驅りて水を得べしとて、遂に水を得て渴を免れしと云ふ故事。  
 しやせき(卓袱) 支那料理の稱。  
 しやせき(閑野) (冬) 神樂歌の小前張の名。  
 しやせき(執蘭) (春) 三月三日、蘭を水上に執りて不淨を祓ふ支那の古俗。  
 しやせき(枝垂雪) (冬) 木の枝葉などに積りたる雪のしづり落つること。國靡て起ぬ月をこそぐるやしづり雪。荷風。  
 しやせき(垂) 垂るること。  
 しやせき(漆園) 莊周のこと。曾て漆園の吏たりしよりいふ。  
 しやせき(アリテ) 又はニテと略ぼ同じ意のテニナハ。  
 しやせき(仕手) 能樂の一曲中に主人公となる役。前シテ、後シテあり。  
 しやせき(四手) 玉串、注連縄などにかくる幣。木綿にて作りしを木綿志天(シテ)といひ、紙にて作りしを紙志天といふ。  
 しやせき(志手石) 木の葉の附着して、化石せしもの。  
 しやせき(征) 關基の用語。遠ぐる石を追馳けて征むること。  
 しやせき(かほのすずみ) (四條河原涼) (夏) 加茂

しやせき

河の涼。  
 しやせき(四手打) (秋) 靜に袴をうつこと。一説に額りに打つことともいふ。  
 しやせき(四手打) 秋の上風灯を亂すへき。高のぼり(四條暖) 河内國讚良郡の地、楠正行戦死の古戰場。  
 しやせき(四條涼) (夏) 加茂川の涼。  
 しやせき(四鳥別) 支那の桓山の鳥、四子を生み成育後四海に飛びわかれ、を親鳥の悲しみし古事。  
 しやせき(幣辛夷) (春) 辛夷の一種、白花のものといふ。  
 しやせき(賤田長) (夏) ほろこぎすの異名。死出の田長。  
 しやせき(四天王寺) 難波寺とし云ふ。又昇して天王寺とのみいふ。攝津東生郡に在り、聖德太子の開基。  
 しやせき(尿) 小便のこと。  
 しやせき(鎮徒) 僧のいふ。  
 しやせき(止動方便) 能狂言の名。  
 しやせき(志波寺祭) (夏) 讃岐國寒河郡、補陀落山清光院志度寺(本尊は觀世音なり。傳説に藤原不比等、此浦の海人と契り、珠を龍宮より取返して海人の死體を葬りし所なりといふ。該曲

しやせき

「海士」に此事を作れり)にて六月十五日より十七日まで三晝夜、海人の墓に水祭(水祭)を行ふ。此時諸人、交易して市をなし賑ふを祭といふ。國取得たる玉の御寄や志波祭。立園。  
 しやせき(鳥) (秋) 山林に棲む小鳥、雀に似て體は黄赤色、翅に黒斑あり。足黒く眼の邊に圓圈あり。種類多し。鳥。○アチノ。  
 しやせき(鶴目) 刀の鞘、又は和琴などの孔ある處の縁に填めし菊座の金具をいふ。  
 しやせき(節) 神社、佛閣、高貴の家などにある櫓の日覆に用ゐる戸。普通の町家にては格子戸の上にある小窓を云ふ。人見。  
 しやせき(榎子花) (春) 木瓜の類、山野に多き樹、高さ三四尺、枝に刺多く、春五瓣の黄紅花を開き夏、實を結ぶ。  
 しやせき(三河) 三河より出す陶器の名。  
 しやせき(階香取) (冬) 神樂歌の大前張の曲の名。  
 しやせき(品川海苔) (春) 紫(海苔)の一種。武州品川邊に産するもの。  
 しやせき(鏡離) (し) の枕詞。  
 しやせき(た) (片) の枕詞。

しやせき

しな(信濃梅) (春) 梅の一種。花單瓣にして下に向ひて開く。實は圓くして一枝に簇生す。小梅。  
 しな(科木) (夏) 菴木、菩提樹の一種、深山に生じ。  
 しな(葉) 葉は似て、刻みあり、夏葉の中より梗又を出し多瓣の細白花を開く、幹の皮を火繩、疊の縁などに用ゐる。  
 しな(信濃太郎) (夏) 雲の峯の異稱。  
 しな(信濃) (秋) 駒乗(信濃)に信濃國の望月、以下十五個の牧より貢進する馬をいふ。  
 しな(指南車) 周の代に周公が造りしさいふ車。軍旅などに道に迷ふことなきやう、車の上に木偶を置き、車は方向を變ずれども、木偶は常に南を指し



(し)の(き)な



じぬこ

るやう造りしもの。

じぬこ(「自然子」)菊を作る爲に非ずして

自然に生じたる竹林の菊の稱。

じぬこ(「自然居士」)自然居士、説法の場

に願文を上ぐる女兒が、人商人に連呼

かるゝを、居士遠く追かけ、身の耻に代

て掻ひさるゝことを作りし謡曲。

じぬこ(「自然生」)秋)やまのいし。

じぬこ(「シノギ祭」)秋)九月九日、三

河國加茂郡狹狹神社(祭神は日本武尊

の皇兄大碓皇子)の祭禮。三河美濃尾

張等の諸國より馬數十匹を獻じ、又諸

人、鎧長刀を捧げ参詣して甚賑ふ。

じぬこ(「藤小屋」)慶)富士詣の道者の爲

に山上一合目より九合目までに設けた

る休泊の石小屋。又、坊さしいふ。

じぬこ(「藤さし」)秋)未だ穂に出でぬ薄

いふ。

じぬこ(「師説」)唐の韓退之が師匠の尊重

すべきを説きし文章。

じぬこ(「半踏根」)慶)さしざし草の根を

いふ。

じぬこ(「車雲」)明方の天の白むを云ふ。

じぬこ(「私箱」)小兒の便を取る器。俗に

じぬこ

おまると云ふ。清器。

じぬこ(「不忍」)江戸上野藩の下の池の名。

じぬこ(「藤原」)加賀江沼郡柴山藩の附近

の地。寶篋寶蓋が討死せし古戰場。

じぬこ(「忍胸」)三絃を低き調子に弾く

こと。

じぬこ(「忍音」)ひそかに音を鳴くこと。

じぬこ(「忍緒」)背につきし紐の名。

じぬこ(「忍」)「憂」つりしもの。

じぬこ(「藤苗」)俗曲の囃子、里神樂などに

吹く横笛。

じぬこ(「忍問」)江戸、上野山をいふ。

じぬこ(「藤吹」)冬)鷹の糞。背竹をぬる

めて切口より出る氣にて鷹の羽のメル

ミを治すなり。

じぬこ(「忍草」)秋)人家の軒、又は樹

枝土石

間に生

じて垂

る草、

長さ三

五寸乃

至七八

寸、葉

厚くし



(草) 忍

じぬこ

て深緑色、其面に金星あり、冬を歴て枯

れず(夏、人家の軒に釣る葱と異り)。

じぬこ(「忍」)垣衣。忍草忘草より

哀なり。冥々。

じぬこ(「忍衣」)秋)カサネの色目の

名、表薄萌黄、爽青。

じぬこ(「忍」)信天庄司、佐藤嗣信、忠信

兄弟の父なり、奥州秀衡の臣。

じぬこ(「女竹」)笹竹の類、人家の垣に用

ゐるもの。

じぬこ(「四宮祭」)秋)九月十日、近江

國大津の四宮社(大比叡、小比叡、氣比、

小禰師の四座を比叡より遷したる所

さいふ)の祭禮、神輿、引山等甚だ美し

く夜相撲を催す。四)四の宮の祭みは

やせ籠の花。政元。

じぬこ(「藤屋」)藤、葉などにて葺きし小屋。

じぬこ(「葉雨」)むらさめのこと。

じぬこ(「芝移」)鳥の忍び立つをいふ。

じぬこ(「四方拜」)春)元日未明、天子清

涼殿に出御し、東庭に天地四方を拜し

給ひて、年災を祓ひ官許を祈り給ふ儀

式なり。四)四方拜其時朝日のぼりつ

子規。

じぬこ(「芝海老」)秋)江戸芝浦に産する

小蝦。大き三寸に過ぎず、殻甚薄し。晚

しばか

秋より盛んに漁せらる。四)芝艇の取

れて淋しや秋曇。

しばか(「柴垣」)明暦比、盛に行はれし小唄

の名。二人相並びて唄に合せ手、或は

胸を打て踊る、之を柴垣うつと云ふ。

しばか(「柴神樂」)春)元日、奈良春日の

若宮社前にて里人集り、柴の束れしを

捧げて神樂を奏すること。四)よきを

着て捧げ申しつ柴神樂。青々。

しばか(「支多調」)東花坊支考、夢林舎乙

由の句調をいふ。或は理風に藉られ、

或は言詮に落つるを以て多く之を排

す。

しばか(「柴栗」)秋)ささ栗。

しばか(「芝肴」)小魚を取交ぜたるもの。

しばか(「芝明祭」)秋)九月十一

日より廿一日迄、江戸芝神明宮の祭禮。

参詣の人、根

勝(チカ)生姜

(俗に)メツカ

チ生姜とも

いふ。古へこ

の邊は生姜

島なりしに

基くさいふ。又片目の人の買り始しに

よるさいしい、芽缺き生姜の意なりと



(箱)木子と生姜勝根

し根勝として根の多き故なりとしい

ふ)と千木箱(神)神社の千木の削り

屑にて製せしさいふより起りし名。丹

膏にて藤花を畫きたる箱を、三つ又は

五つ重ねて提ぐるやうに結びあり中に

は鉛を入る)を買ひ求む。又氏子の家

にては醜を作り客に勧む。故に甘酒祭

さいふ。生薑市。目黒れ市。四)神

風は吹くともわかし生薑市。一漁。

しばか(「司馬相如」)字は長卿、前漢の

人、曾て蜀郡の昇仙橋の柱に願して大

丈夫驕馬の車に乗らすんば誓て此橋を

過ぎしと書きしが、遂に武帝の時、中郎

將となり、西南夷を略定す。

しばか(「師走」)冬)十二月の異名。四)煤

の手に一歩を渡す師走かな。岱水。

しばか(「師走坊主」)貧窮なる姿したる

者を云ふ。

しばか(「師走比丘尼」)落ちぶれたる比

丘尼をいふ。

しばか(「司馬遷」)漢の太史令なり。史記

を作り文章千古に垂る。

しばか(「芝撮」)揚弓の矢を食指を伸して

つまむこといふ。

しばか(「四橋山」)豊前國に在る山。

しばか(「芝能」)春)たき能。

しばか(「芝原祭」)秋)八月廿日、攝津

東成郡天王寺の安井天神(祭神少彦名

命)の祭禮を云ふ。安井天神祭。

しばか(「芝原」)京にて辻君をいふこと。

しばか(「芝舟」)芝祭を見よ。

しばか(「甜」)東京語にてシヤアルといふ。

物を嘗ること。

しばか(「芝祭」)慶)四月八日、出羽國最

上郡大泥村の寺にて行ふ祭式。同所の

大池にて山伏等多勢集り、祈念すれば

池邊の芝生裂けて水に浮び、又元の處

に歸り付く之を芝舟といふ。四)黒雲

の西に起るや芝祭。流之。

しばか(「柴見」)物を偵察すること。

しばか(「芝焼」)山焼くを見よ。四)芝

焼や鷹の巢けむる峰の松。吟雪。

しばか(「暫」)市川團十郎の家の藝。十八番

の内なり。

しばか(「芝居二替」)春)二の替。

しばか(「芝居乗込」)冬)十月の頃、

願見世につき、京、江戸等へ上り下りの

俳優を座元にて迎へ酒宴すること。四)

乗込に昔様や京鹿子。逸志。

しばか(「芝居讀初」)春)正月初旬、江

戸劇場三座(守田、中村、市村)にて翁渡

と稱し、三番叟を舞ひて後、座中の俳優



しほろ

一同麻上下にて舞臺に並び、座頭、新春の賀詞を述べ、春狂言の名題、役割等を讀み干秋樂を讀ふこと。○讀初や江戸市川の聲の鳴り。卓二。  
 しほろ(司馬溫公)宋の學儒、資治通鑑を作りし人。  
 しほ(秋)椎の實の畧。  
 しほ(冬)マケロの一種、大なるは丈餘に至る。冬多く漁す。  
 しほ(秋)椎の木叢立ちたるをいふ。古は秋季とす。  
 しほ(悲心鳥)ヒヨ鳥に似たる鳥、香黒褐にして腹黄なり。野州日光山に多く棲む。一に佛法僧ともいふ。  
 しほ(秋)椎、櫻、柏等に生ずる葎、莖短くして莖黒く香氣あり。又椎の木を伐りて人工にて生ぜしむるもあり。○椎にまた雨をばらむや菌こも白菌。  
 しほ(毒)書初(イ)  
 しほ(死人花)(秋)マンジュサゲ。  
 しほ(痛)、ふに同じ。  
 しほ(花)(花)椎の實を見よ。○風除の椎の花ちる浦家哉。鶯々。  
 しほ(椎實)(秋)樹は喬木にして其葉冬枯れず、夏の初、穂をなして淡黄の花

しほ

を開き、秋子を生ず、ドンケリに似て細長し、炒りて食ふ。○宮守が推拾ひ入る鳥帽子かな。杜梨。  
 しほ(渡瓶)便器をいふ。  
 しほ(渡貼)(秋)落貼。  
 しほ(十一月)(冬)(異名)黄鐘。仲冬。周正。復月。暢(き)月。天正月。寒月。雪見月。子の月。神樂月。霜降月。霜月。露水り月。○山里や十一月の稽古笛。多代女。  
 しほ(十因)禪宗の永観律師がつける文。往生十因とて僧俗に示せしもの。  
 しほ(渡圓扇)(夏)多く方形にして邊をひきたる粗製の圓扇。○旅人や腰につけたる邊うちは。涼菟。  
 しほ(渡柿)(秋)柿の實の味甚しく濃きもの。搗きて邊を搾り採り、柿漆(かき)とし又、餅(かき)として食ふ。○柿邊取る。○邊柿の面つき出す菓陰かな。卵七。  
 しほ(渡糖)(秋)柿邊を取りたるあとのかす。  
 しほ(蕨菜)(夏)草の名、高さ六七寸、甚悪臭あり、葉は圓くして尖り、表背く裏葉なり。莖は節多く、夏四瓣の白花を開く。||ごくくだみ。十薬。魚腥草。

しほ

○無住寺の十薬多き垣根哉。洗耳。  
 しほ(十月)(冬)(異名)陽月。夏月。孟冬。上冬。支冬。開冬。養正。小春。初冬。神無月。神なかり月。神さり月。時雨月。初冬月。初霜月。小六月。○十月や草まだ見ゆる庭の隅。尙白。  
 しほ(十五日)(秋)八月十五日、名月の夜。||三五夜。真夜。真宵。  
 しほ(十三夜)(春)三月十三日、京都下嵯峨、法輪寺の本尊虚空蔵菩薩へ男女十三歳の者參詣すれば、福徳智恵を授け給ふとて、洛中の子女群參し、境内に於て十三品の土産菓子を買る。○はじめての嵯峨に十三参りかな。青々。  
 しほ(十三夜)(秋)後の月。  
 しほ(十七夜)(秋)立待月。  
 しほ(十姉妹)(秋)鳥の名、四十雀に似てよく鳴る。

しほ

五十七夜(十四夜)近江國大津、小野惣右衛門の娘、十四歳の時、闇の梅が香の歌を讀みて名高し、世に此家を十四夜と云ふ。  
 しほ(十禪師祭)(秋)シシガタニマツリ。  
 しほ(土佛)應永頃の醫にして博覧の名高し。  
 しほ(流取)(秋)柿邊取る。  
 しほ(十二宮)太陽の經度を十二に分ち、星宿の象によりて白羊宮、金牛宮、雙女宮等の十二の名を附し、稱。  
 しほ(十二月)(冬)(異名)大呂。暮冬。季冬。隆冬。極月。臘月。塗月(ツツ)。股正。朔年。急景。窮月。嘉平月。二陽月。弟(弟)月。春待月。梅初月(ツツ)。三冬月(ツツ)。限りの月。年積り月。師走。  
 しほ(十二調子)香樂の調子を十二に配し、奇數を律とし、偶數を呂としたる稱。  
 しほ(十念)淨土宗の教に念佛を十度稱ふれば佛道に入るといふこと。  
 しほ(十八粥)(春)正月十八日、赤小豆の粥を作りて食へば毒虫を避くと、十五日の粥の餘風なり。

しほ

しほ(十八公)連句の一體。十八句(表十句裏八句)を以て一卷とするもの。松の字に象りしもの。  
 しほ(十夜)(冬)十月五日より十五日迄淨土宗の諸寺にて十晝十夜の法會を行ふ。無量壽經に「善行を脩すること十日十夜なれば、他方諸佛の國土に善をなす千歳にも勝れり」とあるより出で、古へ京都黒谷眞如堂にて行ひしを始とす。○門前の家は寢てある十夜哉。月居。  
 しほ(十夜柿)(冬)十夜の頃、京都黒谷などの路傍に賣る柿をいふ。  
 しほ(十薬)(夏)しほき。○十薬や算を亂して石佛。星衣。  
 しほ(十四日)(春)正月十四日、松の内了りて飾を撤る。江戸にては六日を年越とす。||小正月。○此年と遊び越しけん十四日。其説。  
 しほ(十夜使)(冬)のさきの使。  
 しほ(十六夜)(春)のさきの能面。  
 しほ(十六夜月)(秋)いさよひ。  
 しほ(十論)各務支考が俳諧の體用十條を論せし書。  
 しほ(十王)佛説に地獄にある閻魔王を始めとする十王をいふ。

しほ

しほ(潮浴)(夏)海水浴。  
 しほ(鹽鳥賊)(夏)鳥賊を鹽干にしたるもの、多く山間僻地の食用とす。||千鳥賊。○いっ干すや淡路は須磨の夕日ゆく。風聲。  
 しほ(潮頭)沖よりよせくる潮の先なるもの。  
 しほ(鹽鹽)(冬)鹽引にしたる鹽。多く冬の食品とす。○沾徳が手紙届くや鹽鹽。屠龍。  
 しほ(鹽鹽)(春)櫻の一種、花淡紅にして樹葉共に艶美なり。  
 しほ(鹽鹽)陸前宮城郡の海邊。一に千賀の浦と云ふ。鹽鹽神社あり、松島を望む絶景の地。  
 しほ(鹽鹽)(秋)しほさんぼう。  
 しほ(鹽鹽)鹽を運ぶ車。  
 しほ(鹽鹽)鹽を焼く煙をいふ。  
 しほ(鹽鹽)鹽漬にて砂を摺鉢の伏したる如く盛りたるに鹽水を減きて日に晒し、鹽を取るもの。  
 しほ(子母錢)利子が殖える金をいふ。  
 しほ(鹽鹽)(春)干乾。  
 しほ(鹽鹽)(秋)蜻蛉の一種、體



しほ

しほに白き斑あるもの。しほは。
しほ(沙干)(春)陰曆、三月三日前後を
大沙といひ、海水大に干くを以て、干海
に出で貝を拾ひ遊ぶ、之を沙干狩とい
ふ。攝津住吉、和泉堺、武藏品川等は
都人多く群る。しほ干狩。○沙干海
國落ちかゝる日に怖氣立つ沙干かな
几童。

しほ(沙干海)(春)沙干のさき干海
のあらはるること。古へ無季とせり。
しほに照る鳥居まばゆき干海かな
静子。

しほ(沙干狩)(春)沙干。
しほ(沙見草)(夏)卯の花の異名。
しほ(潮見飯)遠江國白須賀町にある
飯。海上を望む絶景の地。
しほ(鹽屋長次郎)牛馬、刀劍な
どを吞む奇術をなしたる放下師にて、
難波より江戸へ下り、元祿の比流行す。
しほ(潮流)能曲の流儀の名。
しほ(鳥屋)(夏)鯉の一種。
しほ(織紋)(夏)やぶ。
しほ(冬)時雨に強風の加はるをいふ。
しほ(一しほ)跡先しらぬ堤かな 宗瑞。
しほ(織紋)(秋)薄の一種、葉に縦の
白文あるもの。しほ。授芝。

しほ(島道者)相州江島へ参詣する
信者なをいふ。
しほ(島千鳥)(冬)島邊に飛ぶ千鳥。
しほ(島繁祭)(春)ちくぶしま
しまつなぎ。
しほ(島津文)島津の家士、小野攝津
の女、菊さいふもの、龍造寺の士、瀬川
采女に嫁す、文祿朝鮮の役、采女の軍
に従ふを哀み、菊女、想夫の文を箱に
入れ海に流すに、博多浦に着し、終に秀
吉の手に入る、秀吉文辭の切なるに愛
で、瀬川を呼返せしといふ故事。

しほ(島原)京の遊女町の名。丹波口を
西に入る所あり。大門の右に出口の
柳を植う、此地、往古は鴻臚館ありて外
國使臣攝待の所なり。寛永十八年魚の
糞より遊女町を移し、時に島原の亂に
因みて名とせりといふ。遊女の最初に
して、遊女に大夫鏡を用ふるといふ。
しほ(島原道中)(春)三月廿一
日(現時四月廿一日)京都島原の遊廓に
て大夫の道中をなすこと。遊女の行
装、甚美にして見物群衆す。
しほ(仕舞)能裝束を着すして舞ふ能の
舞をいふ。
しほ(島屋)(秋)月の異名。

しほ

しほ(新願忌)初七日の忌をいふ。
しほ(心教)文明頃、京の聖護院に住し、
連歌に有名なる僧。
しほ(新月)(秋)初旬の頃の月。しほ
月。しほ。○新月や内侍所の棟の草
風雪。

しほ(信支忌)(夏)四月十二日、京都
妙心寺にて武田信支、甲斐の武將、天正
元年卒すの忌を修する式。
しほ(新五左)昔し遊廓にて田舎武士を
習しりていふ詞。
しほ(新五子稿)曉臺、閑更、蕪村、
太紙、青龍の五家の句を集めし書。
しほ(神今食)(夏)(冬)六月、十二月
の十一日夜、月次祭の後に宮中、中和院
の神嘉殿にて伊勢大神宮を祭り、主土
自ら神饌を供せらる式。しほ(しん)ん
じき。○神今食などは吉田、白川、
存義。

しほ(移粉花)(夏)モザブリバナ。
しほ(眞言)佛教八宗の一、僧空海の唐
より傳へ始めし宗旨、大日經、眞言秘密
を基とす。
しほ(眞言院御修法)(春)正
月八日より七日間、禁裏の西なる眞言
院に於て國家鎮護、五穀豊熟の祈禱を

しほ(四萬六千日)(秋)七月九
日十日、江戸淺草觀音に詣づる事なり。
(清水千日詣の條参照)境内に草市立
つ。○文月や雷門は人の音 五條。
しほ(蠶)衣服、書冊の間などに生じ
衣服書畫を害する虫、身小さく細くして、
色白く光あり。しほ(紙魚)蟬。○芍薬
や紙魚打ばらふ窓の前 蕪村。
しほ(清水)(夏)岩間などより涌出づる
水。古は結ぶ、壘くの意なれば維と
したれど、元祿の頃より總て夏季とす。
○谷清水。苦清水。岩清水。○馬柄
杓を岩に割込む清水かな 野徑。
しほ(慈明忌)十七年忌をいふ。
しほ(蔵)いましめの文詞。
しほ(新芋)(夏)薩摩芋の未だ小なる
を、夏の頃より食ふもの。
しほ(新夏)(夏)四月の異名。
しほ(遊學解)唐の韓退之が學を
諸生に勸めることを問答體に書きし文
章。實は自己の用あられる慣を洩せ
しものなりといふ。
しほ(新干瓢)(夏)干瓢の新製のも
の。(干瓢割くを見よ)
しほ(新權)(秋)櫻の實の其年取れた
るもの。

しほ

しほ(新願忌)初七日の忌をいふ。
しほ(心教)文明頃、京の聖護院に住し、
連歌に有名なる僧。
しほ(新月)(秋)初旬の頃の月。しほ
月。しほ。○新月や内侍所の棟の草
風雪。

しほ(信支忌)(夏)四月十二日、京都
妙心寺にて武田信支、甲斐の武將、天正
元年卒すの忌を修する式。
しほ(新五左)昔し遊廓にて田舎武士を
習しりていふ詞。
しほ(新五子稿)曉臺、閑更、蕪村、
太紙、青龍の五家の句を集めし書。
しほ(神今食)(夏)(冬)六月、十二月
の十一日夜、月次祭の後に宮中、中和院
の神嘉殿にて伊勢大神宮を祭り、主土
自ら神饌を供せらる式。しほ(しん)ん
じき。○神今食などは吉田、白川、
存義。

しほ(移粉花)(夏)モザブリバナ。
しほ(眞言)佛教八宗の一、僧空海の唐
より傳へ始めし宗旨、大日經、眞言秘密
を基とす。
しほ(眞言院御修法)(春)正
月八日より七日間、禁裏の西なる眞言
院に於て國家鎮護、五穀豊熟の祈禱を

しほ(四萬六千日)(秋)七月九
日十日、江戸淺草觀音に詣づる事なり。
(清水千日詣の條参照)境内に草市立
つ。○文月や雷門は人の音 五條。
しほ(蠶)衣服、書冊の間などに生じ
衣服書畫を害する虫、身小さく細くして、
色白く光あり。しほ(紙魚)蟬。○芍薬
や紙魚打ばらふ窓の前 蕪村。
しほ(清水)(夏)岩間などより涌出づる
水。古は結ぶ、壘くの意なれば維と
したれど、元祿の頃より總て夏季とす。
○谷清水。苦清水。岩清水。○馬柄
杓を岩に割込む清水かな 野徑。
しほ(慈明忌)十七年忌をいふ。
しほ(蔵)いましめの文詞。
しほ(新芋)(夏)薩摩芋の未だ小なる
を、夏の頃より食ふもの。
しほ(新夏)(夏)四月の異名。
しほ(遊學解)唐の韓退之が學を
諸生に勸めることを問答體に書きし文
章。實は自己の用あられる慣を洩せ
しものなりといふ。
しほ(新干瓢)(夏)干瓢の新製のも
の。(干瓢割くを見よ)
しほ(新權)(秋)櫻の實の其年取れた
るもの。

しん

しん(新通)(春)正月、商家等にて諸
品の賣買の通帳を新むること。帳簿を
見よ。

しん(新刈安)(秋)刈安の其年收穫
されたるもの。
しん(新茄和)(夏)五月頃、茄子を和
物にして食ふもの。
しん(神製)(夏)五月五日、又
は六月六日、或は三伏の日に、白飯、著
蕨の汁、赤小豆などにて餅を造り、麻の
葉又は楮の葉に包み、黄色の皮生する
を待て晒し之を藏す。水穀、宿食穢滯
等に効ありと。

しん(新絹)(秋)八月の頃、上州野州
武州等より、其年取りたる糸にて織り
し絹を出すもの。○絹市。
しん(新給)(夏)五月、朝廷より洛中
の貧窮者に米鹽等を施さるること。檢
非違使之を監す。しん(シシ)ケウ。○眼
給や埃のつき髪の色 赤岳。
しん(夏氣)(春)海邊などにて空
氣の平穩なること。遠方の町村などの
反映して空中に人家などの現はるること。
古は(夏)の口より吐く氣と想像
したるより生類の部とし、又春季とせ
り。しん(ヒ)ヤケウ。海市。○狐隊。

しん(桑名)桑名の城のうづりけり 古風。
しん(賑給)(夏)しん(賑)ふ。
しん(神宮御衣祭)(夏)新
暦五月十四日伊勢神宮にて行ふ祭事。
伊勢カンミツ祭と同じ。
しん(神宮寺薬師講)(春)正
月八日、攝津住吉社の北、神宮寺にて
行ふ會式、延寶頃の行事。
しん(神宮月次祭)(夏)(冬)
新暦六月及十二月十七日、朝廷より月
次祭の幣帛を伊勢神宮に奉遣せらるる
式。四日に奉幣使發遣す。
しん(神宮祈年祭)(春)新
暦二月十七日、伊勢神宮にて行ふ祈年
祭をいふ。宮中より奉幣あり。
しん(新宮祭)(夏)五月五日、江
州三井寺山中の新羅明神の祭禮。
しん(新桑摘)(春)養蠶に用ゐるた
め桑の新葉を摘むこと。
しん(新胡桃)(秋)胡桃の實の初め
て出たるもの。
しん(秦檜)宋の臣、金に因はれしも
逃歸りて高宗に仕へ高位に昇る、宋の
名臣、岳飛を護し、終に宋を亡ぼす。後
世、權塚を立られ、今に世人の惡む所と
なる。

しん(新願忌)初七日の忌をいふ。
しん(心教)文明頃、京の聖護院に住し、
連歌に有名なる僧。
しん(新月)(秋)初旬の頃の月。しほ
月。しほ。○新月や内侍所の棟の草
風雪。

しん(信支忌)(夏)四月十二日、京都
妙心寺にて武田信支、甲斐の武將、天正
元年卒すの忌を修する式。
しん(新五左)昔し遊廓にて田舎武士を
習しりていふ詞。
しん(新五子稿)曉臺、閑更、蕪村、
太紙、青龍の五家の句を集めし書。
しん(神今食)(夏)(冬)六月、十二月
の十一日夜、月次祭の後に宮中、中和院
の神嘉殿にて伊勢大神宮を祭り、主土
自ら神饌を供せらる式。しん(しん)ん
じき。○神今食などは吉田、白川、
存義。

しん

しん(移粉花)(夏)モザブリバナ。
しん(眞言)佛教八宗の一、僧空海の唐
より傳へ始めし宗旨、大日經、眞言秘密
を基とす。
しん(眞言院御修法)(春)正
月八日より七日間、禁裏の西なる眞言
院に於て國家鎮護、五穀豊熟の祈禱を

しん(四萬六千日)(秋)七月九
日十日、江戸淺草觀音に詣づる事なり。
(清水千日詣の條参照)境内に草市立
つ。○文月や雷門は人の音 五條。
しん(蠶)衣服、書冊の間などに生じ
衣服書畫を害する虫、身小さく細くして、
色白く光あり。しん(紙魚)蟬。○芍薬
や紙魚打ばらふ窓の前 蕪村。
しん(清水)(夏)岩間などより涌出づる
水。古は結ぶ、壘くの意なれば維と
したれど、元祿の頃より總て夏季とす。
○谷清水。苦清水。岩清水。○馬柄
杓を岩に割込む清水かな 野徑。
しん(慈明忌)十七年忌をいふ。
しん(蔵)いましめの文詞。
しん(新芋)(夏)薩摩芋の未だ小なる
を、夏の頃より食ふもの。
しん(新夏)(夏)四月の異名。
しん(遊學解)唐の韓退之が學を
諸生に勸めることを問答體に書きし文
章。實は自己の用あられる慣を洩せ
しものなりといふ。
しん(新干瓢)(夏)干瓢の新製のも
の。(干瓢割くを見よ)
しん(新權)(秋)櫻の實の其年取れた
るもの。

しん

しん(新願忌)初七日の忌をいふ。
しん(心教)文明頃、京の聖護院に住し、
連歌に有名なる僧。
しん(新月)(秋)初旬の頃の月。しほ
月。しほ。○新月や内侍所の棟の草
風雪。

しん(信支忌)(夏)四月十二日、京都
妙心寺にて武田信支、甲斐の武將、天正
元年卒すの忌を修する式。
しん(新五左)昔し遊廓にて田舎武士を
習しりていふ詞。
しん(新五子稿)曉臺、閑更、蕪村、
太紙、青龍の五家の句を集めし書。
しん(神今食)(夏)(冬)六月、十二月
の十一日夜、月次祭の後に宮中、中和院
の神嘉殿にて伊勢大神宮を祭り、主土
自ら神饌を供せらる式。しん(しん)ん
じき。○神今食などは吉田、白川、
存義。







しんきやう

しんきやう(黍舞陽) 荆軻と共に秦の始皇を刺さんとして壯士。  
 じんべ(甚平)(夏) 夏日、小兒などの着る單衣、長げ腰まで位にて、多く袖を付けず。 國 襦子に甚平着せよにの花盧子。  
 しんじかざる(新干葉)(冬) 其年作りたる干葉をいふ。  
 しんじたいどん(新干大根)(冬) 十一月頃出る干大根をいふ。  
 しんぼ(新發智) 新に佛門に入て剃髪せしものをいふ。 〓しほち。  
 しんまい(新米)(秋) 其年收穫したる米。 〓今年米。 國 新米もまだ草の實の句哉 蕪村。  
 しんま(新町) 大阪四堀の北にある遊廓の名。  
 しんまめ(新豆)(秋) 初て收穫したる大豆をいふ。 青豆ともいふ。 國 新豆に嘴見せよ鳩の魂 櫻良。  
 しんまろ(浸淫毒) 熱病などに伴れて皮膚に爛漫する熱性の腫物。  
 じんみらい(盡末來際) 後の後までしてなき意。  
 しんま(新夢)(夏) 夏、夢の新設成りたるもの。 國 新夢や竹の子時の草の庵

しんじやう

しんじやう(新涼)(秋) 初秋、夏の暑さ去りて涼し新に生ずること。 〓初て涼し。 國 水の氣の初て涼し朝手水  
 許六。  
 じんむてんわさ(神武天皇祭)(春) 新曆四月三日、神武天皇崩御の日にて宮中にて祭典を行ひ給ふ式。  
 しんやう(新陽)(春) 一月の異名。  
 しんまはら(新吉原燈籠)(秋) 七月一日より竹日まで、東都吉原仲の町の揚屋にて遊女玉菊の追善のため、種々の形したる燈籠を掲ぐ、見物甚多し。 享保年中より始まること。 國 燈籠もいすかの嘴となりけり 屠龍。 〓燈籠になき玉菊が来る夜かな。  
 しん(新羅) 古へ朝鮮の一部の稱。  
 しん(新) 親賢忌(冬) 十一月廿二日より廿八日迄、京、江戸兩京の東西兩本願寺にて親賢上人(弘長二年十一月廿八日寂。 年九十一。 釋源空の弟子にして淨土真宗の開祖)の忌を修す。 之を御佛事、親賢講、御講、御霜月など稱し宗徒の參詣多し。 又此頃天氣快晴なるを御講風といふ。 〓御取越。 見真大師忌。 國 二貫目の燧燭さす御講後花笠。  
 しんやう(新涼)(秋) 初秋、夏の暑さ去りて涼し新に生ずること。 〓初て涼し。 國 水の氣の初て涼し朝手水

しんりやく

しんりやく(新緑)(夏) 若葉の緑なるをいふ。  
 しんわた(新綿)(秋) 木綿の其年出るものを。 〓にひわた。 國 新綿や難波を出る舟じろし 一呼。  
 しん(新) 其年刈りたる稲の藪。 多く注連、輪飾等に作る。 國 新葉や里は春めく日の匂ひ 羽徳。  
 しん(心越) 漢の關雲長の裔にて木朝に歸化せし禪僧。 水戸家に招かれ、後江戸深川に住す。 音律を善し、曾て萩生徂徠より舶來の琴を借て打碎き斧跡を見しといふ。  
 しん(新右衛門) 嵯峨親昌の通稱、歌人にして一休和尚の弟子となり、諱をよくす。  
 しん(注連)(春) 注連飾をいふ。 飾る意に非れば難なり。 〓標。 七五三。 しりくめなは。 しめ縄。  
 しん(注連明)(春) シメズギ。 國 松風は松へ戻りぬ注連拂ひ 倭笑。  
 しん(四明嶽) 山城國比叡山大嶽の西に聳ゆる山。  
 しん(しめいろ月)(春) 三月の異名。  
 しん(注連賣)(冬) 飾賣。

しめかざり

しめかざり(注連飾)(春) 正月の飾に清き葉を左り纏にしたる繩を門戸又は神前などに懸け飾ること。 不淨を祓ふの意なり。 〓飾繩。 飾繩。 國 老ねれば何やら嬉ししめ飾 清葉。  
 しめすき(注連通)(春) 松過を見よ。 〓注連あき。 しめはらひ。  
 しめぢ(湯地茸)(秋) シメヂマケ。  
 しめぢ(湯地茸)(秋) 山中の湯地に生ずる茸、茎短く肥えて圓し、蓋の色によりて黄シメヂ、紫シメヂ、鼠シメヂ等あり。 〓標茅茸。 國 松が根に千代の影さすしめぢ哉 宗因。  
 しめなは(注連繩)(春) しめ。  
 しめ(注連内)(春) 松の内と同じ。 國 注連の内狂士の蒲團被ぐあり 紅葉。  
 しめ(注連買)(春) 正月十五日、市中にて撒したる門松、飾の類を小兒等買ひ取りて之を爆竹(ワナ)にて焼くこと。 國 春ひ合ひて地摺りに轉けつ注連買 蝸牛。  
 しめ(霜)(冬) 露の氷りて地上、物の上に布くをいふ。(異名) サ、ヒコメ。 青女。 三ツの花。 〓初霜。 朝霜。 ハダレ霜。 霜しぐれ。 霜柱。 霜疊。 霜崩。 霜解。

しめかざり

霜折れ。 霜夜。 霜日和。 霜の花。 霜の袴。 霜の劍。 霜の鐘。 霜の聲。 霜夜の鶴。 霜水。 霜沓。  
 しめ(霜) (冬) 草木の霜にあひて枯る、こと。 又、冬の寒き空の景色をいふ。 國 霜枯や鶴の咲く小傾城 一茶。  
 しめ(下鴨) 下賀茂とも書く。 加茂祭の條を見よ。  
 しめ(下賀茂) (冬) 賀茂水無月祝(賀茂水無月祝)。  
 しめ(霜柱) (冬) 霜柱の解け消ゆること。  
 しめ(霜消) (冬) セツケツに同じ。  
 しめ(下五) 俳句の下の五文字をいふ稱。 〓下五文字。  
 しめ(霜水) (冬) 霜の降りて氷りたるをいふ。 國 あか、く、と霜水りけり 嵩夢の壘 關東。  
 しめ(下御堂) 二りやうのわいでを見よ。  
 しめ(霜牙) (冬) 齒るを見よ。  
 しめ(霜時雨) (冬) 北國にて冬季、降霜多く、朝露の如く立ち登むるをいふ。

しめかざり

しめかざり(注連飾)は葉の名所哉 藤太。  
 しめ(霜登) (冬) 霜の一面におきわたれるをいふ。 霜柱に對しての稱。  
 しめ(霜月) (冬) 十一月の異名。 國 霜月や柿四五木の屋敷尻 風外。  
 しめ(下毛花) (夏) 高さ一二尺の灌木、葉は葡萄に似て小さく、五月頃、紅色の小花を開く、形、胡蘿蔔の花に似たり。 〓下野花。 樹繡線菊。 國 下野や日に蒸されたる花の色 青山。  
 しめ(霜解) (冬) 降霜の翌る朝になりて日に解くること。  
 しめ(雙机) 細き木の枝を結び合して作りし神祭用の机。  
 しめ(下鳥羽祭) (秋) 九月十日、山城國宇治郡下鳥羽の天王社(午頭天王を祀る。 田中天王といふ)の祭禮。 國 下鳥羽の祭や菊の香におくれ 翠水。  
 しめ(霜鐘) (冬) 古へ唐の豐山の鐘は霜降れば自ら鳴ると山海經にありし故事。 又霜夜の鐘の聲をいふ。 國 鐘の聲霜を知る夜の眉重き 白雄。  
 しめ(霜聲) (冬) 霜の夜に物音の甚だ訝ゆるをいふ。 國 酒臭き蒲團刺きけり霜の聲 其角。







じやうじやう

じやうじやう(上秋)(秋)七月の異名。  
 じやうじやう(尙齒會)(春)耳順(七十)以上の老人、相集りて宴し、詩歌などを樂むこと。(其人數七人なるを常とし、餘高きを上席とす)。餘を尙むの意にして、古書の傳ふる處には多く三月に行はる故に春季とす。圖 着飾りし宴どもえつ尙齒會 東序。  
 じやうじやう(上日)(春)元日の異名。  
 じやうじやう(淨心)小田原の北條氏の家臣、三浦茂正の稱名。後年、浪人して江戸に出て見聞集の著あり、正保九年七十九歳にて歿す。  
 じやうじやう(盛親)徒然草に見えたる眞乘院の僧、芋魁を好んで食したる人。  
 じやうじやう(精進落)精進の食を廢すること。  
 じやうじやう(生身供)(春)てんわうじ生身供。  
 じやうじやう(淨心寺千部)(夏)四月十九日より廿八日まで江戸深川、法苑山淨心寺にて法華經千部の讀誦會をなすこと。  
 じやうじやう(精進頭)(春)正月十七日より明年の正月十七日迄、上加茂の氏八五人、日々垢齋を修し、本社及太田社

じやうじやう

に詣で、特に丑の日は黄布褌に詣づ。其途中に扇を翳して不淨を避くることいふ。  
 じやうじやう(上辰祝)(春)古へ支那の俗に正月上辰日、池邊に盥濯し、蓬餅を食ひて疫を祓ふこと。後世、三月上巳に行ふこと。この巳の日の祝は此の變遷したるものなりといふ。  
 じやうじやう(精舍)寺のこと。  
 じやうじやう(狸々)唐土、楊子の里のかうふうさいへる酒賣、奉行によりて、海中の狸より壺さぬ泉の壺を得ることを作りし謡曲。  
 じやうじやう(清淨忌)卅三年忌をいふ。  
 じやうじやう(狸々菊)(秋)菊の名花に附したる名、紅黄二種あり。百菊の一。  
 じやうじやう(狸理袴)(夏)草の名。高さ六七寸、葉は蕪蘭に似て短く叢生し、夏の頃、莖頭に穂草に似たる小花集り開く。  
 じやうじやう(上春)(春)一月の異名。  
 じやうじやう(正義)土佐坊正尊、頼朝の命にて京に上り義経を討たんとすることを作れる謡曲。  
 じやうじやう(成道會)(冬)らふはち。  
 じやうじやう(上慶)(春)巳日祝(ハルヒ)。

じやうじやう

じやうじやう(正徹)徹書記を見よ。  
 じやうじやう(上天)(冬)冬の異名。  
 じやうじやう(上冬)(冬)十月の異名。  
 じやうじやう(淨土双六)(春)佛法に、南都部州を振出しして、妙覺の法身に入るを上りとする輪双六。其要は數に非ずして食臘戒定慧、又は南無諸佛分身の六字を刻するを用ゐる。元祿頃行はれしもの。圖 双六や額に出る食臘戒 青々。  
 じやうじやう(城南寺祭)(秋)城南寺祭の轉訛。  
 じやうじやう(城南神祭)(秋)九月廿日。山城國鳥羽の城南神社(鳥羽上皇の離宮ありし地、同帝を祀る)といふ。一説に神功皇后の勸請したまひし處にて、國常立尊を祀るの祭禮。此日、土俗にて客に餅を出し、其腰に手杵三五本を佩ばせ、餅を喰はせて腹の充満するに従ひ、杵を一本宛抜かしむといふ。圖 腹あしき餅も餅へ城南神祭村。  
 じやうじやう(正念)山城愛宕郡、岩堀に住みし僧。食事毎に膳を佛前又は位牌に差つけ、喚び々々といひて後、己れが喰ひしといふ。又、一枚起請といふもの

じやうじやう

を書て、滑稽を弄せし奇僧。  
 じやうじやう(薔薇)(夏)イバラの一種。花園に植ふるもの。樹小にして花大く、白紅黄の諸色ありて香氣高し。イバラさうび。圖 竹伐れば日のあたりけり 花薔薇 嵐山。  
 じやうじやう(薔)水邊に生ずる草。長さ四五尺に至り、花は白、紫の二ありて葉に香氣あり。端午に其葉を織り挿しなごして祝ふ。アヤメ。花薔。圖 戸明ければ草の影さすあやめ哉 乙二。  
 じやうじやう(薔浦倉)(夏)端午に薔浦を採りて其根の長さを競べ、あふこと。根合せ。圖 根合せや御池にひたす花 笹 其角。  
 じやうじやう(正風)せうふう(蕪風)。  
 じやうじやう(薔浦打)(夏)端午に兒童、薔浦を織りたる繩にて相打つ戲。圖 君が代や印地すたれて薔浦打 保吉。  
 じやうじやう(薔浦賣)(夏)端午の頃、薔浦を賣り歩くもの。アヤメ賣。圖 泥足の京で乾くやアヤメ賣 夢林。  
 じやうじやう(薔浦鬘)(夏)アヤメ鬘。  
 じやうじやう(薔浦刀)(夏)端午に男兒の弄ぶもの。木刀に彩色せる布、紙を

じやうじやう

巻きまもの。又は薔浦を刀の形に造りしもの。圖 誰が子ぞ太刀よく似合ふ 薔浦の日 大骨。  
 じやうじやう(薔浦帷子)(夏)薔浦ゆかた。  
 じやうじやう(薔浦平)鹿のなめし革に藍地に白く薔浦の模様を染出せるもの。山城八幡山の麓、大谷の社家の染初めしもの。  
 じやうじやう(薔浦半祭)(秋)八月十五日、大阪安土町三丁目安土八幡宮(男山の八幡を移し祀る)の祭禮。近代は衰頹して祭なし。  
 じやうじやう(薔浦刈)(夏)端午に用ゐる爲の薔浦を刈り取ること。アヤメ引。  
 じやうじやう(薔浦酒)(夏)薔浦を切りて浸し、酒を端午に飲めば疫氣無しと傳ふる俗。圖 世をまゝに隣ありきや薔浦酒 白雄。  
 じやうじやう(薔浦鉢巻)(夏)端午に兒童、薔浦にて鉢巻を作りなすこと。薔浦の鬘の遺意ならんこと。  
 じやうじやう(薔浦湯)(夏)端午、湯の中に薔浦を入れて沐浴すれば疫氣を祓ふと傳ふ。圖 湯に挿したるものといふ。  
 じやうじやう(薔浦湯)や薔浦よせくる乳のあたり 白

じやうじやう

じやうじやう(薔浦浴衣)(夏)京師の俗。端午に家々にて奴僕に與ふる衣類、浴衣、帷子などをいふ。薔浦帷子。  
 じやうじやう(薔浦戲)(夏)五月三日、宮中の官人、アヤメの輿(薔浦と蓬を盛りたる輿、別に輿に時の花を盛りて添ふ)を獻り、諸殿に薔浦を奏く式。五日の節會の準備なり。(あやめの輿の條を見よ)。圖 獻る薔浦に匂へ御清水 也有。  
 じやうじやう(昌平校)江戸湯島にありし學問所、徳川綱吉、上野の弘文学院を移したるもの。一に聖堂と呼ぶ。  
 じやうじやう(正平革)肥後八代郡にて染出せし革。不動の像及び天平の年號入りたり、業は天平革といひ正平革は後代に染出せしものなり。  
 じやうじやう(正本)芝居狂言の巻帳をいふ。  
 じやうじやう(淨飯王)釋迦の父王の名。  
 じやうじやう(上巳)(春)ジャウツ。  
 じやうじやう(聖武天皇御忌)(夏)五月二日、奈良眉間寺に於て同寺の什なる、聖武天皇の宸影を聞き、法忌を修すること。  
 じやうじやう(淨妙山)(夏)祇園會の山の







しやのつた

さいふ。(社日とのみは春季なり) 國正月の雲が残りて社日かな 白東。本家のつた(子夜歌) 晋の子夜と云ふ女が作りし悲戀の歌。  
 しやのく(車厘) 悉作太子、王宮を逃出する時の馬の口を取りし人。戯曲などに假設せし人物。  
 じやのすけ(蛇之助) 俗に庭わけ上戸といふ。強飲家をいふ異名。寛文時代の流行語。又、常矩の句に「蛇の助が恨の鐘や花の暮」あり。時人、蛇の助の常矩と掉名す。  
 しやへう(謝豹) (靈) 支那にて想像の虫。人を見れば足を以て頭部を覆ひ蓋る状をなし、時鳥の聲を聞けば直に死すといふ。故に時鳥をも謝豹といふ。  
 しやみ(沙彌) 佛門に入りて未だ修業の積まぬ僧。  
 しやも(團扇) 扇の一種。形大く冠小くして、羽毛多く禿げ、尾珠に短し。歴太く距長き故に能く扇ふ。  
 しやもん(沙門) 僧のこと。  
 しやるい(射禮) (番) 古へ正月、禁中にて行ひし弓始の式。十五日に兵部省にて手番ひを定め射手を揃へて、十七日、建禮門にて射衛を行ふ。

しやのつた

しやのつた(沙羅双樹) (靈) サラソウツユの花を見よ。  
 しやり(舍利) 靈骨の意。清浄なる硬き骨類の稱。又、諸曲の曲名。足疾鬼といふもの、泉涌寺の佛舍利を奪ひしを章駄天といふ天神の爲に取返さるゝ事を作ししもの。  
 しやれん(謝靈運) 晋、謝玄の孫、宋の文帝に仕へ文章詩才一世に高し。常に好んで曲柄の笠を戴く。族弟惠遠、蓮社の交を陶淵明等と結ぶに、特り靈運を卑みて納れざりしこと云ふ。  
 しやろのあめ(社翁雨) (番) 社日に降る雨をいふ。傳説に社公、社母湯水を食せず。故に社日必ず雨ありといふ。國よいほどに降て晴けり社翁の日 米哉。  
 しやんがね(朱印船) 幕府の朱印ある證を得て外國貿易する船。  
 しやらん(宗論) 能狂言の名。  
 しやか(朱夏) (靈) 夏の異名。  
 しやか(首夏) (靈) 四月の異名。  
 しやか(首夏) (修學寺祭) (番) 三月五日、京の北、修學寺村の八大天王社(祭神一乘社)と同じといひ、一説には牛頭天皇或は天台護法神、赤山明神ともいふの祭禮。一乘寺祭と共にいふ。

しやん

しやん(儒巾) 支那の儒生の被る帽の類をいふ。  
 しやん(淑氣) (番) 新春の氣をいふ。  
 しやん(熱柿) (秋) うみがき。  
 しやん(淑節) (春) 元日の異名。  
 しやん(淑節) (春) 漢の高祖に仕へし博士。太子の大傅となる。よく綱斗の文字を解せし人。  
 しやん(熱梅天) (靈) 梅天。  
 しやん(祝融) (靈) 夏の異名。  
 しやん(宿瘤女) 齊の閔王の后なり。王曾て出遊の途上、桑を採て顧みざる女あり。王問ふて曰く衆人皆我を仰見んとするに汝、何故顧みざるや。女答て、父母桑を採ることを命じて大王を見るを命ぜずと云ふ。王其賢を喜び納れて皇后となすといふ。  
 しやん(珠光) 休心法師と云ふ、一休の門、茶事に悉しく東山義政に傳ふ。  
 しやん(首飾) (番) 一月の異名。  
 しやん(壽藏) 生前より墓を建ること。  
 しやん(壽藏) (靈) 長命橋をいふ。朱朱。  
 しやん(朱櫻) (番) 櫻の一種。ユスサワノに同じ。櫻桃。  
 しやん(朱三) 双六の賽の目の稱。

しや

しや(朱子) 名は熈、晦庵と號す。宋の大儒にして理学を以て孔子の道を説く。慶元六年歿し、文公と號す。  
 しや(朱四) 双六の賽の目の稱。  
 しや(朱雀) 京都内裏の朱雀門より羅城門に至る大路を云ふ。今の鳥原の地は朱雀の朱雀なりといふ。  
 しや(朱備) 丈の極めて低き人。一寸法師。  
 しや(珠數懸鳩) (秋) 鳩の一種。山に多く、頸に白斑あり。秋尤も善く鳴き其聲トシヨリコイと聞ゆ。八幡鳩。  
 しや(珠數玉) (秋) すべたま。  
 しや(朱節) (秋) ちようやう。  
 しや(首陀) 天然の種族の名にて、農民を云ふ。  
 しや(衆道) 男色のこと。  
 しや(酒中花) (春) 山吹の葉の心を彩り、花、其他種々の形に作り、小楊子ほどの細さに縮めたるを、水に浮むれば聞く玩具。元祿以前の頃よりありしものにて後世江戸淺草の名物となる。酒中花や見の唐土のよし野川 青雲。玉ゆんせん(朱陳村) 支那、徐州古豊縣の一村落の名。朱と陳の兩姓相婚姻して、

しや

淳朴の風太古の民の如し。白樂天の古詩よく其様を評す。  
 しや(柱杖) 能狂言の名。  
 しや(出家落) 僧侶の墮落したるをいふ。  
 しや(十哲) じつてつ。  
 しや(酒徳頌) 晋の劉伯倫が酒の徳を陳べ、天地を歎しと放言せし文章。  
 しや(朱買臣) 後漢の人、始め窮を構りて書を讀みしが、終に武帝の大臣となる。(夜の錦の條参照)  
 しや(首尾) 連句の一體。表裏各六句を以て一巻をなすもの。多く神社の本納、賀儀などに行ふといふ。  
 しや(入木道) 書法の道をいふ。  
 しや(須彌山) 佛法に云ふ極大の山の名。日月も此陰に入れば暗黒となること云ふ。蘇迷嵐山(ヤマト)  
 しや(春鶯) (春) 鶯の聲に諸曲の名。國春鶯鳴樂屋は谷の戸口かな 春清。  
 しや(淳于髡) 支那戰國時代齊に仕へ大夫たり。滑稽にしてよく辯せしこと云ふ。  
 しや(春榮) 宇治橋の合戦敗れ増尾種直、弟の捕はれしを聞き、敵中に至り、

しやん

弟に代らんとす、弟春榮は兄を家人と言做して連れしめんとす、兄弟死を争ひ遂に兩人共に斬られんとする時、助命の使者來りて喜ぶ節の諸曲。  
 しやん(戴春燕) (春) 古へ支那にて、立春の日、綵(イ)を剪りて燕の形を爲り、頭髮に戴き、「宜春」の字を書して門戸に貼する俗。綵燕。國花よりしわきて、さしの燕哉 貞兼。  
 しやん(春郊) (春) 春の野外をいふ。  
 しやん(春寒) (春) 餘寒。  
 しやん(春歸) (春) 三月の異名。  
 しやん(春菊) (春) 高麗菊をいふ。秋種を下し、其若菜は冬春の間食用とす。春菜を出し三月梢に白花を開く、單葉の菊花に似たり。高麗。國辻堂や高麗菊のつかみさし 雅因。  
 しやん(春季皇靈祭) (春) 春分の日(新暦三月廿一二三日頃)宮中にて歴代の皇靈を祭り給ふ式。  
 しやん(春興) (春) 新年、俳諧をなすもの集り、其吟味を板行して知人間に贈答すること、之を春興の句といふ。國今朝見れば句にてはなし春の興 沾徳。  
 しやん(春興) (春) 野遊と同じ。漢詩



しゆんけん

なごより出し語。  
 しゆんけん(俊寛)俊寛僧都、鬼界島にて康頼、成経が救免に遇ひて歸らんとするとき、俊寛一人取残さるゝを哀む筋の謡曲。  
 しゆんけん(春桂問答)王権が春桂、花なきし桃李に優るといふことを作りし詩題。  
 しゆんけん(鵝月)(夏)五月の異名。  
 しゆんけん(順檢)毛見のこと。  
 しゆんけん(菘菜)(夏)メナハ。  
 しゆんけん(菘菜)妻に愛溺し、爲に其妻の死を早め、妻亡き後落膽して死せし人。  
 しゆんけん(荷子)戦國時代の人、齊に仕へ後、春申君に知遇し楚の蘭陵の令となり、後罷められて家居し、治世を憤りて荷子數萬言を著す。治國を説き人性を論じ、頗る老莊を排斥す。  
 しゆんけん(春社)(春)春の社日。  
 しゆんけん(俊美坊)名は重源。仁安二年入宋して後、漢空上人の弟子となり、後白河法皇の勅により、南都東大寺大佛殿の再建を勸進す。  
 しゆんけん(春色)(春)春の色。  
 しゆんけん(春曙抄)清少納言の枕双紙を季吟の注釋せし書。

しゆんすゐ

しゆんすゐ(舟水)名は朱熹、明の人。明末の亂を避て我國に來り、水戸光圀に聘せられて儒官となる。天和二年歿す。  
 しゆんすゐ(俊成)藤原氏。崇徳、後鳥羽の二朝に歴仕す。世に五條三位と呼ぶ。基俊の門に入り和歌に名あり。常に桐大桶を抱きて歌案せしといふ。  
 しゆんすゐ(春星忌)(冬)蕪村忌。  
 しゆんすゐ(俊成忠度)平忠度を討ちたる岡部六彌太といふもの、忠度の自筆の短冊を持ちて都なる俊成卿の許に至りしに、忠度の現れて妄執を物語ることを作りし謡曲。  
 しゆんすゐ(春抄)(春)三月の異名。  
 しゆんすゐ(順筆入)(春)筆入。  
 しゆんすゐ(春盤)(春)支那の古俗、立春の日に葱、蒜、薑、菘、芥、芋等の五種の生菜を食すること。之を盛るを五辛盤といふ。迎新(あけ)の音の通るを祝するなり。生菜。菜盤。國菜盤に百事の成らん願しあり。李上。  
 しゆんすゐ(春分)(春)二十四氣の一。  
 しゆんすゐ(俊惠)源俊賴の子。出家して俊惠法師と云ふ。歌に名あり。  
 しゆんすゐ(朱明)(夏)夏の異名。  
 しゆんすゐ(蓮木町)山城國伏見の竹田に

しゆんくじし

在り、昔備前町のありし所。  
 しゆんくじし(案樂御所)天正十四年、豊臣秀吉が京都一條二條の間の地に築きし邸宅、華美を盡し時人呼て案樂御所と云ふ。  
 しゆんくじし(壽皇品)法華經第十六の卷。  
 しゆんくじし(案寮)寺院にて役僧の居る所。  
 しゆんくじし(手爐)(冬)てあぶり。袖籠。圓唯が子ぞ手爐の布圍の唐錦。蝶夢。  
 しゆんくじし(櫻欄花)(夏)一にスロ。暖國に生ず。幹頭枝なく團扇の如き葉を叢生し、皮に毛絲あり、夏黄白色の花穂をなし魚類の卵塊の如し、之を櫻欄といふ。國放參の鐘にこぼれぬ櫻欄の花一扇。  
 しゆんくじし(頌)唱ひ賞する詞をいふ。佛家にほしゅうといふ。  
 しゆんくじし(尉)年寄たる翁の能面をいふ。小尉、笑尉、朝倉尉、大忍尉、小忍尉、名荷、忍尉、驚忍尉等あり。  
 しゆんくじし(夢門冬)(夏)バクモンドウ。  
 しゆんくじし(羅履)唐の玄宗帝の夢中に現れて惡鬼を退治し、國を守らんと言ひし人。又、此事を作りし謡曲の名。  
 しゆんくじし(畫鍾履)(夏)五月五日、支那の俗に、鐘冠の血に朱を交へ、鐘履の像

しゆんけん

を畫き門戸に貼れば邪疫を祓ふといふこと。  
 しゆんけん(松花堂)昭業(ヤウリ)を見よ。  
 しゆんけん(昇仙橋)支那、蜀城の北に在り、司馬相如、嘗て此橋に題して、大丈夫騎馬の車に乘らずんばまた此橋を過さらずと書きしと云ふ故事あり。  
 しゆんけん(勝餅)(冬)五條天神参りを見よ。國割當て、多き家内や勝の餅。  
 しゆんけん(松風會)(秋)九月廿六日。攝津東成郡新清水の茶亭浮瀨に、芭蕉翁の歿前に書殘し、「松風の軒をめぐりて秋くれぬ」の一軸あり、其認めし日を紀念とし、浪花の文人墨客、浮瀨に會すること。國時雨まで籠りあかさん松風會 月居。  
 しゆんけん(勝曼登)(夏)六月一日、大阪四天王寺西門の西北、勝曼院古へ聖徳太子が勝曼經を講じたる道場)の本堂曼曼明王の開帳あり、参詣群集す。曼曼参りといふ。國一群は島原者か勝曼會 葛古。  
 しゆんけん(冬)うたがけ。  
 しゆんけん(松露)(秋)松樹ある邊の砂中に生ずる茸、形圓く褐色にして、春と秋に生ず。食へば香氣あり。參露。(俳

しゆんけん

語には一般の蒲と同じく秋季とす)國住の江の小貝にまじる松露かな 其則。  
 しゆんけん(如雨露)圓庭などに使用する水撒器のこと。  
 しゆんけん(松露飯)(秋)きのこ飯。  
 しゆんけん(承和色)(秋)黄菊をいふ。仁明帝の承和の號より出づ。(そがきくの條参照)  
 しゆんけん(初夏)(夏)四月の異名。  
 しゆんけん(暑氣中)(夏)夏の暑氣に侵されし病。夏まげ。  
 しゆんけん(暑氣見舞)(夏)暑中見舞。  
 しゆんけん(古へ支那にて用ゐし樂器。方二尺四寸の樹方の匡に椎柄を立て、之を左右に動して音を發せしむるもの。本とけんひに種(蜀犬吠日)蜀の山は高くして日を見ること少し、故に日出れば犬吠て吠ゆるといふ。人の見聞狭きに譬ふ。  
 しゆんけん(暮收)(秋)秋の異名。  
 しゆんけん(織女)(秋)七夕の女星。(異名)天孫。星織。天織。天織。たなげたつめ。としし妻。織姫。横姫。女七夕(ワタ)。七夕の七姫をも見よ。  
 しゆんけん(燭奴)人形が燭を捧げるやう

しゆんけん

作りし燭臺。  
 しゆんけん(續命繆)(夏)長命縷。  
 しゆんけん(所化)弟子齋のこと。  
 しゆんけん(且月)(夏)六月の異名。  
 しゆんけん(如月)(春)二月の異名。  
 しゆんけん(如願)(春)支那古代の傳説に、商人區明といふもの、彭澤湖といへる所を過ぎ、青洪君の婢女如願を得、商人の求むる所如願悉く之を致し、が、一年の元且に如願起ること曉く、商人怒て之を打つ、女願腹中に走入て遂に還らず。後人、元且に細繩にて偶人を爲り、囊掃の中に投じ、令如願と呼びて之を吊ふといふ。國さく起て人形作る如願哉 蟹水。  
 しゆんけん(庶子)嫡子以外の子、又は妾腹の子を云ふ。  
 しゆんけん(所司)室町時代にありし侍所の次役の稱。  
 しゆんけん(處士)官に仕へぬ士をいふ。  
 しゆんけん(諸司奏)(春)元日節會の時、陰陽寮より七曜御膳の案を奏し、主水司より水櫃(みづか)を奏し、内膳司より腹赤(はらか)の贊を奏し、又、元日卯日に當れば大舍人寮より卯杖を奏す。七曜御膳以下各條を見よ。







本名のまつ



結りあり。  
 白及種  
 花の  
 数奇屋  
 成 瓜  
 夕。  
 本名のまつ (芝  
 蘭室) 芝蘭  
 は香高き草にて、よき朋友と交るの喻  
 にいふ。  
 白藻 (毒) 海草、岩上に附生し、  
 状、脆の如く長さ尺餘、淡紫にして晒せ  
 ば白し、酢に浸して食ふ。引沙の石  
 を離れぬ白藻かな。  
 白桃 (毒) 桃の一種、白花なる  
 もの。 櫻桃。 園交へ折つて白桃く  
 るる嬉しさよ。 蕪村。  
 白井 (毒) 知賀國石川郡にある山。雪  
 の名所。  
 白木綿 (白帯をいふ)。  
 白井 (毒) 播州島下郡に在る地。蟹の  
 名所。  
 白尾蟹 (毒) 鱒尾蟹。

白柳 (毒) 三月二十八日、二  
 柳庵桃居 (不二庵、三四坊といふ、加  
 賀の人、希因門の俳人、享和三年歿) の  
 忌を修すること。 二柳忌や京と瀨  
 華の友の敷。 成務。  
 白言 (後言) 其人の居らぬ所にて其人  
 の上をいふこと。  
 紫羅馬 (紫羅馬) 晋の王濟の乗馬をい  
 ふ。 濟嘗て連乾の障泥 (障泥) を附け水を  
 濟らんせしに、馬渡らず。 濟之を取  
 去らしめしかば即ち渡りしといふ。 馬  
 の障泥を惜むことをよく知りしを以て  
 濟が馬癖の名高し。  
 馬の尻尾の邊にかけて結ぶ  
 組紐。 總なごを飾に下げしもの。  
 白切 (尻切) 中古の蕪草履の一種。  
 注連 (注連) シメのこ。  
 尻切 (尻切) 武家の小身者、又は田舎な  
 るに於て (汁漉) 武家各自に飯を自宅よ  
 り持來り、菜汁のみを振舞ふ家に行て  
 食すこと。  
 標竿 (標竿) (冬) 雪竿。  
 古今集の「我度は三輪  
 の山本戀しくはさふらひ來ませ杉立て  
 る門」といふ歌より出し語。 訪ふ家の門

のしるしをいふ。 又、大和三輪の社に  
 ありし故事。  
 潘谷 (潘谷) 五條より山科へ出る路をい  
 ふ。 一に若集藏道 (若集) と云ふ。  
 千路 (千路) 名は仲由。 孔子の高弟。 母に  
 至孝にして、嘗て南山の竹自ら直しと  
 孔子に云たる人。  
 白芋 (白芋) (秋) 蓮芋。  
 白瓜 (白瓜) (夏) 蔓草にして葉青く、  
 夏黄花を開き瓜を生ず、色青くして白  
 ばみ、形黃瓜に似て刺なし、揉み又は  
 漬物として食ふ。 越瓜。 あまうり。  
 越瓜の土肌白き葉陰哉。 伊集。  
 徒然草に見えし故事。 盛親法師  
 ある僧を見てシロウツリと名を付けし  
 を、白うりとは何ぞと人の問ひしに、  
 我も知らず。 若し有らば此法師の願に  
 似しものなりと答へしと云ふ。 白うり  
 りはシロウツリにて僧都が誤て言ひしを  
 紛はせしなりといふ。  
 代標 (代標) (毒) アセメリ。  
 代標 (代標) (秋) 夜中、雁が田  
 に下りて眠る時、一更毎に居所を代へ  
 ること。  
 白酒 (白酒) (毒) シロザケの略。  
 四句と六句にて對を取

白

白

白

りつ、形容せし文章。  
 四六店 (四六店) 天明頃、江戸深川の娼  
 家、夜は四百文、晝は六百文にて色を驚  
 ぎしより名けられし稱。  
 白小袖 (白小袖) (秋) 八朔白小袖。  
 白帯 (白帯) (毒) カサネの色  
 目の名。 表白、裏黄。  
 白米 (白米) (毒) 糯米と味噌にて醸じ  
 たる濃き酒。 三月三日の節供に用ゐる  
 もの。 白酒の酒。 しろき。 白酒賣。  
 白酒賣 (白酒賣) (毒) 三月三日の節句  
 に用ゐる白酒を賣ること。 玉川に  
 白酒賣の戻りけり。 其堂。  
 白帯 (白帯) (毒) 次郎左衛門 (毒) かご  
 けたる顔なせし人形。 次郎左衛門と  
 いふ京の舞師、年々江戸に下り公に奉  
 りしといふ。  
 白帯 (白帯) (毒) 狩野元信の俗名。 其  
 事蹟、戯曲、傾城反魂香に作らる。  
 白太夫 (白太夫) (毒) しらたいふ。  
 白足袋 (白足袋) (毒) 白き足袋。  
 白足袋 (白足袋) (毒) ツ、シの一種、白  
 花のもの。 垣なくて妹が住居や白  
 つ、じ。 雁守。  
 白帯 (白帯) (毒) カサネの色

色目の名。 表白、裏黄。  
 白帯 (白帯) (毒) 情の一種。 花白き  
 もの。 白玉帯。  
 白茄子 (白茄子) (秋) 魂棚に供ふる白き  
 茄子をいふ。  
 白帯 (白帯) (毒) カサネの色  
 目の名。 表白、裏スハッ。  
 白比呂 (白比呂) 若狭の國の樵夫、仙  
 人に逢ひ人魚を得て歸りしが、其女之  
 を食し四百餘歳を保らしといふ傳説。  
 白帯 (白帯) (毒) 江戸吉原大門口の改  
 め役人を稱名していふこと。  
 白帯 (白帯) (毒) 瓜の一種、大和  
 奈良地方より出づるもの。 梵天瓜。  
 白帯 (白帯) (毒) 桂葉。  
 白帯 (白帯) (毒) 播津江口の遊女。 古今集に  
 其歌を載せたり。  
 白帯 (白帯) (毒) 百合の白花を云ふ。  
 白帯 (白帯) (毒) 白々々夜の明るを云ふ。  
 白帯 (白帯) (毒) しあくしちと云ふ。  
 白帯 (白帯) (毒) 元三大師忌  
 (白帯) (毒) しをん。  
 白帯 (白帯) (毒) 草の名、春、地に布きて

生じ、葉は互生して邊に鋸齒あり。 秋  
 高さ七八尺となり數百の花、傘狀をな  
 して開く。 淡紫にしてや、青く、形綠  
 菜の花に似たり。 又黄白の異種花あり。  
 異名) おにのし、草  
 炭櫃までさすや紫苑の夕日影。 道  
 産。  
 紫苑 (紫苑) (秋) カサネの色目の  
 名。 表薄色、裏青。 又は表紫、裏蘇枋。  
 又は表スハッ、裏萌黄。  
 す  
 素 (素) 直垂に似たる武家の禮服。  
 大紋を付たるものあり。 素はう。  
 素 (素) 連併の用語。 連句に秋の句  
 を三句、或は五句も續くる内に、月の句  
 なきを云ふ。  
 素 (素) 古へ衣服小器などの仲買又  
 は羅賣して歩行し女商人。  
 素 (素) 酢にて野菜、魚などを  
 和へたるもの。  
 素 (素) うまひ虫。  
 素 (素) かたばみの異名。  
 素 (素) 燕の燕王の臣。 音津をよく



すけり

す。燕の國に谷ありて五穀を生せず、都府律を吹て温氣黍に入り熱す。又、曾て謂せられて賦に繫がれし時、天を仰て哭し、かば、天感じて盛夏霜を降らしたりといふ。

すけり(藜藿) 草刈り男をいふ。

すけり(障月) (春) 一月の異名。

すけり(嵩谷) 高氏、一蝶の畫風を慕ひ、佐脇嵩之の門に入り、別に機軸を出す、淺草堂の頼政の圖、世に名高し、享保頃の人。

すけり(素裏) 連伴の用語。連句の裏に戀の句の一つしなさい。

すけり(子昂) 趙孟頫、松雪と號す、元の人、書畫に於て最も名高し。

すけり(清撰) 琴、三味線など、語なくて靜に振鳴すを云ふ。後世、すががき節にて一種の曲節となり、遊廓にて翠巖中に引き鳴せしと云ふ。

すけり(須賀川) 今の岩代國岩瀬郡に屬す、古へ奥羽街道の驛。

すけり(醉杜鵑) (冬) 生(杜鵑)を醉に和したるもの。國 杜鵑の醉の多きは佐し雨の朝 歡歌。

すけり(透百合) (夏) 百合の一種、花直立して開き白黄紅數種あり、花粉透明にして美なり、東北地方に多し。

すけり(スカン維索) (春) 元日、京都紫野大徳寺にて、維索を祝ふに空腕のみを出すこと。其因詳ならず。

すけり(菅貫) (夏) 茅輪(ワ)。

すけり(菅根島) (春) 維の異名。

すけり(菅根) 長さ、或は亂る、又れしころなどに、いふ枕詞。

すけり(醉貝) (春) からくも貝の蓋をいふ。大き三分にて淡赤色なり、醉を盛りたる皿に入れば沫を出して自ら動く。多く小兒の玩す。國 玉垂に皿もて遊ぶ醉貝哉 旨原。

すけり(晴) 片眼がよく見えぬをいふ。

すけり(冬) カンシキの一種、北越地方にて用ゐるもの。大き三尺餘に至るもあり。

すけり(秋) 鹿の異名。一説に鹿の異名にあらず似我(鹿)の異名と。

すけり(物好) 物好みなること、又好色なること。

すけり(透扇) (夏) 白絹にて振り、透き通るやう作りし扇。中古の制。

すけり(好事心) 風流を好むこと。

すけり(動初) (春) 餅いれを見よ。國 すがせめや五日の風も寒からず 虎周。

すけり

すけり(未黒湯) (春) 燒野の芒の焦げて未黒くなりあるをいふ。國 曉の雨や未黒のすき原 蕪村。

すけり(未黒萩) (春) 燒野の萩なり。(未黒の芒参照)

すけり(典侍) 内侍の次に位する女官の名。

すけり(菅植) (秋) 八月頃、菅を植うること。國 菅植みて雨を待つ夜の門田哉。

すけり(助部) 驛路の人夫不足したることを驛の周圍數里の諸村に之が補充を出す約束ある村をいふ。

すけり(菅笠) 寛文頃行はれし道中明の俗話。

すけり(菅笠) (夏) 關白賀茂詣の行列中、大なる菅笠を擔いで従ふものあるをいふ。

すけり(菅刈) (夏) 菅は茅に似たる草、夏の末刈りて笠、簑等に作る。國 菅刈の濡つ、月に踊るなり 巴亭。

すけり(佐國) 大江の佐國と云ふ者、甚だ花を愛し、詩賦を以て賞せらる。歿後其子、亡父が胡蝶となりて花園に遊ぶと夢み、花房に蜜を塗りて群蝶に供したりと云ふ故事。

すけり(資季) 徒然草に見えし梅梅大納

すけり

すけり(透徹柿) (秋) きやら柿。

すけり(杉菜) (春) 水邊砂地に生ずる草、春先づ葉頭の如き花を出す、之を土筆(ツツ)といひ摘みて食用とす。花終りて杉菜に似たる葉を生ず。國 杉苗に杉菜生そふ荒野哉 白雄。

すけり(杉菜化) (春) 俗説に杉菜は蟻に化すなりといふこと。腐草化して變なるの類にて俳諧には季節とせり。

すけり(杉葉) (夏) 常盤木の落葉を見よ。

すけり(動始) (春) 餅いれを見よ。すがせめ。

すけり(杉原) 播州攝東郡杉原村より産する紙。奉書に似て軟かく薄し。小形なるをコスギ(小杉)と稱す。

すけり(透額) 冠の甲に月形の透しあるものをいふ。十六歳未満の元服者に用ゐるもの。

すけり(好者) 物好なる人。又は好色の人をいふ。

すけり(透綾) (夏) 生絹にて薄く織れるもの。夏の衣に用ゐる。

すけり(數寄屋) 茶室を云ふ、物好みに建てし茶屋の義。

すけり

すけり(杉燒) (冬) 杉の香を魚肉などに移さんため、杉板の上又は杉箱にて肉を焼くこと。國 杉燒をして宿もるやはたら妻 青々。

すけり(醉葉) 青葉に酒酔を加へ、二十日許れかけて、納豆の如く糸を引くを、飯の上にて載て食ふもの。京都加茂の里人これを造りて賣る。又木曾御嶽山の名物なり。

すけり(酸漿賣) (春) 三四月頃、京都の町に酸漿を賣歩くもの。國 朝々や此里過ぎて酸漿賣 青々。

すけり(酸漿漬) (冬) 京都加茂附近の家にて作る酸漿、酸味ありて京人好み食ふ、冬漬けて、三月頃出し食ふ。

すけり(深火) 海士などの焚く芥火をいふ。

すけり(蠶虫) (夏) 團圓の土中に生ずる虫、形芋虫の如く色白く、首赤し草根を食ひ苗を害す。國 地虫(シ) 蠶。蠶を眞直に現はしたる蠶又の名。

すけり(醉蕪) 蕪を造り、こむ蕪をいふ。

すけり(未黒野) (春) 燒野の草の梢の黒さを云ふ。國 すがる野やこほるはばかり星の間 長翠。

すけり

すけり(未黒湯) (春) 燒野の芒の焦げて未黒くなりあるをいふ。國 曉の雨や未黒のすき原 蕪村。

すけり(未黒萩) (春) 燒野の萩なり。(未黒の芒参照)

すけり(典侍) 内侍の次に位する女官の名。

すけり(菅植) (秋) 八月頃、菅を植うること。國 菅植みて雨を待つ夜の門田哉。

すけり(助部) 驛路の人夫不足したることを驛の周圍數里の諸村に之が補充を出す約束ある村をいふ。

すけり(菅笠) 寛文頃行はれし道中明の俗話。

すけり(菅笠) (夏) 關白賀茂詣の行列中、大なる菅笠を擔いで従ふものあるをいふ。

すけり(菅刈) (夏) 菅は茅に似たる草、夏の末刈りて笠、簑等に作る。國 菅刈の濡つ、月に踊るなり 巴亭。

すけり(佐國) 大江の佐國と云ふ者、甚だ花を愛し、詩賦を以て賞せらる。歿後其子、亡父が胡蝶となりて花園に遊ぶと夢み、花房に蜜を塗りて群蝶に供したりと云ふ故事。

すけり(資季) 徒然草に見えし梅梅大納

すけり

言のこと。曾て具氏宰相中將に逢ひて、君の問ひ給ふこと何事なりとも答へんといひ具氏に馬の蹄間をかけられ答に詰りしといふ。

すけり(祐經) 工藤左衛門祐經をいふ。曾我物語中の人物。

すけり(資朝) 日野中納言をいふ。靜然上人の腰曲りしを見て、西園寺内大臣は尊み敬しに、資朝は老たる計りと嘲り、むく犬の老しを内府へ贈りし事、徒然草に見ゆ。此編の事蹟太平記に精し。

すけり(祐成) 曾我十郎祐成をいふ。其事蹟、多く戯曲、演劇等に作らる。

すけり(祐成) (秋) キリギリス。

すけり(祐信) 西川氏、自得史、又は文華堂と號す。浮世繪を以て名あり。八文字屋本等の双紙に描く、美人細細の態、極めて婉柔なり。享保頃の人。

すけり(菅宮祭) (夏) 四月中旬日、近江國野州郡小津神社(宇賀御魂を祭る俗に小菅(ツ)の宮と稱す)の祭禮。國 祭禮の笠も揃ふや菅の宮 重道。

すけり(祐善) 能狂言の名。

すけり(助六) 京に住みし任俠。島原の遊







すずめ



さいひ全く  
相反せりさ  
○鈴虫の  
鳴やころこ  
ろ露の玉  
曉寒。  
すずめ「雀」  
瓜(秋) 漢などの中に自生する蔓草、  
夏五瓣の烏瓜に似たる白花を開き、八  
月頃、四分程の青き實を結ぶ。  
すずめがれ「雀」初春の頃、諸草の芽  
の生じて漸く雀の隠れ得る位になりし  
しをいふ。○雀一畝雀のたけにな  
りにけり。  
すずめ「雀子」(春) 雀の子。  
すずめ「雀交」(春) 雀交む。  
すずめ「雀不知」(秋) 七月の頃、刈る  
稲をいふ。藁を採る爲にのみ作る田に  
して雀の来らざる故にいふ。  
すずめ「雀餅」(夏) 攝津福島邊にて製  
る餅。江朝といふ魚の腹に飯を加へし  
もの。フクラ雀の形したればいふ。○  
雀の葉を此君と申せ雀餅 蕪村。  
すずめ「すずめ」(秋) 七十二候の一、九月節の第二  
候。此候に至れば雀が海中に入りて給

すずめ

なるさいふ。○給こなりて音を鳴  
く雀かな 芭蕉。  
すずめ「雀」(冬) つみ。  
すずめ「雀交」(春) 雀の交尾は春に多  
し。○雀交る。○雀中や雀のさかる  
藁庇 紫苗。  
すずめ「雀子」(春) 二三月の頃、雀の卵  
化したる子。○ふくら雀。○雀子や  
並びあつし黄なる嘴 召波。  
すずめ「雀巢」(春) 薄壁や雨夜を語  
る雀の巢 奇淵。  
すずめ「雀」(秋) イラ虫の巢をい  
ふ。多く秋の頃、柘榴の枝に造り、其  
色白乳の如く、身を其中に隠す、後凝り  
て卵の如く固り長さ五六分、淡黒色に  
して堅に白紋あり。其鱗は雀好みて食  
ふ。○雀の雀。  
すずめ「雀」(秋) 雀のたこ。  
すずめ「雀食」(冬) 時鳥の歸り運  
れて翌年まで雀に養はるゝものをい  
ふ。  
すずめ「雀宮」下野日光街道に在る驛。  
すずめ「雀」(雀爲給) (秋) 雀大水に  
入つて給こなるを見よ。  
すずめ「雀焼」餅を割きて串にさして焼  
き、醬油を附けしもの。

すずめ

すずめ「硯洗」(秋) 七月六日、七夕に  
供ふべき歌を書いたため、硯及机を洗ひ  
淨むること。北野御手水の神事に倣ふ  
なりといふ。○机洗ふ。○硯洗ふ日  
や濁りたる御漢水 白清。  
すずめ「硯蓋」料理を載する大なる漆  
盤にいふ。  
すずめ「漫」みだりに、心なくの意。  
すずめ「裾漣」衣又は紐の糸の末の方の漣  
き染色をいふ。  
すずめ「巢」四月に捕りたる雀をい  
ふ。又此頃、鷹の樹梢に巢籠るをいふ。  
○分入れは巢鷹の聲や雄上川 漢化。  
すずめ「集鳴」多く集りて聲を發するこ  
と。  
すずめ「巢立鳥」(春) 鳥の雛の巢より  
飛立つこと。○窠も心置くかよ巢立  
鳥 一茶。  
すずめ「兼建」雑作せぬ家屋のこと。  
すずめ「懸懸」山林の氣より生ずる妖怪な  
りといふ。  
すずめ「籠揚」(春) 越後は雪國なれば  
暮春迄、門々に籠を掛け、雪を防ぎ置  
くも八十八夜の頃より之を掲げて商初め  
をする事。  
すずめ「籠具」(春) アサリに似て大な

すずめ

る具、殻の表に籠の如き條あり。○  
籠具雪の高濱見し人か 乙二。  
すずめ「籠」 籠り曲ること。  
すずめ「醉造」(夏) 六月の頃、酔を醸造  
すること。○酔造るや細々として落  
る花 青々。  
すずめ「素波」盗賊のこと。○水波。  
すずめ「捨扇」(秋) 秋冷至りて扇の不  
要になれるをいふ。○扇置く。忘扇。  
秋の扇。破扇。○捨扇。○草の月  
に忘れそめしや誰が扇 月居。  
すずめ「捨扇」(秋) 捨扇と同じ意な  
り。○扇捨つ。○扇。○花鳥  
の書も何にせん捨扇扇 ともよ。  
すずめ「捨鐘」時の數に入れぬ鐘の音。  
鐘をつく前に三點鐘くもの。  
すずめ「捨頭巾」(春) 春暖になりて不  
用となりし頭巾をいふ。○とかくし  
て雁も歸るや捨頭巾 萍花。  
すずめ「素手天節」元祿頃、江戸吉原に  
て流行したる俗曲。  
すずめ「捨鉢」自暴自棄なること。  
すずめ「捨人」隠者のこと。  
すずめ「捨札」罪人を所利するさき立つ  
る高札。  
すずめ「捨鞭」竹或は柳などの枝を假に

すずめ

鞭に用ゐること。  
すずめ「冬」西洋室に用ゐる燻爐をいふ。  
○退出を更に燻爐に語る故 悟空。  
すずめ「崇徳帝御忌」(秋) 東山安  
井祭。  
すずめ「砂草」(春) 深山に生ずる草、蔓  
細くして花なく春、莖に黄粉を生ず。  
○盤草。糸かつら。三味線草。海金沙。  
すずめ「麗麗」能狂言の名。  
すずめ「周防」平福平の女、後冷泉院の女  
房にして、和歌に名あり。  
すずめ「蘇枋」熱帯地に産する木材を煎じ  
て黄色の染料としたるもの。  
すずめ「素袍落」主人の叔父の家に使  
したる冠者が酒を振舞れ、刺へ素袍を  
貫ひ、歸途其主人に出逢ひ、正體なく素  
袍を落して、主に拾はるゝことを作り  
し能狂言。  
すずめ「蘇枋衣」(秋) カサネの  
色目の名、表白裏スハツ。  
すずめ「周防殿」板倉周防守重宗を云  
ふ。  
すずめ「蘇枋花」(春) 人家に植うる  
灌木。三月、多粒の如き紫花を開き、  
後二寸餘の平たき莢を結び垂る。藤  
の實に似て中に細子あり。(染料に用ゐ

すずめ

る蘇枋とは異り)。○花蘇枋。紫荊花。  
○一樹の雲や蘇枋の花盛り 里杏。  
すずめ「諏訪湖水」(冬) 信州諏訪湖に  
て、冬季湖水の凍りたる時、諏訪の狐  
先づ渡りてより人馬初めて通す。氷解  
くる頃は狐又、歸り渡りて其後は往來  
せず。○狐先へ狐の渡る氷哉  
一茶。  
すずめ「醉籠」能狂言の名。  
すずめ「洲走」(秋) ヨザラシエアナ。○  
洲走や秋吹く風のれらひ網 四睡。  
すずめ「洲走初賣」(夏) 六月中  
旬、尾張熱田にて洲走(小輪)を初て漁  
し名古屋市中に商ふこと。  
すずめ「諏訪社」信州諏訪郡に在り上  
下二社に分る。諏訪祭の條参照。  
すずめ「數法庭」(秋) 七月七日より十  
三日迄、長門國長府二の宮の社前にて  
行ふ神事。神功皇后が異國にて退治し  
たる、二鬼の首を埋めたりといふ石の  
邊に、數百本の幡をたて太鼓等を鳴ら  
しズバウテイ〜と囃し廻るといふ。  
其意詳ならず。  
すずめ「洲濱」濱邊の洲の凹凸せるより名  
く。丸みつきたる凸形のものをいふ。  
又、其形に作れる壺の名。



すまじり

すまじり(洲蛤) (春) 攝津住吉の洲蛤、多く蛤を産す、漁者之を剥きて升に盛り市に賣る、酢に和へ食ふを美味とす。故に又、醋蛤ともしふ。大阪にて正月多く之を賞美すといふ。

すまじり(洲濱草) (春) 草の名、一穂より叢生し、葉の形スハマに似たり。二月頃、六七瓣の紅白花を開く。|| 韓耳細辛。

すまじり(諏訪祭) (春) 三月中旬日(若は初四日)。信濃國諏訪郡諏訪明神(上諏訪)に健御名刀命、下は下照媛命の祭禮。鹿七十五頭及び魚鳥の肉を供物とするといふ。

すまじり(洲濱鏡) (春) 放下(か)鏡。すまじり(鶯歌)物に驚く時の感嘆詞。そよやの鶯参照。

すまじり(素腹) 石女(スメメ)のこと。

すまじり(翠乾) 物を欲しがりて無心をいふことなり。

すまじり(狹窄若衆) 尻の穴の狭き若衆を云ふ。一説にすまじり(わ)なる若衆をいふ。

すまじり(昴星) 西方の一宿にて列座せる星の名。|| 旄頭星。

すまじり(忍冬) (夏) にんどうの花。

すまじり

すまじり(素引) 弓術にて矢を番はず、弓弦のみを引て姿勢を稽古すること。

すまじり(今俗に) しまじりと云ふ、誘引すること。

すまじり(吸筒) 竹筒を漆にて塗りたる器。酒を入れて携ふもの。

すまじり(下髪) 下髪のこと。

すまじり(滑瓦) (夏) 初夏、地上に布生する草、葉赤く葉細し、六七月頃、葉の間に十瓣の黄花を開き實を結ぶ。|| 馬齒莧。|| 深草の院といはんや滑ひひ正好。

すまじり 先の尖からぬものをいふ。

すまじり(須磨) 攝津國八郡郡の海邊。家毎に廣を軒頭に吊し、名物、磯馴味噌を賣るもの多し。明石に續きて眺望佳絶なり。

すまじり(須磨源氏) 光源氏の靈、須磨の浦に現れて昔を語る事を作りし謡曲。

すまじり(須磨寺) 攝津國八郡郡西須磨にある福禪寺をいふ。仁和年間創建にして、寺前に對面自筆の和歌、青葉の笛等を藏す。

すまじり(須磨御成) (春) 源氏物語須磨の巻に見えし故事。源氏、須磨の浦にさすらしし時、三月初日、己の日に

すまじり

て、浦邊に舟を出し、人形を立て、破したまひしこと。己の日の祓參照。|| 桃ちりて人形浮くや須磨の海 青々。|| 破して心もすまの且かな 徳元。

すまじり(果酒) (夏) 六月に捕ふ蟹をいふ。

すまじり(相撲) (秋) すまふ。

すまじり(相撲) 相撲取のさす黄楊の樹をいふ。元祿の頃、兩國と云ふ力士より始まり、古への角力皆樹をさせしこと云ふ。

すまじり(相撲取) (秋) すまふことり。

すまじり(相撲使) (秋) ことりつひ。

すまじり(相撲) (秋) 古へ相撲の節(相撲會を見よ)を七月に行ひしにより秋季とす。今は東京兩國回向院に一月、五月に大相撲あり(一月場所、五月場所の條を見よ)其他諸國にて祭禮などに多く籠す。|| 角力。すまひ。|| 辻相撲。草相撲。宮相撲。相撲取。小相撲。|| 國のさされて分る、角力かな 孤桐。

すまじり(相撲寒取) (冬) 寒中に相撲の稽古取をすること。|| 寒取。|| 國寒取や霜の淺黄を踏死し 他力。

すまじり(相撲草) (秋) 原野の濕地に生する草、葉地に布きて叢生す、秋寒を起て青白色の穂を出す。其莖長さ六七寸、

すまじり

甚強健なるを以て小兒、糖を支えて引合ひて戯とす。|| 力草。ヒシバ。相撲取草。|| 國 戦ぐたびとり並びけり角力草 三翁。

すまじり(角力草) (冬) 十二月廿日、江戸回向院の角力などにて翌年の勳進角力の興行人を抽籤にて定むること。

すまじり(相撲五月場所) (夏) 五月場所。

すまじり(相撲取) (秋) 相撲を業とする者。|| すまふ。すまひことり。|| 國 老にきと妻定めけり角力取 召渡。

すまじり(角力取草) (秋) 相撲草(スマツ)。

すまじり(相撲夏場所) (夏) 五月場所。

すまじり(相撲節會) (秋) すまふ。

すまじり(相撲節會) (秋) すまふ。

すまじり(相撲香場所) (春) 一月場所。

すまじり(相撲會) (秋) 古へ七月、相撲の節と稱し、宮中に諸國の力者を召して相撲を行はせ給ふ式。七月十六日、左右の近衛を以て相撲を召す、之を部領使(ツカヒ)といふ。廿六日、内取(ウチ) (下習しのこと)あり。主上仁壽殿に出御し左右の相撲人、横鼻(ヨコノビ)に狩衣袴をきて

すまじり

勝負を行ふ。廿八日、召合せ(眞の取組なり)あり。天皇南殿に出御し、大將、相撲の奏(取組の書付)をとり、又廿九日には拔出(デ)とて前日の勝者、及不参の者をすくりて勝負を行ふ。

すまじり(炭) (冬) 冬季多く用ひれば季とす。|| 炭火。|| 炭焼。炭賣。炭取。白炭。輪炭。切炭。割炭。管炭。四方炭。扇炭。櫻炭。小野炭。池田炭。熊野炭。獸炭。炭頭(カ)炭。炭俵。|| 國 物思ひあれば崩る、炭火かな 櫻堂。

すまじり(炭賣) (冬) 炭を荷ひて賣る人。|| 賣炭翁。|| 炭賣の己が妻こそ黒からめ 重五。

すまじり(炭頭) (冬) 炭を焼くに末だ焼け盡さずして煙をいふ。一説に炭の大なるものをいふ。|| 國 煙りしは香をとめぬるや炭頭 宗方。

すまじり(炭意) (冬) 炭を焼く煙をいふ。|| 國 炭がまに手負の猪の倒れけり 凡光。

すまじり(角倉意庵) 天文中、明に渡りて歸り、時の皇帝の病を療せし醫者。

すまじり(墨染) (春) 山城伏見深草にある櫻樹、寛平三年、堀河大臣昭宣公薨せし時、上野の岑嶺が哀傷したる和

すまじり

歌のため墨染に咲きしと云ひ傳ふ故事。|| 墨染や櫻に遊ぶ冬の峰 虛明。

すまじり(隅田川) 江戸、本所、淺草の堺を流るる河。豊島川の下流にて宮戸川、後草川と呼ばる大川と云ふ。

すまじり(隅田川) 梅若丸の母、狂女となりて其子を尋ねることを作りし謡曲。梅若忌參照。

すまじり(炭俵) (冬) 炭を入る、俵。|| 國 炭俵ますはの清見付たり 藤村。

すまじり(炭俵) 元祿七年、野坂、孤屋、利牛が編みし正風の句集、七部集の一。

すまじり(角頭巾) (冬) 錦のつきたる頭巾をいふ。寛永頃流行す。|| 國 盗人に似た人行くよ角頭巾 青々。

すまじり(炭取) (冬) 炭を入る、器。籠、箱又は瓢などにて作れるもの。|| 炭斗。烏府。|| 國 炭取に炭の音する炭哉 旨原。

すまじり(墨繩) 工匠などの材を挽くに直線を附するため用ふる器。

すまじり(墨直) (春) さりりんじすみなほし。

すまじり(墨塗) (春) だてのすまひり。

すまじり(墨塗女) 能狂言の名。

すまじり(住江) 攝津住吉のこと。



すみのくろふのり

すみのくろふのり(角倉船乗始)(春)正月二日、京都河原町二條の角倉屋敷(大井川の水利を修めし了以の末孫の居宅)にて、邸前なる高瀬川に船を出し船乗始の式を行ひ、供物の饅頭を群集に撒く。

すみのくろふのり(角倉與市)名は光昌、素庵と號す。了以の男、京嵯峨に居す、光悅流の書を著す、世人呼て嵯峨流と云ふ。又古典を上木し嵯峨本と稱す、寛永九年歿。

すみのくろふのり(角倉了以)醫家、吉田宗柱の子、徳川家康の命を受け巨船を造り安南に通商す。又、山城保津川の水利を収め鴨川、富士川の通路を開く等、功頗る多し、慶長十九年七月十二日歿。

すみのくろふのり(墨袂)墨染の衣の袂。僧衣のこと。  
すみのくろふのり(炭火)(冬)炭に熾りし火。圖炭の火に峯の松風通ふなり。一茶。  
すみのくろふのり(角前髪)元祿頃、少年の前髪を角の立たるやうに結ひしもの。  
すみのくろふのり(炭焼)(冬)炭を焼くを業とする人。圖炭焼の一人ぞあらん職のきは其角。  
すまよし(住吉)住吉廣通より出し蓋の流

すまよし

備。土佐派より別れて代々、將軍家の御齋所となる。具慶廣澄は廣通の子にして有名なり。

すまよし(住吉)攝津の南端に位し海に面す。東西三里南北一里餘。住吉神社は、底筒男、中筒男、表筒男の三神を祀り、神功皇后の創建なり。其鳥居、高燈籠等は共に高名のものなり。年中の祭祀甚多し。

すまよし(住吉)四月上卯日、攝津住吉社の祭禮。昔時、大神垂跡の卯日に當る故祭日とす。神輿渡御の時、神官等各、檀木にて作りし卯杖を手にし供奉す。之を卯の葉、又はリス草といふ。



(圖之女植田吉住)

すまよし(住吉御田植)五月廿八日、攝津住吉社の祭禮。昔時、大神垂跡の卯日に當る故祭日とす。神輿渡御の時、神官等各、檀木にて作りし卯杖を手にし供奉す。之を卯の葉、又はリス草といふ。

すまよし(住吉御田植)

を立て武者多勢、弓箭を以て戦ふ事なす。圖早乙女やこれらし神のつかはしめ 東人。○飾笠に夕日さしたる御田植な 別天樓。

すまよし(住吉御田植)六月晦日、攝津住吉社にて御輿を修する式。神輿の御旅所に幸し、夜に入りて還幸す。堺の市民手毎に炬火を持して之を送る。此火を灘、兵庫、須磨、明石、泉州等の地より遙に神幸を拜するの目標とす。之を住吉の火替と云ふ。

すまよし(住吉御田植)大江丸。國火を替る堺の町や秋の風。大江丸。すまよし(住吉御田植)住吉の潮湯。

すまよし(住吉御田植)正月十三日、攝津住吉社にて行ふ弓始の式。御輿の導師、神前の講終りて、射手、樂の的に弓十番を射、後酒餅を賜ふ。これ泰平祈禱の爲なり。參詣の人、竹馬と毘布を買って土産とす。住吉御結禱(元々)。住吉おんたらし。圖松晴れて住吉の御弓神事かな 樂南。○鶴雁しよらす住吉おんたらし 竹雅。すまよし(住吉御田植)九月晦

すまよし(住吉御田植)

日、攝津住吉社にて神輿、假宮に渡御し、御輿を修し、出雲石と稱する所に神官等出雲を遙拜す。之を神送といふ。(諸社より一日早し)。

すまよし(住吉相撲會)(秋)九月十三日、攝津住吉社にて相撲の神事を行ひ神輿を出す。社内に賣の市あり。後世相撲會絶え賣の市のみ行はる。賣の市の條参照。

すまよし(住吉大嘗會)(春)三月八日、攝津住吉社にて行ふ大嘗會。神輿にて舞樂を奏す。三月會とも云ふ。

すまよし(住吉踏歌節會)(春)正月三日、攝津住吉社にて行ふ神事。戌の刻、樂人、練童集り舞をなして後、常持を呼び、幣の中の餅を數へ退出し、樂人練童等「蓮田」「田中」「井戸」等の催馬樂を誦ふ。

すまよし(住吉沙干)(春)三月三日、攝津住吉の浦にて諸人沙干持を行ひ、同所の海邊甚賑ふ。圖上り帆の浜路はなれの沙干哉 去來。  
すまよし(住吉潮湯)(夏)六月十四日、諸人多く攝津住吉社に詣り、住吉浦

の潮水に浴して百病平癒を祈る。靈驗多しといふ。俗に之を泥湯と云ふ。又は住吉の神輿洗と云ふ。圖月かけて永居の浦や沙干あみ 風清。

すまよし(住吉白馬神事)(春)正月七日、攝津國住吉社にて神馬の乗始をなし、神主並に伶人社僧之を勤むる式。

すまよし(住吉御使)(春)二月一日、住吉の神官、大和國叡火山の山口神社に至り、山上の壇を取て歸る式。五日、此壇土にて造りし平蓋を神供に用ひ、六日其御供を煎和して諸人に與ふ。之を御唐煎(カラ)といふ。

すまよし(住吉火替)(夏)住吉御使(カラ)。

すまよし(住吉評定始)(春)正月十一日午刻、攝津住吉社、正印殿にて神官等集り、同社年中の諸般の儀式を評定する。

すまよし(住吉御使)

すまよし(住吉御使)源氏住吉に詣づる折、端なく明石上に逢ふといふ筋を源氏物語によりて作りし謡曲。  
すまよし(住吉御唐煎)(春)住吉壇使を見よ。  
すまよし(住吉御結禱神事)(春)

住吉御弓。  
すまよし(住吉御輿洗)(夏)住吉の潮湯に同じ。

すまよし(住吉虫拂)(秋)七月七日、攝津住吉社にて神官、内陣より神輿を出し、虫拂して再び宮を封する式。

すまよし(住吉物語)平安朝時代に作られし物語の名。今傳はるものは別種なりといふ。

すまよし(住吉踊)攝津住吉社の附近の者、白衣に腰衣を着し、菅笠を紅の絹の絹を付たるを戴き、團扇を持ち、歌を誦ひて踊ること。例年、五月廿八日、出見の濱に集りて踊り、後四五人一組となりて諸方に出づ。圖あめがした傘に住みよし踊哉 徳元。



(踊吉住)

すまよし(住吉御使)



すみれ

すみれ「葎」(毒) 野生の小葎、葉は細長く...

すみれ「葎」(毒) すみれ。すみれの「葎野」(毒)...

すみれ「葎」(毒) カサネの色目の名、表葉、裏葉...

すみれ「葎」(毒) 短くして肥えたるを云ふ。すみれ「角帽子」...

すみれ「葎」(毒) 李の花をいふ。李の花を見よ。...

すま

すま「菓守」他の卵の字へりし後なほ、卵化せざる卵をいふ。

すま「餅」食物の腐りしを云ふ。すま「籠」...

すま「籠」旅行などに用ゐる竹行李のこと。すま「籠」...

すま「籠」古へ、山藍、月草などの植物を衣に摺りて染めたるもの。

すま「籠」近江坂田郡香場の附近にして中仙道中の隙所なり。

すま「籠」しゆるの花。すま「籠」まつすぐに立てる杖をいふ。

すま「籠」正月元日、鯛を食膳に供ふこと。...

すま「籠」楚の項羽が乗馬の名。すま「籠」...

すま「籠」特衣に似たる一種の装束。すま「籠」...

すま「籠」陸前松島郡頭にある寺院。...

すま「籠」伊達政宗の像を置きけり。...

すま「籠」(籠) わいも。籠垂下につけて露うくするさかな。...

すま「籠」(籠) あめんぼう。すま「籠」...

すま「籠」(籠) 瓶を懸くる具。柱の如くにて、形、琵琶のやうなるもの。

すま「籠」(籠) 飯を柔く炊き水に洗ひて冷し食ふもの。...

すま「籠」(籠) 水飯に漬漬ゆかし二日酔。...

すま「籠」(籠) 遠望の山色の青きをいふ。又山腹、山裾などなりともいふ。

すま「籠」(籠) 五月の異名。すま「籠」...



(籠 睡)

すま「籠」(籠) 池沼に生ずる水草、六月頃、白花を開き、...

すま「籠」(籠) 花を開き、晝は水面に出で夜は萎みて水に没す。

すま「籠」(籠) 花葉共に蓮に似て形小く、全體に鬚毛を被る故にヒツシ草の名あり。

すま「籠」(籠) 能狂言の名。すま「籠」...

すま「籠」(籠) 宋の歐陽脩が山すま「籠」...

すま

すま「籠」(籠) 北野宇堂祭。すま「籠」...

すま「籠」(籠) 瓜の一種、花葉共にマクハ瓜に似て秋、瓜熟す、...

すま「籠」(籠) 水瓜多味甘し。果として生にて食ふ。...

すま「籠」(籠) 西瓜。西人のころがして行く水瓜かな。...

すま「籠」(籠) 彼岸の頃、西瓜の種を蒔くこと。...

すま「籠」(籠) 西子。すま「籠」...

すま「籠」(籠) 水官解厄(冬) 下元(ツケ)。...

すま「籠」(籠) 蜀の諸葛孔明が魏を討つ軍を出す爲め、...

すま「籠」(籠) 後主に奉りし表文。前後の二表あり。

すま「籠」(籠) 古へ、近衛の舎人の兵仗を帯し供奉するもの。...

すま「籠」(籠) 上皇、攝政、關白、大臣以下、...

すま「籠」(籠) 衛門兵衛の骨、佐等までに従ふ。...

すま「籠」(籠) 其人數は官級により多少あり。後世、俗に矢大臣、...

すま「籠」(籠) 左大臣とて、羅人形などの東裝して弓矢を賣ふものをさして云へり。

すま「籠」(籠) さつきのかみ。すま「籠」...

すま「籠」(籠) 佛説に日本の神を佛の生れ變りたるものと附會していふこと。

すま「籠」(籠) 佛の生れ變りたるものと附會していふこと。

せ

せ「夫」女より男を親みて呼ぶ稱、又、兄を云ふ。

せ「世阿彌」能樂家。結崎清次の男、元清といふ。...

せ「海馬」かいばをいふ。其牙齒を薬用とし又は彫刻に用ゐる。

せ「星河」(秋) あまのがは。

せ「世阿彌」能樂家。結崎清次の男、元清といふ。...

例ば天照大神の本地は天然の大日如來にして、此地に垂跡して形を換えしといふ如し。

すま「籠」(籠) 葉森に似て厚く末圓く、莖頭に六瓣の白花を開く、香氣甚高し、...

すま「籠」(籠) 水中に没し置けば能く長ず。...

すま「籠」(籠) 肥後國熊本水前寺村より出る海苔。

すま「籠」(籠) 紅鬚と連れて熟すとす。美人の臥戸を云ふ。

すま「籠」(籠) 地黃坊樺次と大蛇丸座深と酒殿の事を記し、書。

すま「籠」(籠) 支那明代の人、書畫に名あり。

すま「籠」(籠) 七月十六日、山城宇治、...

すま「籠」(籠) 蓮華の形に作りし小紙燈籠三百六十個を點火して水上に流す式。...

すま「籠」(籠) 河津遊覧の船多く出づ。壯觀なれば、...

すま「籠」(籠) 水灯會夜露こめたる間の家。菊後。

すま「籠」(籠) 方位家の語、人の生れ年により忌む日あるを云ふ。

すま「籠」(籠) 成美。すま「籠」...

すま「籠」(籠) 他卵の字へりし後なほ、卵化せざる卵をいふ。

すま「籠」(籠) 食物の腐りしを云ふ。すま「籠」...



せうか(靑葉) 手拭掛をいふ。  
 せうせう(靑海流) 舞樂の名。二人して舞ふもの。装束、下賜、太刀等舞樂中の最も華美なるものなり。  
 せうせう(精好) 大口などに用ゐる編織の名。厚くして美し。  
 せうせう(清閑寺) 京都東山清水寺の東に在り。眞言宗の寺院。延暦中、超繼法師の創建なり。歌の中山は此寺より清水寺へ通ふ山路なり。  
 せうせう(清閑石) 歌の中山、清閑寺の谷より出づる石の名。  
 せうせう(靑帆飯) (春) 支那の古俗、寒食の日、桐楊の葉にて飯を染む、色靑く光あり、之を食へば腸氣を資くといふ。靑精飯。國法の師や寺子集めて靑帆飯を食ふ。  
 せうせう(靑高) 藤原氏、名は藤。素と妙壽院と呼び傳はりしが、遷俗して朱子學を唱ふ、性理の學此人より開けたり。元和五年設。  
 せうせう(清華) 攝政に次ぐ家柄の名。三條、徳大寺、四閑寺、久我、今出川等の九家あり。  
 せうせう(靑皇) (春) 春の異名。  
 せうせう(井華水) (春) 若水。

せうせう(靑願寺) 一週上人、熊野權現の示現により、京、靑願寺にて六十萬人決定往生の札をひろめらるゝこと、和泉式部の靈出て、額の文字を書きかへん、ことを乞ふ筋の謡曲。  
 せうせう(秋) すずき。  
 せうせう(生來) (春) 春盤。  
 せうせう(四座記) 元時代の戯曲。王實甫の作にして正續二篇あり。  
 せうせう(正期) (春) 元日の異名。  
 せうせう(靑山) 琵琶の名。總ての事を智慧光にて照らすといふ。  
 せうせう(靑紙) 誓約の文に指を刺して血列を捺すもの。  
 せうせう(四座) 棒心(ソウジ)の條を見よ。  
 せうせう(靑紙) (冬) 臘日をいふ。  
 せうせう(靑紙) 模様なくして淡線、又は淡藍の油染をかけた陶器の名。  
 せうせう(靑紙) (秋) 八月の異名。  
 せうせう(靑紙) 靑紙にて塗りし器物。  
 せうせう(聖日) (春) 元日の異名。  
 せうせう(正始音) 魏の正始年中、竹林七賢ありし故、七賢をさして云ふ詞。  
 せうせう(政事始) (春) 新曆正月四日午前八時、宮中にて天皇自ら内閣大臣の

上奏を聴せらるゝ式。神宮の事を先づ奏するを例とす。國八省の人馬も政事始かな。白山。  
 せうせう(清十郎) 戯曲、五十年忌歌念佛中の人物。和泉水間の農の子にして姫路の但馬屋といふ家に仕へ、但馬屋の女、夏と通じ、終に情死す。夏の條参照。  
 せうせう(清慎公) 藤原實賴をいふ。  
 せうせう(靑春) (春) 春の異名。  
 せうせう(靑初) 初算のこと。  
 せうせう(靑生) (春) 二月朔日。古へ唐の俗に穀物、瓜果の種を靑葉に盛り互に贈答して豊年を祈る。中和節をいふ。靑生子。國小袋に縁がたくみや献生子 存義。  
 せうせう(靑精飯) (春) 靑帆飯(せうせう)。  
 せうせう(靑少納言) 清原元輔の女、一條院の皇后に仕ふ、有名の才女にて枕草子の著あり。  
 せうせう(靑堂) 江戸湯島に在る幕府の學問所。孔子を祀る故に此名あり。  
 せうせう(正旦) (春) 元日の異名。  
 せうせう(靑女) 靑少納言に同じ。  
 せうせう(靑女) (冬) 支那の傳説、靑雲を司る天女の稱。霜の異名。

せうせう(靑帝) (春) 霜の異名。  
 せうせう(靑奴) (春) 抱籠(かまき)。  
 せうせう(靑伯) 周文王の前稱。  
 せうせう(靑白眼) 靑の阮籍、俗士に逢へば白眼をなして卻け、酒徒に會せば靑眼をなして悦びしといふ故事。  
 せうせう(靑紙) 錢のこと。  
 せうせう(聖廟) 孔子の廟、或は曾公の廟をいふ。  
 せうせう(聖廟忌) (春) せうせう(北野御忌日)。  
 せうせう(清兵衛) 大阪に有名なる印籠師。其作はばら印籠と云て世に名高し。  
 せうせう(歳暮) (冬) 年の暮をいふ。轉じて歳暮の禮をいふ。  
 せうせう(歳暮状) (冬) 歳暮を問ふ狀なり。  
 せうせう(歳暮使) (冬) 歳暮の禮の使をいふ。國口上の歳暮使や古男 召波。  
 せうせう(歳暮禮) (冬) 年の暮に音物を贈答すること。歳暮配り。○歳暮使。國植木屋が歳暮の梅の匂ひ哉。屠龍。  
 せうせう(清明) (春) 二十四氣の一。  
 せうせう(清明) 安倍氏、花山帝の時の天文層衛博士なり。從四位下に至る。

せうせう(靑明判) ☆、この形を紙に書て門に貼り覽除とすること。  
 せうせう(靑明祭) (秋) 九月廿六日、京都宮川町の東、靑明社、安部靑明を祀るの祭禮。國橋占や靑明祭翌日は兩伏見。  
 せうせう(井目) 團扇の衝語。技倆の上なるものと善を打つとき、樂め九目を打ち置けといふ。  
 せうせう(靑文拂) (冬) 夷講の日、京都の商人、四條京極の官者社(惡王子社)とし、祭神不詳、一説に土佐坊正俊なりと。よく偽盟の詞を免れしむる故に起請返し社とし、いふに詣で常に賣買にて人を驚きたる罪を赦ふ。此日、京の夷服商など賣出しを行ふ。  
 せうせう(靑陽) (春) 春の異名。  
 せうせう(正陽) (夏) 夏の異名。  
 せうせう(正陽月) (夏) 四月の異名。  
 せうせう(靑夜吟) 宋の邵康節の作りし詩の題。  
 せうせう(靑嵐) 夕照をいふ。  
 せうせう(靑涼寺) 山城國葛野郡嵯峨にあり。五台山といふ。本尊釋迦如來は五尺の立像にて宋より傳へし靈佛なり

せうせう(靑涼殿) 主上の常に在ます御殿の名。  
 せうせう(靑芭) (春) 元日の異名。  
 せうせう(靑雨) (秋) 七夕に降る雨をいふ。傳説に二星が別れを惜む涙が雨となるなりと。國色糸の願もさめん酒涙雨 替陽。  
 せうせう(靑樓) 遊女屋をいふ。  
 せうせう(靑王母) 漢武帝の朝、西王母といふ仙女降りて、三千年に一たび實る桃を捧ぐることを作りし謡曲。  
 せうせう(靑和天) (春) 和清の天に全し。  
 せう(靑) 縦に細き竹を編み列れたる笛。大は二十三管、小は十六管あり。  
 せう(靑) 武野新四郎と云ふ。泉州堺の人、茶道を宗陳、宗悟に受け、禪學を修め、和歌を詠じて閑居し、一間居士、大黒庵と稱す。茶道を千利休に傳へ永録元年没す。  
 せう(靑) 唐草に龍の模様ある純子織の名。  
 せう(靑) (秋) 秋の異名。  
 せう(靑) 宋の仁宗帝の時の儒家、安樂先生と云ふ、層衛算數の學に精



せうかん

しく梅花鳥を作る。  
 せうかん【小寒】(冬)二十四氣の一。寒の條を見よ。  
 せうかん【昭君】漢元帝の宮嬪。勅命により一人胡地に連れゆかれ、馬上琵琶を奏で、別を哀みしといふ。又、此事を作りし謡曲。  
 せうかん【昭君】(春)櫻の一種。楊貴妃櫻より色濃く早開にして廣し。昔この櫻を愛玩せし人、或家の秘書と交換するに臨み、名残を惜みしより昭君の故事により名付くこと云ふ。  
 せうかん【昭光】(春)春の異名。  
 せうかん【昭景】(春)春の異名。  
 せうかん【昭景】(春)二月上申日、河内牧岡神社(春日と同神)の祭禮。  
 せうかん【燻燻】(冬)支那荆楚の俗に十月一日、燻燻(アブリモノ)と訓す。煮焼したる食の意を喰へば寒氣に中らぬといふこと。燻燻燻燻に飽てや楚歌を謳ひけり。常長。  
 せうかん【椒酒】(春)椒酒。  
 せうかん【少將】深草の少將、又は四位の少將といふ。小野小町を戀ひて日夜通ひしに九十九夜にして雪中に凍死すといふ。謡曲通小町に作れり。

せうしやう

せうしやう【少將】鎌倉化粧殿の遊君なり。曾我時政と契り、後、尼となる。  
 せうしやう【小祥忌】一週年忌をいふ。  
 せうしやう【小祥忌】一家の内より起る儀。  
 せうしやう【椒酒】(春)古へ支那の俗。正月、山椒又は柏葉にて醸したる酒を椒柏酒と稱し、之を椒酒(椒酒)にて服さばよく不老なるを得といふ。|| 柏を刻む蓋。四。これよりは千年の春に椒柏酒。政次。○日の匂ひ小瓶に椒酒花ぞかし白雄。  
 せうしやう【小春】(冬)十月の異名。  
 せうしやう【小春】(冬)二十四氣の一。  
 せうしやう【昭景】山城男山の社僧、瀬本坊と云ふ。松花堂様々翁の號あり。書を以て有名なり。又、書を著す。寛永十六年没す。  
 せうしやう【小乘】大乘を見よ。  
 せうしやう【無途】唐代の酒客の名。飲中八仙歌に、無途五斗方卓然とあり。  
 せうしやう【諸節】(春)元日の異名。  
 せうしやう【小雪】(冬)二十四氣の一。  
 せうしやう【消息】手紙のこと。  
 せうしやう【招提寺開山忌】(夏)うちわまき。

せうたか

せうたか【兄鷹】(冬)鷹の雄鳥。|| 小寒。  
 せうたか【紹宅】木山惟久といふ。肥後木山の城主。連歌を嗜み紹巴の門に入る。曾て紹巴が「心ぐるしき月をこそ待て」と詠みし句に「人しれず肌結ぶ岩田帯」と附けしより、世に岩田帯の紹宅と呼ぶ。  
 せうたか【紹智】茶人。飯内氏、千家に學んで一派を起す。代々紹智を名とす。  
 せうたか【蕭條】しの淋しき形容。  
 せうたか【紹巴】里村氏。連歌の名家周柱に學び、一家を成し奈良流と稱す。法橋に叙せられ、豊臣氏の待遇を受く。慶長五年没。  
 せうたか【椒酒】(春)椒酒。  
 せうたか【皇后】(冬)の事。  
 せうたか【消防出初】(春)一月六日(新暦)東京市内各所の消防夫集りて、出初式をなし、消防の演習、梯子乗等をなすこと。|| 出初。酒空晴れて風早き日の出初哉。井村。  
 せうたか【宵柏】泉州堺の人、牡丹を愛し、自ら牡丹花宵柏と稱し、又、牛の角に金箔を置きて乗る。宗紙の門に入りて連歌和歌に達し、屢々風聞に召さる。永正頃の人。

せうじん

せうじん【蕭白】明和頃の畫工。曾我蛇足の畫風を慕ひて機軸を出す。  
 せうじん【椒酒】(春)椒酒。  
 せうじん【蕭條】(冬)蕭條。一派の俳諧をいふ。閑寂を以て宗とす。|| 正風。  
 せうじん【小満】(夏)二十四氣の一。  
 せうじん【蟻】(夏)古へ支那の傳説に蚊の腫に巣くふ虫なりといふ。|| 目に見ぬ鳥。|| 蟻の窟さぐる莊子かな其角。  
 せうじん【昭明太子】蕭統梁武帝の子。文選を編む。  
 せうじん【蕭門】芭蕉の門人をいふ。  
 せうじん【蕭門十哲】芭蕉門の其角、嵐雪、許六、去來、支考、丈草、北枝、杉風、野坡、越人の十弟子をいふ。  
 せうじん【招涼珠】(夏)古へ燕の昭王が常に懷にしたる珠にて隆暑の時、體自ら輕涼なりしといふ。|| 涼しき玉。  
 せうじん【小飲忌】五七日の忌をいふ。  
 せうじん【善見】唐土天狗の首領善見坊。日本へ渡り佛法を妨げんとせしに、比叡の僧に威徳を説かれ、佛力、神力に恐れ再び飛歸る筋の謡曲。  
 せうじん【施餓鬼】(秋)孟蘭盆に諸方の寺院にて行ふ施餓鬼會。無縁の亡者の靈に

せうじん

讀經し、餓鬼に食を施すこと。其法、寺の堂上に檀を據へ、幡を四隅に立て供物を備へ、僧侶其前にて讀經をなす。寺院に依りて日異れり。|| 川施餓鬼。施餓鬼棚。  
 せうじん【施餓鬼舟】(秋)川施餓鬼の舟。吹あまる蘆の葉や施餓鬼舟芳樹。  
 せうじん【施餓鬼棚】(秋)施餓鬼會に寺院の堂上に設けて供物を供ふる棚。|| 驚くや門とてありく施餓鬼棚。荷兮。  
 せうじん【瀬川】享保頃、江戸吉原松葉屋の妓、情夫の仇を討ちて後、尼となる。  
 せうじん【瀬川】(瀬川)島津文を見よ。  
 せうじん【瀬川】(瀬川)享保中、俳優瀬川菊之丞が冠りしより流行せし綿朝子。  
 せうじん【關】關の語。黑白相闘みて中に若干の目あれど先に石を下せば負くるを以て、双方にて打捨つるもの。  
 せうじん【關】伊勢鈴鹿山の關の驛次。  
 せうじん【關原】美濃不破郡にあり中仙道の通路に中る地。慶長四年石田三成、徳川家康と戦ひし舊蹟。  
 せうじん【堰口】水の落口をいふ。  
 せうじん【石斛】(夏)イハシノホ。

せうしやう

せうしやう【釋菜】(春)せきてん。  
 せうしやう【石州流】片桐石見守貞昌より起りし茶道、生花の流儀。  
 せうしやう【石申】魏人、星の名を付けし人。  
 せうしやう【石菖】(夏)水邊の石上などに生ずる草。葉細長く深緑色なり。春の末に莖を出し、紫色の穂を出す。形つくしに似て長さ一二寸なり。夏其青葉を賞す。|| イハアヤメ。|| 石菖の夕暮匂ふ泉かな。移竹。  
 せうしやう【石崇】支那晋の時代の富者、壁に長じて兎懸なり、蠟を以て薪としたりといふ。  
 せうしやう【隻手聲】臨濟宗にて見性する人に與ふる公案の語。  
 せうしやう【石尊】(夏)大山坐り。  
 せうしやう【節季候】(冬)十二月廿二日より廿七八日頃迄、京地方の乞食、笠に蓑菜の葉を挿し、赤布にて面を被るを被ひ、腰に赤



(候 季 節)



せせり

諸を垂れ、二人又は四人一組にて市中の家に来りて歳暮の祝言を唱へつゝ、踊をなして米饅を乞ふもの、其唱歌の先にセキノロ〜と繰返し稱ふ。又同廿日より廿五日まで、同じ粉袋にて面を白布にて被ひし女來る、之をワハラ(婆等)といふ。節季候の妻女等なり。江戸の節季候は編笠を被り面を覆ひ、實盡しなご鬘さし紙の前垂して、割れ竹を叩き廻しつゝ來る。節季候は各地にあり然等は京都に限る。○梶久がまくら元なり節季候 豊太。  
 せせり(石帯) 衣冠、東帯のとき、兜の腰を束める帯、黒塗の革にて作り石、珊瑚など飾にす。  
 せせり(石帯) 箱庭のこと。  
 せせり(石竹) 撫子の一種、専ら花卉とす、花辦撫子の如く深く刻まれず、花色種々あり。同種中間花最も早し。○唐撫子。○石竹や花し動かす晝の鐘成美。  
 せせり(關弦) 弓弦を糸にて巻き差を引き、更に漆をぬりしもの。  
 せせり(釋奠) (春) 二月、八月、上丁日に宮中大學寮にて孔子並に門人十哲、顔淵、閔子齊、冉伯牛、仲弓、宰我、子貢、冉

せせり

有、季路、子遊、子夏)の像を祀り、經學を講する式。翌日、釋奠の昨(ヒモロギ)と訓す。白餅、黒餅、栗飯、栗等供物なり。を獻する式あり、之を獻酢といふ。我國にては大寶元年に始り、徳川時代にては江戸神田の聖堂大成殿にて行ひ、各藩又其學所に行ふ。又、諸侯以下を行ふを釋菜といひ、たゞ、蕪藻のノを供ふ。○オキマツリ。聖廟忌。折柱會。○秋の釋奠。○飯白く結細かれおきまつり 二柳。  
 せせり(關寺小町) 小町、老て近江關寺の邊に庵を結びしを、七夕祭の日、關寺の住僧、訪つれて物語の序、小町といふ事を知り、祭の庭に誘引ひて舞はしむる筋の諸曲。  
 せせり(雪洞) (冬) 助祭。  
 せせり(關清水) 近江國逢坂山にある名所。  
 せせり(關地蔵) 東海道關郡の九關山寶藏寺中にある地蔵尊。  
 せせり(關川) 近江、美濃國境にある川。源を伊吹山に發す。古來和歌に秋ぞられて名高し。  
 せせり(おんまつり) 關明神祭(秋) 九月廿四日、近江國逢坂山、關明神(道祖神を

せせり

記り、上下二社あり、有名なる關の清水あるを以て一に清水明神といふ。傳説に後に延喜帝の御子輝丸宮及び柿宮、逆髮宮を合祀し土俗、輝丸の宮といふ。の祭禮。一に逆髮祭といふ。○關關清水に影を見て踏る 亭々。  
 せせり(關原與市) 牛若丸下向の途次、美濃中川庄にて關原與市といふもの、胸の腹上げせしを憤り、多人を斫て立退く筋の諸曲。  
 せせり(關札) 關所通行の切手。又、關所に建てある高札。  
 せせり(赤壁賦) 宋の蘇東坡が秋夜赤壁に客と船を泛べて遊びし事を記し、文章。前後の二編あり。  
 せせり(關祭) (秋) 關の明神祭。  
 せせり(關所) 關所のことないふ、又武藏南葛飾郡にある地名。  
 せせり(説經) 經文の意を解き聽かすこと。  
 せせり(施行) 僧尼などへ施しすること。  
 せせり(施行水) (夏) ふるまひ水。  
 せせり(石關) (秋) 關の一種、根の形岩石の如く、葉に斑點あり、花黄なり。○岩石關。  
 せせり(瀬切) 早瀬の流のこと。

せせり

せせり(柘榴) (秋) さくら。  
 せせり(鶴鶴) (秋) 水邊に棲む鳥、燕に似て青灰色、頸下に黒き筋あり、尾長くして常に上下に動す。其胸の黄なるを黃鶴鶴といふ。○ニハタ、キ。ニハクナブリ。石叩き。嫁ぎ教へ鳥。○鶴鶴や沙にひかれて洲を走る 兼雨。  
 せせり(赤靈符) (夏) 支那の古俗、端午に符を書きて兵亂を遠る呪とすること。  
 せせり(石王兵衛) 放生川等に用ふる能の筋面。  
 せせり(石燕) 傳説に唐土零陵山に石あり、雨ふれば燕となりて飛び、晴れば復元の石にかへると云ふ故事。  
 せせり(節供) せつく。  
 せせり(女術) 遊女の口入をなすもの。  
 せせり(世間僧) 形のみ出家して心は佛道を守らぬ僧。その寺を世間寺といふ。  
 せせり(列卒) (冬) 鷹狩其他狩場にて鳥獸を追ひ立つる役夫。○勢子。○せこ。○せこ(夫子) 兄或は夫のこと。○せ。青子。○[狭路] 路次のこと。  
 せせり(青鹿) (夏) 沖論を見よ。  
 せせり(列卒) (冬) 狩の時、列卒の諸鳥

せせり

獸を追ふに用ふる旗。○せこ。○せこ(踏み) 途へ約九十九折 陰風。  
 せせり(定書) 暑氣中に用ふる散薬の名。按樂師定書、豐太閤より明の沈惟敬が薬方を傳はり、其子孫、大阪にありて之を賣り、今日も猶行はる。  
 せせり(結漆) 漆の一種。粘り強くして物を接ぐに用ふるもの。  
 せせり(瀬) 多くの瀬。  
 せせり(瀬所) 近江國滋賀郡本多氏の舊城地。  
 せせり(瀬) 細き流。  
 せせり(細流) せせりに同じ。  
 せせり(咬) 獨りくどくど云ふこと。  
 せせり(嗚) もてあそぶこと。  
 せせり(世尊) 佛の衆徳を備へ、世に尊きこと。即ち釋迦のこと。  
 せせり(世尊寺流) 書道の流儀。天文の頃、世尊寺行季、能書を以て鳴り、遂に名とす。  
 せせり(虚) 虚待すること。  
 せせり(急) いそがすこと。  
 せせり(勢田現) (春) 江州勢田の湖邊に産する蛭、名物なり。  
 せせり(勢田橋) 近江志賀郡、栗太郡の界にある橋。小橋廿三間、大橋九十六間

せせり

にして中間に島あり。○勢田の長橋。  
 せせり(背) 背を曲げて物を荷ふこと。  
 せせり(節) (春) 節振舞。  
 せせり(節祝) (春) 節振舞をすること。  
 せせり(節客) (春) 節振舞の客ないふ。  
 せせり(節客) 九十三騎の打揃ひ 琴二。  
 せせり(節小袖) (春) 正月節振舞に着る小袖。○節衣。○一家皆音撰機や節小袖 富水。  
 せせり(節衣) (春) 節小袖。  
 せせり(節汁) (春) 節振舞の料理ないふ。  
 せせり(節料米) (冬) 正月の料米を年の暮より貯へ置くこと。  
 せせり(節振舞) (春) 京の俗、正月、親戚互に酒食を設け饗應すること。○節祝。○節客。節汁。朝節。夕節。桜飯(ハク)。節小袖。○花にいざ節振舞の連なはり 望翠。○ものがたや節振舞の武家の文 正信。  
 せせり(節會) 朝廷にて節日其他定まれる公事のある時、宴を群臣に賜ふこと。  
 せせり(雪下紅) (秋) ひよどりじやう。  
 せせり(割匙) 飯杓子の頭の半片なるもの。



せつせき

せつせき(節季)(冬)年の暮、正月の用意に忙しき頃をいふ。  
 せつせき(節句)人日、上巳、端午、七夕、重陽の五節句をいふ。  
 せつせき(攝家)攝政關白に補せらるべき家筋。五攝家を見よ。  
 せつせき(折桂會)(春)せきてん。  
 せつせき(雪消)(冬)冬の朝の酒宴をいふ。雪の寒さを消すといふ意。霏霏雪消。  
 せつせき(節後痛)(秋)後日の菊。  
 せつせき(雪舟)有名の畫僧。小田等楊と云ふ。備中赤濱の産、相國寺の僧。如雪、周文に畫を學び、後入明して一風を興し、歸朝の後、周防山口に止り雪谷寺を監督す。永正三年歿す。  
 せつせき(殺生石)傳説に下野那須野にありし怪石にして近衛帝の御宇にありし妖狐の化するところ、人々に觸るれば死す。後深草帝の時、玄翁和尚之を得脱せしといふ。又、此事を作りし謡曲。  
 せつせき(雪村)天正頃の畫僧、周文を慕ひ雪舟を學び、頗る畫名あり。晩年、宋元の名家、牧溪、顔輝を學び新意を出す。其畫は多く那須紙を料とす。故に世に

せつせき

此紙を雪村紙と云ふ。  
 せつせき(攝待)(秋)七月初旬より廿四日頃まで、佛家にて路上に湯茶を煮、往來の人に施すこと。攝待。門。茶。攝待や草の花吹く曲突の先。踏風。つたひ(攝待)義經奥州落の時、佐藤の館にて繼信、忠信が母の攝待に逢ひ、軍語りをする筋の謡曲。  
 せつせき(踐躑)氣にちめて事を爲すこと。俗に病をせつてうつするなと云ふ。  
 せつせき(刹那)佛説にて時の最し短きをいふ。稱。  
 せつせき(切羽)刀の鐔際の薄き金をいふ。  
 せつせき(節分)(冬)立春の前日(新暦にて二月三日頃)をいふ。年越。(豆撒き。糺す。願頭挿す。初夢。賣船。厄拂ひ。米かけ等をいふ)節分を灯してたり獨住。召波。  
 せつせき(節分草)(春)宿根草、山溪に生じ、小頃、一寸許の莖を出



(草分節)

せつせき

し、端に一葉ありて花を包み節分の頃開く、梅花に似て白く白曇多し、花落ちて葉生ず。一華草。一輪草。莢莢。イヘレ。四層日なき山さしもしなし節分草。花鏡。  
 せつせき(瀬門)海の陸地に入りこみたる狭きところ。  
 せつせき(瀬戸)備後尾道より安藝廣島に至る二十餘里の内海をいふ。  
 せつせき(旋頭歌)和歌の一體。上下各、五七七の三句にて成り、下の句より上の句へ讀みても其意通するもの。  
 せつせき(瀬戸飯)東海道藤枝附近にて賣る名物。形小判の如く、強飯にちなし色を染しもの。  
 せつせき(羅取)仲買のこと。  
 せつせき(錢袋)(夏)葵の一種、莖短く、初夏淡紅にして紫文ある花を開く、大さ錢ほどなり。錢袋。小葵。圓鉢に植て庭にめづるや錢袋。千葉。  
 せつせき(錢賣)天明頃、江戸市中を呼歩行きて小錢を兩替する商人。  
 せつせき(錢猪)たむしのこと。  
 せつせき(錢魚)龜の子の大き寸許なるものをいふ。  
 せつせき(錢苔)山地、或は家の垣根など濕

せつせき

地に生ずる苔。色緑にして鏡形の文あり。  
 せつせき(鏡屋切)堺の鏡屋某が唐にて織せし鏡製の名。  
 せつせき(施火)(秋)七月十六日、京都東山の大火の火、船岡山の船形の火、松ヶ崎の妙法の火、愛宕山の鳥居の火、又は洛外の山野にて麻幹、樺の枝等を焚くこと。國京土産施火に泊りを延ばしけり。椿号。  
 せつせき(施米)(夏)六月、京都の東山、西山、北山等の山寺に棲む貧窮孤獨の僧尼に官より米鹽を施すこと。國人ごよむ施米の場の草いされ。宗讀。  
 せつせき(蟬)地蟲の一種、夏日土中より出で、皮を脱し兩翼を生じて蟬となる。其種類甚だ多し。○初蟬。油蟬。熊蟬。蟬のしわけ。蟬の聲。蟬の語聲。蟬時雨。○蟬なくや行人絶ゆる橋柱。蕪村。  
 せつせき(蟬衣)(夏)夏衣の薄さを蟬の羽にたとへていふ。○いでや我よき衣着たり蟬衣。桃青。  
 せつせき(蟬聲)経をよむ聲をいふ。  
 せつせき(蟬時雨)(夏)蟬の多く鳴きてその聲の時雨降る音の如く聞ゆるをい

せつせき

ふ。○蟬立て、馬引き行や蟬時雨。縣山。  
 せつせき(蟬聲)(夏)蟬の鳴く聲。○蟬から此木惜むや蟬の聲。其角。  
 せつせき(蟬羽)(夏)六月の異名。  
 せつせき(蟬羽衣)(夏)蟬の始めて鳴くをいふ。○初蟬。○初蟬や梅雨の晴れ行く朝風。孟遠。  
 せつせき(蟬羽衣)(夏)カサネの色目の名、表ヒメダ、裏青、又表濃紫、裏青。  
 せつせき(蟬脱)(夏)蟬の羽化したる脱殻をいふ。○空の蟬。蟬退。蟬壳。枯蟬。○わくら葉に取つて蟬のしわけ哉。蕪村。  
 せつせき(蟬聲)(夏)蟬の多く群り鳴くをいふ。○蟬の聲定りて雲の立つ。牛花。  
 せつせき(蟬始鳴)(夏)七十二候の一、五月中の二候。  
 せつせき(蟬花)(夏)地蟲の化して蟬となること、木の根などに支えられ



(花蟬)

せつせき

て化せざるもの、地中より嫩草の如きものを生じ、二三日を経て花に似たるもの開くをいふ。其根には必ず虫の形あり。○蟬花やうさき山邊の青葉垣。青々。  
 せつせき(蟬丸)琵琶の名手にて延喜帝第四の皇子なりと傳へいふ。盲目のため達坂山に捨らる。姉第三の宮を逆襲せし。頭髪逆生じて狂人となるといへり。  
 せつせき(蟬丸)蟬丸、達坂山に捨られ、琵琶を弾して歎きしところ、姉、逆襲の宮、尋ね來りて兄弟共に別を悲む筋の謡曲。  
 せつせき(蟬丸祭)(夏)五月十三日、近江國達坂山蟬丸社の祭禮。(關の明神祭の條参照)  
 せつせき(蟬折)横笛の名物の名。  
 せつせき(山海經)支那、夏の益の著したる書。異柳の天地、草木、人物、鳥獸を擧ぐ、足長、手長などの怪異記して此内にあり。  
 せつせき(線香花火)(秋)紙張に煙硝を仕掛たるもの、座上に弄びて兒童の玩具とす。(花火の條を見よ)。  
 せつせき(泉岳寺)江戸高輪に在り、萬松



せんかくじまら

山といふ。赤穂義士の墓所あるを以て有名なり。  
せんかくじまら「泉岳寺詣」(春)二月四日東都高輪、万松山泉岳寺にて赤穂義士四十七人の忌(元禄十六年切腹の日)を修し、諸人多く墓前に参詣す。  
せんかくじまら「千箇寺参」日蓮宗の信者が諸國の寺々を巡拜すること。  
せんかく「禪閣」佛門に入りし攝政太閤の稱。  
せんかく「前鬼後鬼」役の行者小角が使役せし大和高峰の鬼童。  
せんかく「川芍花」(秋)チナナカツラといふ草、春宿根より生じ高さ一二尺、葉は芥の葉に似て細く香気多し。七月八月頃小白花傘状をなして開く其根を薬用とす。園川芍の香に流るゝや谷の水其角。園川



(芍花)

せんかく「願夏」(冬)冬の異名。

せんく

せんく「千句」連俳の一體。百韻を十巻重れたるもの。但し一座にてなすしのは千句にして百韻を十座(十回)にてなすを十百韻(千句)といふ。  
せんく「蓮宮」神社の遺蹟ありて神靈を移し奉るをいふ。伊勢は廿一年目、宇佐は三十一年目、住吉、香取、鹿島は廿一年に一度改築す。此時諸國より役夫を出し、供米を出しなごす。俳諧にては蓮宮といへば伊勢御蓮宮(其條参照)のみを季とし稱ふ。  
せんく「仙花」伊豫牛紙をいふ。其實厚くして硬し。  
せんく「善光寺」信州長野にある天台宗の寺。本尊の阿彌陀如来有名なり。  
せんく「千観」橋敏貞の子、三井寺に登り僧となり、後攝津國田中金龍寺の開祖たり、時々、淀口に出て、自ら馬の轡を取りて馬士を勤め、行人を利せしといふ。  
せんく「千貫桶」數多つけたる桶をいふ。又、伊豆と駿河の國境に在る水道をいふ。  
せんく「暹化」僧の死を云ふ。  
せんく「臘月」(秋)新月。  
せんく「漫問祭」(春)二月廿二日(新

せんけりう

曆二月三日(駿州阿部郡府中、漫問神社(祭神木花咲耶姫)の祭禮、附近にて養を商ふ。  
せんけりう「千家流」千利休より起る茶道の流派。表流裏流の二に別る。  
せんけりう「前胡」(秋)草の名、高さ八寸餘、葉三葉にて叢生し秋、ニンジンの花の如くにて紫黑色の花、枝の端に傘の状をなして開く。  
せんけりう「千石通」搗米を入れて米と糠と分け又、米の精粗を分つため用ゆる器械。  
せんけりう「善根」佛語。善果を受くべき所爲。  
せんけりう「前栽」庭前に植へたる草木。又、其植込をいふ。  
せんけりう「善哉」粟の蒸したるに餡をつけたるもの。又、京阪にてつぶし餡の汁粉をいふ。  
せんけりう「浅草寺」東都浅草金龍山観音堂をいふ。  
せんけりう「浅草寺修正會」(冬)浅草観音追儚(祭)。  
せんけりう「前司」前の國司を云ふ。  
せんけりう「禪師」大徳ある僧を云ふ。  
せんけりう「千秋樂」(秋)樂の盤連調の曲

せんじゆ

名。秋の調子なりとて古より季とす。  
せんじゆ「宣旨書」勅語の書類。杉人。  
せんじゆ「禪師曾我」曾我兄弟の弟に久上の禪師といふもの、伊藤助宗に襲はれ出家せしを、兄弟敵討の後、助宗君命により討手に向ふ、禪師大勢を倒し護摩壇に自殺することを作りし話曲。  
せんじゆ「錢神論」晋人、魯褒の作りし文。錢の萬能なるを説て時世を刺りたるもの。  
せんじゆ「獵物賣」能狂言の名。  
せんじゆ「洗車雨」(秋)七月六日の雨をいふ。傳説に七夕の車を洗ふ雨なりとす。  
せんじゆ「先生」帯刀の長官の稱。  
せんじゆ「千社参」諸國の神社へ参詣すること。千社札とて種々の意匠せる札を造り参拜の印に神社の柱などへ張つくるなり。  
せんじゆ「千手」三位重衡、因はれて狩野介宗茂の邸に在り、千手を近づけて物語する筋の話曲。  
せんじゆ「千壽菊」(秋)孔雀草の一種、八月頃紅黄色の花を開く。  
せんじゆ「千手觀音」風の異名。

せんじゆ

せんじゆ「鑪樹子」許子和と云ふ枝、死せんとする時、其母に向て金の生る木が倒れると云ふ故事。  
せんじゆ「かほは」(千手、三河)紫雲寺の僧正、覺性に仕へし兒二人の名、千手の龍愛三河に勝りしかば、三河は之を愛く思ひ高野山に登りしといふ。  
せんじゆ「専願」池の坊といふ。京都六角堂に住し、連歌の名家にて、又、立花の一派を起す。  
せんじゆ「千手院」名は行信、大和の刀工、建長時代。  
せんじゆ「錢書」(秋)秋立ちて曇去るをいふ。  
せんじゆ「前書」まへがき。  
せんじゆ「善四郎」出雲國松江の陶工。出雲燒の祖なり。天明頃の人。  
せんじゆ「扇子」(夏)あふぎ。  
せんじゆ「千壽萬歳」(春)萬歳。  
せんじゆ「關提」佛縁なきものを云ふ。  
せんじゆ「仙臺馬市」(春)三月上旬より四月中旬まで、奥州仙臺馬市にて馬市あり。江戸將軍及國主の馬を撰ぶ。  
せんじゆ「仙臺萩」(春)高さ二三尺の草、葉の形野萩の如く柔々にして晩春黄色の花を開く、豆の花に似たり。夏

せんたいほし

英を生じ内に鶏豆の如き實満つ。  
せんたいほし「首」宿望。江南。  
せんたいほし「過ぎぬ仙臺萩の二年越友山」。  
せんたいほし「仙臺橋」仙臺にて産する道明寺橋をいふ。  
せんたいほし「善導忌」(春)三月十四日、京東山永觀堂、善導院、百萬遍等の寺院にて善導大師(唐の人。名は淨業、唐高宗永隆二年寂、三論宗の祖にして、念佛捨身したる高僧なり)の忌を修す。園青柳に遊ぶ糸あり善導忌 青々。  
せんたいほし「禪橋」禪を修する人の座する椅。  
せんたいほし「梅檀」紫檀、白檀などの香木の名。天然に産し、日本には唯材のみ渡る。  
せんたいほし「梅檀板」檀の胸の左右上部にある小さき箱板。  
せんたいほし「梅檀講」(夏)千圓子。  
せんたいほし「千圓子」(夏)四月十六日、江州三井寺の鬼子母神へ参詣する人、一千



(仙臺萩)







そりや

そりや「折焼」(冬)芥を酢醬油にいため焼きたるもの。冬の食品。○芥焼に齒の美しき女かな故六。

そ

そ 勿れ云ふ意を含みて、上に「な」云ふテニナハを添へて用ゐる辭。「な折そ」と折てくれり圓の梅」  
そ 事物を指示する意にて切字となる辭。「獨りあればぞ」「こゝよりぞ」などの類。  
そ「増」氣高き女の顔したる能面の名。羽衣、龍田などに用ゐる。  
そ「宗因」(秋)七月十八日、夏籠りし僧の各自行われること。江湖別れこいふ。○送行や一物もなき袈裟衣 極露。  
そ「宗因」(春)三月廿八日、西山宗因(梅花翁、西翁とも號す。大阪に住し天和二年歿す。俳諧に櫻林風を開きし人)の忌。○浪華津に梅も餘波や宗因忌 楚灯。  
そ「宗因」(春)朝賀。○宗因(春)朝賀。○宗因(春)朝賀。

そり

そり「増賀」密宗の僧。叡山の慈應大師に學ぶ。冷泉帝の供奉に伴狂して加らす。頗る硬骨の法師なり、長保五年寂。そり「僧綱」僧正、僧都などの僧衣の襟をいふ。襟を折らすして立てて着るもの。  
そり「増賀」重願したる女の能面の名。  
そり「宗鑑」(冬)十月二日、宗鑑(支那氏、山崎に住す、連歌に長ず、後人俳諧の祖とす。天文廿二年歿)の忌。○宗鑑忌水仙活し油筒 万紅。  
そり「宗鑑」飯尾氏、通稱治部右衛門、自然齋、種玉庵の號あり、東常縁に就て和歌連歌を修し、才能拔群、千載の一人と稱せらる。後土御門帝より花の下の免許を蒙り、東西を周遊して箱根湯本の客舎に歿す。文龜二年七月十八日、享年八十二。  
そり「送窮」(春)正月廿九日、支那の古俗に、屋室の塵穢を掃除し、之を水中に投ずること。これ實鬼を祓ふ爲と。○送窮や吳越の水の落所 丹敷。  
そり「宗鑑」(秋)七月十八日、宗鑑法師の忌を修すること。○宗鑑忌やかたはし雷の丸灯籠 青々。  
そり「宋玉」楚國の人。屈原の弟子に

そり

して楚の大夫なり、容姿端麗好んで辭を作る。文選に好色の賦あり。  
そり「宗動」延寶頃、一節切の名人。  
そり「宗關」片桐石見守貞正が剃髮後の名。桑山左近の門、茶事及生花に石州流の一派を開く。寛文時代。  
そり「宋慶」明人。永正中歸化して、京に住し陶工となる。樂燒の祖なり。  
そり「總檢校」神官僧侶の諸事を裁し諸國を檢べ巡る役の名。  
そり「僧着蠅」宋の歐陽永叔が蠅の情なきを説ける文章。  
そり「曾子」孔門の弟子。母に至孝なり其妻、梨を煮して母に捧げしに未だ熱せざりかば、是れ姑に事ふる禮をしらずと言て妻を離別せり。今傳ふる孝經は孔子が曾子の爲に説きしものなり。  
そり「宗十郎頭巾」(冬)頭巾の一種。頭は大黒頭巾の如くにして長く縷の垂れしもの。俳優、澤村宗十郎之を冠りしより流行す。  
そり「宗信」三郎左衛門といふ。茶道に精し、東山義政に仕ふ。志野流香道の祖。  
そり「奕瑞」(春)朝賀。○むら竹や

そり

伏して奏する雪の瑞 紅葉。  
そり「宗丹」小栗氏常陸小栗の城主なりしが、足利氏に仕へ、後、京都相國寺に禪髪す。周文の弟子となり。書伎に長ず。天正五年歿。  
そり「宗太郎」(冬)寒中に鯛鮑等の肉を靴の煎りたるに漬けしもの。關州殿島の名産なり。  
そり「宗持寺」無縁經(春)三月十五日より廿一日迄播磨國島下郡惣持寺にて行ふ無縁經(無縁の精靈の疫鬼に使はれて疫病を行はしむる故之を度する法會)の法事。  
そり「宗持」文龜頃の人。常に源氏物語を愛して教部をつつし、廿四部の朝貞の巻を書きして空しくなりしといふ。  
そり「宗長」柴屋軒と號す。駿河島田驛の人、一休に禪を學び、宗紙に連歌を修め花の下の號を受く。天文元年歿。  
そり「宗部」(秋)かかし。  
そり「宗眼」横谷氏、次兵衛といふ。金工の名人、最し一輪牡丹の彫刻に長ず。享保十八年歿。  
そり「宗經」(夏)小麥粉を水と鹽にてこれ、油にて糸の如く引き延し干したるもの。之を湯で汁にて食ひ、又、冷し

そり

て冷夢の如くして食ふ。夏の食品。○素麩のいとゆふ影や三輪の里 帶路。  
そり「双林寺墨直」(春)さうりんにすみなほし。  
そり「總経」盲人の官位。檢校を總ぶるもの。  
そり「宗和」金森氏、古田織部門の茶人。  
そり「宗右衛門」能樂の大鼓の流儀の名。  
そり「蘇我」(秋)黃菊をいふ。仁明帝黃菊を愛されしより其年號の承和に因みて承和菊といふ。○承和の色。○承和菊の隣を覗く朝出かな 沾露。  
そり「曾我中村」相模國にあり。曾我兄弟の生ひ立ちし地。  
そり「曾我雨」(夏)虎が雨。○芝居筋京は京にて曾我の雨 旨原。  
そり「蘇合香」舞樂の名、六人にて演ず。又藥物の名。  
そり「曾我祭」(夏)五月廿八日、駿河國富士郡井出村神名荒神(曾我兄弟を祀る)の祭禮、此日雨ふるを虎が雨といふ。江戸猿蓑町三座の劇場にても此日曾我祭を行ひ狂言を催す。

そり

そり「粉」屋根を葺くに用ゐる薄き板の稱。  
そり「即興」即座の興によりて詠みし詩歌。  
そり「五論」支考が俳諧十論の後に補ひて作りし論書。  
そり「菰」沾園等が集めし蕪門の句集、芭蕉七部集の一。  
そり「關詔」告訴人に褒美を與へること。  
そり「則天后」唐の高宗、太宗二代の妃。聰明なれども内房收よらず醜名高かりしといふ。  
そり「續命」(夏)長命縷。  
そり「續勢」古へ官位を買ひ、位を進めらるゝために奉りし金をいふ。  
そり「養鷹」人を誘導して賄賂を贈ること。又、惡智恵を付ること。  
そり「蘇」晋人。寶船の妻なり。蘇氏、名は蘇。字は若蘭。才學あり。曾て夫が安南將軍に任せられし時、寵姫趙陽台を携へ任に赴く、蘇氏悔恨に堪えず、瀧文の詩を錦に織り夫に贈りて歸を勸めしといふ。  
そり「庶務」物事の極限に至ること。  
そり「素業」無職業なること。又、功なく



そ

して餅を食ふこと。  
 そと「蘇子」東坡の異名。  
 そと「素秋」(秋)九月の異名。  
 そと「蘇志摩利」舞樂の名、舞笠を着て舞ふ、雨乞祭などに行ふ。  
 そと「蘇秦」支那戦國の時、趙に仕へ、辯舌を以て六國の合縱を計りし人。  
 そと「鼠飯」筆の異名。  
 そと「鼠飯」鼠の類にて作りし筆。  
 そと「二男蘇叔黨」詩あり。  
 そと「十代田」七十坪ほどの田地をいふ。  
 そと「蘇小」藝妓をいふ。漢語。  
 そと「急」忙はしくすること。又髪など亂れ、ゆるること。  
 そと「驚破」すばやに同じ。  
 そと「狂」戯言をなすこと。又粗雑なること。  
 そと「漫顔」何そなく落つかぬ貌をいふ。  
 そと「座楽」(秋)ややまむ。  
 そと「素堂忌」(秋)八月十五日、山口素堂(季吟門の俳人、葛飾風の祖と稱せらる。享保二年歿)の忌。素堂忌や蒲茶に疊る窓柳、花鏡。  
 そと「祖帳」門出を祝ふこと。

そ

そ「帥」大宰府の官の名。  
 そ「落」手ぬかりあること。  
 そ「華土」天下のこと。  
 そ「油扇」(夏)奥女中などの用ゐし扇。美しき模様を描き骨を黒塗にせしもの。扇たしなみの笑かくすや油扇、錦扇。  
 そ「油笠」油を頭へかさして笠の如くすること。  
 そ「油几帳」油にて顔をかきすこと。  
 そ「油打」(春)毬打の玉をアリアリと糸にて釣り、飾りにしたるもの。  
 そ「油時雨」(冬)油に涙のかゝる時雨にたとふ。|| 漢時雨。  
 そ「油巾」(冬)頭巾の一種、油の形したれば名く、被れば目ばかりを出し面部を隠す。|| おこそづきん。|| 西きぬのふくら雀や油巾巾、扇籠。  
 そ「油止」(夏)袖ナホシ。  
 そ「油直」(夏)嘉定(カヤウウ)の日、十六歳の男女其振袖を直して、止め袖とする俗。|| 油止め。|| 油止めて、へり見らるゝ起居かな。|| 華女。  
 そ「油墨付」戀ふ人の袖には必ず墨つくこと云ふ古き俚語。  
 そ「油漉草」(夏)撫子の異名。  
 そ「油子」犬のこと。一説に稻のことなりとす。  
 そ「油露」(秋)人の衣袖に露置くこと、轉じて涙に油のぬるること。  
 そ「外ヶ濱」陸奥北津輕郡龍飛崎より三崎港の邊をいふ稱。  
 そ「卒都婆小町」小野小町老て零落し卒塔婆に腰をかけ、深草の少將の怨靈の爲、狂氣することを作りし謡曲。  
 そ「衣通廻」允恭天皇の皇紀、容姿美はしく光麗、衣を通すほどなりとて時人、衣通廻と稱す。和歌に長じ、河内茅苅里に居給ふ。  
 そ「外野」人の歩行するに兩足の先の外に向ふ癖あるをいふ。  
 そ「曾根」紀州南牟婁郡の東北に在り、太郎山次郎山の名あり。  
 そ「曾根崎」大阪梅田の附近の地。遊廓ありて、蜷川その傍を流る。  
 そ「曾根太郎」曾根を見よ。  
 そ「曾根松」播州印南郡の天満宮境内にある老松、高さ三丈、周囲六尺に及ぶ、高砂の松と共に有名なり。  
 そ「蘇民書札」(春)(冬)二

そ

そ「孫子」名は武、吳の軍術者にして

そ

月上五日及十一月中五日、古へ宮内省に鎮座する園神(大物主神)韓神(大己貴命、少彦名命)の祭禮を行ふこと。養老年中より始る。園守の爲にから神の祭儀、良祭。  
 そ「其駒」(冬)神樂歌の曲の名。  
 そ「園殿」園の別當をいふ。又、すべて庭下家をいふ。  
 そ「園神祭」(春)(冬)そのからのみまつり。  
 そ「園別當」藤原基氏卿のこと。庭下家の名あり。曾て百日の禮切りしと自負せしこと徒然草にあり。  
 そ「園原」信濃國下伊那郡御坂越の山中にあり。椿木の名所として名高し。  
 そ「元祿」元祿三年、嵐雪が集めし句集をいふ。  
 そ「そばの花」又、そば切の略。  
 そ「蕎麥搦」(冬)蕎麥粉を湯にてかき、これに汁をつけ食ふもの。冬の食品。  
 そ「蕎麥刈」(冬)秋末より冬にかけ蕎麥を刈ること。(蕎麥の花を見よ)。  
 そ「蕎麥切」そば粉を麵に製して食

そ

ふもの。單にそばをいふ。  
 そ「蕎麥花」(秋)蕎麥は夏種を下し秋の末に高さ一二尺、白花簇り開きて實を結ぶ、形三角にして皮黒く子白し、磨きて粉とし蕎麥粉をいふ。ソバキリ、ソバガキ等にして食ふ。馬の背の高きに登り蕎麥の花、移竹。  
 そ「蕎麥湯」(冬)蕎麥粉を湯に溶かし、砂糖などを加へて飲むこと。寒氣を防ぐためをいふ。園二三輪飲こぼしたる蕎麥湯哉。雅因。  
 そ「川セミ」川セミに同じ。  
 そ「雙物」連併の用語。雲、霞、霧、烟等の如く空中に上氣するものを云ふ。但し此名稱今日甚だ合理ならず。  
 そ「誘ひ出す」こと。  
 そ「蘇武」漢武帝の臣。匈奴に囚れ賓中に在る數日、雪を嚼んで生く。匈奴、神となし、北海に徙し羊を牧はしむ。十九年にして漢節を更えず白髮となる。後和成りて漢に歸る。  
 そ「添發句」連歌の發句に、同意味の發句を附添し、連絡のあるやう作ること。  
 そ「素封」富者をいふ。  
 そ「満る」こと。

そ

そ「添水」(秋)尺餘の竹筒を結棒の如く作り、山中の流などに置き、水の力にて旋轉して其一端石にあたりて音をなすもの、秋、田の實る頃、野獸を怖し其害を防ぐに用う。園立去れば五歩に聲ある添水哉。几道。  
 そ「細雨」細雨のふること。  
 そ「蘇民書札」上古、行脚の修験者を卑しみて云ふ語。  
 そ「蘇民將來」同前。  
 そ「蘇民將來札」(春)八幡の厄神詣に參詣者の乞來る神符。傳説に厄神(午頭天王)南海の蘇民將來が家に宿り給ひし時、汝が子孫には鬼電を避て幸を與へんと託宣ありし故、後世蘇民が子孫と稱して疫を免ることをいふ。  
 そ「孫康」晋人、家貧にして燈なく、雪明りにて書を讀みしといふ。  
 そ「孫敬」楚の人。常に戸を閉て書を讀み、睡を催す時は繩を頭に懸けて梁に吊りしといふ。市人呼で閉戸先生といふ。  
 そ「孫子」名は武、吳の軍術者にして



そんじやく

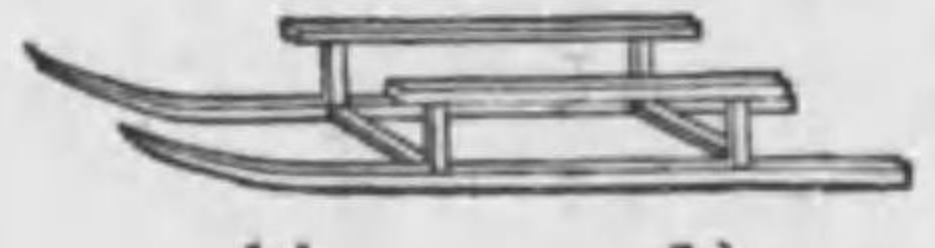
孫子を著す。女軍を編制し操練を教へし人。  
 そんじやく(孫思道)唐の名醫の名。  
 そんじん(孫君)支那の賢者。家賃しく益を獲て業をなし、冬月も業一東を以て寒を凌ぎ學問せしといふ。  
 そんまのり(孫鍾瓜)孫鍾、貧しき時、三人来て瓜を乞ふあり、之を與ふれば曰く、吾は司命星なり。汝の徳に由り世々封侯を與へんと言て去りしといふ故事。後代、吳王孫權はその子孫なり。そんまのり(孫鍾瓜)孫鍾、貧しき時、三月二十四日、京都白川にありし尊勝寺に行はれし會式。寺は後世絶つ。曾て、石に枕し流に漱ぐといふべきを、誤て漱石枕し流といひしかば、友、之を告めしに枕し流は耳を洗ふ爲、漱石は齒を磨く爲なりと答へしといふ。  
 そんめん(孫臍)孫武の孫。曾て齊の軍師、鷹消の爲に足を則られ、後敵將鷹消を街中に墜れ殺す。  
 そんま 越後國の方言。左様ならに同じ。  
 そんめん(尊圓)伏見帝第六の皇子、天台の座主。青蓮院の門主となる。御家流書法の祖。

そめいろのやま

そめいろのやま(蘇迷盧山)須彌山のこゝ。東は白銀、西は眞珠、南は珊瑚、北は黄金なりと云ふ。又、染色山と書て夕暮のこゝをいへり。  
 そめい(染木)錦木のこゝ。  
 そめい(遊廓)遊廓を素見すること。京阪地方の語。  
 そめい(染姫)(秋)龍田姫。  
 そまん(什麼生)支那宋代の俗語にて多く禪家に用ゐる。抑し如何にの義。  
 そま(征矢)戦争に用ゐる矢。  
 そま(初夜)しよや。  
 そま(それやさいふに同じ。副詞。  
 そま(嘘)嘘す意、喝采すること。  
 そま それよの意ある副詞。物を思ひ出すこゝなごに發する語。  
 そま(驚破)そまご同じ意に用ゐる、又、すはやご同じ場合に用ゐる副詞。  
 そま(狙獲)获生想右衛門といふ。物部氏字は茂綱、柳澤侯に仕へ古學の大儒たり、常に炒豆を嚼りて書を讀を樂しむ、又大言壯語の僻ありしといふ。寛政四年歿。  
 そま(空蕪)いづこも知れぬやう香を蕪くこゝ。  
 そま(空豆)(蠶)高さ三四尺の蔓草、

そのまのほな

秋種を下し春、葉間に黒斑ある白花を開き莢を結び倒立して空に向く、夏熟す、豆は指大にして多く煮て食ふ。蠶豆。  
 そのまのほな(空豆花)(蠶)空豆を見よ。  
 國 そら豆の花に明たる夜也けり升六。  
 そのまのほな(蠶豆引)(蠶)五月頃、蠶豆の熟したるを取收すること。國 牧守や殺そら豆を引惜む 干魚。  
 そま(雪車)(冬)寒國にて堅材を以て舟の如き形とし、之に乗り雪上を滑らしゆく具。其制大小あり。又、薪其他の運搬にも用ゐる。  
 雪車引。國 北國や雪車引入る、煙出し 蟻水。  
 そま(雪車引)(冬)雪車を御する人の服なり。  
 そま(蘇利古)舞樂の名。扇面をつけ四人にて舞ふ。  
 そまのほな(仙翁花)(秋)せんをうけ。  
 それか(對雪)(冬)麿持の麿の通したるをいふ。國 麿持やそるゝも見えて雪の山 沙羅。



(り) (そ)

た

た(誰)たれに同じ。  
 た(權)双六を打つこゝ。又總て錢にて行ふ賭事をいふ。  
 た(大融寺)大融寺(春)正月七日、大阪北野の大融寺境内にある辨天社にて行ふ宮藏。其面と同じく二月三日、二の宮あり。延寶頃の行事なり。  
 た(大融寺二宮)(春)大融寺の宮を見よ。  
 た(内室)(春)ナイエン。  
 た(大恩教主)釋迦を指していふ佛語。  
 た(太師)(春)春の異名。

た

た(候可候物)事をなげやりにする。いふ。  
 た(曾呂松尾)小扇の名。曾呂松尾形が遺ひし扇の如しとて名く。  
 た(曾呂利)曾呂利とも書す、名は新左衛門、泉州堺の船師なり、和歌、茶道等に達し、又、滑稽の才ありて豊太閤に寵せらる。  
 た(未だ生立たぬ間をいふ)。  
 た(大寒)(冬)二十四氣の一。寒(さ)を見よ。國 大寒や八月欲しき松の月一茶。  
 た(戴逵)晋人、字は安道、博學にして又、琴をよくす、武陵王に召されしに、安道は王の伶人とはならずとて琴を破り召に應ぜざりしといふ。  
 た(大紙忌)(秋)八月九日、炭太紙(不夜庵、徳語の號あり、明和八年京に歿す。無村と同時代の俳傑)の忌。國 大紙忌や香餅なほ居て其噂 白雨。  
 た(大變)(春)二宮の大變を見よ。又大臣となりし人の行ふ變事。(後者は錯なり) 國 大變や毒詞頼まる、文章家 江村。  
 た(大極殿)禁中にて天子朝に臨み給ふさきの正殿。  
 た(大宮司)官幣社の神官の長を云ふ古稱。  
 た(代官)庄屋名主の支配役の名。年貢、公事、人別など司りしもの。  
 た(大元師法)(春)正月八日より十四日まで、禁中治部省(後世太政官にて行ふ)にて大元師の秘法といへるを行ひ、主上の御衣を遺はして祈禱せしめ給ふ。(大元師は師を讀まぬを例

た(大黒)山城國宇治郡の地。東方に醍醐山雙え、笠取山その近邊にあり。上醍醐、下醍醐の二寺あり。  
 た(大黒頭巾)大黒頭巾(冬)丸頭巾をいふ。大黒天の像の被れる如きもの。  
 た(大黒舞)(春)元日、京阪の股者、大黒天の姿を模し、假面、頭巾を着て市中に唄ひ舞うて門々に錢を乞ふもの。又、江戸吉原にては正月三日より二月初午の頃まで、種々の物真似などして舞をなし、錢を乞ふものありしこゝ。國 面落て近付おかし大黒舞 市川。  
 た(大黒湯)(春)東叡山大黒湯。た(大湖石)支那産の石。斷岩絶壁の形をなす。大なるは庭に置き、小なるは床の飾とす。我國にては美濃の明星山より産す。



(大) (黒)

た



たぐり

たぐりたぐり「奉頭女郎」遊女の名稱。享保以前藝子なき頃、三絃等を引きて座を取持しより名あり。  
 たぐりたぐり「大根引」(冬)大根を圃より引き抜くこと。圃 鞋蓋に小坊主乗るや大根引 桃青。  
 たぐりたぐり「醍醐祭」(秋)九月九日、山城宇治郡小野の南、深雪山醍醐寺なる醍醐天神社(長尾天神外二社を祀る)の祭禮、社前に能樂等を能す。○醍醐宵祭。國樂の音も醍醐祭の長夜哉 長靴。  
 たぐりたぐり「醍醐味」牛乳を最も善く精製したるもの。佛説に、始め般若方等などの權教より、最終に法華涅槃の實教を説きたるに喩へたり。  
 たぐりたぐり「大根」(冬)蘿蔔をいふ。菜類。四季としにあれど秋種を蒔き、冬收むるを以て季とす。○大根引。圃ものもの大根からき噛哉 桃青。  
 たぐりたぐり「大根祝」(春)大根を蓬菜などに用ゐること。カガミ草。  
 たぐりたぐり「大根花」(春)蘿蔔。葉は蕪に似て粗く硬し、春、高き莖を出して花を開く。四瓣にして淡紫、又は白色なり。○花大根。圃 大根の花や雲雀は雲の中 虚子。

たぐり

たぐりたぐり「大根時」(秋)八月の頃、蘿蔔の種を蒔くこと。圃 まき付て土用にかゝる大根哉 定武。  
 たぐりたぐり「大根物狂」元祿三年、鬼貫等の連俳を集めし書。  
 たぐりたぐり「醍醐宵祭」(秋)醍醐祭の宵宮をいふ。能樂等あり、之を宵宮能といふ。  
 たぐりたぐり「泰山府君」(春)たいさんふく(櫻の名)  
 たぐりたぐり「第三」連句の發句より三句目の立句を云ふ。連句作法を見よ。  
 たぐりたぐり「泰山府君」道家に祀る支那泰山の神の名。我國には素戔鳴命となり現れしと云傳ふ。  
 たぐりたぐり「泰山府君」(春)櫻の一種、古へ櫻町成範卿、京東山双林寺山上の櫻の盛ならんことを天帝に祈りたる故事より名く。樹は枝に曲折ありて花大く、八重にして濃紅なり。開花遅けれど盛久し。たいさんふく。  
 たぐりたぐり「太子講」(春)二月二十二日、大阪四天王寺太子堂にて聖觀音の後に行ふ法事。舞樂等あり。  
 たぐりたぐり「大師講」(冬)十一月二十一日より二十四日迄、天台宗の諸寺、其開祖

たぐり

智者大師(其條參照)の忌を修す。京比叡山、江戸東叡山、野州日光山等は二十一日朝より二十三日晩に及び晝夜法間あり、之を論議さひ、又、二十四日俗間にて赤豆粥を食ひ、枯柴を以て箸とするを智惠の粥、又は大師粥といふ。圃 大師講明くれば暮るる夜也けり 白雄。  
 たぐりたぐり「大師粥」(冬)大師講を見よ。  
 たぐりたぐり「大士忌」二十七年の回忌をいふ。  
 たぐりたぐり「大食調」樂曲の呂調の名。  
 たぐりたぐり「太子堂生身供」(春)天王寺生身供。  
 たぐりたぐり「太真」楊貴妃のこと。  
 たぐりたぐり「大身」位階高き人をいふ。  
 たぐりたぐり「大人」君子と云ふに同じ意。  
 たぐりたぐり「大憲」富者、又は遊廓にて豪遊する人をさしていふ。  
 たぐりたぐり「大臣大舞」だいきやう。  
 たぐりたぐり「大靈舞」正保頃、江戸吉原の幫間、二朱判吉兵衛が作りし小唄。當時の大靈の數々を擧て全盛を唄ひしもの。  
 たぐりたぐり「臺榭」高樓をいふ。  
 たぐりたぐり「大師講」弘法大師流の書法を云ふ。  
 たぐりたぐり「大祥忌」三年の回忌をいふ。

たぐり

たぐりたぐり「第唱句」連俳の用語。漢和の連句の發端の句をいふ。  
 たぐりたぐり「大尊會」天皇御即位の後、初めて行はせらる、新嘗會をいふ。十一月中卯日に行はれ、神事の最大なるものとす。  
 たぐりたぐり「帝釋」佛教にいふ天帝のこと。○梵天帝釋。  
 たぐりたぐり「太子山」(夏)祇園會の山の一、聖德太子が天王寺建立の材木を愛宕郡に求め給ふ體を作る。  
 たぐりたぐり「大樹公」將軍のこと。  
 たぐりたぐり「大星」(夏)二十四氣の一。  
 たぐりたぐり「大乘」佛教の名目。大いなる車に衆生を載する義にて、人を説き導く法。小乗の反對にて意義深遠のもの。天台、眞言、淨土、禪、法華等は皆大乘にて、日本には俱舍、律などより小乗はなしといふ。  
 たぐりたぐり「退走禿」一に老舞といふ。舞樂の名。  
 たぐりたぐり「太子會」(春)二月二十二日、太秦廣隆寺其他諸處太子堂にて聖德太子の忌を修すること。圃 太子會に来て在すなり藤原高 連山。  
 たぐりたぐり「茶湯の式」用ゐる棚の如き

たぐり

臺。茶碗、水差、茶器等を載するもの。眞蓋子、竹蓋子等の類あり。  
 たぐりたぐり「大成殿」孔子を祀る堂の名。  
 たぐりたぐり「大雪」(冬)二十四氣の一。  
 たぐりたぐり「大族」(春)正月の異名。  
 たぐりたぐり「橙」(秋)橙の實をいふ。樹は幹高く葉は扁く大く兩刺ありて二段の如し。夏の中に小白花を開く、實は大くして熟すれば黄色となり年々落ちずして形長ず。故に代々の意に寄て正月の飾とす。(飾る意に詠めば春季なり。○橙飾る) 圃 橙や伊勢の白子の店さらし 桃青。  
 たぐりたぐり「橙賣」(冬)飾賣。  
 たぐりたぐり「代々講」伊勢講のこと。諸國の人組合ひて願金し伊勢神宮に詣りて神樂を奉ること。  
 たぐりたぐり「橙飾」(春)世俗に橙を代々の祝詞に寄せ、正月の蓬菜、門飾に用う。圃 橙や春を重ねし千年家 山呼。  
 たぐりたぐり「橙花」(夏)橙を見よ。  
 たぐりたぐり「退轉」佛説に迷うて一つ所に居たこと。信金薄きを云ふ。  
 たぐりたぐり「大燈忌」(冬)大徳寺開山忌。  
 たぐりたぐり「大徳寺」山城國愛宕郡紫野にあ

たぐり

る禪宗の伽藍。大燈國師の開基にして正中元年の創建といふ。  
 たぐりたぐり「大徳寺開山忌」(冬)十月二十二日、京都紫野大徳寺の開山大燈國師(名は妙超、建武二年寂)の法忌を行ふ。○大燈忌。圃 霜ふせぐ一把の草や大燈忌 青々。  
 たぐりたぐり「大徳寺製」京紫野の大徳寺派の茶人の用ゐし茶の製地、白地に石疊、花模様あるもの。  
 たぐりたぐり「大徳」僧を崇めて云ふ語。  
 たぐりたぐり「大日如來」毘盧遮那佛のこと。奈良大佛の像なご是れ也。  
 たぐりたぐり「對屋」兼中或は貴人の邸宅の寢殿に對して造れる離れ家。女房の住む長局にて、東の對、西の對など稱す。  
 たぐりたぐり「代のよ」君が代などの如く讀む代の字をいふ。  
 たぐりたぐり「類馬風」暴風を云ふ。馬も倒れる程烈しきこと。  
 たぐりたぐり「太白」金星をいふ。曉の明星ともいふ。又、酒杯をいふ。  
 たぐりたぐり「太白」(秋)百菊の一、白菊なり。  
 たぐりたぐり「大般若」佛敎の經文の名、六百卷あり。唐の玄奘、天竺の玉華寺に







たがらしのはな

赤し唐辛子 桃青。唐辛。園赤からん花の白さや唐辛 信徳。たがらし(富歸)草の名、高さ二三尺、葉は深緑にして互生し厚く細長し。夏枝頭に傘状をなして小白花簇り開く。根を薬用とす。園 奈真道や富歸園の花一木 蕪村。

たがらし(唐辛) 秋)モロコシ、タワモロコシといふ、糸の一種。多く圃の傍に植う。高五七尺より一丈に及び、茎太く葉長大にして互生す。夏の頃、葉の端に穂を出して多くの花を開き、青さ皮に包まれし實を結ぶ、内に豆の如きもの集り生ず。磨きて粉にし團子などにす。蜀黍。園 唐黍を流る、香や水見舞 其角。

たがらし(唐桐) 秋)桐の類、高さ二三尺葉丸くして末尖り、大き尺に及ぶ。夏穂を出して紅花を開く花繁く甚美し。多く暖地に生じ花を賞す。桐の字により古來秋とす。桐桐。たがらし(唐榎) 榎の一種。樹の細さもたがらし(道具屋節) 大坂の淨瑠璃語り

たがらしのたがらし

道具屋吉兵衛が唄ひ出せし小唄節の名。たがらし(桃花粥) (春) 楊花粥。たがらし(桃花酒) (春) 桃の酒。たがらし(桃花節) (春) 三月三日(上巳)を見よと云ふ。桃花を酒に浸し宴する故也。桃の節句。園 諸やこに桃花の鶉の聲 其角。たがらし(道灌草) (夏) 草の名、葉は撫子に似て高さ二尺餘、初夏の頃鈴の形したる花を開く五瓣にして紅白あり。



(草 灌 道)

後房を結ぶ、穀に五稜ありて子ば豆の如く熟すれば黒し。薬用とす。木藍子。長鼓草。王不留行。菘草(カサ)。たがらし(道灌山) 武蔵北豊島郡日暮里に在る小丘。もと太田道灌の居城ありしと云ふ。たがらし(投華) 灌頂のこと。

たがらし

たがらし(桃源) 武陵桃源といふ。支那湖南の地に秦の亂を避けしもの住せし一村落にて桃の外、他樹なしといふ仙郷。晋の太元年中、漁人迷入て七日にして歸りしと云ふ故事あり、地は今尚ほ存す。たがらし(道順) 天智帝の時の備。馬の尾に果くひし鼠あるをトして、高麗の我手に入るを奏したが、果して其言の如くなりしといふ。

たがらし(道元) 内大臣藤原通親の子。建仁寺明全に就て禪を修し後、入宋して歸り曹洞の一派を開く、寺を越前吉井郡に興し永平寺と呼ぶ、屢々當朝の帝の恩命を蒙り又、北條時頼に招れしも固辭す、建長五年寂す、五十四、承陽大師と謚す。たがらし(道元忌) (秋) 永平寺開山忌。たがらし(南弘景) 支那梁時代の人、山中に隠れ華陽隱居と云ふ、梁の武帝大事ある毎に就て香る、時人呼で山中の宰相と云ふ。

たがらし(唐獨樂) 竹筒を輪切にして上下を木にて塞ぎ、竹の心棒を通したるコト。別に穴を穿ち心棒に糸を結びて廻せば空氣のため高き音を發す。俗に云々住宅を移ししものなり。たがらし(唐招提寺開山忌) (夏) ワチハマキ。たがらし(盜匠) 魯の大夫、柳下惠が弟にて大盜なり、莊子に盜匠の篇あり。たがらし(唐船) 唐土の視度官人といふもの、日本に渡り箱崎殿に仕へ二人の子を設く、然るに古郷に残し置きし子二人、父を迎に日本に来る、主、日本にて設けし子を留めよといふ、父左右に心惹かれて別れを悲むことを作りし謡曲。

たがらし

たがらし(唐胡麻) (秋) 草の名。胡麻の一種。莖高さ丈餘に至り中空にして節あり。葉は麻に似て甚大なり、秋、莖頭又は葉間に黄白色の花聚り閉くこ神樂鈴の如く、其實は大豆の如く、製してヒマシ油を採る。唐 胡麻。ヒマシ。カラエ。カラガシハ。園 唐胡麻や油につもる一ト島 求木。たがらし(團三) 曾我兄弟の家人、鬼王の弟。兄弟の復仇後、其親を屠らして、家に歸る。たがらし(道三) 今大路一溪と稱す、明應頃、洛の人、鎌倉にて三喜に醫を學び名四方に高し。たがらし(道三) 宮尾氏、諸藝に通ず。千利休の男なり。たがらし(道士) 道家。たがらし(導師) 佛葬の式を司る僧。たがらし(室島) 大坂天満の西に在り。米市場を以て名あり。たがらし(道心) 佛に歸依せる心。又、若年にして佛道に入りしものをいふ。たがらし(唐人相撲) 能狂言の名。たがらし(桃仁湯) (春) 元日、去年實りし桃の實の核を湯に入れて呑むもの。よ

たがらし

く邪氣を散ふといふ。桃湯。たがらし(唐人踊) 立園が編みし俳諧集の名。たがらし(道者) 神佛へ參詣の旅人をいふ。たがらし(道成寺) 紀州の道成寺に鐘供養あると云ふ、鐘に執念をなしたる女の霊、白拍子となり、舞をなして後、鐘を落して蛇體となり遂に法力によりて失する、ことを作りし謡曲。たがらし(陶朱) 越の范蠡、功成り名遂げて後退き、齊に在りて富を作し陶朱公と云ふ。たがらし(道春) 林氏。名は信時、羅山と號し禪髪して道春といふ。徳川幕府の儒官にして朱子學を稱へ、家康以下四世に歴仕す。明暦三年歿。たがらし(室司) 禪僧のこと。たがらし(桃青思) (冬) ばせうき。たがらし(當世男) 蝶々子が編みし俳諧集の名。たがらし(道昭) 河内の産、白髮年中渡唐して禪を學び、高僧の名あり。文武四年寂。我國にて火葬を始めし僧。たがらし(唐招提寺) 南都七太寺の一。大和國添下郡跡村にあり。鑑真の開基にして、講堂、食堂等は當時の貴紳の

たがらし

たがらし(道祖神) さへの神、又だうろくじんといふ。猿田彦命なりといふ。多く路傍に祠を立て草鞋を供へて祀る。たがらし(道祖神祭) (冬) 十一月十六日、攝州天王寺村にある道祖神の祭あり。祭の前に村中の兒童、往來の人に供物料を乞ひ、與へされば泥つきたる繩にて路を遮る。故に此日、堺の魚荷飛脚を除く外は此道路を通行せずと、一に泥くじり祭、道祖神祭といふ。園 道祖神の中に生出たる蕪かな 玉芝。たがらし(田歌) (夏) たうまつた。たがらし(桃湯) (春) 元日、桃を入れし湯に浴すれば墨疫にかゝらずといふ。〃



桃仁湯。たうち(田打)(春)たがやし。たうち(道中双六)(春)東海道を江戸より京に上る道中五十三驛を圖して之を過ぎゆくやう作りし双六。圖道中双六後や先なる君と我 波空。たうち(唐菖)(春)野菜の名。葉はスヽナに似て甚厚く、四時食ふべし。故に不斷菜、不斷草といふ。春莖高さ二三尺、葉間に白花簇り開く。ハワレン草の花に似たり。根は赤くして食ふべし。たうち(道陳)攝津國堺、南宗寺の祖、茶事に精しき僧。たうち(道哲)明暦の頃、江戸吉原土手下に庵を結び、一向念佛して終りし僧。又、其庵の名。たうち(道頓)大阪東區に在り。千日前其近傍にあり、芝居、見世物など多く繁華の地。たうち(道頓堀)大阪東區初芝居(春)正月、大阪道頓堀劇場の初興行なり。元禄頃の行事にも出づ。たうち(道耳)志野氏。泉州堺の人、東山義政に仕へし香道の師。茶道を珠光の門に學び、弟子を傳はる。

たうち

たうにんたう

たうにんたう(桃仁湯)(春)たうじんとう。たうにんたう(道念節)京の道念山三郎と云ふ木道の音頭取の名人、盆踊の口説に倣ひて唄ひ出せる俗曲。貞享頃流行す。たうのいも(唐芋)(秋)芋の一種。莖は紫赤にして、根大く、子小なり。莖根共に食ふべし。一霜の寒さや芋のすんど切 支考。たうのいも(唐芋賣)(冬)西の市に唐の芋を並に申して賣るもの。たうはち(道八)素焼の茶器の名。たうぼん(桃板)(春)桃符。たうひき(到彼思)二十七日の佛忌をいふ。たうふ(桃符)(春)支那古代の俗に、元旦畫鶴を戸に貼し、葦索を懸け、其傍に桃符の枝にて作りし符を挿じ、神茶(神茶)の古事に象りて鬼を追ふ爲なり。仙木。桃板。神茶(神茶)。我腰の桃符はしがる禿々な 青々。たうぶ(馬)たまふに同じ。たうぶ(食)くらふこと。たうぶ(道服)廣袖にて裾に雙目ある十徳に似し服。中世貴人の塵除のために着るもの。たうぼん(道本)寂傳竹林といふ。黄檗宗の僧、書に名あり。

たうま

たうま(道滿)芦屋道滿と云ふ、播州の産、安倍晴明の門にして陰陽家なり。後、晴明を殺し其秘書を奪ふといふ。たうまる(鶴)鶴の属の最も大なるもの。たうまる(唐丸)罪人を乗するに用ゐる駕形、鶴を乗る、竹籠の如きもの。たうみ(唐箕)穀物の枇を分くる器械。米商などにて用ゐるもの。一馬車。たうみやび(道明寺)河内志紀郡土師(土師)の里に在り。菅公の伯母覺壽尼の住寺にて土師寺といふ。福を製出するを以て世に名高し。又、道明寺に白太夫の靈現れ、天満宮の昔語をなすことを作りし諸曲。たうみやび(道明寺)(靈)ほしいひ。國屋が兒に尊とがらせん道明寺 嵐雲。たうみやび(道明寺祭)(春)二月二十五日、河内國志紀郡道明寺にて菅公の祭息を行ひ、菅公自作の傳ふる木像を開帳す。國祭の日しひまなき尼の水粉々な 西鶴。たうみ(道無)文明頃の醫なり。禪の問答を好み名言多かりしといふ。たうめ(専女)老女のこゝろ。又、老狐をいふ。たうもろこし(玉蜀黍)(秋)たうまぎ。

たうやく(御青藥)(春)正月三日、朝廷にて御藥(り)を供すること了りて、典藥頭より上れる青藥を天子自ら取て玉體に塗らせ給ふこと。御青藥はカウヤク(カウヤク)の忌詞なり。たうやく(龍驤)(秋)龍驤の一種、形状りんだうに似て稍小く、根莖共に味苦し。秋引きて藥用とす。〇胡黃蓮。干振(ア)。〇當藥引。たうやく(當藥引)(秋)たうやく。〇苦々しき顔で當藥引にけり 貞武。たうやく(根地草)(秋)河邊の地に多く生ずる草。初め露の如くにて長じて葉五葉、莖葉共に黄緑となり、八月枝の末に花を著く。〇矢筈草。たうやく(唐弓)結号のこと。たうやく(唐百合)(夏)姫百合の一種、花赤くして瓣厚し。たうやく(桃浪)(春)三月の異名。たうやく(蟻)かまきり。たうやく(蟻)七十二候の一、五月節の第一候。此頃、蟻生するなりといふ。〇萬骨の枯れて蟻生れけり 露月。たうやく(蟻)力の足らざるを知らずして大敵に向ふことを、蟻が物

たうやく

たうりん

たうりん(前足を振ふにたさふ)。たうりん(桃李園)唐の李太白が春夜桃李の園に宴すること記したる文。載て古文にあり。たうりん(道陸神祭)(冬)道祖神祭。たうりん(唐橘)(秋)木橘(カ)。たうりん(田植)(夏)早苗の七八寸なる頃、苗代より常の田に移し植うること。四五根づゝを一株とし敷すを隔て、植う。農家の女傭を運送ひつゝ、行ふ。〇早乙女(イ)。田植歌。田植笠。早苗(イ)。今日ばとて嫁も出立つ田植。な 蕪村。たうりん(田植歌)(夏)田植の時、田植女の唄ふ俗謡。〇田歌。〇覺えんさすれば時すぐ田歌。な 青藤。たうりん(田植笠)(夏)田植の人の被る笠。〇早乙女のさみだれ髪や田植笠許六。〇絶間之巻。鳴神上人の稚兒にて容貌頗る美し。上人是が爲に墮落せしと云ふ。たうりん(冬)鷹類の總稱。「異名」かし。鳥。なら柴鳥。〇熊鷹。はし鷹。鴨。のせ。ばやぶさ。(さ)しば。つみ。

たうり

たうり(このり、えつさい等は秋の小鳥狩に用ゐらる故に古來秋季とす)。又、鷹の一種、青蒼白に胸白く斑文あり。尾黒白の重文あり。狩に用ゐて諸鳥を捕へしむ。其一歳なるを若鷹、二歳をカカヘリ、三歳をモロカマヘリといひ、又雄鳥を兄(鷹)、雌鳥を大鷹といふ。〇鷹組んで鶴の毛ちらす鷹かな 曉齋。たうり(鷹)能面の名。鶴の類に用ゐる。たうり(他界)佛語。死ねること。たうり(鷹犬)(冬)鷹狩に用ゐる獵犬。其餌を打(イ)といふ。〇狩杖。〇鷹犬の繩にひかる、枯野哉 屠龍。たうり(誰家)其角の編みし俳書の名。たうり(尊氏思)(夏)四月二十九日、山城葛野郡衣笠山の麓なる萬年山等持院にて足利初代將軍尊氏(正平十三年卒)の思を修すること。たうり(鷹打)(秋)七八月の頃、鷹の雛を離れ自ら食を求むる時、崖上の喬木の邊に網を張り(網掛(イ))と稱す(死鳥を謀として之を捕ふ。一に鳥屋待(イ))と云ふ。〇鷹打の野狐待けり鷹の中貞兼。たうり(等)(夏)たけのこ。たうり(雁掛)雁などのタガをかり、修繕



たかひり

するを業とするもの。多く路上を歩行する。鷹狩(冬)鷹を使ひて諸鳥を獵る。...

たかせき



(匠 鷹)

淀川の下流なり。又山城京都の賀茂川の西に沿へる運河。たかせき(高瀬船)淺瀬を行くに適したる川船の大なるもの。...

たかつ

に在る地。藤原秀衡が義経の爲に城を築し。たかつ(高坪)菓子など盛る器。くりもの高さ足ある盆。...



(高燈籠)

の如きものを結び、杉葉にて包み、其下に圖の如き行燈を掲ぐ。毎夜暮六つより明六つまで點す。揚燈籠ともいふ。...

たかなぶり

なり。鷹(冬)鷹を祭るや、ろき山の風梅架。たかなぶり(鷹括)(冬)夜居(ユス)の鷹を糵させぬために用ゐる糵の類。...

たかひり

や野山の夢の聞しき。巴野。たかひり(鷹出)(秋)七月中旬、鳥屋(社)に入りたる鷹の羽を新になりて鳥屋を出る。...

たかひり

親鳥に別る、をいふ。山別の鷹。若鷹。鷹朝風や山を離る、鷹一つ博子。たかひり(鷹括)(冬)鷹の餌を入れ...



たかまつり

青々。

たかまつり

〔多賀祭〕

四月

中

日(陽)

十二

日(近)

江大

上郡

多賀

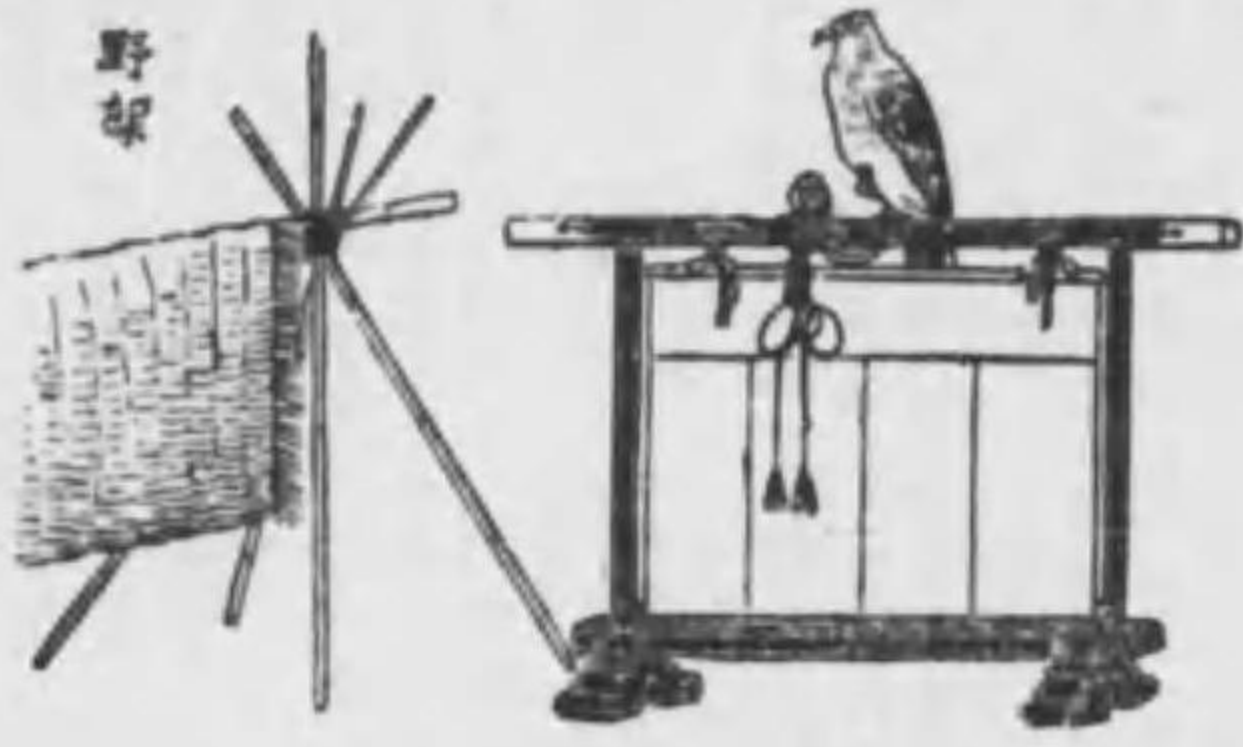
大社

(祭神)

伊弉

野

諸尊)



(樂) (鷹)

の祭禮、神輿本宮より長の方なる栗栖村の御旅所に渡御し供奉の村民種々の造花を出す。國杓子果報あたりもよしや多賀祭 景三。

たかまつり (鷹) 竹にて編みたる籠、夏季の敷物とす。〓浮屠。國夜に入て三時ばかりをたかまつり 五明。たかまつり (竹) たけのこ。たかまつり (室) 竹藪のこと。たかまつり (高柳寺) 武州栗橋の南にあふ、中田宿に移り光了寺と云ふ、靜御前の舞衣を賣物とす。たかまつり (鎌刀木) 熱帯地に生ずる木材、器具を造るに用ゐる。たかまつり (耕) (毒) 稻夢其他の野菜を植ふる爲め田畑の土を打ち返すこと。〓たかまつり。田打。細打。鳥打。田を動かす。田かへす。〓耕や五石の粟のあるじ願。無村。たかまつり (高安里) 大和國高安郡に在り、伊勢物語に出でし兼平の河内通ひの故事にて有名なれば多く戀の心に用ゐらる、又河内木綿の産地。たかまつり (鷹山) (鷹) 祇園會の山の、又太郎山とも稱し山さしといふ。鷹匠の鷹を据え大牽を連れて鷹狩する體を作る。たかまつり (高行) 空を飛ゆくこと。たかまつり (賣合) 種々の賣を競ぶること、轉じて陰翬を競ぶるを云ふ。

たかまつり

たかまつり

たかまつり (寶貝) (毒) 貝の名、殼の中央に齒の如き刻みある縦孔あり。婦女安産を祈る爲此貝を藏す、故に子安貝と云ふ。〓貝張の中に交ばや寶貝 旨原。たかまつり (田芥) (毒) 草の名、秋水田に生じ、春莖を出す。三月頃、葉間に枝を生じ、枝毎に五瓣の黄花を開く。花葉共にキンコウケに似たり。其實は楊梅の如くにて小く、熟すれば深緑なり。〓回轉。たかまつり (寶珠) 寶珠、小槌、隱蓋などの種々、想像の賣物を畫きたる模様。たかまつり (寶寺開帳) (秋) 七月十六七日、山城國山崎、補陀落山寶積寺(俗稱寶寺、眞言宗にて僧行基の草創なり)にて安阿彌作の不動、毘沙門の像並に行基、弘法、慈惠の木像を開帳すること。たかまつり (寶市) (秋) 九月十三日、攝津住吉社内の市段(寶)神社(市を守る神と云ふ)の祭に升、取鉢(銀を入る器)を商ふこと。一に升の市ともいふ。(住吉相撲會参照) 國昔見し遊女にあひぬ升の市 月溪。たかまつり (寶差) 能狂言の名。たかまつり (寶船) (冬) 節分の夜、七福神、

たかまつり

其他賣物の乗りたる船を畫き、枕に敷きて眠り、古夢あれば來歲、福を得、若し惡夢なる時は翌朝之を流水に付し、以て惡夢を流すこと稱す。又、ながさよのさかぬふりのみなめさめなみのりふれのおこのよきかな」といふ題文の俗歌を書きたるものあり。之を板行したるものを賣歩くをお賣賣といふ。(今は正月の初夢に専ら行はる) 〓賣船し。〓須磨明石見の寐心や賣船 嵐雪。

たかまつり (寶船費) (冬) お賣賣。

たかまつり (寶船費) (冬) 賣船。

たかまつり (高尾) 山城國葛野郡に在る山、山上に神護寺あり。紅葉に名高し。

たかまつり (高尾) 江戸吉原三浦屋の遊女。初代を万治高尾と云ふ、以下十一代まで繼續す。高尾考、高尾年代記などに精し。

たかまつり (高尾法華會) (春) 三月十日、山城國高尾山神護寺にて法華會を修す。延暦の頃より始まること云ふ。安良日花(ヤスナ)とも見よ。

たかまつり (高尾虫拂) (夏) 六月三日より九日迄、山城國高尾山神護寺に於て賣物の虫拂を行ふこと。

たかまつり (高尾女詣) (春) 山城國高尾山神護寺に女人禁制の寺にて毎年三月廿一日、御影供に限り女人を許す。故に此日女人の參詣多しといふ。たかまつり (打球) 古昔の遊戯の名。騎馬の士紅白の毬を籠にて遊び、已が組の球を的の穴の中に早く投入し勝負を争ふこと。たかまつり (打毬樂) 舞樂の名。たかまつり (抱籠) (夏) 竹にて編みたる細長き籠、夏夜寐るに抱きて風を通はし涼を取る。〓竹婦人。竹奴。青奴。竹種。〓抱籠や誰に抱かれて拂もの召波。たかまつり (瀬瀧) (冬) 冬季、瀧の流の潤ること。〓瀬瀧れて木葉を叩く聲哉 唇風。たかまつり (新讀) (冬) 薪の讀。たかまつり (新讀) (秋) 七月七日、山城國新讀郡新里、願恩庵(一休和尚の建つる所、世に薪寺と稱す)にて什賣の虫干をなすこと。〓虫干や裏の竹さる薪寺 青々。たかまつり (薪能) (春) 二月七日より十四日まで、奈良興福寺にて夜中の法會あり。其間同寺、南大門の前なる芝生に焚

たかまつり

たかまつり

火して能狂言を行ひ、四座の大夫之を勤む。古へ寺僧、法要を營む間、其奴僕の寒に堪へずして火を燒き、俳優の戯して暖を取りたるより起るといふ。〓芝能。〓地謡のしえすきりなる薪かな 沾徳。たかまつり (薪) (冬) 十月八日より十二日、津天王寺、萬塔院にて行式を十講會といふ。



(讀) (薪)



たきごも

此會式の中(十日)に役僧淨衣を着し薪、水桶、草花の折枝、指花等の籠を荷ひ堂内を回りつゝ、「法華經を我得しことは薪こりなつみ水汲み仕へてぞ得し」といふことを節つけて誦ふ。たきごさん。圖 水桶と薪と擔ひつゝ薪讀 青々。

たきごも「瀧口」禁中の御湯殿の落口を云ふ。此處に六位の武臣詰り居て警護すといふ。

たきごも「抱經」(夏)攝津市岡の土人、夏、池中に網を張り鯉を追寄せ、大なるものは水際にて抱き取るをいふ。

たきごも「湧出」わきあがること。

たきごも「瀧殿」(夏)泉殿。

たきごも「瀧飛」(春)峯入の時、檢校の宮の名代として、所を携み、垢離場の瀧に飛込よむること。(峰入の條參照) 圖 瀧飛のけりりと浮や星使 嵐雲。

たきごも「ぬんぶつ」(瀧宮念佛) (秋)七月廿四日、讃岐瀧宮の附近七ヶ村にて催す盆踊。そのうち長刀振といふことあり。

たきごも「瀧宮祭」(秋)七月廿五日、讃岐國南條郡瀧宮社(菅神を祀る)の祭

たきごも

たきごも「瀧」たへまを見よ。

たきごも「瀧枕」瀧の近邊に泊ること。瀧の音を枕邊に聞く意。

たきごも「薰物」香のこと。又、香を焚くこと。

たきごも「薰物姫」(秋)七夕星の異名。七夕七姫の一。

たきごも「瀧井山三郎」寛文頃、歌舞伎の女形にて舞唱歌の上手なり。

たきごも「馬術」馬の足並のや、早くなりて未だ馳け足にならぬ歩行さまを云ふ。

たきごも「澤庵」但馬出石の人、名は宗彰。幼より禪門に入り、其奥を究む。普く諸國を遊歴し、寛永十五年、品川東海寺の開祖となる。正保二年寂。

たきごも「澤庵流」(冬)大根の干したるを糖と鹽にて漬たるもの。十一月頃にも多く製す。圖 一樽は辛く漬けたる大根哉 格堂。

たきごも「田草取」(夏)盛夏の頃より秋に至りて稻田の雜草を取除くこと。凡十日に一回程に行ふ。之を一番草、二番草と稱し數回に及ぶ。圖 草取の雲に息づく昔田かな 紫道。○笠ばかり

たきごも

たきごも「瀧」田を遊ぶなり二番草 舟舟。

たきごも「瀧枝雨」(夏)六月の大雨を名く。

たきごも「瀧酒」(秋)しろみ。中汲み。

たきごも「手扶」古へ素焼の陶器の名。

たきごも「瀧仙」下界へ放たれたる仙人の意にて、放浪せる詩人など自稱の語。

たきごも「瀧」楠木城のこと。

たきごも「瀧」白といふ語の枕詞。

たきごも「瀧」木の皮を晒して曬こしたるもの。

たきごも「瀧布」木皮の晒したるを織りて衣としたるもの、麻衣などいふ。

たきごも「托鉢」僧の鉢を持ちて米錢を乞ひ歩行くこと。

たきごも「瀧」瀧はしむること。又、似寄りのこと。

たきごも「卓文君」司馬相如の妻。相如若き時、其家に宿り琴を鼓して挑み、遂に共に亡げて夫妻となり酒屋を營む。卓氏が族、其窮困を憐み財を饋るといふ、後、相知立身して稍や妻に疎し。卓文君、白頭吟を作りて之を誦し、伉儷又温かなりしといふ。

たきごも「宅磨」佛畫師の家の名。性は藤原氏。永延頃、爲氏を祖とす。爲久は壽

たきごも

水頃の人、下總守に任ぜられ、其名海内に傳ふる。

たきごも「巧婦鳥」(冬)みそささい。

たきごも「内匠家」古へ工匠の事を司る役所の名。

たきごも「田藏田」愚人を云ふ俗語。

たきごも「秋」キノコをいふ。圖 商。數。○茸狩。茸山。松茸。鶴茸。椎茸。初茸。シメジ茸。松露。鼠茸。針茸。椋茸。椋茸。ナメス。キノ。平茸。土茸。イクラ茸。紅茸。栗茸。キノネノカラカサ。キノネノフア。竹ノクサビラ。ヨシ茸。岩茸。蛇茸。カワ茸。猪(シ)茸。笑茸。舞茸。天狗茸。月夜茸。エブリコ。柳茸。

たきごも「竹植」(夏)竹うゑる日。

たきごも「竹植日」(夏)五月十三日を竹植日又は竹連日と稱し、竹を植うれば必ず根づくこと、支那の傳説。竹植る。圖 降らすとも竹植る日は雲と並 桃青。

たきごも「竹返」數本の竹の細き腰を、手の甲に載せ表裏均しく伏せて勝負する兒女の遊戯。

たきごも「茸狩」(秋)山中に入りて茸類を探り採ること。圖 茸狩。圖 さし上げて獲物見せけり 菌狩 召波。

たきごも

たきごも「竹伐」(秋)八月、竹を伐れば虫いらすきて、此月多く切出す。圖 竹伐るや故郷の水を渡る日に 青々。

たきごも「武隈松」相馬街道にあり、昔藤原元善の植る所、橋季通の歌に「武隈の松は二本を都人いかに問はば三木と答へん」故に又、二本の松と云ふ。

たきごも「丈比」連俳の用語。上の句に上の句を附け、下の句に下の句を附るをいふ。初心者などの多くする誤なり。

たきごも「竹床几」(夏)庭園などに置きて涼簾などに用ゐる竹の腰掛。圖 月花を宵寐の夢や竹床几 菟江。

たきごも「竹橋」(夏)抱籠。圖 汗に汚らば風そぐべし竹橋 嵐雲。

たきごも「竹田」山城紀伊郡に關す。京都油小路より伏見へ通する道なり。

たきごも「竹田出雲」阿波の人、寛文二年、始めて大阪に操芝居を興す。其子、二代目出雲は淨瑠璃の作者を兼ね、戯曲の作甚多く、就中、假名手本忠臣蔵の作有名なり。

たきごも「竹取翁」竹取物語に出し人物。名を讃岐のみやつこまるといひ、山野に竹を取るを業とせしが、或日、竹の中に一少女を得、養ひ、終に姫と名し

たきごも

が、後、富貴の家となる。

たきごも「竹拔五郎」市川家の荒事の役名。道成寺の劇に面を、隈取したる猛者、青竹を持ち、足駄を穿ちて出で鬼女を追戻すもの。一名押戻しといふ。

たきごも「竹秋」(春)春季を竹の秋とし、秋季を竹の春とす。其葉の盛衰に依りていふなり。圖 梅實てすす買や竹の秋 文路。

たきごも「竹落葉」(夏)竹葉の散落するをいふ。圖 野の宮や笹の古葉の落る音 成文。

たきごも「竹皮」(夏)竹の子長じて竹にならんとするとき其皮の落つるもの。まだけの皮は紫の斑あり。はちくは無し。之を拾ひ取り、物を包み又は細工などに用ゐる。竹の皮脱ぐ。竹の皮散る。皮拾ひ。圖 伸立て落るばかりや竹の皮 一波。

たきごも「竹皮落」(夏)竹の皮。

たきごも「竹皮脱」(夏)竹の皮。

たきごも「竹菌」(秋)竹林などに降雨多き時生ずる菌、形鹿の角の如し、又竹の枯根などに木耳の如く附生するもあり。圖 竹菌。

たきごも「竹」竹の芽生をいふ。竹



たけのこ

の子。笋。たけむな。たけうな。○すすのこ。○竹の子やまだ四五寸の草の露。土明。  
 たけのこ「竹子」能狂言の名。  
 たけのこ「竹梅雨」(夏) たけのこにふは。  
 たけのこ「竹梅雨」(夏) 四月の頃吹く東南の風。竹梅雨。菜種入梅。  
 たけのこ「竹梅雨」(夏) 天王寺土塔會。  
 たけのこ「竹梅雨」(夏) 竹を刻みて交へ焚きたる飯。○名物の竹飯や牡丹畑一刀。  
 たけのこ「竹梅雨」(夏) 親王家を云ふ。  
 たけのこ「竹梅雨」(夏) 酒の異名。  
 たけのこ「竹梅雨」(夏) 竹は數十年にして花を生じ實を結ぶ。花は晩春を季とす。  
 たけのこ「竹梅雨」(夏) 竹の秋を見よ。○己が葉に月朧ろなり竹の春。蕪村。  
 たけのこ「竹梅雨」(夏) 蕪宮の居所を云ふ。  
 たけのこ「竹梅雨」(夏) 月若さいふ者。繼母の爲に苦しめられ、竹の雪を拂ひつゝ、雪中に倒る、其實母近きに住みけるが之を拯ふて身を全うする筋の謡曲。  
 たけのこ「竹梅雨」(夏) 武藏岡田川の向島と今月との間の渡船。

たけのこ

たけのこ「葺山」(秋) 葺する山をいふ。○心にくき葺山越ゆる旅路哉。蕪村。  
 たけのこ「葺山」(秋) 九月、(日不定) 京都の檢校の翌年の積資(シヤク)に當る家にて、供物のため松茸を求め貯へ置くしあり。其家を葺割といひ、檢校句當等理らず其家に集り酒宴をなすこと。  
 たけのこ「葺山」(秋) いかのほり。  
 たけのこ「葺山」(秋) 七月廿四日、河内國入尾村地蔵の法會に市をたて古物、古枕、古下駄、古着の類まで賣ること。○蛸市に買て揃ひし端本かな。石葉。  
 たけのこ「葺山」(冬) 頂を丸く造れる頭巾。もうろく頭巾のこと。○魚市のゆきかふ朝や蛸頭巾。天倪。  
 たけのこ「葺山」(冬) 蛸を捕る器。壺瓶にウキを附け、一晝夜海中に沈め置けば蛸は穴と思ひて入込居るを捕ふもの。  
 たけのこ「葺山」(冬) 駿河國富士郡の海邊。眺望佳絶なり。  
 たけのこ「葺山」(冬) 上野多野郡池村に在る碑。上毛三古碑の一。元明帝和銅四年に建てしもの。  
 たけのこ「葺山」(冬) 貝の名。圓形灰白色にして中央に花紋あり。  
 たけのこ「葺山」(冬) 眼のただれたる病をいふ。

たけのこ

たけのこ「葺山」(冬) 京都新京極、圓福寺境内にある堂。本尊は石影の彌師如來にして傳教大師の作なりといふ。各月廿八日縁日の夜賑ふと云ふ。  
 たけのこ「葺山」(冬) 十二月卅日、京都北野天満宮へ東坊城家(菅原氏の裔)より米二俵を進獻せらるること。  
 たけのこ「葺山」(冬) 古へ筑前に置きし官府の稱。九州及諸島、外國の事を司る處。  
 たけのこ「葺山」(冬) 八月廿五日、筑前國太宰府、天満宮の祭禮。○八月の間に探つて梅の花。奇測。  
 たけのこ「葺山」(冬) 他山の石を見て己が成さること。詩經に他山之石、可以攻玉とあるより出づ。  
 たけのこ「葺山」(冬) 薬喰(ツクリ)を見よ。  
 たけのこ「葺山」(冬) 二月、官にて秋収穫したる玄米を倉庫より出し百姓に貸與ふこと。○カシヨネ。  
 たけのこ「葺山」(冬) 夕暮のこと。  
 たけのこ「葺山」(冬) 夕顔の異名。  
 たけのこ「葺山」(冬) 明暦頃、江戸吉原、江戸町四田屋の遊女、誰哉、或夜四つ過に揚屋より歸るとき、何人にか殺害さる、それより麻中諸處に行灯を出す例。

たけのこ

となる。  
 たけのこ「葺山」(冬) 木造の置燈籠にて庭園などに据へおくもの。  
 たけのこ「葺山」(冬) 又、四つに疊みて物を入置く厚紙。  
 たけのこ「葺山」(冬) わかま、なること。東京語のたけのこといふに同じ。  
 たけのこ「葺山」(冬) 京都下加茂の邊にて鴨川と高野川の合するところ。納涼に有名の場所。  
 たけのこ「葺山」(冬) みたらしまうで。  
 たけのこ「葺山」(冬) たたすむこと、又、世の中に處すること。  
 たけのこ「葺山」(冬) 事物の重なること。  
 たけのこ「葺山」(冬) いといふ語にかゝる枕詞。  
 たけのこ「葺山」(冬) 常ならぬこと。又、懐胎せること。  
 たけのこ「葺山」(冬) 多田新發意。多田滿仲の別號後の稱。  
 たけのこ「葺山」(冬) 佐藤忠信、吉野にて義経の命により、山法師を欺き空腹切つて落失することを作りし謡曲。  
 たけのこ「葺山」(冬) 平忠度、戦死の時、籠に短冊を結びしことを骨子としたる謡曲。

たけのこ

たけのこ「葺山」(冬) 攝津河邊郡多田川の傍に在る寺院。天祿元年、多田滿仲の子、源賢備の創建にして、後世、徳川氏、多田神社を造營す。鼓ヶ瀬は其南にあり。  
 たけのこ「葺山」(冬) 大江氏、文章生より出て侍從に至る。博覽にして文章に巧みなり。赤染衛門の真人、長和元年卒す。  
 たけのこ「葺山」(冬) 大江匡衡の曾孫、權中納言にして太宰の帥を兼ね、世に江帥といふ。博覧にして關白頼通に愛せらる。源義家武を諫りて匡衡に兵法を受けしこと世の美談なり。天永二年卒す。  
 たけのこ「葺山」(冬) 婦女などの占事。善などを疊の上に落し、其落ちたる處より疊の目数を勘定して其數の丁牛により物を占ふこと。  
 たけのこ「葺山」(冬) 上總五郎兵衛といふ、平家の侍大將なり。平家没落の後、眼に鱗を嵌み土工となりて頼朝を視ひ遂に捕へらる。  
 たけのこ「葺山」(冬) うで。  
 たけのこ「葺山」(冬) 鑄物に用ゐる吹革の大なるもの。足にて踏み空気を送る器。  
 たけのこ「葺山」(冬) 方形の臺の中央に丸き柱を立て、之に糸を結び巻く具。

たけのこ

たけのこ「葺山」(冬) からあふひ。  
 たけのこ「葺山」(冬) 衣類の小切れを香ひ賣る商人。  
 たけのこ「葺山」(冬) たちを(太刀魚) (秋) たちのうな。  
 たけのこ「葺山」(冬) よたか(辻君)の古稱。  
 たけのこ「葺山」(冬) 形ハモに似て細長き魚。青くして光あり、刀の如し、大なるは五六尺に至る。晩秋を漁期とす。○帶魚。鳥羽の稱。○太刀魚や波の玉ちる岩の上。緑水。  
 たけのこ「葺山」(冬) 武藏の駒。  
 たけのこ「葺山」(冬) 天日槍の裔三宅氏の祖なり。垂仁帝の時、帝の命を受けて常世の國に渡り、ささじくのかぐのこのみ(橋なりといふ)を求め、十年を経て歸るに帝崩御の後なりければ、陵の邊にて慟哭して死すといふ。  
 たけのこ「葺山」(冬) 橋の花(夏) にしいひ橋の實(秋) にしいふ又、橋飾る(春) は正月の蓬菜に用ゐるをいふ。  
 たけのこ「葺山」(冬) 正月、橋の實を蓬菜などの飾とする。○蓬菜の橋匂ふ一ト間かな。陶々。  
 たけのこ「葺山」(冬) 五月の異名。  
 たけのこ「葺山」(冬) 大和國高市郡にあり。佛頭山菩提寺と號す。聖德太子の創業



たつばなのはな

にして古へは六十六の堂會變えしが後世は荒廢に歸す。  
 たつばなのはな(橘花)(夏)橘は柑子蜜柑の古名なれど、今云ふ橘は柑子よりや、小く、庭前などに植うるものにて、夏小白花を開き、秋實を結ぶ。實は形金柑より大く、皮の肌粗くして蜜柑の如し。  
 花橘。唐橘。(異名)こよ花。庭古草。昔草。軒生草。橘のかはたれ時や古館。蘇村。  
 たつばなのみ(橘實)(秋)略して橘とのみいふ。(橘の花の條参照)  
 たつばなひめ(橘姫)日本武命の妃、尊の東征に従ひしが、相模より東海に航する時、身を以て尊に代り海に投じ、颯風を鎮め給ひしといふ。  
 たつばなむす(橘焼)魚肉を擽りて丸め、くちなしにて黄色をつけ、味噌にて煮、枳殼の枝などにつけし料理。  
 たつばな(大刀峯)能狂言の名。  
 たつばなつき(立待月)(秋)八月十七日の月、出るを立ちて待つ意。圓立待や欄干に人の顔見ゆる。牛琴。  
 たつもの(立物)植物のこと。連俳の用語。たつやく(立役)俳優の男形にて善性の人に扮するを云ふ。

たつあそ

たつあそ(枕歌)豊原氏。後柏原院の時の樂人。横笛の名手なり。嘗て山中に入り途に迷ひて狼に遇ひ、笛の秘曲を奏して狼を退しといふ。  
 たつあか(手柄)弓の手に握るころの稱。  
 たつあかし(無手束)便りなきこと。  
 たつあかゆみ(手束弓)弓を手に握るにつきていふ語。  
 たつあき(斧)袖などの用ゐる斧の大なるもの。|| 鑿。  
 たつあし(便)たより。よるべ。  
 たつあし(組己)殿の封王の愛姫、暴殺を好み肉刑を見て喜ぶ、俗説に九尾狐の化身なりと云ふ。  
 たつあし(田作)(春)農家にてゴマメを云ふ祝語。圓田作や句をうつつす豆の中貞業。  
 たつあし(調布)布を織ること。又、布を晒すこと。  
 たつあし(結縛)淫亂なる者を云ふ。古語。  
 たつあし(脱履)手足の端の血の運行絶え生機を失ひて腐りゆく病。  
 たつあし(龍田)大和國平群郡にある川。古より紅葉の名所として詠歌せらる。又、龍田明神の由来を作れる謡曲の名。  
 たつあし(龍田)名香の名。

たつたのこり

たつたのこり(龍田垢離)(冬)十月廿九日、奈良春日社祭禮の諸役を務むる者、龍田川にて垢離を取り心身を淨むること。|| 垢離とも紅葉流る、石間かな湖洗。  
 たつたひめ(龍田姫)(秋)大和の龍田に座す女神にて、秋を司る神とす。又立田姫とも書く。秋の色(多く野山の紅葉にいふ)を染出す神なりとす。(さほひめの條参照) || 染姫。圓うかりけるもの、頼ひや龍田姫。昨非。  
 たつたまつり(龍田祭)(夏)廣瀬龍田祭。  
 たつたやま(龍田山)大和平群郡にある山。  
 たつたち(塔頭)大寺院の境域にある小院を呼ぶ語。|| 塔中。  
 たつたけ(脚絆袴)かるさんのこと。  
 たつたねみ(尋見草)(春)櫻の異名。  
 たつたのち(辰市)大和添上郡にあり、辰市社ありて辰日に市立つといふ、後世穢多村となる。  
 たつたのち(龍舌草)(秋)水中に生ずる草、葉はオホバコノ如く八月、水中にて白花を開く、葉の花に似て大なり。實は三角形をなして細し。  
 たつたすけ(辰之助)水木辰之助と云ふ。元祿頃、京の俳優、女形にて、鎗踊、猫の狂

たつたのこり

言等大に流行す。  
 たつたのこり(龍舌)(春)リウ天に登る。  
 たつた(竹置)(冬)深き水中に沈めて魚を捕ふ器。竹を筒龍の如く編みて沈みたる時は口開き、引上る時は閉づるやう作り、水中に沈め魚の入るを待ち上げて捕ふ。又、漁船に之を数多く積み沖に漕出で沈め置きて魚を捕るもあり。  
 || ゴシウケ。圓數なるも寂しき沖のたつた。|| 稲守。  
 たつたつばな(辰松八郎兵衛)享保頃の人形遣ひなり、始めて出遣ひの技(黒衣を着ず仕舞を着て人形を遣ふこと)を演す。  
 たつたつばな(辰松風)男鬚の結方。高く押立たる如き風をいふ。  
 たつた(藪)(夏)水邊に生ずる草、春二三月頃苗を生じ、夏に至り繁茂す。秋枝毎に長さ穂を出し白花を開く。夏、其葉を採り食ふ。味甚辛し。(藪とのみ云へば夏にして花は秋なり) || 紫藪。赤藪。青藪。大藪。川藪。圓。砂川や或は藪を流れ越す。蘇村。  
 たつた(伊達)物を飾り街ふこと。又、男伊達のこと。  
 たつた(立入)連俳の用語。連句に物の名

たつたのこり

を讀込むこと。  
 たつた(立傘)長柄傘をたゝみて袋に入れたしもの。貴人の行列に用ゐるもの。  
 たつた(馬)馬の頂の毛をいふ。  
 たつた(伊達着)はてなる衣裳を着ること。轉じて意氣なる着衣を云ふ。  
 たつた(藪喰虫)(夏)藪の葉に棲む虫、性辛烈を好みて甘きを受せずといふ。俚語に藪喰ふ虫も好きと云ふ。あるより想像したるものにて實物あるには非ざるべし。|| 藪天に藪喰虫の機嫌哉。一茶。  
 たつた(立琴)(秋)庭の立琴。  
 たつた(立師)芝居の立廻りの型を附くるもの、多く名題下の腕さ、のものより出づ。  
 たつた(立砂)古へ、儀式の時などに、門戸の左右に砂を山形に盛ること。|| 盛砂。  
 たつた(髪題)俳句の季節にて歌の題にも通じて用ゐらるるものをいふ。月或は時鳥の如き題なり。  
 たつた(伊達墨塗)(春)正月十四日陸奥國伊達郡築館の村民、新婚の者の家に近隣の人集りて新夫婦の顔に墨塗るを祝儀とす。水祝の如きものなり。|| 墨塗や掛け懸ひたる梅林。宗甫。

たつたのこり

たつたのはな(薔花)(秋)薔の花、穂状にして小白花なり。之を薔の穂といふ。|| 薔。|| 圓。三徑の十歩に盡きて薔の花蕪村。  
 たつたのはな(薔花)(秋)薔の花をいふ。|| 薔。|| 圓。  
 たつた(立板子)(夏)小兒の弄ぶもの。起し輪と稱する線香に厚く裏を付け、其面の形に切り、燈籠の如き箱に組み立てしもの。夜は之に灯す。|| 圓。|| ちならべ灯し勝たり立板子。|| 虚子。  
 たつた(立雛)(春)男雛女雛共に立てる形の雛。紙糊の類に多し。  
 たつた(藪藪)(秋)ヒハの一種。普通藪よりや、大にして、好みて麻の買を喰ふ。  
 たつた(立文)ひねりぶみ。  
 たつた(立干)遠淺に賣を立ておきて退湖の時、魚の残れるを捕ふること。  
 たつた(立山積置市)(秋)七月十五日、越中立山の町にある盆市をいふ。此時、同所地藏堂の邊に胡蝶多くいて、舞遊ぶといふ。  
 たつた(ながら)其身の分際に応ぜざることを爲す意なり。「ながら」に略同じ。  
 たつた(帯刀)古へ東宮御所の守衛の武







たね

たね(種井)(春)種浸しに用ゐるため、田の傍に設くる井。たね。田おがたまの木に繩さげし種井かな支考。

たね(田庵)(秋)稲田を守る人などの假に居る小屋。稲小屋。田人ありと見せる草履や田番小屋。一茶。

たね(田色)(秋)秋田の稲の黄熟したるをいふ。

たね(田草取)(夏)たぐさとり。たね(田草取)(秋)八朔をいふ。田面の節。田の實の祝。特怙の節。田(心)の祝。田の面の日暮ぐ馬醫の家督哉。曉堂。

たね(田虫送)(秋)虫送り。田面すし虫送るなる火の明り。紫海。

たね(田雁)(秋)田の面の雁の轉。田の雁といふに同じ。

たね(田行灯)(秋)八朔に江戸吉原遊廓の催しにて吉原田南を照す爲に吊す行灯をいふ。

たね(田面祝)(秋)たのみの節。たね(田面祝)(秋)タノムノカリ。たね(田面節)(秋)田の實の節。

たば

たば(煙草)(秋)春種を下し夏移植す。葉高さ三五尺、葉大く楕圓にして末尖り、葉葉共に毛茸あり。秋葉頭に寸餘の漏斗状の淡紅紫花を開き實を結ぶ。實の内に無数の細子あり。晩秋、其葉を晒して煙草を製す。一茶。南草。○若煙草。掛煙草。煙草の花。○若煙草丹波の貼の片荷かな。維新。○虫ばみて下葉ゆかし煙草かな。蕪村。

たば(煙草苗)(春)二月の頃、實の苗を植ふること。

たば(煙草花)(秋)煙草を見よ。○結つた煙草の花を見て休む。蕪村。

たば(水など走り飛ぶ)こと。

たば(東綿)(冬)綿を製して束ねしもの。

たば(遊女)うかれめ。

たば(僧衣の名、種々の帛を綴ぎ合したるもの)。

たば(冬)多く冬季の防寒に用ゐる。

たび

たび(茶思)火葬のこと。

たび(旅夷祭)(秋)九月廿日(一説十六日)京都建仁寺門前、經子社の例祭。建仁寺の祖、榮西が歸宋の舟中、波濤に此像の漂ふを収め、風波の難を免れしより持歸りて寺内に勧請す。海旅をなす人、必ず此社に詣て安全を祈る。故に旅夷社といふ。宮川町より練物鉾、神輿を出す。國家並に祭は鯛や旅夷山鏡。

たび(旅陰間)旅泊などにある陰間をいふ。飛子。

たび(小兒の玩具、張子の鯛に車を附けしもの)。

たび(旅所)祭禮の時、神輿の駐まり居る假宮。

たび(旅中)旅中に携ふ小硯をいふ。

たび(旅人)たびびに同じ。

たび(肥前彼許郡入江の別稱。又、房州小湊の海邊)。

たび(雲雀)似て楕小き

たひ

たひ(全身灰色にして黒みを帯び、胸黄にて黒斑あり。稲田に多く鳴く。リイナヒ。大雲雀)。

たひ(鯛味噌)(冬)鯛の肉を刻み味噌に混じ製したるもの。鯛味噌やいはけなき身の食好み。青々。

たひ(田火屋)(秋)かびや。

たひ(田平子)(春)ホトケノザ。田平子は西の壳にならひけり。其角。腹尾に淡紅のこゝろあり、味美ならず。たひ(稚子雪)(冬)カマビラ雪。

たひ

たひ(手)手をかへすこと。

たひ(狭くして長き林)。

たひ(たふること)こらゆること。

たひ(たふること)こらゆること。

たひ

たひ(玉打)(春)ギチャヤ。

たひ(魂送)(秋)七月十六日、孟蘭盆の聖盂を送る爲、送り火を焚きながらして供養すること。○續靈の立振舞の

たひ(玉打)(春)ギチャヤ。

たひ(魂送)(秋)七月十六日、孟蘭盆の聖盂を送る爲、送り火を焚きながらして供養すること。○續靈の立振舞の



たまたまはる

たまたまはる「魂梅」いのち、世といふ語の枕詞。  
 たまたまはる「玉置流」玉置中助より起りし書法の流儀、御家流より出づ。  
 たまたまはる「魂消」驚くこと。  
 たまたまはる「玉串」神の枝に幣帛をつけ、神前に供ふるもの。  
 たまたまはる「玉櫛笥」明け、ふた、おく、おほふなどの枕詞。  
 たまたまはる「手枕」てまくら。  
 たまたまはる「魂卵酒」(冬)酒に鶏卵を混じ、砂糖を加へて温めたるもの、寒氣を防ぐ爲用ある。國池を消す内儀老たり玉子酒 召波。  
 たまたまはる「玉琴」美しき琴。  
 たまたまはる「魂魂祭」(冬)十一月中寅日、宮中にて鎮魂神(祭神八座、平安宮内省にあり)を祭ること。離遊の運魂を招きて身體の中府に鎮むる爲なり。神武天皇の時に始まる。國此日ふる雪しつけし鎮魂 竹亭。  
 たまたまはる「玉工」玉を磨き作る工人。玉人。  
 たまたまはる「玉取」(春)箱崎玉取祭。  
 たまたまはる「魂祭」(秋)魂祭(孟蘭盆)に佛前に作る棚。眞寔の産なし秋草にて飾

たまたま

り、枝豆、枝サ、ゲ、根芋、青蕎麥、ワサ米、青瓜、白茄子、蓮の葉、青柿、掛索題、麻柯の香、迎へ馬、マセ垣等を供ふ。(以上の品を供ふ意とすれば秋季なる)國魂梅は露も涙も油かな 嵐雪。  
 たまたまはる「玉簾」簾のこと。又、玉などにて飾りし簾。  
 たまたまはる「玉草」(秋)烏爪の異名。  
 たまたまはる「玉津島」紀州和歌の浦にありて玉津島明神の社あり。又、和歌三神の一。玉津島明神といひ、衣通姫を祀る。  
 たまたまはる「玉椿」(春)白玉椿といふ。一に椿の美稱。又、八千代の玉椿の略。  
 たまたまはる「玉手水」大阪天王寺中にある清水の名。  
 たまたまはる「靈殿」神社のたまやないふ。  
 たまたまはる「玉苗」(夏)早苗(すな)。  
 たまたまはる「玉葱」(冬)葱の類、根塊の形大にして玉をなす。  
 たまたまはる「玉屑」(冬)雪の異名。  
 たまたまはる「玉塵」(冬)雪の異名。  
 たまたまはる「玉春」(春)歳旦の祝語、玉の如き春の意。新玉の春。  
 たまたまはる「玉井」天孫、彦火火出見命、失ひ

たまご

し鈎針を龍宮に尋れゆくことを作りし語曲。  
 たまたまはる「玉緒」命をいふ。  
 たまたまはる「玉簾」(春)萬葉集の「初春の初子の今日の玉簾手にさるからにゆらぐ玉の緒 家持」の歌にある如く上古正月子の日に群臣に玉簾を賜ひたる故事、一説に著(じ)といへる草に子の日の松をそへ簾同ふ屋を掃ふ事なりといふ。  
 たまたまはる「玉巻葛」(夏)初夏、葛の新葉生じて巻葉すること。國玉巻や風もさわがぬ眞葛原 之仲。  
 たまたまはる「玉巻芭蕉」(夏)初夏、芭蕉の新葉生じて巻葉をなすをいふ。國巻葉さへ風にあやうき芭蕉かな 夢浪。  
 たまたまはる「魂待」(秋)魂迎。  
 たまたまはる「魂祭」(秋)七月十三日より十六日まで、家々の佛前に靈(たまご)棚を飾り、祖先の靈を迎へて供養すること。靈祭。聖靈祭。○魂迎へ。魂送り。國まざまざと在すが如し魂祭 季吟。(又暮の魂祭なし見よ)  
 たまたまはる「玉水」山城段喜郡の驛。井隆の玉水の舊跡ありて有名の地。  
 たまたまはる「玉水木」(秋)水木の美稱。



たまご

たまごやき「玉水焼」樂焼の陶器の名。玉水彌兵衛と云ふ者焼始めしより名く。  
 たまたまはる「魂迎」(秋)七月十三日に孟蘭盆の聖靈を迎ふ爲、迎火などを焚き供養すること。○魂待つ。國魂迎芒に風の來る時に 玉流。  
 たまたまはる「玉虫」(夏)山中の楓などに多く生ずる甲虫。長さ寸許、體楕圓形にして、六足あり。背の甲に碧と綠の縦線ありて腹は綠なり。全身より五彩の光を放つ、植物の葉を喰ひて生活す。婦女之を収め置けば衣類多くなるといふて匣中に珍藏す。國玉虫や伽羅とも朽ちぬ香包み 白芥。  
 たまたまはる「玉虫」源平屋島の合戦に那須與一に扇の的を差出せし平家の美女の名。  
 たまたまはる「玉藻」(春)柳の美稱。  
 たまたまはる「玉響」露多くおこな云ふ。又、幽かに、暫しばかりの意。  
 たまたまはる「田賀島」播州西生郡の地。今の北濱の邊をいふ。  
 たまたまはる「彩色」彩ること。  
 たまたまはる「手向市」(秋)草市。  
 たまたまはる「田村」田村慶の靈、旅備に遇ひて親

たまご

音の功力を説き、我が軍功を物語ることを作し語曲の名。  
 たまたまはる「坦庵」伊藤氏、那波活所の門人にして越前侯の儒臣なり。芭蕉が漢學の師。  
 たまたまはる「探幽」狩野永徳の季子、季信の子、名は守信、幼名は四郎次郎、剃髮後、探幽齋と號す。有名の畫家にして、狩野家中興の祖と稱せらる。延寶二年歿。  
 たまたまはる「丹庭」禪僧の名。木佛を燒きて己の尻をあぶりし奇人。  
 たまたまはる「丹庭」名香の名。  
 たまたまはる「法眼」鬼一法眼の雙、法眼の命により沙那王を討たんとし返り討たる、筋の語曲。  
 たまたまはる「淡海公」藤原鎌足の男、不比等公の名。  
 たまたまはる「短歌行」連句の一體。二十四句(表四句、裏八句、名殘表八句、名殘裏四句)にて一巻をなす。(長歌行の條參照)。  
 たまたまはる「檀香」白檀の香。  
 たまたまはる「彈基」兩人六個宛の石子を盤上に並べ彈き中て、勝負する遊戯。たぎ。たまたまはる「談義」浄土宗にて其教を説くことをいふ。

たんご

たんごん「断金」二人志を同くすれば金をも断つとて、固き交りを云ふ故事。  
 たんごん「短檠」燈臺の短きもの。  
 たんごん「端溪」支那廣東の端溪より出づる紫赤色の石、多く硯とす。  
 たんごん「檀扇」前漢の平恩侯が其弟を新築せし祝に、沐猴と狗と闘ふ戲を演じて、衆の笑を買ひし人。  
 たんごん「短歌」(秋)短歌(秋)短歌の古名。古文に出づ。  
 たんごん「端月」(春)一月の異名。  
 たんごん「端午」(夏)五月五日の節句をいふ。重五。蒲節。艾節。地臘。端陽。  
 たんごん「短冊」(秋)七夕竹。  
 たんごん「短冊竹」(秋)七夕の前に短冊竹を賣るもの。  
 たんごん「談山」たふのみれ。  
 たんごん「餐食」割腹に盛りし飯をいふ。  
 たんごん「短日」(冬)冬の日短きを云ふ。  
 たんごん「影追行」や牛車 土鈴。  
 たんごん「彈正」古へ刑法を司りし官の名。



たんじゆの類

たんじゆの類 (誕生會) (慶) 佛生會。  
 たんじり (車樂) 祭禮の時、市中を曳き廻る飾物をいふ。京にて山鉾などいひ、江戸にては山車(2)といふ。  
 たんじりま (車樂舞) (慶) 津島祭の車樂にて能す樂(2)。  
 たんせい (丹青) 畫の彩色をいふこと。  
 たんせん (宣泉) 支那廣州の國境に在る清水にて之を呑ば食慾を生ずと云ふ、吳隱之が之を嘲りし詩あり。  
 たんせん (丹前) 昔、江戸にて流行せる遊治郎の風俗。江戸神田、堀丹後守の邸前に風呂ありて世人、丹前風呂と呼ぶ。其湯女に勝山と云ふ女快氣あり、其行裝、一の風俗をなし、後吉原に出て、益々名高し、又、此頃、此門前に大小立髪の異風なる男達、六方詞など使ひて丹前風と呼べり。  
 たんぞくめ (断續花) (憂) をどり草。  
 たんたい (探題) 隠し題を探りて詩歌俳諧を詠すること。  
 たんたい (探題) 鎌倉時代に遠隔の重なる諸州に派遣して其土地を治め、又外寇などに備へし役。  
 たんちやう (暖帳) 垂幕のこと。  
 たんちやう (段通) 毛織の敷物をいふ。

たんじゆの類

たんじゆの類 (段通) (憂) ツ、ウの一種、京都上賀茂の南の段といふ所に多しと。  
 たんじゆ (端的) 目前の意、諷刺。  
 たんじゆ (丹田) 鹿部の躰の下一寸許の處をいふ。  
 たんじゆめ (檀特花) (秋) 高さ三四尺の草、葉は芭蕉に似て、穂穂く長さ尺餘、八月、穂の如き深赤の花を開き實を結ぶ、黒くして固く、珠數に作る。園檀特や花をつ、少し葉の幾重、芳存。  
 たんじゆせん (檀特山) 釋伽の修業せしといふ天然の山。  
 たんじゆ (檀那) 佛道に恩惠する信者をいふ。檀越。  
 たんじゆ (檀那) 巨勢氏泉州の人。叡山に入り懇懇に従ひ僧正となる。奇相にして舌を出せば鼻を過ぐといふ。  
 たんじゆのじゆはん (反無糖料) 近江の佐々木家の士が具足の下に着たる襦袢。後に農夫までも之を着るといふ。



(くごんだ)

たんじゆの類

たんじゆの類 (壇浦) 長門國豊浦、引島の間の海邊。  
 たんじゆ (探梅) (冬) 梅さぐる。  
 たんじゆ (丹波栗) (秋) 丹波國に産する栗、多く京都に賣出す。  
 たんじゆ (丹波太郎) (憂) 京都にて六月頃、丹波の山より沸く雲の名。此雲出づれば夕方に雨降ると云ふ。園先に立つ丹波太郎と道しるべ、大江丸。  
 たんじゆ (丹波布) 丹波國より織出す布の稱。  
 たんじゆ (丹波) 銅坑より出る礦物。青色にして毒あり。  
 たんじゆ (丹波興作) 戯曲丹波興作中の人物。伊達氏にして、丹波の領主由留木の臣、海魂して馬追となり關の宿の出女小萬と狎れ、罪を犯して刑せられんさせしも、前妻、重の井のために救はれ再び士に復すといふ。  
 たんじゆ (段平) 巾廣き刀をいふ。  
 たんじゆ (壇風) 壬生實朝、高時の爲に斬られしが、息梅若其跡を慕ひ、當の敵守護頭を討ち、師阿闍梨の助によりて逃げ失ふことを作りし話曲。  
 たんじゆ (團袋) 綿などを入る、布製の大袋。又、股引の太くして厚きもの。

たんじゆ

たんじゆ (湯邊) (冬) 大さ枕位の一方に口ある銅器に湯を盛り、腰脚等を暖むしもの。又、陶製なるもあり。脚邊。暖南。湯南。園曉に踏出されたる湯邊哉、五明。  
 たんじゆ (浦公英) (春) 多く原野に叢生す。葉は薺の如く、莖頭に黃花、又は白花を開き、後葉(2)となり、莖頭に玉をなし風に飛散す。(異名) 鼓草。藤菜。園たんじゆはほの花並び咲く濱屋哉、秋夫。  
 たんじゆ (断末魔) 死際を云ふ佛語。  
 たんじゆ (端陽) (憂) 端午。  
 たんじゆ (檀林) 大なる寺を云ふ。  
 たんじゆ (談林) 西山宗因の流派に屬せる俳風を云ふ。  
 たんじゆ (暖爐) (冬) ストーブ。  
 たんじゆ (丹絨) 明和以前の錦繪は皆筆彩色にて、丹と綠青にて塗りを以て之を丹絨繪といふ。  
 たんじゆ (暖爐會) (冬) 支那の古俗に、十月朔日、爐を開き爐中に肉を炙りて飲食する會。園暖爐會廣同が藤を捕しけり、車蓋。  
 たんじゆ (檀越) だ、なに同じ。  
 たんじゆ (爲明) 爲世の孫。後醍醐帝の

たんじゆ

たんじゆ (爲明) 爲世の孫。後醍醐帝の時、歌會に興り、北條氏に囚はれ捕問せられし時、思ひきや我數島の道ならで浮世の事を問はるべしとは、の歌を詠じて赦さる。新拾遺和歌集の撰者。  
 たんじゆ (爲家) 藤原定家卿の子。官、權大納言に至り、民部卿を兼ね、後雅髪して融覺と號す。續後撰、續古今等の和歌集を撰す。建治元年歿。  
 たんじゆ (爲氏) 爲家の子。二條家の祖なり。官、正二位權大納言に至り、後入道して覺阿と號す。續拾遺和歌集の撰者。弘安九年歿。  
 たんじゆ (爲) しのの歌を延すこと。  
 たんじゆ (爲朝百合) (憂) ハカユユリ。  
 たんじゆ (爲世) 爲氏の子。官、正二位權大納言に至る。新後撰、續千載の二撰集を撰す。延元三年歿。  
 たんじゆ (爲朝) 一條天皇の頃の人。中納言兼輔の孫にして、刑部少輔雅正の男。皇太后宮大進たり。拾遺集の撰者。曾て我老たるを人の避けしに、「いづくに身なばよせまし世中に老を厭はぬ人しなれば」と迷問せしといふ。  
 たんじゆ (播磨) すくひ綱。さて。  
 たんじゆ (秩百合) (憂) 百合の一種、深山の崖腹等に多し、葉は輪圓にして花白

たんじゆ

たんじゆ (タモ買) (秋) 字不詳、桂の一種、蔽肉桂といふ木の實にて、形ムクロジの如く圓し。古來、桂桐、又は樺子桐の實とするは誤なり。タモ買。園だもの實のたのもしげなる色香哉、竹亭。  
 たんじゆ (鳥付栗) 梅紅葉などの木の枝に鳥を結付たるもの。儀式の時、或は贈物などに用ゐる故買の名。  
 たんじゆ (多聞天) 毘沙門天の分身にて、右に寶塔、左に寶鈴を持つ福神。  
 たんじゆ (田守) (秋) 秋の稲田を守りて鳥獸の害を防ぐこと。山田守。小稻守(2)。小田守。又、案山子(2)の異名。園秋の夜をあはれ田守が鼓波召波。  
 たんじゆ (樽) たるきこと、又鈍い意。  
 たんじゆ (遠巡) ためらふこと。  
 たんじゆ (鱈) (冬) 北海に産する魚、頭口大にして鱧細く皮薄く肉白し、冬を漁期とす。多く干し又は鹽漬として出す。大口魚。〇干鱈。鹽鱈。雲馬(2)。鱈舟や比良より北は雲氣色、李由。園たる(陀羅) ばいこまのこと。  
 たんじゆ (太郎月) (春) 正月の異名。正



たのうばう

月は一年の頭なれば人の子の長を太郎  
さいふに比へていふ。  
たのうばう(太郎坊)天狗の名。謡曲などに  
多く出づ。又、駿河の富士山の麓にあ  
る登山口の坊の名。  
たのじゆ(多羅樹)貝多羅(六才)を見よ。  
たのちね(垂乳根)母親のこと。  
たのに(陀羅尼)能持と譯す。よく持成し  
不善を遮ること。佛語。  
たののき(桜木)タラの花。  
たののはな(桜花)(秋)タラの樹は多く



(ら た)

山中  
に生  
す、  
高さ  
丈餘  
幹直  
くし  
て枝  
なく  
刺多  
き故鳥止らずと稱す。春の牛に幹の上  
に芽を生ず、形も味もウドの如し、ウド  
モドキといふ。葉は枝を分ちて小葉多  
く排生し、アブラの葉に似て刺多し。秋  
葉間に小白花を開き實を結ぶ。實は小

たのゆ

く圓くして熟すれば黒し。〓〓。〓  
桜の花いつか實となる山日和 三和。  
たのゆ(桜芽)(春)タラノハナを見よ。  
たのはす(使足)満足せしむること。  
たり さありの略。語尾につきて物事を  
指定する助辭。  
たり てありの約。現在を現はすテニオ  
ハ。  
たりやかに(十分)満足なること。  
たのがき(權柿)(秋)サハシ柿。  
たのつぐ(權次)地黄坊と號す。英木春期と  
云ふ醫なり。大酒家にて大蛇丸底深と  
酒戦をなし、其記を木鳥記といふ。寛文  
頃の人。  
たのぬき(權抜柿)(秋)サハシ柿。  
たのひ(垂水)(冬)つらら。  
たのまき(達磨忌)(冬)十月五日、禪宗の  
諸寺にて、其開祖、達磨大師(天竺)の人、  
支那に入り梁帝に面して法を説く。梁  
大道二年十月五日寂の忌を行ふ。〓  
達磨忌や和尚いづちを尻目なる 召  
波。

たのむこ(權覺)能狂言の名。  
たれむし(垂蕪)帳幕のこと。  
たわやめ(權)まさやかなること。  
たわやめ(手前女)たをやめに同じ。

たわのたま

たわのたま(倭重)(春)新年三ヶ日に轉び  
臥すこと忌詞なり。  
たわのこ(倭子)(春)商家にてゴマメの祝  
語。一説に金海鼠(ゴシ)の異名なりとし  
いへど前説多く用う。〓倭子やこが  
れ花さく國のもの 友蝶。  
たわに(挽)しなふほご重みあること。  
たをき(田長)ほごさすの異名。  
たをすく(田鋤)(春)たがやし。

ち

ち(芽)(秋)原野に生ずる草、葉楢に似  
て高さ三四尺に至る。春芽を出して葉  
の中に花を包むこと細菊の如し、之を  
茅花(チ)といふ。夏穂を出して長く白  
き絮あり、秋刈りて屋根などを葺く。〓  
白茅。ちがや。〓ちゆるぎの磯川包  
む茅葺かな 紫川。  
ち(地)地話の略。  
ち(地)東北の風の名、北國の語。  
ち(血忌)層の内日の名。  
ち(組)印又は鏡などのつまみ。  
ち(中陸)佛説に人の死後、四十九日  
の間は現世と冥途の途中なりと云ふこ

ちのたがはは

ちのたがはは(仲那母)唐の柳仲那時  
學をなすに其母夜に入れば黄蓮、能讀  
を丸として與ふ、口苦くして眠る能は  
ず。是が爲に一世の學者となりし故  
事。  
ちのち(仲夏)(夏)五月の異名。  
ちのち(中夏)支那の別稱。  
ちのち(中宮)皇后をいふ。  
ちのち(中宮)中宮大業(春)二宮大業。  
ちのち(中相)(春)三月の異名。  
ちのち(中和節)(春)二月朔日。唐の  
徳宗の時、節日の一に定められ、上巳、  
重陽と同じく宴樂を催し民間に生子  
(ハ)を獻するの事あり。(獻生子を見  
よ)。  
ちのち(厨下)(春)正月二日、京都知恩院  
にて現住の大僧正、厨に出て僧徒、徒僕  
等に饅頭を饗し、僧徒等集りて遊宴を  
なすこと。  
ちのち(仲景)張機といふ。漢代の醫家。  
ちのち(中啓)親骨を外へ反らせたる扇、  
神官、僧侶など持つもの。  
ちのち(中間)武家の下儀。  
ちのち(中元)(秋)七月十五日をいふ。

ちのちのたま

(上元を見よ)。  
ちのちのたま(中元贈物)(秋)盆禮。  
ちのちのたま(中山祭)(夏)(冬)四月中西日  
及十一月上朔日、京都三條、冷泉院にあ  
りし中山神社(奇石窟(ハ)命を祀る)  
の祭禮、御冷泉帝の天喜元年より官幣  
あり。〓月花の今日が中山祭かな  
宗親。  
ちのち(賢子)家督たる子をいふ。  
ちのち(中秋節)(秋)八月十五日を  
いふ。  
ちのち(中秋無月)(秋)八月十五夜  
に雨又は曇のため月の見えぬこと。  
〓月の雨。團物干の老に雨をさく夜  
哉 屠龍。  
ちのち(仲商)(秋)八月の異名。  
ちのち(中將)若き男の相したる能面。  
ちのち(中將姫)孝謙帝の代、横佩大  
臣豊成の女、十五歳、繼母のために殺さ  
れんことを逃れ、落飾して善心尼、  
法如尼といふ。當麻寺の條參照。  
ちのち(中酒)吸物、口取、酢の物、焼肴、又  
は列身を供へたる料理を云ふ。  
ちのち(仲春)(春)二月の異名。  
ちのち(中書監)醍醐帝の皇子、兼明親  
王のこと。源姓を賜ひて御子左と號

ちのちのち

す、博學安才を以て知らる。  
ちのち(中禪寺)下野日光山にある  
寺。勝道上人の開基。  
ちのち(中尊寺)奥州西磐井郡平原村に  
在る寺。嘉祥三年、慈覺大師の開基な  
り。寺内に芭蕉の發句塚あり。  
ちのち(地唄)其土地にて謡ひ初めし俗曲。  
又、京にて上方唄をいふ稱。  
ちのち(地話)謡曲の節(ハ)、同吟のこと、  
ろ、略して地といふ。  
ちのち(重太丸)藤原純友の子、十三に  
して成人の如し、天慶の亂に父と共に  
亡ぶ。  
ちのち(重話)(春)新年の賀客に供ふた  
め、組重箱に數の子、開き午茶、煮豆の  
類を盛り出すもの。〓組重。〓組  
重に客を待ちけり今日。〓  
ちのち(中話)京都祇園の遊廓にて、若き  
遊女の稱。  
ちのち(仲冬)(冬)十一月の異名。  
ちのち(仲尼)孔子のこと。  
ちのち(重二)双六の詞。  
ちのち(中日)(春)彼岸の中日をいふ。〓  
時正。〓中日と知つてのさばる風か  
な 一茶。  
ちのち(中日)曆の語、己亥の日にて、吉



ちゅうはん

内半ばする日。  
 ちゅうはん「中半」遊廓の語。晝しまひの歸り、夜仕廻の前に、遊女を茶屋へ送り込むこと。  
 ちゅうはん「中本」半紙判の書物。又、人情本の總稱。  
 ちゅうはん「晝夜帯」黒白の帛を腹合せにしたる帯。|| 錦帯。  
 ちゅうはん「仲呂」(豊) 四月の異名。  
 ちゅうはん「討王」殷の國王。妲己を愛して暴政を行ひ遂に周の爲に亡さる。  
 ちゅうはん「智水」隋の僧。王羲之七世の孫にして、吳興の永欣寺に住し、書を以て名あり。其書を望む者多く、門前市をなし、遂に其壁を破りしつば、鑿業を以て張る。世人之を龍門限と呼ぶ。後年其用筆の痕れたるを埋め筆塚を築けりといふ。  
 ちゅうはん「知恩院」京都東山にあり。淨土宗の總本山にして、華頂山大谷寺といふ。殿堂の壯大なるを以て名あり。  
 ちゅうはん「千賀浦」陸前鹽釜の浦をいふ。  
 ちゅうはん「遠付」連俳の用語。八體の一。連句の脇句に前句と同時の事を反對に付るを云ふ、例へば開なることに忙しき態など付る也。

ちかまつ

ちかまつ「近松忌」(冬) 十一月廿二日(一説に廿一日とす)。近松門左衛門(名は信盛。巢林子、平安堂の號あり。有名)の淨瑠璃作者。享保九年歿)の忌。團横町の糸の師匠も近松忌 寺沙。團横町(地紙賣) (豊) 昔、夏日、扇の地紙を箱にし荷ひて地紙々々と呼歩き、即席に扇を折りて賣る行商、多く武家屋敷ある町に賣る。寛政頃より廢る。  
 ちかまつ「茅葺」(秋) 茅(茅)。  
 ちかまつ「力紙」力士の髷に結ぶ紙。又、相撲の土俵の柱に釣りかく清め紙。  
 ちかまつ「力草」(秋) 相撲草(マツ)。  
 ちかまつ「力草」(冬) 鷹狩に鷹の鳥を捕ふるとき、片足に草を力み力とすること。團土深く爪立てにけり力草 夢水。  
 ちかまつ「主税寮」古へ民部省に屬し、買物を司る役所。  
 ちかまつ「千木」神社の屋根に交又して突出たる股木。|| 遠木。  
 ちかまつ「直綱」腰の下に懸ある僧服の名。|| 直綱。  
 ちかまつ「千木箱」(秋) 芝神明祭を見よ。  
 ちかまつ「扛秤」秤の大なるものにて、天秤にて擔ひ用ゐるもの。

ちかき

ちかき「腰」機を織るとき経糸を巻く器。  
 ちかき「乳切木」太く長さ杖。又能狂言の名。  
 ちかき「契草」(秋) 菊の異名。  
 ちかき「支那の樂器の名。竹を割きて編み列れ、叩き鳴らすもの。  
 ちかき「竹庵」天和頃、淺草今戶に住み風月に吟詠して樂みし人。梨本茂睡の友なり。  
 ちかき「竹虎」しがり。  
 ちかき「千草」千草色といふ。薄萌黄色をいふ。  
 ちかき「千草」(秋) 秋の草花をいふ。  
 ちかき「竹堂」慶安頃、洛の醫師にて滑稽の男。觀之助と云ふ僕を供ひて國々を廻り、終に名古屋に留り、天下庸醫竹堂と軒札を掲ぐ、烏丸光廣那の作に係る、竹堂物語と云ふ書有り。  
 ちかき「千草花」(秋) 草花に同じ。  
 ちかき「竹枝」土地の風俗を諷ひし時、七言句の連作にして多く換韻の事を作る。  
 ちかき「竹紙」履皮紙をいふ。  
 ちかき「竹秋」(春) 三月の異名。  
 ちかき「畜生腹」男女の双兒を生むこと。  
 ちかき「竹春」(秋) 八月の異名。

ちんすわ

ちんすわ「竹餅日」(豊) 竹植る日。  
 ちんすわ「地下」南風を云ふ。北國地方の方言。  
 ちんすわ「地口付」享保頃流行せし前句附の一種。發句の五七二句を字にて書きし順に、下五文字を繪にて附くるもの。  
 ちんすわ「竹奴」(豊) 抱籠。  
 ちんすわ「竹高」(豊) 抱籠。  
 ちんすわ「竹高」支那の古代には紙なかりし故竹簡、又は布帛に事を記し、より起りて、書冊、記録の、こをいふ稱。  
 ちんすわ「竹生島」近江琵琶湖中に在る島、淺井郡に屬す。辨才天の社あり。  
 ちんすわ「竹生島」江州竹生島明神の神徳を叙したる謡曲。  
 ちんすわ「竹生島鳴鑼」(春) 三月三日、近江琵琶湖竹生島と、傍にあるモト島(ヤ、コ島とす)の間に注連繩を繫ぎ心經會を行ふこと。古へ此小島、瀧の爲に離れて天女の嘆きたるを里人の和むる爲なりと。|| 島鑼祭。團朝日さす波の光りや島鑼 湖月。  
 ちんすわ「竹生島祭」(豊) 六月十四日十五日、琵琶湖竹生島の辨才天社の例祭、毎年近江國淺井郡より神事を司る頭人を定め、湖上に船を浮べ管弦を

ちんすわ

奏し、神輿の船を渡御せしむ。一に蓮華會といふ。團法の花見する蓮花の會式かな 重頼。  
 ちんすわ「竹婦人」(豊) 抱籠をいふ。|| 竹夫人。團蓬生や手拭かけし竹婦人 几童。  
 ちんすわ「筑摩川」信濃國の大河。犀川と信濃川とに合流し越後に出づ。|| 千曲川。  
 ちんすわ「竹迷日」(豊) 竹植る日。  
 ちんすわ「千久真沖」竹羅用(チヨウマシ)といふ。物事のどちらへも落付ぬを云ふ。對馬の沖、日本と朝鮮の湖境にチカラ沖あるより出づと。  
 ちんすわ「竹林寺」攝津西成郡九條村尻無川の西岸にある淨土宗の寺院。又、大和國村上郡上の郷村にある寺。藤原不比等の創建といふ。  
 ちんすわ「竹林七賢」阮籍、嵇康、山濤、劉伶、阮咸、向秀、王戎の七人を云ふ。  
 ちんすわ「大地」大いなる荷車のこと。  
 ちんすわ「五位以下の昇殿を許されざる官人。又、公卿に對して下民をいふ稱。  
 ちんすわ「稚理」晋人、風韻清疎にして酒を愛し、門庭中の草樹、延びるも剪らず、

ちんすわ

常に叢中に蛙の鳴くを聴きて樂みしといふ。  
 ちんすわ「地獄落」竹にて造りし風捕の器。  
 ちんすわ「持國天」佛教に東方を守護する神の名。  
 ちんすわ「地獄腹」女のみ生むこと。  
 ちんすわ「兒櫻」(豊) 山櫻の一種、花白く瓣一重にて内へ反る。花小くして疎なり。團佛塔の松に添ふなり兒櫻 鳴劍。  
 ちんすわ「地骨」石のこと。  
 ちんすわ「地窟」山の下をいふこと。  
 ちんすわ「兒百合」(豊) 姫百合の一種、小にして花愛すべし。  
 ちんすわ「野菜」高さ三四尺に至り、葉はカラシに似たり、四月苗長じ莖を生ず、之を莖の臺といふ。五月、野菊に似たる黄花を開く。春は其若葉を食用とする故に莖を春季とし花を夏季とす。白莖。川莖。唐莖。紫莖等の種類あり。|| 高莖。團堀川や橋の下なる莖畑 宋屋。  
 ちんすわ「致意」先祖の祭の爲め物忌、潔斎すること。又、紙園會の五月朔日に神を所々に樹つることといへり。



ちまらばん

ちまらばん(地蔵盆)(秋)地蔵盆をいふ。  
ちまらばり(地蔵盆)(秋)七月廿四日、各所の地蔵堂、石地蔵等に香華を供ふこと。又此一日、六ヶ所の地蔵に廻り詣つるを六地蔵詣といふ。京都にては加茂、御泥(ワツ)の池、山科、伏見、鳥羽、柱の六所あり。六所の行程十四里なり。地蔵盆。地蔵盆。團迷ひ子や地蔵祭の跡の間 南菊。  
ちまらばり(地蔵盆)(秋)地蔵盆。  
ちまらばり(直樹)(夏)山直の花を見よ。  
ちまらばり(直樹)(夏)直を見よ。  
ちまらばり(直花)(夏)直を見よ。團なまなかにつき残されて直の花 蝶夢。  
ちまらばり(致仕)官職を辭すること。  
ちまらばり(地子)古への制に、公田の餘りを賣付て耕作せしめ年貢を納めさせること。  
ちまらばり(週日)(春)たそきひ。  
ちまらばり(地芝居)(秋)村芝居を見よ。  
ちまらばり(智真)一週上人のこと。  
ちまらばり(智積院)京都阿彌陀堂の西にあり。眞言院新義派の寺院にて、豊臣秀吉、其子秀君の冥福のため建てし寺なりといふ。  
ちまらばり(智積院開山忌)(冬)十

ちまらばん

二月十二日、京都鳥邊山の麓、智積院にて行ふ會式。織田信長が僧侶の武事に跋扈するを憎み、之を滅し、時、其理僧の一人、智積院を再興せしむ、後世報恩のため此忌を修す。故に報恩忌といふ。團時に鳴る大徳出て、報恩忌吉團。  
ちまらばん(智積院論議)(冬)十月朔日より十二日まで、京都智積院にて行ふ論議なり。了つて僧徒酒宴をなす。  
ちまらばり(智者大師)智願といふ。陳隋二朝の國師たり、天台山にて摩訶止觀を著す、開皇十七年十一月廿四日寂。  
ちまらばり(智者大師忌)(冬)大師講。  
ちまらばり(智者邊重)智者の邊の童は智はの経を讀むといふ説。  
ちまらばり(地主)土地の守護神を云ふ。  
ちまらばり(地主祭)(夏)四月九日、京都清水堂後の地主権現(將軍田村廣を祀り清水寺の鎮護なり)の祭禮。祭日、神輿を同寺經書堂(サカサカ)前に置く。是旅所の義を表す也。團宗盛の車も見ゆれ地主祭 紫曉。  
ちまらばり(智證)名は圓珍、弘法大師の外甥、仁壽三年入唐し、居ること七年、天安十年、慈覺の後を受けて天台の座主と

ちまらばん

なり、又、圓城寺天台寺派の開祖となる。寛平七年寂す。  
ちまらばり(智證忌)(冬)十月廿九日、智證の忌を行ふこと。  
ちまらばり(父戀鳴)(秋)葉虫を見よ。  
ちまらばり(千々春)(春)歳旦の祝語、千代の春と同じ意。團鷗さしあれ願瀧生きて千々の春 其角。  
ちまらばり(千々實)父の枕詞。  
ちまらばり(秩父朝)(秋)武藏の駒。  
ちまらばり(秩父山)武藏國秩父郡にある山。  
ちまらばり(鳴籠)鳥を捕る器。高三寸許の小鳥籠を樹下に掛け、別に高箱にて木葉のつきたる枝に綱をつけ樹に懸し、籠中の小鳥、聞鳴を友鳥の戦かと思ひて他の鳥來りてもちにつくを捕ふるもの。  
ちまらばり(争鳴)小鳥の烈しく争ひ鳴くこと。  
ちまらばり(松子)(秋)まつかさ。  
ちまらばり(キリギリス)の異名。  
ちまらばり(千歳)(冬)せんざいといふ。神樂歌の小前張の曲の名。  
ちまらばり(千鳥)(冬)水禽、形は鴨に似て、頭、嘴は蒼黒に頬白く背青黒、胸翅は黒

ちまらばん

く、腹白く尾短く、脚黄にして細長し。冬季、多く河海の邊に列を成し、群り飛びつゝ啼く。〓衛。鶉。〓群千鳥。河千鳥。磯千鳥。浦千鳥。濱千鳥。島千鳥。小夜千鳥。夕波千鳥。友千鳥。團舟に焚く火に聲たてる千鳥かな 龜洞。  
ちまらばり(千鳥打)(冬)武藏六郷下流、羽田村の洲崎にて、網にて千鳥を捕ふること。  
ちまらばり(千鳥掛)糸を斜にたがへちがへにかゝること。  
ちまらばり(千鳥掛)尾張、鳴海の知足が編みし蕉門の句集。  
ちまらばり(地無)元祿頃、女子の衣服、金箔にて松葉の模様の地の織目見えぬ迄摺りしないう。禮服として男のノシメを着るに對して用ゐるもの。一般の流行なりしといふ。  
ちまらばり(地拔足)天に踏り地に拔足すといふ。身の置所なきこと。  
ちまらばり(茅浮浦)泉州堺の浦のこと。  
ちまらばり(地鼠)鼠の一種。土龍に似て尾長く常に地中を歩行し、みみすなごを食ふ。  
ちまらばり(孔間)約物の上部の突起の數多く

ちまらばん

羅列せる部分。  
ちまらばり(地乗)馬術の語。馬を緩歩させること。  
ちまらばり(茅輪)(夏)菅貫ともいふ。菅茅を束れて徑一間餘の輪を作り、夏越の祓に神社の前に立てて之を滑れば疫を免るといふ。古へ素戔嗚尊が南海にて、蘇民將來の家に宿り給ひ、之を作ることを教へて疫を免れしめしより始まること。團振袖を結むでくる茅の輪哉 霜沼。  
ちまらばり(千葉殿)千葉常胤をいふ。下總千葉の名族、賴朝旗を擧ぐる時、常胤一族皆黨すと云ふ。  
ちまらばり(千葉野)下總國千葉郡にある曠原。  
ちまらばり(千葉笑)(冬)十二月廿四日の夜、下總國千葉郡、千葉寺に村民集り、面を包み音聲をかねて、地頭代官、里正諸役人の善惡を講評し、後大聲に笑て別ること。團團ふかき寺の格子や千葉笑 青々。  
ちまらばり(神)女神子(カミ)の服、白布に山藍にて模様を摺り袖を紙振にて括りしもの。  
ちまらばり(千早振)神、又は人などの枕詞。  
ちまらばり(茅原)かやばらのこと。

ちまらばん

ちまらばり(立腹皮)懸にて傾き強きことの形容語。  
ちまらばり(千引)陸奥に千引の石ありて人を害する故、他へ移すべしとすに動かさざりしかば、石の精の契りし女一人して之を引くことを作りし話曲。  
ちまらばり(地引)地網を海中に張り、陸にて大勢にて引寄せ魚を取ること。  
ちまらばり(地登)袋月棚のこと。  
ちまらばり(血吼)聲を立てることを云ふ。元祿時代の奴詞なり。郭公ちほゆるなごいへり。  
ちまらばり(糍)端午に造り食ふ菓子。糯米を水に浸ししもの、又は米粉をこれしものを、菰笹等の葉に包み蒸したるもの。其製極々あり。糍。茅卷。(異名)元結草。〓



(きまち)







ちやんざんりし

の子や丈山などの鑑の類 其角。  
 ちやんざんりし「張三李四」彼處此處の名し  
 知れぬ人々を指す稱。  
 ちやんざんりし「張芝」字は伯英、後漢の人、書を  
 巧にす。  
 ちやんざんりし「丁子」熱地に産する樹。幹は肉  
 桂に似て葉は柳の如く、花は白く後、緑  
 に變じて香極て高し。花萎みて落ち  
 す。色赤く固りて實なる。形、釘の如  
 く香氣あり。舶來して薬用となる。||  
 丁香。  
 ちやんざんりし「丁子草」(毒)草の名、葉は柳  
 に似て葉文や、白く、花は丁子の如く  
 にて淺藍色なり、晚春開花す。||花丁  
 子。圓蝶々の離れかけり丁子草  
 寸風。  
 ちやんざんりし「張氏鈞」古へ支那にて、張氏  
 といふ人の家に鳩一羽飛び來る、張氏  
 云ふ、福ならば長押にこまれ、幸とな  
 らば欄に入れとて、欄を開きければ、欄  
 に飛び入りて一つの銅鈞を獲しゆけ  
 り、これより張氏の家榮えしといふ故  
 事。  
 ちやんざんりし「張敞」前漢の人、字は子高。京  
 兆尹となり、よく偷盜を盡す。曾て其  
 婦の眉を描く。秦宣帝之なき、張を

ちやんざんりし

賈す。張蒼て曰く、臣聞く閨房の内夫  
 婦の私、眉を畫くより過る者ありと。  
 帝其能を受し、之を貴めざりしといふ。  
 ちやんざんりし「長嘯子」豊臣姓、名は勝俊。  
 武門を去て木下氏を名乗り、京東山に  
 閉居して和歌を誦じ、風約を友とす。  
 後、西山小隱に移り、貞徳等と交る、其  
 歌文集め集白集といふ。慶安二年に  
 歿す。  
 ちやんざんりし「長春」(毒)蕎麥の一種、花多  
 くは紅にして一重八重あり。四時に開  
 花すれども春を以て季とす。||月季  
 花。日月紅。開雪紅。○櫻長春。國長  
 春や遅き櫻のちりはつる 效枝。  
 ちやんざんりし「長春菊」(毒)きんせんく  
 わ。  
 ちやんざんりし「町汁」(毒)十日汁(トウカ)  
 ちやんざんりし「茶白山」大阪天王寺の西南に  
 ある丘。  
 ちやんざんりし「長石」六角又は四角の結晶をな  
 す石、色は白、肉紅、淡綠等あり。種類  
 多く、氷長石、月石、太陽石等あり、我國  
 には近江、美濃を産地とす。  
 ちやんざんりし「張爾奇」支那の畫家、金陵の  
 安樂寺の壁に龍を畫きて晴を點せず、  
 成人之を點すれば雷電して龍飛去ると

ちやんざんりし

いふ。  
 ちやんざんりし「帳幕」貴人の坐所に設くるも  
 の。四方に帳幕を垂れたる壇。  
 ちやんざんりし「帳幕試」(冬)五節(チヤ)  
 帳幕試。  
 ちやんざんりし「提灯賣」(秋)盆市。  
 ちやんざんりし「提灯鈴」(夏)津島祭を見  
 よ。  
 ちやんざんりし「提灯祭」(夏)津島祭。  
 ちやんざんりし「長頭丸」松永貞徳の號。  
 ちやんざんりし「定朝」後一條帝の時、有名なる  
 佛師。曾て京都法成寺の佛像を刻し、  
 帝の歡感に入り法橋に叙せらる。  
 ちやんざんりし「杖頭錢」晋の阮籍、酒を好  
 み、常に百錢を杖頭に掛けて酒肆に行  
 きし故事より、錢百文のこと。  
 ちやんざんりし「長徳寺」元祿頃の遊里の通  
 語。金一分のこと云ふ。  
 ちやんざんりし「帳帳」(毒)正月四日、諸商人の  
 家に其年用ふる帳簿を繰り之を祝する  
 こと。||帳帳。帳書(チヤ)。||帳帳とち  
 や春風わたる門の竹 左柳。  
 ちやんざんりし「重食」雙六の遊戯を云ふ。  
 ちやんざんりし「長範頭巾」(冬)頭巾の一  
 種。目ばかり出せるやう作りしもの。  
 ちやんざんりし「張文成」唐の文人、遊仙窟を

ちやんざんりし

著して名あり。  
 ちやんざんりし「長松」商家の丁稚の名として多  
 く用ゐらる、稱。  
 ちやんざんりし「長命丸」江戸兩國にて賣り  
 し糖菓の名。  
 ちやんざんりし「長命寺」江戸向島の堤邊にあ  
 り、天台宗にして本尊は釋迦如来なり。  
 ちやんざんりし「長命橋」(夏)支那の古俗、五  
 月五日、五色の彩絲を臂に纏へば、鬼及  
 び兵を避け疫氣を免るといふ。||披命  
 橋。辟兵附。五彩絲。壽索。條達。合  
 歡索。靈彩絲。國 我肘に母が訓へや  
 長命橋 石葉。  
 ちやんざんりし「長樂寺」京都圓山の南にあり。  
 時宗の巨利にして、桓武帝の草創たり。  
 ちやんざんりし「張里」馬醫者のこと。又機多の  
 稱。  
 ちやんざんりし「長流」下河部具平といふ。和歌  
 をよくし夙に國學の復古を稱へ契沖と  
 交り深し。水戸西山公屢召せども應ぜ  
 ず、生涯隱者にて終る。  
 ちやんざんりし「張良」漢高祖に仕へし三傑の  
 一人、後勇退して隱る。又、張良が圯上  
 の老人、黄石公より兵法を授かりしこ  
 とを作りし話曲。

ちやんざんりし

ちやんざんりし「茶」佐渡の方言にて怠惰に  
 して放蕩なる人ないふ。  
 ちやんざんりし「丈六」高さ一丈六尺ある大佛の  
 こと。  
 ちやんざんりし「茶粥」茶の汁にて炊きたる粥。京  
 阪にて多く作る。  
 ちやんざんりし「着袂政」(夏)(冬)古へ  
 五月及十二月に、檢非違使の官人、盜犯  
 及私鑄錢の罪人に袂(足枷)を着けて驅  
 使し刑を行ふこと。和銅年中より始  
 る。  
 ちやんざんりし「茶葉拜」能狂言の名。  
 ちやんざんりし「茶葉草」(夏)麥の異名。國  
 朝よきに見て廻りけり茶葉草 可月。  
 ちやんざんりし「茶立」大坂島の内の遊女の稱。  
 ちやんざんりし「茶立虫」(秋)秋の頃出る虫。  
 形體にして見えず、障子などに近くカ  
 サカサと音して茶を點する音の如し。  
 人寄れば其聲を止むといふ。國 夜長  
 さや所もかへす茶立虫 白雄。  
 ちやんざんりし「菓子」木製にて漆塗の小なる菓子  
 盆。茶室にて用ゐるもの。  
 ちやんざんりし「茶壺」能狂言の名。  
 ちやんざんりし「茶摘」(毒)茶の嫩葉を摘み、飲料  
 の茶を製すること。(八十八夜の前後を  
 適候とす)山城宇治地方、最も茶園多く

ちやんざんりし

茶摘、又盛なり。○茶の手始。茶山時。  
 茶摘唄。茶の葉摘。利。茶。國歌に  
 き、て久しき里の茶摘かな 牛茶。  
 ちやんざんりし「茶摘唄」(毒)茶摘の男女が話  
 ふ唄。  
 ちやんざんりし「茶摘手始」(毒)製茶家の  
 始めて茶摘に着手するをいふ、多く三  
 月一日、又は三日頃なりと。國 手始や  
 摘ひかれたる茶摘歌。  
 ちやんざんりし「茶摘女」(毒)茶摘する人。  
 ちやんざんりし「茶口切」(冬)口切。  
 ちやんざんりし「茶子」(毒)世俗に彼岸七日の中、  
 亡人の忌日あれば行ふ。國 彼岸會の  
 茶の子まだらの豆腐哉 白羽。  
 ちやんざんりし「茶試」(毒)かきちや。  
 ちやんざんりし「茶花」(冬)茶樹の花ないふ。  
 樹は高さ四五尺、葉は長さ寸許、深緑に  
 して光あり。春、其若葉を摘みて茶に  
 製す。花は瓣白く黄を帯び、黄葉多く  
 香氣あり。初冬より開花す。實は圓く  
 して褐色なり。國 茶の花に雉子鳴く  
 也谷の坊 召波。  
 ちやんざんりし「茶葉撰」(毒)摘みたる茶の葉  
 の善惡を摘み分くること。國 捨て又  
 心づくしの葉より哉 寸紅女。







ちりびん

如く味百合の如し。甘露草。滴露。土鱗。チヨウロギ。國はびこら顔で穿を出すちよろぎ哉。果光。ちりびん「著羅絹」白と黒の糸を合せて織りし絹の名。其地、甲斐絹に似たり。ちりびん(毒)チヨロを見よ。ちりびん(叙位)(毒)正月五日、天子清涼殿に出御して、五位以上のものに位階を授け給ふ式。上古は式日一定せず、式は七日或は六日等なりしが、村上帝の天徳五年より五日に定む。○女叙位。ちりびん(散告)課題、締切、撰者の名、入花料等を書きて發句を募集する引札。ちりびん(地蔵)(毒)端午。ちりびん(散交疊)花など烈しく散亂するを形容する語。ちりびん(身柱)人の兩肩の中央にて、骨骨の上の處をいふ。ちりびん(散椿)(毒)落椿。ちりびん(塵芥)ちりあつた。ちりびん(池鯉鮒)東海道三河國の縣。馬市の立つを以て名あり。ちりびん(池鯉鮒馬市)(毒)四月廿五日より五月五日迄、三河國池鯉鮒にて行ふ馬市。同縣の東野に駒を繋ぎ、松の下にて價を定め賣買する故、其松

ちりびん

を談合松といふ。國馬市やだみ聲古き松の下。金花。ちりびん(散松葉)(毒)常盤木の落葉。ちりびん(散櫻)(毒)散る花。ちりびん(散花)(毒)落花、飛花。ちりびん(散紅葉)(毒)紅葉散る。ちりびん(治雙酒)(毒)世俗、社日に土地の神に供へし酒を飲めば雙を治すといふこと。國治ろう酒や遠里小野の鐘の聲。莊角。ちりびん(酒注)底を爐中に入れて酒を温むるに用ゐるもの。筒形にて注口あり、上に手提ある銅器。昔は徳利を用ゐるす多くチヨロを用ゐしといふ。ちりびん(地蔵)(毒)草の名、春宿根より生じて發生し、葉は脈齒ありてカラジに似たり、中夏、葉頭に黄白、或は薄紫の花を開く胡麻の花に似たり、根を薬用とす。ちりびん(地黄丸)(毒)正月、去年採りたる地黄を干したるものを割き、粥に和して食ふもの、邪氣を除くためなりといふ。ちりびん(地黄丸)古へ行はれし建薬の名。

ちりびん

ちりびん(地黄煎)地黄の根を煎じ給に和したる藥。強壯劑として用ゐらる。ちりびん(智惠粥)(毒)大師講を見よ。ちりびん(乳世)うばのこと。つ(動作の過ぎ去りたるを示す詞。又、助詞として連體言を受けるテニオハ。「流邊まで船漕寄せつ子規」つ(津)伊勢國安濃郡の地、舊名安濃津。藤堂家の舊城下なり。つ(葉垣)築地(チ)と同じ。土にて築きたる垣をいふ。つ(衝重)古代の食器。今の三寶の如き製にて飯器を盛るに用ゐる。つ(明日丸)昔、女が毎月一日に吞めば決して孕むことなしとて用ゐられし建薬の名。つ(明日頃月)(秋)初旬の頃の月をいふ。つ(松明)のこ、又つ(松明)たいまつ(松明)のこ、又

つ

歌加留多のこを伊勢物語の故事に依りてつ、い、つと云ふ。つ(梅雨入)(毒)つゆいり。墜栗花。國杉苗のたま〜赤きつゆいり哉。保吉。つ(墜栗花穴)(夏)つゆのぬ。つ(津打治兵衛)俳名は英子、大坂の人、江戸歌舞伎狂言作者の祖なり。實暦十年正月廿日歿。年七十八。つ(通天橋)京都伏見街道なる東福寺中に在る原橋。下は深川にして楓樹多く紅葉の名所とす。つ(通圓)能狂言の名。つ(梅)深山に生ずる樹、高さ七八丈に至る、幹葉等椏に酷似し小なり、材を器具とす。つ(梅)黄楊の古名。つ(司召)(秋)八月、朝廷にて在京の官人を召し任官を行ふ式。春の經召除目に對し秋の除目ともいふ。京官除目。國拜すこて烏帽子落すな司召太鼓。つ(東派)葉を疊の大き位に廣げ敷くもの。つ(菟野)こがの。つ(正使)使者のうちの頭立ちし人

つ

をいふ。つ(香舞)雅樂の名、左舞右舞組合せて舞ふこと。つ(使女)はした女のこと。つ(柄袋)刀の柄のこ、ろを被ふ袋。革又は羅紗などにて張りたる筒の如きもの。雨雪又は旅行の時など用ゐる。つ(東餅)小さき餅をいふ。つ(津輕私大)(冬)私大。つ(月)(秋)單に月と云ば秋の月なり。なほ連句作法、月の座の條をも見よ。(異名)蟾蜍。素蟾。太陰。蟬素。玉兔。玄兔。銀兔。丹桂。蟾除。金波。金精。水鏡。氷輪。月讀男。さへらえ男。しまはし。桂男。秋の月。名月。○月の都。月の桂。月の兔。月の鼠。鼠如の月。心の月。さやけし。照月なみ。月の出潮。月の船。月の劍。月の顔。月の鏡。月の霜。月の雲。月の氷。つ(椀)食物を盛る器。古語。つ(椀)けやきの一種。其木理縦横にして、古く多く弓の材とす。つ(連歌)連歌のこと。つ(月影)月影の光のさすをいふ。つ(月影)月影をわちこちの水の音召

つ

波。つ(月瀬)大和添上郡の東の地。梅花の名所。つ(接木)(毒)一の立木の幹に他樹の杖を切りたるを接ぎ育つる事。多くは同種の樹を接ぐものにて、春分の前後之を行ふ。接木の幹を塞木(サキ)又は盤砧(イ)といひ、杖を接ぎ(接頭(サキ)といふ。其方法にも塞接、呼板(寄接)の稱あり。塞接は幹の皮肉の間を割きて髓を挿み、繩を結び置き、數日を経て粘着せしむるもの。呼接は立木のまへなる接種を塞木に呼せて接ぎ、粘着したる後切り放すものなり。國そ、こしき主が接木覺東な。几董。つ(連句)連歌をいふ。つ(月草)(秋)露草の古名。つ(月草衣)(秋)カサネの色目の名、表花田、裏薄花田。つ(月毛)馬の毛色の名。赤ばみたる茸毛をいふ。つ(月水)(冬)冬夜、月の汚えて氷れる如く見ゆるをいふ。つ(今宵)(秋)今宵の月。國月今宵主の翁舞出よ。蕪村。つ(三味線)三味線の棹の中は